
騎士の想い 侍女の願い

水芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士の想い 侍女の願い

【Nコード】

N7098J

【作者名】

水芙蓉

【あらすじ】

帝国キリングシークの『漆黒の軍神』の側近シキ。『軍神の妃』の侍女ホタル。近いようで遠い立場の二人。しかも、ホタルはシキが嫌いらしい？

でも、とあることがきっかけで、急接近。だけど、やっぱり、ホタルはシキが苦手。そして、シキは？

『軍神の花嫁』スピンオフ第2弾。

地味な娘だ。

明るい赤毛と、淡い茶の瞳。端正な顔立ちをしてはいたが、貴族の侍女ならば、この程度はいくらでもいるというレベルだろう。洗練された仕種も、道中の会話の受け答えも、すべて型通り。何も面白いのない娘。

主に命じられて迎えに行った侍女、ホタル・ユリジアに対する、シキの第一印象はそんなものだった。

印象が変わったのは、彼女が敬愛する女主と再会した時か。駆け出し、涙し、笑う、その変わりようには、少し驚かされたが、それでもシキにとってホタルはさして興味を引かれる存在ではなかった。その瞬間までは。

ホタル・ユリジアは、庭の隅に膝を抱えて座っていた。何をしているのか、ずっと宙を見つめている。

やがてその瞳から、ポロリと雫が流れた。

そのまま、静かにポロポロと涙を零し続ける。

シキはたまたま、通り掛かったただけだった。通り過ぎることは、何も難しいことではなかった。

だが、足は止まってしまったのだ。

なんとなく木陰で隠れるように見つめるシキの視線の先で、ホタルはただ涙を零し続ける。

こんな風に泣く女もいるのだ。

シキが知る女達は皆、シキに何かを訴えて、涙を流しながら、わめき立てたり、切々と語る。そういう女ばかり見てきたから。

誰かに訴えるためではなく。何かを洗い流すかのように静かに。涙を流しつづける娘は、ひどく痛々しい。

シキは、声をかけるか迷った。

かける義務はない。でも、素通りしてしまうには、ひどく後ろ髪が引かれる。

どうする？

が、シキが心を決めるより先に、ホタルが気配に気が付いて、シキの方へ顔を向けた。随分と察しがいい。

それでも、名の通った騎士で、気配を消すことにも慣れている筈なのだが。

「やあ」

そんな内心の動揺など微塵も顔に出さず、女性にすこぶる受けがいいと自負する笑顔を見せる。

「シキ様」

ホタルは迷わず、名前を呼んだ。そして、立ち上がり、きれいな仕種で礼を一つくれる。

お、と少し嬉しい。

同じ屋敷内に暮らす、見た目だけは瓜二つの双子の兄タキと、きちんと区別が付いてるようだ。

顔を上げたホタルは、もう泣いていなかった。

だが、長いまつげは濡れていて、頬にも跡が残っている。

何か思った訳でもなく、つい、手が伸びた。

手の甲で頬を拭うと、ホタルは露骨に後ずさった。

「何を泣いていた？」

それを追わずに、尋ねる。

意識して、下心を感じさせない笑顔を浮かべて。

いかにも、年若い仲間を気遣う、年長者の風体で。

ホタルは、決まり悪そうに視線を地面に落して「何でもありません」と答えた。

答えないだろうとは思っていたから気にしない。

「ここは居心地が悪いか？」

違う問い方をすれば「皆様には、とても良くして頂いております」

型通りの返事が戻ってきた。

どうやら、この侍女は、シキと馴れ合うつもりは、毛頭ないらしい。シキとしても、別段この侍女に興味がある訳ではない…筈だ。

「何かご用がおりですか？」

早く立ち去りたいとばかりの態度に、さすがに気分を害して「いや…ない」と、素っ気なく答えた。

「失礼致します」

ホタルは、先ほどと寸分違わぬ優雅な礼をして、シキの前から立ち去った。

何故か…嫌われているっぽい。

そう思いながら、別にそんなこともあるだろうと気にしないことにした。

したかった、のだが。

だが、妙に印象的なあの涙。

それだけが、シキの中に深く深く刻み込まれて、離れない。

どうやら、これは：本当に、本格的に嫌われているらしい。少し離れたところで、侍女頭のマアサと笑顔で話しているホタルを見て、知らぬうちにため息が零れた。

マアサが特別なのではない。

あの娘は、この屋敷内の至る場所で、笑顔を振りまいている。

シキ以外の者には、等しく愛想が良いようだ。

別に、構わないではないか、と思う。

虫が好かないということは、誰にだってある。

同じ屋敷内にいるとはいえ、主の側近と、主の妻の侍女。

仕えられる者同士の関係は深いが、仕える者同士の関係は希薄。

何も支障はない。放っておけばいい。

そう思うのに。

だが、気がつけば視界の隅っこにいたはずの娘が、中心で笑ったり怒ったりしている。

働き者の侍女は、一時として一所にじっとしてはいない。パタパタと動き回ってすぐにどこかへと姿を消す。

なのに、ふと気がつけば、また。

「若い娘さんが屋敷にいと、華やかでいいねえ」

でっぷりと太った体を揺らしながら、料理長のレンがしみじみと呟く。

おいおい、おっさん。

シキは心でツツコミを入れながら、ホタルから目を逸らした。

また、気がつかないうちに、あの侍女を見ていたのか。

「華やか、か？」

どちらかといえば、地味だろう。

お仕着せの侍女の衣装はもちろん、化粧気もない。

シキの知る、どの女性よりもホタルの装いは地味で質素だ。

華やかとは程遠いと思われる。

「：我が家は息子が5人ですから：あんな娘の一人もいたら、と思いますよ」

レンのそれは心からの言葉のようだ。

確かに、その家にはあまり近付きたくない。

小さく笑ったシキに言うでもなく、「おや：奥方様だ」とレンは呟きを続けた。

それに、シキは視線をホタルの方へ戻した。

主人の妻である：それはつまりホタルの主な訳だが、サクラがホタルに笑いかけている。

ホタルが、満面の笑みで：それこそ、シキには絶対に見せないだろうと確信できる顔で、それを迎えている。

確かに、これは。

「華やか、かもな」

こうして、二人揃って楽しげにしていれば。

それは、今まで、この屋敷になかった明るさかもしれない。

年頃の二人の娘がじゃれ合うように庭を歩く姿は、見ていてつい笑みを誘われるものだった。

しかし、なぜ、嫌われているのだろう。

見慣れたホタルの笑顔：ただし、それはシキに向けられたものではないのだが、それを眺めながら、気にしなければ良いとは思ってはみても、何度も繰り返さずにはいられない疑問がまた浮かぶ。

嫌われる理由は、まったく浮かばない。

何もしていない、筈だ。

さほど交流がある訳でもないが、それでも数少ない接点において、極めて紳士的に騎士道に則って、接していると思う。

「：ホタルは：どんな娘だ？」

思わず尋ねると、レンはすらっと答えた。

「素直な良い娘ですよ。良く働くし、気がつくし：マアサはうちの息子のどれかに嫁に来て欲しいと言ってましたよ」

そういうレンも、その意見には賛成のようだ。

なるほど、レンとマアサの夫妻にいたく気に入られているらしい。とすれば、この屋敷内でのホタルの地位は上々。

「…シキ様はホタルに興味がおありで？」

今度はレンが尋ねてくる。

シキは微笑んだ。

「いや、ないよ」

あっさりと口から出たその言葉の真偽は、シキ自身も分からなかった。

「あ」ホタルはしまったという顔をしたし、「お」シキだって内心タイミングの悪さを呪った。

「…失礼します」

立ち去ろうとする娘が、シキの横をすり抜けようとして、その足が止まる。それが、自分が彼女の腕を掴んだからだと気が付いたのは、ホタルが掴まれた腕を、涙が浮かぶ瞳で凝視していることに気が付いてからだった。

「あの…」

不審げに見上げてくるのに、にっこりと微笑んで見せた。

「もう少し落ち着いてからの方がいい…その顔じゃ、泣いたのが明らかだから」

ホタルは俯いた。

一体、歳は幾つなのだろう。

小柄な上に全体的にほっそりしているから、まるで年端もいかない少女にも見える。

「何がそんなに泣けるんだ？」

つい尋ねる。

ホタルは、俯いたまま答えない。

だが、ポタリと雫が零れ落ちて、地面に水玉を一つ描く。

また、こうやって泣くのか。
肩を震わせることもなく。

声一つ出さず。

ホタルは、しばらくそうしていくつかの水玉を足元に描いていたが、やがて「：離して頂けますか」呟いた。

「泣き止んだのか？」

離すと、そのまま逃げられてしまいそうだ。

逃げる？

つまり。

逃がしたくないのか？

「もう、大丈夫ですから」

ホタルは腕を離して欲しそうにしながらも、頷いた。

「：で？」

促すと顔を上げる。

「何を泣いてた？」

再び俯く。

「なんでもない、はなしだ。2回も泣いてるところに遭遇したんだ。
理由ぐらい聞いてもいいだろう？」

離れたげに腕が引かれる。

それを、自分自身でも思いがけない強さで引き戻した。

「：奥方か？」

どういう訳か、目が離せないから。

ホタルの感情の起伏がどこにあるのか、知らず知らずの内に気が付いていた。

どうやら。

「どうやら君は奥方が絡むと、えらく感情的になるな
他のことではそうでもないようだ。

常ににこやかに、やり過ごしているように見える。

ただ一つ、サクラという主だけだ。

何の特徴もない普通の娘にしか見えないあの妃が絡むと、ホタルは、

喜怒哀樂の感情という感情の全てに制御がきかなくなるようだった。

「いけませんか？」

ホタルは予想外の冷たい口調で答えてきた。

涙で潤んだ瞳が、強く非難めいた彩りでシキを見上げてくる。

どうして、こんな瞳で、見られるのだろうか。

「いけなくはない…か」

見事な忠誠心だと、むしろ称えられてしかるべきかもしれない。

だが、面白くない。

そのやけに敵意を感じる視線は何なのだ。

別に、妃並みの応対をしろとは言わない。

しかし、もう少し、他の使用人と同様程度には笑みで応対してくれる良いのではないか。

「ちょっと確認したいんだが、君は…私が嫌いなんだな？」

突然の問いかけだったかもしれない。

さすがに、ホタルもたじろいだように、逃げがちだった腕から少し力が抜けた。

しかし、自分で口にしておきながら、『嫌い』という言葉に、少し落ち込んでいるのは何故だろうか。

「…嫌い」

ホタルは呟いた。

「…ではないのですが」

続く言葉に、シキは大人げなく続けた。

「じゃあ、苦手」

ホタルは困ったように眉を寄せた。

どう答えるのかと思いきや。

「…申し訳ありません」

薄紅さえ引いていない唇からは詫びが出た。

「否定なし、か」

つまり、それは肯定？

「結構、傷つくもんだな」

結構どころか、想像以上。

なのに、ホタルときたら「…あの…私、失礼してもよろしいでしょうか」と、立ち去ることばかり考えているようだから。

「ダメ」

と、腕を掴む力を強める。

「…………ダメ？」

面喰らったような顔は、睨むそれよりは幾分愛らしい。

その表情を引き出せたことにそれなりの満足を得ながらも、ため息がでる。

「若い娘には受けがいいと思っていたんだが…」

だから、ちよつと落ち込んでいるのだろう。

そう、思うことにした。

シキの情けない呟きに、ホタルは少し笑った。

初めて、シキに見せる笑顔。

なるほど、これは確かに…華やかかもしれない。

「私の態度がシキ様のお気に障ったのなら、お詫びします」

だが、教科書にありそうな模範的な受け答えは、気に入らない。

これなら、先ほどの睨んだ態度の方がまだ。

「詫びはいいから、今度からもう少し打ち解けてくれ」

言えば「…そんな不相応なことは…できません」と返ってきた。

そして、俯いてしまった。

「失礼してもよろしいでしょうか」

さすがに、これ以上留めるのは無理だろう。

シキは腕を離した。

「どうぞ」

ホタルは一度も顔を上げないまま、いつものとおりの優雅な礼をくれて立ち去った。

やはり嫌われているのだ。

いや、違う。苦手だと言っていたではないか。

それは…嫌いよりも、救いがない気がする。嫌いは感情だ。もしか

したら、将来的に改善の余地があるかもしれない。でも、苦手は生理的なもの。基本的には、生涯苦手なものは苦手ではないか？
シキは小さい頃からどうしても食べられないものと、自分の姿を重ね合わす。

そして、ため息をついた。

それは、シキの想像をはるかに超えた深い深いため息だった。

結局のところ、シキがしたことと言えば、ホタルと必要以上には関わりをもたないというネガティブな平和的解決だった。

これは思った以上に簡単だった。そもそもが、さほど接点がある訳ではない。

シキの視線の行方さえ、無視を決め込めば良いことだ。

もっともこればかりは、無意識なだけになかなかうまくいかない。思いつつ、それでも毎日はそのなりに穏便だったのに。

遭遇してしまった。

三度目の涙に。

実のところ、なんとなくそろそろかな、などと思っていたのかもしれない。

この地方特有の夏は、容赦なく人を追い詰めることがある。この時期は、とかく波風が起こりがちだから。

そして、彼女の主とシキの主は最近少し何かがおかしかったから。

だから、泣くホタルに妙に納得もしたりした。

ホタルは廊下を歩きながら、子供がするように乱暴に手の甲で目元を拭った。

それでは目が腫れる。

余計なお世話だろうと自ら突っ込みながら眺めていると、前方から歩いてくるホタルはシキに気が付き足を止めた。

さて、彼女はもうするのだろうか。

いつもの通り、優雅な礼をくれて立ち去るのか。

シキの予想どおりホタルは頭を下げながら膝を折る。そして、踵を返して立ち去ろうとする。

だが、その礼はいつもよりよほど余裕がなく。

見せた背中へは、あまりにか細い。

声をかけるには遠い距離。

あれだけはつきり苦手だ意思表示されたのだ。さすがに放っておくかと思う。

思った筈なのに。

気がつけば、ホタルの腕を捕らえていた。

この娘が絡むと、どうしてか『気がつけば』ということが増える。

大抵のことは面白いと思えるシキだが、これに関しては今のところ楽しめてはいない。

「最近泣いてないと思ってたんだが」

ホタルは、俯いたまま。

シキに腕を捕われたまま、何一つ反応しない。

明らかに、今までとは様子が違う。

「何があった？」

三度目の涙に対する、三度目の問い。

ホタルは、動かない。

シキは、何故か腹立たしさを覚えて、少々意地の悪い言葉を投げた。

「そんなに奥方は辛い目にあっているか？」

確かに、主の妃は攫われてここに来たも同然だ。

シキの主であるカイは、皇子という身分と、『破魔の剣』の使い手という権威をもって、一人の娘を手中に納めた。そこに、娘の意思を慮るものは何一つない。

だが、皇子の正妃というのは身分的には申し分ないものに違いない。むしろ、貴族の娘としては最高位を手に入れたと言っても過言ではない。

そして、傍若無人にも見えるカイは、実のところ十分に妃を丁重に扱っていると思う。

いたるところに気遣い、与えうるものは全て与え、何よりホタルを呼び寄せたのはカイではないか。

最近こそ何かにいらつき、素行にも少々問題はあるようだが、しかし、それも許容の範囲だろう。本来ならば、複数の妃を迎えてもいい身分なのだ。

「カイ様の立場的に、多少のことはしょうがないだろう？」

何も、歎き悲しむほどのことではない：筈だと思う。

「多少？」

小さな声が、ようやく返った。

ホタルは抑えきれないものがほとぼしるように、微かに、でも感情露わに呟いた。

「カイ様はサクラ様を本当の奥様とはなさらないし、皇帝の使いだという姫君はサクラ様をいらないと言うのに？」

本当の妻ではない？

皇帝の使い？

ホタルは、シキの知らない出来事を並びたてた。

「何を言ってる？」

腕を掴む手に力を込めると、思い切り振り払われた。

上がった面にあるのは、いつかも見た非難めいた瞳。

「貴方だって、カイ様がお命じになれば、あっさりサクラ様をお断ちになるのでしょうか」

シキは眉を寄せた。

それは？

それは：シキとカイが、二人きりの気安さで話したあれ？

いったい、この娘は。

この娘は、どこで何を聞いた？

「お前、何を知ってる？」

今度は易々と振り払えない力で、肩を掴む。

「貴方はそうおっしゃったもの！」

ホタルが身をよじる。

逃がすまいと抱き寄せた体は、渾身の力でシキを拒否し：しかし、その気配に硬直し動かなくなる。

そして「カイ様」

震える声が、その名を呼んだ。

シキはおとなしくなったホタルの体を離し、だが再び腕を掴む。

そんなことをしなくても、ホタルは逃げないだろうが。

「お前：遠耳か？」

どこから聞いていたのか分からないカイが尋ねた。

静かなのに、逆らいのような威圧的な声。

ホタルはコクリと頷いた。

シキも、もしやとは思った。

遠耳：人の何倍もの聴覚を持つ者。

気配の聡さにも納得だ。

「来い」

カイが手近な扉を開けて命じる。

シキが腕を引いて導くと、ホタルは黙って従った。

「聞いたんだな？俺とアカネの会話を」

容赦ない単刀直入な問いに、青ざめながら、それでも、ホタルは頷いた。

「サクラも知ってるんだな？」

それにも頷く。

カイが部屋を出ようとする。

「お待ち下さい、カイ様。サクラ様は何も：全て私が：」

ホタルがカイを追おうとするのを、シキは掴んだ腕に力を入れて止めた。

「カイ様！」

どのような会話がなされたのか、もちろんシキには知るよしもない。ただ、カイの様子から、ホタルの涙から、それが妃にとって楽しい話でないことは容易に知れる。

そして、今、カイから感じられるのは、怒りではないから。

「シキ、ホタルを見てろ」

その命令を受け入れる。

「カイ様！」

振り返ることなく部屋を去るカイを、追おうとする体を引き寄せ、胸元に閉じ込めたのと、扉が閉じられたのは、同時だった。

「離して！」

ポロポロと際限なく涙を零しながら、ホタルが叫ぶ。
無性に腹が立った。

分かっているのか。

甘い状況ではないにしても、自分の体が男の手中にあることを。

もがけばもがくだけ、拘束は強まるだけだということを。

それでも心を占めるのは、あの妃だけなのか？

シキは、ホタルの腰を抱く腕に力を入れて、己に強く引き付けた。
小さな顎を掴んで顔を上げさせて。

「…離し…っ…」

拒否を紡ぎ続ける唇を塞いだ。

シキ自身のそれで。

ホタルはシキの腕の中で、ビクリと大きくわなないた。

嫌がつて顔を背けようとするのを、捕えた顎にこもる力で感じ取りながら、上回る力で押さえ口づけを深いものへと変化させる。

さながら情事のようなキスは、まるで返し方を知らないホタルから
確実に力を奪い去った。

ホタルがおとなしくなる。

抱き留めた体が、力無くシキに預けられる。

目的は達した。

これ以上は必要ない。

思いながら、シキはホタルを更に抱き寄せた。

抗う氣力を奪われた娘は、されるままにシキの腕の中に納まり、深
くなる口づけを、ただ呆然と受け入れる。

氣がつけば…また、氣がつけば、だ。

シキの手は、顎を離し頬を包んでいる。拘束するための腕は緩み、
武骨な手のひらで華奢な背から腰を撫でる。肉付きの薄い…だが、
思ったよりも柔らかな感触が、温もりと共に伝わる。

これ以上はまずい。

このまま…どうするつもりだ？

シキは、口づけを解いた。

腕を外すと、ホタルはカクンとその場に座り込んだ。

「そのまま、おとなしくしてるんだ」

夢中になった。

それに動揺していることが、声に出ていないことを自ら褒める。

ホタルは、しばらく呆然と宙を見つめていた。

涙は渴いている。

やがて。

「お手を煩わせ、申し訳ございません」

いつもの、侍女の反応が返る。

もう一度、思い切り濃密な口づけを与えたい衝動をなんとか抑え、

シキは黙ってホタルの傍らに立っていた。

泣けば良いのに、と思った。

苦手な男に、口付けされて。

悔しさと怒りで：シキを罵れば良いのに。

ホタルは、ただ無表情でそこに座っている。

本当に、妃のためにあるのだ。

この娘の涙も笑みも：すべて、あの妃のためにのみ。

ホタルにとって、サクラという存在は特別だった。

サクラのいるところがホタルのいるべきところ。

サクラに仕えることが、ホタルの日々日常。

サクラと共にあることが、ホタルの生きていくための糧であり、証であると言っても、決して大げさではない。

それくらいホタルにとって、サクラというのは全てだった。

だから、仕方がないと思うのだ。

ホタルが母から受け継いだ、人とは違う特別な耳。

普通に生活しているだけでも、人より何倍もの声や音を聞く『遠耳』と呼ばれる鋭敏な聴覚。

ホタルが望んで手に入れた訳でもない能力ではある。だが、身についている以上もはやこれはどうにもならないことなのだ、受け入れたのは随分前のこと。それから、力を使うのではなく、ただ制御することだけを考えてきた。

意識して閉じるのだ。

手のひらで耳を塞ぐように。

頭に響く声を、退ける。

そうすれば、遠くの音はあるべきところに帰っていく。

だから、普段は聞こえていると言っても、せいぜいが壁を隔てた隣の部屋の会話程度だった。

でも、サクラのことになるとだめだった。

制御ができなくなる。

サクラが側にいないと、ついその声を探してしまう。

サクラの周りの声を：サクラに関する会話を、無意識にも探っている。

それは、どんなに意識しても止められない。

隣で交わされる会話は、聞こえてきてしまうものだろう。それが、

とても興味のあることだったら言わずもがな。

ホタルにとっては、『サクラ』というキーワードがそれ。

だから、人々がこっそりと、自分達以外に聞く者はいないと、無遠慮に声にすることをホタルは聞いていた。

それらが、本当なのか嘘なのかは、もちろん分からない。

人々が、様々なことを無責任に声にするのを、ホタルは十分すぎる程承知している。

承知していて、それに振り回されずに、その声の中から真実を見出す術を、ホタルは遠耳という能力との長い付き合いの中で身につけていた。

そして、確証を得るまではいかなくても、多分これは本当だ、と感じていたのだ。

ホタルから一時的とは言え、サクラを奪ったあの男。

帝国キリングシークの第2皇子にして、『漆黒の軍神』であるその人は、奪っておきながらサクラを本当の妻としては扱っていない。

あの軍神にとっては、サクラは神剣を抱くものにすぎなくて。

サクラが邪魔になれば、迷わずに葬ってしまうのだろう。

サクラに対する優しさを感じることはある。

接する態度は真摯にさえ見えることもある。

でも、あの男は。

サクラを妻とはしないのだ。

なのに。

ホタルは遠耳だ。どんな遠くで囁くことだって、力を使えば聞くことができる。

だけど、決して声にならないことだって、時には知り得るのだ。

サクラの近くに仕えていたホタルには、聞こえるようだった…サクラの沈黙の想い。

サクラ様は、カイ様がお好き。

それぞれが知らない様々なことを、ホタルは少しずつかもしれないが知っていた。

知っていて、ホタルの心を占めたのは悔しさと哀しさだった。
どうして？

応えのないまま、何度も唱える疑問。

どうして、あの方はサクラ様を妻とはなさらないの？

どうして、サクラ様を受け入れてはくださらないの？

違う。それは確かに思っただけだけれど、小さなことだった。

本当に悔しかったのは。

本当に哀しかったのは。

どうして、そんなに辛いのに、サクラ様はあの方を想い続けるの？
想ったところで、あの方は応えてはくれないのに。

なのに、どうして、そんな風に何事もないようにあの方に微笑むの？
どうして？

哀しい。悔しい。

どうして：側にいるのが私ではダメなの？

楽しいことを見つけて、一緒に笑っているだけではダメなの？
前は、それで良かったのに。

二人でいて、それで楽しかったのに。

それでは、ダメなの？

どうして、あの方がいいの？

ホタルには、分からなかった。

ただ、悔しくて、哀しくて。

だから、カイの元に女性が尋ねてきたと知った時。

サクラにも聞かせてしまったのだ。

ねえ、サクラ様。

カイ様には女性がいる。

この方だけじゃない。

サクラ様だって気がついているでしょう？

サクラ様に触れないカイ様は：他の女性には触れる。

サクラ様。

もう、良いでしょう？

そんな想いは消して、前みたいに二人で楽しく過ごせばいい。
そうでしょう？

そんな愚かな考えで、力を暴走させた。
今、思えば馬鹿だったと言わざるを得ない。

話の内容は、ホタルの想像以上に残酷なもので。

サクラは、それでも、泣かなかった。

サクラは元々は喜怒哀楽のはっきりした娘だったのに。

なのに、泣かずにホタルに大丈夫だと微笑んだのだ。

泣いてくれれば良いのに、と思った。

泣いてしまうことで、どれだけのものを流し去ることができるか、

ホタルは知っているから。

でも、サクラは泣かなかった。

そして、その心の健気さに悲鳴を上げたのは、サクラの体の方だったのだ。

そのことがある前から、少し体調を崩していたサクラは、その日からベッドに横たわっていることが増えた。

医者は暑さを理由にしたけれど。

私のしたことが、サクラ様を追いつめた。

ホタルにはそう思えて。

結局のところ、カイに何一つ咎められることなくサクラの元へと戻してもらえたホタルは、ベッドに横たわるサクラに付き添いながら、必死に涙を堪えた。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

何度、口にしたところで、心で唱えたところで、決して元には戻らない。

元には戻らないけれど、ホタルは決めた。

サクラ様はカイ様が好き。

それは、変わらない。変えられない。

だから、認めよう。例え、想いがカイ様に届くことはなくても。サクラ様がカイ様をお好きだという、その事実を受け止めよう。

悔しさも哀しさも、完全になくなることは難しいかもしれないけれど。

認めたからといって、何かできる筈もないのだけど。

でも、サクラ様の想いを拒否したり、否定したりするのは止めよう。

そして、サクラ様が笑えば笑って、辛そうだったら一緒に苦しむの。それだけしかできないけど。

そうしようと。

そう決めた。

夏まっさかり。

燦々と降り注ぐ太陽に負けない熱気に溢れた市場の中を、ホタルは日傘を片手に、店先を冷やかしながら歩いていた。

今日は、マアサのお使いで、街に買い物に来ているのだ。

なぜなら、屋敷では仕事がなくてヒマだから。

どうして、ヒマか。

それは、今、サクラが屋敷にいないから。

あの後：ホタルがシキに預けられて、カイがサクラの元へと行ったのである、その後。

カイとサクラに何があったのか、ホタルは知らない。

自分自身に降りかかった災難、ここはあえて災難と言ってしまいたいことで、すっかり混乱してしまっただけから。

もう何も聞きたくないと、耳を閉ざしてしまっただけから。

だから何も聞いていない。何も知らない。

ただ、あの直後からカイとサクラの間はすっかり変わってしまった。それまでは、事実がどうであれ傍目には、それなりに仲睦まじい夫婦にも見えていた二人。

でも、あの日からカイはサクラを遠ざけるようになった。体調を崩したこともあってサクラは、自室から出ない日さえあった。二人が一度として顔を会わさない日も、珍しくなくなった。

それは、誰もが二人の間に何かあったのだと気がつくほどに、あからさまな決裂に見えた。

何人かは、カイに進言したことがあったかもしれない。でも、二人の間は何も変わらなくて。

屋敷内には、少し前から僅かにあった緊張感が、嫌なくらいにはつきりと張り巡らされて。

それでも、皆、日常を過ごしていた。口を閉ざし、目を逸らし、何もなかったような日々を過ごした。

それしかできなかった。

ホテルも、もちろん何もできない。原因の一因が己にあることは重々承知していたが、何が言える筈もない。

ただ、サクラの側にいただけだ。

それだけだったのだけど。

それさえ、今はできない。

どういうきっかけかは知る由もないが、サクラはカイに連れられて、どこぞに療養に出かけたらしい。

カイ様は、いつも突然サクラを連れて行ってしまう。

一瞬は、そう思いもした。だが、そんなに怒りが湧いた訳でもない。いつまでも、こんな状況を続ける訳にはいかないだろう。

それに、一度だけ、サクラを見るカイを見た。

見たことのない白い魔獣を従えた漆黒の軍神は、その存在に気がつかず座り込むサクラをただ見ているだけだった。

その色の違う双眸に、何かの感情を見つけることはできなかった。寡黙な口は、ホテルの耳に何も届けなかった。

だけど。

何か。

何か、そこにあるかもしれない。

そう思わせる、そう思いたい光景だった。

ホテルには、何もできない。見ていることしかできない。

今を変えるには、あの二人がどうにか動かなければならない。

そして、カイが動いたならば。

それは、変わるきっかけになるかもしれない。

そうなることを願っている。

だから、足掻くのは止めて、耳を閉ざして、こうしてマアサの手伝いに精を出しているのだ。

マアサに頼まれたのは、いくつかの小物を揃えることだった。

「別に急ぎのものはないから、ゆっくりしていらっしゃいな」と、優しい侍女頭は言った。「貴方もいろいろと大変でしょうから…サクラ様のいらっしやらないときぐらいは、ね？」続いた言葉は、ホタルがどれだけサクラに心を寄せているかを知っているからこそその言葉だった。

素直に頷いて、ホタルは街にでてきた。

久しぶりに出てみた街は、相変わらずにぎやかだ。

だが、ほんの少し前までは、ここもさびれていたのだと聞いたことがある。

男たちは戦場に。荒れた田畑に作物は育たず、産業も廃れて。

でも、今はこんなにも明るくて、何もかもが満ちている。

これが、キリングシークの双壁がもたらしたものの一つだ。そして、双壁の一角が：サクラの夫である『漆黒の軍神』だった。

どうしても、考えはカイやサクラへと向かう。

それでも、声だけは聞かないようにと言い聞かせながら、ぶらぶらと店を見て歩く。

時折、見知った店主が声をかけてくるのに、笑顔で答えながらいくつかの日用品を手取る。

特に欲しいものがある訳でもなかったが、華やかな品々を眺めて歩くのは、それなりに楽しかった。

ところが、だ。

向こうから歩いてくる人を見つけて、一気に気分が萎える。

今、一番会いたいのサクラなら、あちらは一番会いたくないお方だ。

その姿を発見して、ほとんど、条件反射のように脇道に逸れて隠れる。

隠れてから：私が隠れる必要なんてない筈じゃない？…と思っではみたが、勝手に体が動いたのだから仕方がない。

それほどに、とにかく、苦手なのだ。

あのシキ・スタートンという男は。

とても優秀な騎士なのだと聞いている。それを裏付けするような、騎士特有の隙のない身のこなしが、嫌いな父の面影に重なるからだろうか？

だから、苦手？

それとも、あのいかにも貴族然とした物腰が、過去に出会った不遜な方々と同じに感じるから？

違う。

何よりもあの飄々として何を考えているか掴めないところが、一番苦手だと思う。

声にならないものをたくさん秘めている者は、聞くことを得意とするホタルの不安をとっても煽る。

いつそカイのように、必要なことしか語らないならばいい。

だが、一見饒舌に見えて、でも、どれが本当のことなのか分からないああいう男はとっても苦手だ。

しかも、先日は自業自得とはいえ、キスまでされてしまった。苦手という思いは強まるばかり。

「避けるなら、もう少し上手に避けてくれないと」

背後からかかる声は、できれば聞きたくないもの。

恐る恐る振り返ると、シキは癪に障るほど優雅に微笑んでホタルを見ている。

避けていると気がついたなら、そっとしておいて欲しい。

どうして、わざわざ声をかけるのだろう。

「シキ、どなた？」

どうにかこの場を穏やかにやり過ごそうと頭を巡らせていると、シ

キの背後からひょいっと、一目で貴族の上流階級のご婦人と分かる女性が顔を出した。

「妃殿下の侍女ですよ、母上」

そんな風に紹介されては礼を尽くすしかない。

ホタルの失態は、サクラの評判に傷をつけかねない。それは、絶対にしたくないことだ。

だから、仕方なく膝を折り、深々と礼をする。

これがいかに優雅で、いたく貴族の皆様を受けがいいかは、オードルの奥様のお墨付き。

オードル夫人はともに行儀作法に厳しい女性だった。サクラの側に付くことになった時から、サクラと同じように作法を教えられるようになり、一時はそれに辟易したこともある。一生、サクラに仕える気はもちろんあったが、まさか皇子に嫁ぐとは思っても寄らなかつたから。適当な作法で良いではないか、とそう思ったものだ。

だが、こうして最上位の貴族の方々の前でも恥ずかしくない程度の作法を身につけさせてもらったのだから、今はとても感謝している。もう心でタイミングを数えることもないほど馴染んだ礼の動作でゆっくりと顔を上げると、老婦人はしみじみとホタルを眺めていた。何かまづかったかとドキリとしたが、合った視線の優しさにそうではないらしいとほっとする。

「ホタル・ユリジアです」

シキが丁寧にも、名前を女性に伝える。

そんな紹介なしで、サラッと立ち去って下されば良いのに。

ホタルは心で恨み言を綴る。

それでも顔には微笑みを浮かべて、夫人に再度頭を下げた。

女性はニコニコと屈託ない笑みを浮かべながら「おいくつ？」と尋ねてきた。

人柄が知れる笑顔に思える。

だが、ホタルは何か違和感を覚えた。

優しい。

美しい。
だけど。

「もうすぐ、十八歳になります」
違和感を押しやり、ホタルは答えた。

あと一週間もすると、ホタルは誕生日を迎える。毎年、サクラが祝ってくれていたが、今年は無理だろう。

当のサクラは、春に一足先に十八歳になっている。

今年も、歳は追いつくのだ。

だが、絶対に追いつけないどこかに、サクラが行ってしまった。
とても遠いところに。

そんな気がする。

「あら…もっとお若いかと思ったわ」と言う母君と、ほぼ同時に「そんなに若いのか」とシキが呟いているのが聞こえた。

どちらかと言うと、幼く見られがちだから、シキのその反応は意外だった。

「シキは、いくつになったのかしら？」

母君が、シキを見上げながら尋ねた。

そういう会話は家でお二人でどうぞ、と思いながらも多少の興味で答えを待つ。

「二十七ですよ」

シキの答えは、意外といえば意外だし、相応といえば相応な気がした。

当たり前の話だが、双子のタキもその年だということになるのか。

同じ顔形なのに、年齢が同じであることに違和感を覚えるほど二人はタイプが違う。

そして、以前ちらりとマアサに聞いたことを思い出す。

確か、カイも同じ年の筈だった。

さすが…としか言いようがない。

他を圧倒する存在感。誰もがひざまずく威圧感。

タキにも、シキにもないものを持つあの主。

それは背負うものが多い証だろうか。

ホテルは身分も地位もないけれど、それでも特殊な力を持つ者として負うべきものがあるのだと過去には幾度と諭された。

あの方は、もっと大きいものを背負うのだ。

大国の皇子であり軍神。世界がこの形を保つのに、不可欠な存在。サクラ様の想い人は：そういう男だ。

「18歳というと、ケイカと同じ歳ね」

ホテルの耳に知らない名前が入ってくる。

尋ねる立場ではないから黙って、だが、チラリとシキを見遣り訴えた。

そういう会話はご自宅の居間でどうぞお願いします。

私は、もう失礼したいのです。

そんな思いを込めた視線に気がついたようで、シキが「母上、彼女は仕事中ですよ」

と助け舟を出してくれる。

「そうね」

素直な答えに、立ち去ってくれるのかと思いきや「ねえ、貴方」母君はホテルの手を取った。

ふわりとした、柔らかい手のひらだった。

「今度、私とケイカのお話相手になって下さらない？」

いやです。

即答は心の中だけ。

返す言葉が見つからず、ただ、黙ってずっと微笑んでいる婦人を見つめる。

「あの子ったら、相変わらず部屋に閉じこもりっぱなしなんだから：同じ年頃のお嬢さんがお相手して下されは、きつと機嫌もよくなるわ」

ね、と首を傾げる様が少女のようで。

少し背筋に寒気を感じた。

この感じは、見覚えがあるのだ。

思い出したくもない。だが、忘れられない。
救いを求めるように、シキを見る。

シキは、眉を寄せて母親を見下ろしていた。
その様子が、まったくいつものシキらしくなく、ホタルは尚更早く
ここを立ち去りたい思いにかられる。

今すぐにも、その手を振り払って逃げたいぐらいに。

「分かりました。今度、屋敷へ連れて行きます」

なのに、シキはそんな言葉を口にした。

ホタルは、焦った。

ちよつと、待って。そんなこと、勝手に決めないで欲しい。

だって、この方は。

シキ様、この方は…。

「いいね？」

困ると言いかけたホタルを遮るように、シキはにつこり笑って言う。
先ほどの、不穏な表情の名残など微塵もない、ホタルの苦手な貴公子
然とした笑みだ。

そして、言葉は疑問形だったけど、少しも譲らない強さがそこにあ
った。

こういうところも苦手だ。柔らかい物腰のくせに、相手を従えさせ
る威厳じみたものがある。

「奥方がいないんだ。君、ヒマだろう？」

確かに、サクラのいない今、ホタルには時間がある。

でも、だからって、なぜシキの母君や知らない女性の相手をしなく
てはいけないのか？

だいたい、これ以上シキとの接点は作りたくない。

「明日は、どうかしら？」

ホタルの思いなど知らないのだろうが、この雰囲気は察しても良い
のではないか。

だが、母君は無邪気に尋ねるのだ。

そのあまりに無頓着な様子。

やはり、この方は。

「明日、迎えに行く。マアサにはちゃんと話をしておくから」

ホタルが母君を見つめている隙にシキは、それを決定事項としてきっぱり口にした。

行きません。

そう言いたいのに。

「お待ちしてるわ。絶対にいらっしやってね」

と、母君に再度手を強く握られて、何も言えなくなってしまう。

悔し紛れにシキを睨んだ。

シキは、ホタルの怒りを煽るかのように、ひどく優しく微笑んだだけだった。

結局、その日の夜。

ホタルは明日、スタートンのお屋敷に行くように、マアサに言われた。

憂鬱だった。

行きたくなかった。

だが、マアサに言っても困らせるだけだろう。

仕方なく、ホタルは「承知いたしました」と頷いた。

腹痛、頭痛…いっそ生理痛なんてどうだろう。まさか、証拠を見せろとは言われまい。

朝から、昨日頂戴したありがたくないこのご招待を、ご辞退申し上げる理由をいろいろと考えてはみたものの、結局どれも口にすることはできず、ホテルは不本意ながらスタートン邸へと赴く羽目になっていた。

しかも、「今日は侍女としてお伺いするのではないのだから」と、マアサに言われて、日頃身につけている侍女の衣装は却下されてしまう。

由緒正しい方を訪問するためにと、マアサが着せてくれたのは小奇麗な浅黄の夏のドレス。髪もいつもはみつあみして、引っ詰めるだけなのに、今日は多少華やかに結い上げられる。

途中でたまたま通り掛かったカノンが加わって、化粧までされてしまった。

日頃は慌ただしく仕事をこなす二人だが、カイにサクラ、さらにはタキまでいないとあって、かなり時間も気分も余裕のようだ。

新しい玩具でも見つけたかのように、寄ってたかって弄られること、数十分。

「あら」

化粧を終えたカノンが、感心したように呟く。

「きれいな顔してるとは思っていたけど…やっぱり若いっていいわねえ。化粧のノリが違いわ」

自らの作品に満足するような二人の侍女と裏腹に、鏡に映る姿を見たホテルの気分は、ただでさえ下り坂だった所に、思い切り拍車がかかって急降下だ。

この姿で、あの騎士の前に出るの？

言い訳でなく、本当に胃のあたりが痛い気がしてきた。

「でも、さすがにちよつと淋し過ぎない？」

言いながら、カノンが突然、ホタルの胸に手の平を当てる。ギョツと身を引くと、真剣な顔で「なんか詰め物する？」と聞かれた。

「しません！」

勢いよく返事をする。

冗談ではない。

何の意味があつて、そんなことをしなくてはいけないのか。

「細い子だとは思つてたけど…それでは、うちの子供みたいよ？」

カノンの子といえば、上の10歳児は男の子だから。

7歳児と一緒にされてしまったようだ。

でも、それでいい。

「体型なんて、まだ、これから変わりますよ」

マアサがクスクスと笑いながら、フォローらしきことを口にする。

ホタルは何も言わずに、鏡の中の自分に目を向けた。

言われても仕方がない、細い体。凹凸に乏しい体は、確かに子供のようだ。

いつからか成長が止まってしまったかのように。

ホタルの体は幼い。

でも、このままでいい。

ふくよかな胸も腰もいらぬ。

サクラやカノンのように、女性らしい体なんていらぬ。

誰にも触れられることのない体だから。

何も育まない体だから。

だから、必要ない。

子供のようない。

女性らしさのまるでない。

このままの体でいい。

「シキ様がいらっしゃいましたよ」

かけられる声で鏡から目を逸らし、ホタルは重い足取りながら部屋を出た。

シキは、しみじみとホタルを眺めてきた。

本当に不眠な、全く遠慮のない視線だ。

恥じらったり、怒ったりしたら負けな気がする。

だから、なるべく普通を装って「：なんでしょうか？」
尋ねる。

「いや：新鮮だな、と」

多分、素直な感想なのだろう。妙に気を遣われて、気恥ずかしい言葉をかけられるより、よほどいいと思った途端。

「君は：少し北の方の血が入っているのか？」

シキが何気なく続けたらしい言葉に、ホタルは自身でもびっくりするくらい体が強張った。その反応は、どんなに愚鈍な者でも気がつくだろうというくらい、あからさまだった。

シキが気がつかない筈はない。

更に質問を重ねられたら、どうすれば良い？

何か言い訳をとホタルが焦る中、シキの方はまるで何事もなかったかのように歩きだした。

少し後ろを付いて歩くと、前方から「しかし：細いな」と呟きが聞こえてくる。

またか。

本当ならうんざりするところだが、話題が変わったことを素直に喜ぶ。

でも。

「細すぎる：ちゃんと食べてるのか？」

ちらりと見下ろしながら、しみじみと言われるのは、いい気分ではない。

ちゃんと食べてはいる。

「食べても肉のつかない体質なんです」

だから、その問いには正直に答える。食べさせてもらってないで

も思われたら、屋敷内の誰に迷惑がかかるのやら。

シキは片方の眉を器用に上げた。

「それはそれでマアサあたりが羨ましがりそうな話だが…細すぎるだろう」

何度も繰り返されて、さすがにムツとくる。

思わず「どうせ、サクラ様と違って、抱き心地が悪そうです」と言ってしまうてから。

「それは…」

しまった、と思った。

無礼な態度と。

カイとの会話を遠耳で聞いていたという露呈を、自らほじくり返す失態。

しかし、後の祭りだ。

「…君は普段はどれぐらい聞こえているんだ？」

シキの問い掛けに、慌てて答える。常に聞き耳を立てているとは、例え相手が苦手なシキであっても思われたくはない。

「あの時は、お屋敷についたばかりだったので、緊張してて…ちょっと力が暴走気味だったんです…普段は本当に人より少し聞こえる程度で…」

段々、言い訳が尻すばみになっていくのは、そこはかなり誤魔化しがあるから。

つまるところ、ホタルは正直者なのだ。

だから、つい俯き加減になってしまう。

「責めてる訳じゃないよ」

シキはきっぱりと言った。

勇気を持って少し顔を上げれば、シキは柔らかい表情でホタルを見下ろしていた。

「能力を使って自らの権威を示そうとする者はいくらでもいるけど、君がそういう人種ではないことは分かっている」
そうありたいと思っている。

持っているものは仕方がないと、諦めの言葉を何度も唱えて。せめて、誰かのお役に立てれば良い。サクラ様をお守りできれば良い。

そう考えるのに。

なのに、ホタルは力を使ってサクラを追い詰めた。

ツンと鼻の奥が痛くなる。

自らが犯した間違いに、また胸が苦しくなる。

「ホタル」

シキは足を止めた。

「大事な人を守るために、力を使うことを恥じたり、負い目を感じる必要はない」

真剣な顔で、ホタルを見下ろしてくる騎士は諭すように続けた。

「皆、何かを守るために自らの持てるものを駆使する。それは悪いことじゃない。君が奥方を守りたいと力を使うことは、決して間違ったことではない」

そして、笑みを浮かべる。

「何も持たない私なんかは、剣を振り回すしかないんだよ」

少し自嘲が混じったようなそれ。

いつもとは少し違う表情に、シキの本音を垣間見た。

「だから、そんなに自分の力を卑下するんじゃない」

そんな風に言われたのは初めてだ。

ホタルは小さな声で礼を述べた。上辺ではない、心からの礼を。

「さ、行こう」

再びシキが歩きます。

シキが諭したのは、ホタルが己の力を嫌悪する表の理由についてだ。それでも、なんだか少し救われた気がした。

黙々と従って歩いたホタルは、馬車の前に辿り着いた。

「どうぞ」

車の扉を開けて、シキが促す。

「これに乗るのですか？」

歩いて行ける距離と聞いている。

なのに、馬車？

しかも、御者はいない。

つまり、シキが御者をする？

「呑気に歩いていくと、途中で逃げられそうだから」

そんなことありませんと言い切れないのは、先ほどまで仮病の言い訳を考えていたからだ。

「乗って」

と言われても。

まさか、公爵家のご子息に御者をさせて、侍女ごときのほほんと座ってられる筈がない。

「ホテル？」

少し悩み、仕方無くホテルは、シキが座るだろう御者台の横に座った。

「…そこ？」

「恐れ多くて後ろには乗れません」

シキは微笑んだ。

「私としては大歓迎だけどね…その姿でここはちょっとね」
確かに。

正装で御者台は、変な光景だろう。

だから、いつもの服で良いと言ったのに。

ただでさえ乗り気ではないのに。

どうしようかと思うけれど、でも、やはり後ろには乗れない。

そういう身分ではない。

「ちょっと待って」

と言うシキが、馬車の中から持ってきたのは、女性用のショールだった。

ホテルの隣に座ると、それをふわりと広げてホテルの頭に被せる。柔らかな生地は、かなり大きめのもので、頭から腰あたりまですっぽりと隠すことができる。

「ないよりはマシ：ぐらいだけどね」

ホテルはショールで顔を隠すようにして「：ありがとうございます」
まったくもってこの方は。

その優しさと気遣いは。

どれだけの女性を惑わせるのだろうか。

こういうところも苦手なところの一つだ。

ホテルの小さなため息は、ゆっくりと動き出した馬車の揺れに飲み込まれた。

動き出して間もなく。

「昨日、ケイカという名を母が口にしていただろう？」

シキが話を切り出した。

「はい」

予測していた会話の流れ。

ホテルは頷きながら、昨日の会話を思い出す。

今日お相手をするのはシキの母君と、拗ねて部屋から出てこない、
ホテルと同じ年だという娘。

「妹の名前だ」

妹。公爵家の令嬢、ということか。

別段、驚く話ではない。

シキに妹がいたとは知らなかったが、それだけホテルには関係のない話だということだ。

だが、続いた言葉には正直驚いた。

「五年前、かけおちして、そのまま行方知れず、という困った妹で
ね」

それが本当ならば公爵家の令嬢の出奔ということになる。

当時の世間は、さぞかし醜聞に湧き立っただろう。

「生きてるなら23歳になってる」

ホテルははっとした。

23歳？

母君は、ホタルと同じ歳だと、言っていなかったか。

「駆け落ちしたのが、18歳の時だった」

ホタルはあっさりとそれを理解した。

そして、やはり、と思う。

あの時、感じたものは間違っていなかったのだ。

あの方は、同じなのだ。

あの女と。

「相手が身分の低い男で、父が猛反対。妹は、さっさと家を出て男と行ってしまった、と」

そこまでの口調は、いつものシキと変わらなかった。

だが、さすがに次の言葉は声が沈んだ。

「母は、それから、少し壊れている」

大事な人を失って、それが辛くて堪えられなくなったとき。

人はその事実を、己の中から消してしまふことがある。

そして、何事もないように日常を過ごすのだ。

ホタルは、そんな女を一人知っている。

シキの母が、その女に重なる。

「母の中でケイカは18のままで、拗ねて部屋から出てこない困った娘なんだ」

やはり、来るべきではなかった。

ホタルはギュッと手を握りしめた。

私は大丈夫だろうか。

あの女と、同じものを抱えた女性を前に、平静でいられるだろうか。

「適当に話を合わせてやってくれ」

不安を抱いたまま、しかし、ショールの中でホタルは頷いた。

ほどなく、馬車は立派なお屋敷の門を潜り、中庭に止まった。

シキの手を借りて、馬車を降りると、突然「あ、そうだ」とシキが声をだす。

まだ、何かあるのかと顔を上げれば。

「悪くなかったよ」

にっこりと、笑うシキに出くわす。何故か少々嫌な感じを覚えながらも「：何がですか？」

問う。

「君の抱き心地」

一瞬、意味が分からない。

だが、その意味が分かった途端、今度はカッと頬が熱くなる。

それは、多分あのキスの時のこと？

というか、それしかありえないだろう。

「でも、やっぱり、もう少し凹凸が欲しいかな」

ホタルの能力を認めるようなことを言ってくれて。

ちよっと、いい方かもしれないと思ったりしていたのに。

「レンの作る料理はうまいけど、うちの料理人の作るものも悪くないから出たものは、きちんと食べなさいね」

さらっと言った後、何事もなかったように、シキは歩き出した。

やっぱり、この方は苦手。

ホタルは、零れそうなため息を堪えながら、後について歩き出した。

スタートン夫人は、満面の笑みでホタルを迎えてくれた。

ホタルは多少の緊張をもって夫人の前で礼をし、導かれるままに椅子に腰掛ける。

シキは、二人から離れたソファに腰を下ろした。

どうやら、そこに落ち着くつもりらしい。

ありがたいような、ありがたくないような。

複雑な思いを抱く。

夫人は柔らかな口調で、いろいろな話をした。ホタルにも、様々なことを尋ねる。

ことに、公の場に出ることのない妃殿下：つまりはサクラのことは気になるようだった。

当然といえば当然だ。

突然現れた、軍神の妃は、ちょっとした時の人だ。

出生、生い立ち、容姿や性格。さしてサクラを知る訳でもない人達が、身勝手な憶測で語るのをホタルは聞いていた。

苛立ちや怒りを持って。

でも、まさか訂正して歩く訳にもいかないから、唇を噛み締めて聞き流していた。

サクラの耳に届かないことを祈りながら。

一方、夫人のそれはホタルを不快にはさせなかった。

噂好きな有閑婦人の好奇心ではなく、幼い頃から知り、息子の主君でもあるカイを思う故と感じ取ることができたから。

ホタルはなるだけ真摯に答えた。

そして、話をするうちにホタルは気がついた。

夫人は、一度もケイカという名を口にしない。

シキやタキの幼い頃の話。公爵である夫の話。それらが出た時でさえ。

まるで、そんな娘はいないというようにチラリと触れることさえない。

分かっているのだ。

本当は、娘がここにいないことを。

今、ここで、ケイカの部屋の扉をノックし、開けてしまったら、そこに誰もいないということ。

意識の奥底で分かっている。

だから、今は何も触れない。

こうして、自らの世界を護るのだ。

そんなにも…大事なのか。

その娘が。

いないことを認めてしまったら、自らの世界が崩壊する程に。

母親とはこういうものなのだろうか。

ホタルは、自らの母を思った。

一度もホタルを己の子と認めなかった女。夫だけが全てだった女。

だが、この目の前の夫人は、違ふのだ。

ホタルが、ふと夫人に思いを向けた、その瞬間。

口には出さないその存在が、不意にホタルの耳に届く。

ホタル自身、一瞬、起きたことの意味を掴み損ねた。

「ホタルさん？」

強張ったホタルを氣遣うように、夫人の手がホタルに触れる。

途端に流れ込むのは、ざわめく人々の声。

だが、それは背景のようにぼやけて、意味をなさない雑音。

そして、はつきり響くのは。

「：アキ、どこにいるの」

声。優しい優しい女性の声。

「ケイカ！？」

夫人が不意に叫んだ。

「ケイカの声がするわ！」

姿を探すように、椅子から立ち上がり首を巡らす夫人をホタルは驚きで見詰める。

まさか？

同調？

ホタルの聞くものが、この夫人に流れ込んでいる？

こんなにも、たやすく？

そんなことが、ありえる？

シキが動こうとする。

ホタルは一瞬迷ったが目でシキを制して、夫人の手をギュッと握った。

意識を夫人に。

夫人の中にあるケイカの声に向ける。

「ああ、そんなところにいたの。探したわ。さあ、あちらで父様が待っているわ」

「父様、帰ってきたの？」

幼い：男女の区別さえ判じ得ない声。

ざわめき。物売りの声。ひと際大きな叫びが漁船が戻ってきたと告げている。

とても訛りが激しい。
でも聞いたことがある。

「父様、たくさんお魚獲って来たかな？」

アキと言う子の声の後ろで「マオマオが大漁だってよ！」という答え。

「ケイカ！アキ！」

男性の声が、名を呼ぶ。

やはり、声はケイカなのだ。

「父様！」

「おかえりなさい。アユ」

遠くにザーツという音。

これは、波？

「ケイカ！」

夫人の声。

いきなり、目の前が暗くなる。

そこで音が途絶えた。

「ホタル！」

ひどく近くに聞こえる声。

背中を抱かれるように起こされて、床に倒れ込んだと分かった。

どうやら、力を使い過ぎたようだ。

「大丈夫か？」

シキが心配そうに覗き込むのに、なんとか頷きを返しながら、夫人を探す。

大丈夫だろうか。

また、傷つけてしまったのではないか。

娘はここにいないと。

遠くで、夫と子供と暮らしているという現実、心優しい母を打ち砕いてはいないか。

「奥様」

夫人は床に座り込み、呆然とホタルを見つめている。その瞳が、ホタルの母の最期とは全く違うことにいくらか安堵する。

「…あなたなの？」

夫人は呟いた。

膝を進めて、ホタルに近付く。

「今のは…あなたが？」

ホタルは目を逸らした。

気味が悪いと思われるも仕方がない。遠耳は身近な存在ではないから。

だが。

「ありがとう」

思いがけない言葉が、ホタルに届いた。

ギョツと手を握られて、そこに祈りを捧げるように額が当てられる。

「生きているのね」

夫人はそれ以外は何も言わなかった。

涙が頬を伝う。

あとはただ、何度も何度も。

「ありがとう」

それを繰り返した。

シキは、侍女を呼んで、興奮気味の母を下がらせた。

母は名残惜しげではあったが、ホタルの疲れた様子と、息子のやりわりとした、だが断固と譲らない態度に、折れて部屋を出ていく。

ホタルをソファに座らせ、暖かいお茶の入ったカップを渡す。一瞬触れた指先が、ぞっとするほど冷たい。

「大丈夫か？」

もう一度尋ねる。

ホタルは頷き、手を温めるようにカップを包んだ。

その小さな両手を自身の手の平で温めてやりたいという思いが沸き上がる。

そんなことをすれば、思い切り逃げられるのだろう。

「波の音がしました」

独り言のような小さな声。

「波？」

じっとカップの中を見つめながら、ホタルは話していく。

聞いたことを。

たくさん情報の中から必要なものを探し出すように、考え込む。普段の子供っぽさとはほど遠い姿だ。

「それから、周りの話し声には南方の訛りが多く聞かれました」
続く言葉に、シキの頭は幾つかの地名が浮かぶ。

「マオマオが大漁だったと」

この時期にそれが獲れる地域。

それだけで、随分と絞られる。

「そこにケイカが？」

ホタルは頷いた。

「旦那様らしき方が、帰ってきたとおっしゃっていました。お子様の言葉から旦那様は漁師と思われます。少なくともその近辺にお住まいと思います。町の名前までは分かりませんでした：申し訳ありません」

「詫びる必要なんてないよ」

疲れきって座っているのも辛そうなホタルを労いながら、少なくとも驚きを持って見つめる。

遠耳を持つ者は何人か知っている。中には、かなり遠くのことを聞くことができる者もいて、戦では助けられた。だが。

「驚いたよ：こんな遠耳は初めて見た」

ケイカの声を探し当てたのだ。

広範囲を聞くだけではない。

ホタルは、声を探し当てることができたのだ。

「私：普通じゃないみたいです」

素直な感嘆だったが、その言葉はホタルには辛いものだったようだ。疲れているせいかな。

それとも、多少シキに打ち解けたのか。

心情がありありと表情にでる。

「例えば：こうしてシキ様の側にいると、シキ様がその時にお望みの方の声を聞くことができるんです」

ホタルはカップに口をつけた。

一口含み、息をつく。

「逆に：私が聞いていることを、人に聞かせることも可能です。ただ：これは、なんて言うか、波長？：が合わないと難しくて：奥様が同調なさるなんてびっくりしました」

シキは、ふと気がついた。

「奥方とは合う訳だ」

ホタルは嬉しそうに微笑む。

「そうなんです。小さな頃は、それがとても嬉しくて：意味なく、いろいろなことを聞いてみたりしました」

それから、シキを見る。

シキが視線を合わせると、一瞬たりとも迷わずに「本当に：最初は故意ではなかったのです。奥様にお聞かせするつもりもまったくなくて」

訴えてくる。

「私の力に巻き込んでしまい、奥様には申し訳なく思っています」確か、18歳になると言っていた。意外に若いと思ったのは、こういうところに、細かな気遣いが見えるからだ。

「ホタル。巻き込まれたのは、君だろう」

シキは思うままのことを口にした。

ホタルがあえてケイカの居場所を探ろうとしたとは思えないから。

「母の思いに君が巻き込まれた。すまなかった」

娘の不在を認められない母。

自らを騙してしか正常を保てないほどに求めるその想いに、ホタルが引きずり込まれたと考える方が適っている。

ホタルは、目を見開いた。

そんな表情は、歳相応に見える。

そして、プルプルと首を振った。

その仕種は、幼い子供のよう。

「それから…」

シキはずつと言うべきだと思っていたことを、ようやく口にする機会を得た。

「この間も、悪かった」

ホタルは、じつとシキを見詰める。

誘われているような感覚を、錯覚だと言い聞かせながら。

「…奥方を軽んじるようなことを言った」

ホタルはまた、首を振った。

「もう一つ」

本当に詫びたいのはこちら。

「無理矢理…キスした」

ホタルの頬が赤く染まる。

今日のホタルは、いろいろな顔をシキに見せる。

見せてないのは、満面の笑みくらいか。

「いえ…あれは、元はといえば私が悪いんですし」

俯いて、ボソツと返る返事は、だが、そこで詰まる。

耳まで赤い様子に、思いついたことを口にする。

「もしかして、初めてだった、とか？」

コクリ、と頷いた。

それには正直驚く。いや、慣れてないのは、気が付いた。

だが、侍女などという立場にあれば、不埒な貴族の誘いなど、いくらでもあるように。

初めて、とは。

「大丈夫です！」

いきなり、顔を上げて、ホタルが勢いよく話し出した。

「なかったことにしてますから」

ホタルにしてみれば、シキを氣遣ったの言葉だっただろう。しかし。

「いや、それは無理だろう」

無理に決まっている。

いや、なしにされるのは不本意な気がする。

なぜなら、シキは無理なのだ。

あれから何人の女で、その感触を消そうとした？

いくら濃密な時間を上塗りしたところで、僅かな応えもなかった拙いキスが浮き立つ。

「シキ様が黙ってて下されば無理ではないです。次が初めてってことにしますから、シキ様も忘れて下さい」

しかも、そんな風に言われ、かなりムツときた。

「おい、待て」

立ち上がらんばかりのホタルの腕を掴み。

「次回の予定があるのか？」

尋ねていた。

ホタルは、また頬を染めて。

「それはシキ様には関係ありません」

もつともな答えだ。

ホタルが誰とキスを交わそうが、シキには関係ない。

関係ないが：面白くない。

面白くない？

「それはそうだが：とにかくなしにするのは無理だろう」

自身が至った思いを、今は深く追求するのは止めて、ひとまず、言うべきことを言う。

「何かあったら言ってくれ。詫びはする」

ホタルは「いえ、そんなことは：」と言いかけた。だが、それは途

中で止まり、考えるようにソファに座り直した。
やがて。

「私、サクラ様のところに行きたいです」
願い出た。

そうきたか。

もし、意趣返しなら見事だ。

だが、もちろんそんな筈はない。ホタルは何も知らないだろう。
これは、純粋な願いなのだ。

「それは…」

カイがサクラを連れて行ったのは、とある小国。

アルクリシュというそこは、体調を崩した妃を連れて行くに相応しい国に違いない。

だが、シキには、あまり近付きたく場所なのだ。
どうする？

ホタルはシキを見ている。
じっと。

期待と不安を隠しもしないで。

この表情を払拭するのは簡単だ。
一言でいい。

「：分かった。連れて行こう」

そして、シキは折れた。

「本当ですか!？」

ホタルの表情が一転する。

「ありがとうございます。シキ様」

今日は本当に、様々な表情を見せる。しかし、まさか、この笑顔が
自分に向けられるとは思わなかった。

見たことのない、いや、シキには見せたことのない笑顔。遠くでしか
見たことのない表情が間近に溢れて、思いがけず、心臓が踊った。
「：どういたしまして」

意識してにっこりと笑みを返しながら、何となく、己の感情の行方

に気が付いてしまった。

ほんの数日。

カイがサクラを連れて行ってしまってから、サクラに再会するまでの時間はほんの数日だった。今まで共にいた時間に比べれば、それは本当に僅かなものに過ぎない。

なのに、サクラはすっかり変わっていた。

体調が回復したというそれだけではない。

鮮やかに。

艶やかに。

変化を遂げた。

自らの想いを認められた方は、あまりにも眩しい。

ホタルが触れることを躊躇うほどに。

匂やかな瑞々しさに満ち満ちていた。

全て、カイのために。

あの方のためだけに、サクラは変わったのだ。

そして、カイもまた。

ホタルからサクラを奪った方。

サクラを傷つけるばかりだった方。

だけど、サクラが求めて止まない方。

その方がサクラを受け入れた。

サクラの想いが届いた時に、その場に共にあれたことを、ホタルは

とても嬉しく思った。

サクラの想いが通じて。

そして、思いも寄らないほどの、深い愛情がカイから返って。

本当に良かったと、心からそう思っている。

だけど、許して欲しい。

寂しいと思うこと。

恋しいと思うこと。

どうしても、拭い切れない。

どんなに言い聞かせてみても、一人になったという思いだけはホタルからなくならない。
どうしても。

「サクラ様。準備できましたよ」

サクラの今日のドレスは、夏の若草を集めたような鮮やかな黄緑。薄い布地で涼しげではあったが、華奢な首筋や肩はやんわりと隠す大人しいデザインだ。

ほんの数日前には、アルクリシュのドレスは首と肩を晒すのが特徴と言っていたアイリだが、手の平を返したように露出を抑えたドレスを準備している。

怪我を負ったカイを煽らないため、と公言して憚らないのはさすがだが、どれほど功を奏しているのか。

「カイ様のお部屋に行かれるのでしょうか？」

呼び掛けても動き出さないサクラに再度声をかける。

サクラはちらりとホタルを見やり、少し頬を膨らませて「簡単に言わないで……心の準備がいるの」

頼りなげに訴えてくる。

「心の準備、ですか？」

サクラは頷きながら、柔らかなドレスの裾を実に無造作に、だが華麗に捌きながらラグの上に座り込む。

サクラ自身はあまり気がついていないらしいが、作法に厳しいオードル夫人にきっちり躰けられているサクラの動作は、実のところ、とても優雅で美しい。

「こんな状況、想像したことないもの……どうしたら良いのか分からないの」

どんな状況かは、深く追求しないことにする。

とはいえ、アイリの不作法のおかげで、カイの腕の中に治まるサク

ラをはっきり見てしまった身としては、その状況を想像するのは難しいことではない。

その上で、ホタルが言えることと言えば。

「私だって、どうしたらいいか分かりません」
ぐらいだ。

オードル家にいた頃は、来客として訪れる貴族らに何度も不埒な真似を仕掛けられたことはある。

だが、ホタルはそういったことは頑なに拒んでいたし、周りの親しい者達はそんなホタルを庇ってくれた。

故に経験といえ、先日の…と考えが至って、遮断する。

「相談相手には到底なれません」

としか言いようがない。

「頑張って心の準備をして下さい」

情けない応援を口にしながら、時間を気にする。

「サクラ様、そろそろ行かれた方が…」

そうしないと。

と思ったところで、扉がノックされる。

大方予想しながら答えると、「奥方様、そろそろカイ様の所に行つて下さい」

思った通り、慌ただしくシキが現れた。

シキが歩み近づこうとするサクラを見やれば。

サクラは縋るようにホタルを見ている。

「何か不都合でも？」

シキはホタルに尋ねた。

これは多分、ホタルが適当な言い訳をすれば、シキは猶予を与えてくれるつもりということだろう。

「…何もないと思います」

しかし、そう答える。

いずれ、サクラをカイの元へ送り出さねばならないのだ。
少しばかり先延ばしにしたところで意味はない。

「じゃあ、カイ様のところにどうぞ」

シキがにっこりとサクラに笑いかける。

サクラは動かない。

不安げな表情で…カイ様が見たら絶対怒る…とホタルが心配する愛らしい不安定さで、シキを見上げた。

「…まあ、奥方様の戸惑いも分からなくはありませんが」

シキは苦笑いのような、それでいてサクラを宥めるような笑みを浮かべた。

その笑みは、ホタルをも懐柔させそうな柔らかな優しげなものだったのに。

「カイ様も花を眺めて愛でる方ではないので…しかも、それが咲き誇って、触れられるのを待っているかのようにでは堪えろと言う方が酷でしょう」

サラッと言つてのけられた言葉は、若い娘二人を硬直させた。

シキ様…ちよつと、それは。

赤くなって俯くサクラに代わって、ホタルはシキを止めようと口を開きかけた。

だが。

「まして、貴方は妃な訳ですから…本来なら、誰に咎められることなく、好きにしている筈ですし」

と、続けざまの言葉も際どい。

更には「…医者言うことはもつともかもしれませんが…我慢させ過ぎるのもどうかと思いませんか？」

などと言われて、サクラは黙って身を縮めるようにしている。

「シキ様」

ホタルはなんとかシキを止めようと声をかけた。

サクラもだろうが、ホタルだって、そんな恥ずかしいこと、聞きたくない。

だが、シキはそれを易々と無視して続けた。

「怪我なら大丈夫ですよ。あの程度なら、あの方にとってはどうっ

てことないですから。何も気にせずカイ様に任せてしまえば、あとは……」

限界。

あとは、なんなのかなんて、絶対に聞きたくない。

「シキ様！」

声を荒げて、その名を呼ぶ。

シキは言葉を止めた。

真っ赤になって睨むホタルを眺め、ふと微笑むと。

「ま、逃げ場はありません。諦めて下さい」

サクラには極上の笑みを見せて、手を差し伸べた。

「……という訳で、カイ様の所にどうぞ」

サクラはシキの手を眺め、やがて「分かりました」と、そこに手を添えた。

ホタルは、シキの助けを得て立ち上がるサクラに近付き、髪とドレスを整えた。

「ホタル、行ってくるわ」

笑顔を見せるサクラに、笑顔を返し。

「行ってらっしゃいませ」

そして、サクラには分からないようにこっそり、だけども思い切りシキを睨みつけたのだった。

人目を避けるようにして、ホタルは庭の隅に座り込んでいた。

膝を抱える姿は、やはり少女のようだ。

「ホタル」

これ以上近づくと気がつくだろうというところで立ち止まり、名を呼ぶ。

ホタルは振り返り、シキを認めると慌てたように立ち上がった。

「何かご用でしょうか」

この2、3日で、少し打ち解けたかと思っていたが、また、元に戻

ってしまったようだ。

だが、シキはそれをあえて素知らぬ風に近づき、ホタルの横に腰掛ける。

そして、ホタルに隣を指差して見せた。

ホタルは少し迷った後、素直にそこに座った。

やはり、多少は歩み寄ることができているらしい。

「泣いてるかと思った」

ホタルを見つけた時は、本当にそう思った。

というか、実のところ、探していたのだ。

一人で、どこかで、泣いているのではないかと思って。

「泣きません。何も泣く理由なんてありません」

言うものの、シキには泣いているように見える。

「まあ、それもそうか」

だが、そう言っておく。

ホタルはホタルで、何かを思っている筈だから。

「…暇そうだな」

少し庭を眺めて、シキは尋ねた。片隅から覗き見る庭は、どこか遠い世界に思える。

平和な一時だ。

ほんの少し前に、魔獣に出くわして、主君が怪我を負ったとは思えないほどに。

「ここでは特に仕事もありませんし」

ホタルは同じように庭を眺めながら答えた。

静かな瞳は、シキと同じような違和感を感じているかのよう。

この娘は、時々ひどく大人びた顔をする。

それは遠耳という力のせいだろうか。

「カイ様はサクラ様にベツタリだしねえ」

言えば、大人の表情が消えて、子供の笑みが零れた。

だが、それがすぐ陰しくなってシキを睨む。

「シキ様、サクラ様を虐めないで下さい」

もちろん、今朝方の会話だろう。カイの求めに戸惑うサクラに、あえて際どい言葉を投げ掛けてみた。

「親切な助言だっただろう？」

「助言？」

疑う目線に笑いかけた。

「奥方はもう少し自覚した方がいい」

シキ自身、最近気がついた。

サクラという主の妃は。

「ご自身が十分に魅力的だということをね」

平凡な娘だと思っていた。特筆すべきことのない凡庸な娘だと思っていた。

だが、違う。

あの柔らかさ。

あの温かさ。

そして、通った一筋の強さ。

サクラという娘は、軍神や、この侍女を魅了するだけのものを持つのだ。

「そうだろう？」

ホタルはシキを見つめ、そして嬉しそうに微笑んだ。

「はい」

こちらの娘も、自覚すべきだ。

その笑みが、いかにこちらに切り込んでくるか。

もつとも、まだまだこちらは咲き誇るには、時間がかかりそうだが。

「シキ様は何してらっしゃるんですか？」

少しの間をおいて、ホタルが尋ねてきた。

ホタルの方から、会話を続ける様子を見せたことを意外に思いながら。

「私も暇を持て余しているところだ」
答える。

カイに傷を負わせた魔獣は狩った。

もう一頭いる筈の魔獣は、まだ見つからない。

剣を振るう相手がいない内は、シキには比較的自由が与えられる。とはいえ、言うほど暇を持て余している訳ではない。

今しがたも、現れた狩人達に幾つかの指示を出してきたところだ。

「…タキ様はお忙しそうにお仕事していらっしゃいますよ」

ホタルが言う。

「あいつは仕事が趣味だから」

シキは肩を竦めて見せた。

双子の片割れの忙しさは承知している。

だが、それはシキが口を出すことではない。シキが必要な時、タキは迷いも遠慮もなく使ってくれるのだから。

だから、今はこうして一時の平穩を過ごすくらいは許されるだろう。

「…カイ様が」

ぼつり、とホタルが切りだした。

見ると、何か言いづらそうにしている。

「うん？」

促す。

「…私がシキ様をお連れしたのか…とおっしゃったのですが」

ホタルは俯いたままだ。

「ここには…いらっしゃることを、あまりお望みではなかったので
しょうか」

これは何か聞いたな、と察する。

「そうだな」

ホタルが見た目の幼さと裏腹に、ひどく大人びた風に思い悩むタイ
プらしい、と気が付いているシキは、そんな些細なことがホタルに
引っかけているなら取り除いてやりたい、と単純に思っただけで答
える。

「…それは…」

ホタルは言葉を探すようにしていたが、結局

「アイリ様がここにいらっしゃるからでしょうか？」

すっぱり聞いていた。

つい笑みが零れたのは、まるで駆け引きができない率直さが可愛らしいと思えたからだ。

「何か聞いた？」

尋ねる。

「遠耳で聞いたのではないです」

との答えに、また、ホタルが力を卑下していると感じながら。

「そういう意味で聞いたんじゃないよ」

手を伸ばして、ポンポンと小さな頭を軽くはたく。

ホタルは戸惑うような表情を見せながらも、シキの手のひらを拒まなかった。

「この侍女の方々が…その…過去の経緯をいろいろと教えて下さいます…」

この侍女達は若く華やかな分だけ、口も軽いらしい。

シキは「ふーん」と、なんとなく答えた。

ホタルは少しだけ間をおいて。

「シキ様もアイリ様をお好きなのですか？」

まるで子供の問い掛けだった。

「そういうことを、サラリと言うかな、この子は」

本当に駆け引きのないそれ。

「はっきりしておこうと思ひまして」

そして、やけにきっぱり言う。

「何故？」

問えば。

「お詫びすべきかと」

一度も視線を合わせないのはそういうことか。

どうやら、侍女の心中には罪悪感、というものがあるらしい。

「ここに連れてきて頂いたので…申し訳なかったと…」

シキはもう一度ホタルの頭を手のひらで宥めた。

こんなことで、ホタルを煩わすのは避けたい。

「いや：正直来て良かったよ」

だから、隠すことなく話すことにする。

「アイリが好きだったよ」

幼い頃から一緒にいた小さな姫君。

美しい娘になる様を見守って、それが、いつの間にか恋慕になった。だが、カイの妻になる女性だと、手の届かない方だと、最初から求めもしなかった。

あのままカイの妻になっていれば、違っただろう。

主君の妃として仕え、想いは何らかの姿に変わったと思う。

ところが、アイリは双子のタキの妻となった。思いがけない：いやアイリの想いには気がついてはいたのだが、それでも、まさか：という現実にはシキの気持ちはどこにも行き場がなくなってしまったのだ。

引きずっているとは思いたくなかった。

だが、どんな想いを抱き続けているのか形が見えなくて。

だから、ここには来なくなかった。タキとアイリが共にいるところを見たくなかった。

「けど、もう、大丈夫だった」

そう、大丈夫だったのだ。

アイリは、双子の兄の妻。

その現実には、あっさりとシキの中に落ち着いた。

さすがに無邪気な抱擁を受け入れるのは躊躇われたが。

昔話に花を咲かせられるくらいには。

それは過去の想いだった。

「…本当に？」

心配げに尋ねる少女のような娘に頷く。

ほっとしたように微笑んだのに満足しながら、ふと話を振ってみる。

「ホタルは？」

さほどの意図があった訳ではない。

まるでその手の話題に興味のなさそうな娘への好奇心？…の筈。

「私？」

ホタルは首を傾げた。

「そう：君は、誰が好き？」

ホタルは首を振った。

「：私、そんな資格ありません」

呟かれたそのの意味は分からない。

「資格？」

誰かを好きになる資格。

そんなもの、誰にだってあるだろう。

「サクラ様だけでいいんです」

ホタルは言った。

きっぱりと。

それが気に入らなかった。

「だが、奥方の唯一は君じゃない」

自分でもひどいことを言ったという自覚は十分にある。

しかし、事実。

ホタルが唯一と仕える方は、ホタルではないたった一人を見つけた。

「意地悪ですね」

ホタルが睨んでくる。

それをさぞかし余裕めいて見えるだろう笑みで受け止めた。

「寂しくない？」

尋ねる言葉は、自分でも思いがけない優しさを含んでいた。

計算ではないそれに一瞬シキ自身が戸惑った。

だが、それはホタルを懐柔しない。

人よりたくさんの言葉を聞く耳は、その優しさをどう取ったのか。

「本当に意地悪ですね」

むしろ、気分を害したようだ。

立ち上がろうとするのを腕を掴んで止める。

「私は寂しいよ」

一人は寂しい。

そんなの当たり前だろう。

だから、みな誰かを求めるのだ。

違うか？

「だから…たくさん恋人をお持ちなのでしょう？」

責める口調ではなかった。

事実として突き付けて、シキから離れたいというだけの気持ちを含んだ言葉だったのだろう。

だが、それは何故かシキに何かを抱かせた。名を付けるなら、罪悪感とか後ろめたさ。

「それも親切な誰かが教えてくれたのか？」

それでも、余裕の笑みを見せて尋ねた。

ホタルは答えない。

ただ、シキをじっと見つめてきた。

「本当に欲しい一人が手に入らないとね…一人じゃ代わりにはならないんだ」

視線を逸らさずに、シキはそんなことを口にしてみた。

多分、それは本音だ。

ただ、本当に欲しい一人は誰なのか。

戦の最中、狩りの最中。

もしかしたら、これが最期の時かも。

そんな時さえも。

思い描く人をシキは持っていない。

幾人の情人がいても。

戦いを終えて戻る場所は、シキは定まっていない。

「…私は…一人で良いんです」

サクラ様だけで。

ホタルは呟いた。

とはいっても、シキに侮蔑の視線を向けるでもない。なるほど。

シキのことは他人事か。

己には関係ないと、あっさり切り捨てられるのか。
やはり、本当にあの妃だけなのか。
だけど。

「寂しいのに？」

言いながら腕を引く。

「…寂しい者同士…慰め合うのは悪いことか？」

本気か冗談かは自分でも分からない。

だが、細い腕を掴んだ力は自分自身でも思いがけず強い。

ホタルは崩れるようにシキの胸に倒れ込んだが、すぐに顔を上げた。
そして、今度は明らかな蔑視を胸元からくれる。

「申し訳ありませんが、他を当たって下さい」

腕を払われ、すぐさま胸から逃れる娘に、再び引き寄せられる隙は
なかった。

「失礼します」

礼さえなく、ホタルは小走りに逃げていく。

失敗した。

だが、止まらなかった。

サクラ一人を求めて、誰も受け入れようとしないうホタルが腹立たし
い。

こんなに。

こんなにシキを捕えておいて、サクラしかいららないというホタルが。

ああ、そうか。

ストンとシキの中で、何かが落ちた。

そうなのか。

シキは、納得した。

なんとなく、気がつきかけていた。

だが、唐突にそれに納得した。

あの娘に惹かれている。

あの娘が欲しい。

シキはホタルが去った方を眺める。

だから、目が離せない。

泣いていないかと心配で、姿を探さずにはいられない。

そして、笑みを向けられれば、胸が跳ね上がるのだ。
そうか。

己はあの娘が欲しいのだ。

なのに、あの娘の心を占めるのはたった一人。

だから、こんなにも腹立たしい。

とはいえ、どうする？

あの娘は、妃が最も信頼する侍女だ。

遠耳という能力を持ち、しかも、まだまだ何かを内に抱えていそう
だ。

何よりも、シキを苦手だとはっきり意思表示しているではないか。
軽い気持ちで手を出すには、少々、いや、かなり厄介な相手。
考えてみる。

このまま、距離を置くと言うのも一つの手。

いや、そうするべきだろう。

だが、できるのか。

気がつかぬ内にも視線が追うのに。
意識せずとも、手が伸びるのに。
手に入れずに済むのか？

『寂しい者同士、慰め合うのは悪いことか？』

シキの言った言葉がホタルの耳に残っている。

確かにホタルは寂しい。

だけど、シキが言うのは違うと思う。

慰め合えば、その時は寂しさが薄れるのかもしれない。

でも、その後はどうなるの？

慰め合うためだけに寄り添って、そのあとは？

また、寂しさに苛まれるだけではないの？

そうしたら、また、慰めてくれる人を探すの？

そんなの嫌。

こうして一人で眠れない夜を過ごす方が良い。

どのような未来が先にあるのかは、もちろんどんなに耳を澄ましたところで聞こえる筈もないけれど。

でも、サクラの未来がカイと共にあるならば。

それでも、ホタルはサクラが唯一なのだから。

だったら、さっさとこの寂しさに慣れてしまいたい。

できる筈。

離れ離れになる訳ではないのだ。ホタルよりもサクラに近しい方が現れただけ。

サクラは側にいる。

それは、サクラが現れる前の孤独な日々よりよほど良い筈。

そうでしょう？

ホタルはため息をついて、寝返りを打った。

眠れない。

『寂しくない？』

聞きたくない声が脳裏に響く。

ホタルはそれが今現在囁かれているものではないと分かっているが

ら耳を塞いだ。

どうしてあの人は、構うのだろう。

苦手だと分かっているだろうに。

どれだけ、無礼な態度を取っても、優雅に微笑んでそれを受け止める。

苦手だ。

とても。

枕に顔をうずめる。

考えない。考えても仕方がない。

高貴な方の戯れを真剣に受け取るのは愚かだ。

そう言い聞かせるのに。

シキに掴まれた腕が熱い気がする。一瞬触れただけの体の感触が手のひらに残っている気がする。

それを認めたくなくて、ホタルはギュッと目を閉じて眠りを待った。

ようやく、浅い眠りが訪れる。

そんな時、ホタルは再び目を開けることを余議なくされた。

僅かな物音。

微かな息遣い。

普段ならば、気が付かなかったかもしれないほどのそれ。

ホタルを身を起こした。

耳を澄ます。

寝静まった屋敷内の物音は少ない。

それを通り越しもっと遠くへ。もっと広い範囲を。

そして、届いた音にベッドを降りる。

迷っている暇はない。

ホタルは数えきれないほどの寝返りでベッドから滑り落ちていたシヨールを拾い上げ羽織ると、部屋を飛び出し走り出した。

誰もいない薄暗い廊下。

壁の向こうのその向こう、嫌な音が近づいてくる。

目的の扉が目に入るなり、慌ただしくノックした。

軍神は、誰と問うこともなく、すぐに部屋から出てきた。

「どうした？」

いつかは、嫌いだとも思った低い声。

しかし、ひっそりとした空気の中に響くそれは、驚くほどホタルを落ち着かせた。

だが、ひしひしと確実に近付いてくる音は、それをも蹴散らす。

「嫌な音がするのです」

今、この時も。

ほら、近づいてくる。

「…分かった」

カイはホタルの様子に何かを察したのか頷くと、一旦は部屋の中に入っていく。

幾らも経たない内に現れたカイの手には、剣が握られていた。

「どんな音だ？」

長い足が速足で進む。行き先は、迷わずサクラの部屋。

ほとんど駆け足になりながら、ホタルは乱れる呼吸の中答えた。

「…唸り声…呼吸…足音…とてもたくさんです」

なお探る。

近い。

「どのくらい近い？」

もうすぐそこに。

そして、一体どれほどいるのか分からぬほどに、幾重にも重なっている。

「かなり近いのです。申し訳ありません。魔獣は音を消すのが上手なので…」

どうして、もっと早く気がつかなかったのだろう。

どうして、もっといろいろなことを聞けないのだろう。

もどかしさを覚える中「詫びる必要はない」

カイはそう言った。

そして「シキに知らせに行けるか？」と問う。

命令ではない。実は足が震えているホタルの怯えを知っているのだ。この方は。

なるほど、本当はお優しいのだ。

ホタルは答えた。

「はい」

カイがちらりとホタルを見る。

そして、励ますように微笑んだ。

「寝てるだろうが、たたき起こせ」

その言い方に、ホタルは一時だけ状況を忘れて笑みを零した。

シキの扉の前での躊躇は一瞬。

あまりに近いそれは呑気にノックをしている場合ではないのだと、ホタルの覚悟を決めさせた。

「シキ様！起きて下さい！」

有無を言わず、扉を開け放った。

アイリじやあるまいし、人生、こんな無作法をしたことはない。でも、そんなことを言っている場合ではない。

ベッドの上、シキが飛び起きた。

同時に枕元にある剣を構えるあたりは、さすがだ。

「ホタル？」

驚いた様子を隠しもしない騎士に、ホタルは近寄りベッドへと伸び掛かる。

「君：夜這いなら、もう少し穏やかに…」

「違います！早く起きて下さい！」

相変わらずの軽口に返しながら、シキの腕を取ってベッドを降りようとしたそのとき、どこかでガラスの割れる音がした。

「何だ？」

「魔獣です。すごい数が…」

状況を説明しようとする、シキの背後で激しい音がする。

シキは反射的に自らの体をシートで覆い、更に、その体でホタルを庇う。

音が止み、室内に目を向けたシキは啞然とした。

「なんだ、これは…」

ガラス窓が無残に打ち破られている。

「寒い季節でなくて良かった、のかな」

などと言いながらも、今がそんな状況ではないことはすぐさま知れた。

部屋には、無数の魔獣が目を光らせて、蠢いていた。

「知らせに来たのは、これか？」

尋ねられて、ホタルはコクリと頷いた。

思わず、シキに縋る。

なんて数なのか。

ここまでとは、思わなかった。

「…カイ様は…サクラ様のところに…」

シキは縋るホタルを抱き寄せながら、手にしていた剣を構えた。

また、どこかでガラスの割れる音がする。

それに刺激されたのか、何匹かの獣が飛び掛ってくるのを、シキの剣があっさりと切り捨てるのを、ホタルは抱かれたままで茫然と見ていた。

「知らせてきたのか？」

頷いた。

もはや、声は出ない。

「上出来だ」

見上げれば、いつもと変わらない笑みがホタルを見ろしている。

微笑む余裕が、この人にはあるのだ。

どんなに、穏やかに見えても、この人も戦士なのだ。

「しかし参ったな…身動きが取れない」

自分がくつついているせいかと身じろぎすると、逆に引き寄せられ

て、大きな手のひらがぽんぽんと背中を叩く。

「違う。この数だ：たぶん、屋敷中に溢れてるんだろうから：」
耳を澄ませばシキの言うとおり。

もう何が何だか判らない音が、屋敷中に渦巻いている。

「：っや：」

紛れる激しい悲鳴にホタルは、シキの胸に顔を埋めた。

「ああ：もう、この子は真面目だな。聞かなくて良いから、ここで大人しくしてろ」

何を聞いたのか察したのか、シキはホタルの頭を抱いた。

「そうは言ってもあまり大人しくもしてられないか：とりあえず、奥方のところに向かうかな。努力はしておかないと、後でタキに何を言われるか」

シキは言いながら、ホタルを抱きかかえるようにしてベッドを降りた。

「歩けるか？」

問いに頷けば、ホタルの腕を取って歩き始める。

昼間は怒りに任せて振り払ったそれが、今はこんなに頼り甲斐があるとは。

だが、開け放ってあった扉から一步踏み出して、そんな僅かな安堵は飛び散った。

ホタルはガクガクと震え出す体を止められなかった。

獣、獣。そして：屍。

見知った侍女のそれに、ホタルは目を背けた。

「見るな：って言っても無理か」

ホタルの頭を胸に押し付けて視界を遮りながら、シキは言う。

怖い。

怖い。

怖い。

これが騎士や狩人が生きる戦場という場所？

何度も耳で聞いたそれは、目にはこんな風に映るのか。

動けない。

固まってしまった体は、一步も進めない。
どうしよう。

サクラ様の元に行きたい。

だけど。

「ホタル、奥方のところに行くんだろう？」

シキが耳元で囁く。

ホタルは顔を上げた。

「カイ様がいる。だけど、それでも君は奥方のところに行きたいんだろう？」

ホタルは頷いた。

「じゃあ…なんとかついて来い」
腕を掴んだままシキが走り出す。

キーキーと耳障りな声が渦巻く中で、シキの絶つ獣の悲鳴がひと際
甲高く響く。

シキは決してホタルの腕を離さなかった。

そればかりか、時には抱き寄せてホタルを全身で庇う。

完全に足手まといだ。

それを思い知って、だから、ホタルは必死に走った。

頑張って。

走って、走って。

ようやく辿り着いたサクラの部屋。

床を埋め尽くさんばかりの獣の残骸。

見たこともないような巨大な真黒な魔獣が、横たわっている。

少し離れたところには、一度だけカイと共にいるのを見た白い獣。

そして、サクラはカイの腕の中にいた。

それを見て、ホタルは心底ほっとした。

寂しいとか。

恋しいとか。

そんなことは、もうどうでも良かった。

サクラが無事で。

そして、何よりも安全な、何よりもサクラが求める…カイの腕の中にいる。

「遅い。もう終わった」

大事そうにカイがサクラを抱く。

「…ひとまず、だがな」

ホタルの腕を掴むシキの手に力がこもる。

ホタルはシキを見上げたが、シキはホタルを見ていなかった。

カイと巨大な黒い山に目をやりながら、ホタルの腕を掴んだままカイとサクラに近づいていく。

「無茶言わないで下さい。そこら中、魔獣だらけだったんですから。屋敷中、めっちゃくちゃですよ」

ホタルはシキから目を離し、驚く大きさの魔獣をすれ違い様に眺め、そして、カイに抱かれているサクラに視線を移した。

サクラはカイの腕の中で疲れたように、それでも、ホタルに頷いて見せた。

大丈夫だと。

そして、大丈夫かと問いかけてくる視線に、ホタルもまた頷いて見せた。

ホタルの耳に新たな足音が届く。

「カイ様、屋敷内には魔獣は残っていないようです」
タキだった。

これでは、シキだかタキだか分からない。

そう思うほど、血に塗れている。

「…例の魔獣でしょうか。サラの…」

「…分からね…見知った者に確認させろ」

カイが命じるのをホタルはぼんやりと聞いていた。

しばらく、何も聞きたくない気分だ。

だが、タキが出ていく足音が耳に響く。

精神的におかしな状態になっているのだろう。

聞きたい音。

聞きたくない音。

求める声。

興味のない会話。

様々なものがホタルの意思に関係なく遠ざかったり、近づいたりする。

「このあたりの狩人に伝えろ」

カイのそれはシキに向けられているようだった。

既にシキの手はホタルを離している。

それに気がついた途端、その場にしゃがみ込みたい思いに駆られたが、なんとか立ち続ける。

「ここから去って行った奴らが、しばらくは暴れるだろう…根こそぎ討ち払え」

「了解です。俺も、このまま着替えて出ますよ…奥方様、準備にホタルをお借りしても？」

シキの声がホタルの名を紡いだことだけが、やけに現実味を帯びて耳に届く。

サクラを見ると、サクラもまたホタルを見ている。

カイに抱かれているサクラには、ホタルは必要ないだろう。

ホタルは部屋を出るシキに続いて、サクラに背を向けた。

シキはホタルを待っていた。

その姿を見た途端、何故か急に泣きたくなった。

「頑張ったな」

シキの労いに首を振る。

何の役にも立っていない。何の役にも立たない。

それでも、涙は堪えた。

まだ、終わっていない。

これから、この人は魔獣を追ってここを発つのだ。

「…頑張ったよ。ついでにもうひと頑張りしてくれ」

シキの腕がホタルの腕を取って歩き出す。

「はい」

ホタルは素直に頷いて、それに従った。

シキの支度を手伝いながら、ホタルは母を思い出していた。

思い出したくもない思い出ばかりの中で、唯一といって良い辛い光景。

ホタルの母は、父を戦に送り出す支度に手を貸している。

日頃は冷たい視線で父を嘲る母が、何故かその時だけは献身的な妻に見えた。

こうして戦いに赴こうとする男を目の前になると、それがどんな男であっても。

それがどんな女であっても、その無事を祈らずにはいられないのだろうか。

シキが血に塗れた衣を脱ぐ。

細かな傷が散りばめられた背中に、ホタルは新たに用意された衣をかけた。

今は濃紺のこれも、いずれ紅に濡れるのだろうか。

それが、どうか、この人自身の血でありませんように。

そう祈る。

シキの前に周り、生地を整える。

「ホタル：昼間は悪かった」

上から降ってくる声に、顔を上げた。

「冗談が過ぎた」

そう言うシキは、真面目な顔で見下ろしている。

そんな顔、しないで欲しい。

まるで、これが最期の別れのように思えてくる。

「いえ」

答えながら、背後に周り、広い肩にマントをかける。

そして、再び前に戻り、首元の紐に手を伸ばした。

「頼みがあるんだが」

シキは変わらない真面目な顔で、ホタルに言う。

「はい」

素直に返事をして、マントの紐を結わいてから、手を下ろしてシキを見上げる。

「抱きしめたい」

ホタルは眉を寄せた。

意味は多分分かってる。しかし、その本意が分かりかねる。

ただ、シキの口調と表情がいつもと違うから、やみくもに拒否するのも躊躇われた。

「これで：最期かもしれないから、抱いておきたい」

それは：ホタルではなくても良いということだろうか。

慰める相手を求めるように。

今この時に、ただ、誰かを抱きしめたいということだろうか。

ホタルは迷った。そして、「私でよろしければ：どうぞ」

結局、そう答えた。

シキの言うとおり、これで最期かもしれないから。

だから、だ。

シキの腕が肩を抱く。

ぐっと引き寄せられて、ホタルは許したことを少し悔やんだ。

「やっぱり：細いな」

背中を手の平が撫でる。

思いがけない強さで、腰が引き寄せられる。

想像以上の密着に、ホタルは身を強張らせた。

「細すぎる」

解いてある髪に顔を埋められて、首筋にかかる呼吸に肌がざわめいた。

「抱き心地の悪さは：我慢して下さい」

そして、ホタル自身にも我慢を強いる。

逃げたいのを抑えて。

背中を手を回したい、と一瞬よぎったのを抑えて。
シキの腕に納まる。

「抱き心地は悪くないって…言わなかったか？」

シキはしばらくの間、ホタルを抱いていた。

ホタルの耳には、シキの鼓動と息遣い。

そこに。

「ホタル」

名を呼ぶ声が混じる。

「キスしてもいい？」

そんな問い掛け。

「いやです」

即答すれば、小さな笑い声が頭上から届く。

「それは…」

ホタルはシキの胸に手を置き、そつと体を離れた。

「無事にお戻りになってから、お好みの方となさって下さい」

それは、ホタルではない。

どんな女性かは知らない。知りたいとも思わない。

でも、ホタルではない。

「行つてらっしゃいませ」

ホタルは微笑んで、最上級の礼を試みせる。

侍女として。

それ以外には、何もないけれど。

教えられた仕草に、素直にシキを心配する想いを乗せて。

「心よりご無事をお祈りしております」

シキはホタルを見つめていた。

何かを言いたいように唇が動く。

だが、何も声にならない。

だから、ホタルには聞こえない。

「…悪い…これだけ許してくれ」

シキは呟き不意に背を屈めると、ホタルの頬に一瞬唇を触れた。

「行ってくる」

離れていく騎士の背を見送ることもなく、ホタルは立ち竦んでいた。

「…何、これ…」

少しして呟いた。

ハタハタと絶え間なく、涙が溢れて止まらなかった。

とても滞在できる状態ではないアルクリシユの屋敷から、ラジル邸に戻ってきたホタルの日々は一見平穏だった。

ホタルを心穏やかにさせてくれない人の命懸けの不在理由を考えれば、もちろん無事を祈らずにはいられない。サクラの不安げな様子を見れば、屋敷の主の早い帰還を望まずにはいられない。

しかし、罪悪感と背中合わせながらも、その人がいないことはホタルにとっては、いくら物思いを減らしているのが事実だった。

そんな日々は2週間ほどだっただろうか。

終わりを予兆し始めた夏の花々を、どうしても寂しさを紛らわせないでいるサクラの慰めにと、庭師に腕いっぱい切ってもらったホタルは、木々の合間にいるその存在に気がついて足を止めた。

「タオ？」

名を呼ぶ。

真っ白な、とても美しい魔獣は庭の片隅から上を見上げている。

「どうしたの？」

尋ねながらその穏やかな目線を追えば、サクラの部屋に行き着いた。この子は、いつもサクラの傍らにいた。

破魔の剣が、サクラの内にない間は。

軍神がサクラの側にいない間だけ。

ああ、そうなのか。

ホタルは気が付いた。

剣が戻ったのだ。サクラの内に。

この度の魔獣狩りは、一応の決着が着いたのだろう。だから。

「もうサクラ様の側にはいられないのね」

カイもまもなく戻るだろう。

サクラの元に。

シキも、戻るのだろうか。

誰の元に？

浮かぶ思いは、心の片隅に押しやって。

ホタルはしゃがみ込んで、夕オに視線を合わせると慰めるように微笑んだ。

「また、来る？」

ホタルに負けないくらいサクラを大好きな獣。

また、来るとしたら。

それは、再び剣がサクラの元から、カイの手へと渡るとき。

サクラには辛い日々。

そんなときにしか側にいられない夕オに、ホタルは心から同情した。この白い獣の切なさに比べれば、ホタルの状況はいくらも悪くないと思える。

「：暇だったら：私にも会いにきてね。いくらでも、サクラ様の様子を教えてあげる」

そう言って耳の後ろを指先で撫でてやれば、夕オはホタルの鼻先にちょこんと濡れた鼻を触れた。

そして、ふわりと舞い上がるように駆け出す。

今のは、同志の挨拶？

ホタルはクスリと小さな笑いを零す。

「元気でね：怪我なんてしないでね」

聞こえるか分からないけれど、そう呟いた。

ホタルはいつだって、こうして送り出す側だ。

そうしかできない者の務めとして、戻った時には笑顔で迎えよう。

「さて、と。いつお戻りになるのかしら」

サクラ様の想い人と、その側近は。

きっと、寄り道なんてしないで、まっすぐに戻ってくるだろうから。

戦いに疲れた軍神は、すぐにもサクラの元で癒されたい筈。

花束を抱え直して、ホタルは屋敷へと向かう。

カイが戻る。

シキが戻る。

平穏な日々の終わりかもしれない。

それでも、ホタルの心には一欠片の不満もなかった。

そして、竜が舞い降りる。

降り立った軍神を、サクラは優雅な礼で迎え入れる。

それに倣うように頭を下げながら、ホタルはそっとサクラを見やっていた。

剣が戻ってからのサクラは、どうしてか不安げだった。

明るい態度を表面に乘せてはいたが、ふとした時に表情が沈み込む。どうしてだろう。

カイ様がお戻りになるのに。

今度こそ、サクラ様の想いは成就するだろうに。

なのに、どうして、こんなに不安な顔をなさるのだろう。

今もそう。

カイはサクラを求める気持ちを抑えきれないように口付けを一つ与えて屋敷へと戻っていく。

家人たちが驚きと、だが、明らかな好意でそれを受け入れて動き出す中、サクラだけが：サクラの不安を感じ取っているホタルだけが、動きを止めて戸惑っている。

「意外におとなしいな」

竜を降りて初めて聞こえた声は、いつものとおりのんびりとしたものだった。

サクラの緊張は、張りつめたまま。

ホタルの緊張は、スルリと落ちて。

「…てつきり、このまま寢室に直行かと…」
続く、いつもの軽口に。

「シキ様…やめてあげ下さい」
遮る余裕も出てくる。

シキは軽く肩を竦めて、言葉を止めた。

そして、これも以前と何も変わらない柔らかな…そして少し悪戯めいた笑みを、ホテルにくれる。

それが、安堵をもたらしたなどとは認めたくない。認めたくないけれど…では、この胸に広がるものを何と呼べば良いのだろうか。

シキとタキが立ち去り、サクラとホテルが残される。

サクラは、途方にくれたようにその場に立ち尽くしている。

なんと声をかけるべきか。

多分、サクラの中には、ホテルには分からないたくさんの不安が溢れているのだろう。

カイが戻った以上。

そして、今のカイの態度からしてみても。

カイがサクラを欲していることは明らかだ。

いつかシキが言ったように、逃げ場はないように思える。

そもそも、逃げる理由もない筈だ。

サクラ様は、カイ様をお好きなのだから。

そして、カイ様も。

だから、結ばれるのは当たり前。

それでも。

もし、このまま、ここにいたら？

そうしたら、もしかして以前のように、無邪気に笑うだけの二人に戻る？

そんな、在りえない馬鹿みたいな考えを振り払い、ホテルは心がけて、明るい声を出した。

「サクラ様、部屋に帰りません？」

サクラは聞こえているのかいないのか。

ただ、物憂げに宙を見ている。

ホテルはサクラの手を引いて、歩き出した。

ホテルにとっても、それはとても覚悟のいる一歩だった。

ホタルは誰もいない庭の隅にいた。
自分でも呆れるのだが。

辛いことや、哀しいことがあったとき。

誰とも顔を会わせたくない時。

そんなときの逃げ場所はいつも隅っこだ。

庭の隅だったり。お屋敷の隅の部屋の、そのまた隅だったり。
とにかく隅っこ。

そして、耳を塞いで、目を閉じて。

何かを待つ。

それはホタルの感情の嵐が遠ざかることだったり、聞こえそうな喧騒が止むことだったり。

様々。

今夜は。

ただ、時が過ぎるのを待てば良い。

それだけ。

今夜、サクラ様はカイ様に召されるだろう。

その夜に、ホタルはマアサに全てを任せて、サクラから離れていることを選んだ。

ホタルでは、ダメだ。

もし、サクラが少しでも望まない素振りを見せれば、あの不安げな表情を見せれば、それに同調してしまうだろう。

宥めて、カイの元へと背中を押すことなんてできないから。

離れたところで、こうしてサクラを案じている。

案じながら……ただ。

ほんの少し。

寂しさが増してしまう。

小さな嫉妬にも似た感情が沸き上がる。

仕方がない。

だって。

ホタルにはサクラだけだから。

だから、この感情を完全に消し去ることなんて無理。

ホタルは一本の大木の下にしゃがみ込んだ。

春になると華やかなピンクに染まる樹木は、今は青々とした葉を繁らせている。

幹に額を当てる。

その内を流れる音に集中する。

何も聞かない。

何も考えない。

言い聞かす。

だけど。

こうしていると。

ホタルが泣きたい気分でしゃがみ込んでいると。

最近はずっと現れて、頼んでもいないのに相手をしてくれる方がいたことを思い出した。

でも、今夜は現れないだろう。

カイがサクラを求めるように。

あの方も、例えばそれがかりそめであっても、一時の温もりと癒しを求めている筈だ。

浮かぶ考えを振り払う。

ホタルを癒す樹木の内を流れる水と、僅かに吹く風の音だけに、集中しようとするのに。

寂しさに負けて力が暴走しそうになる。

必死に耳を閉ざす。

何も聞かない。

聞いてはいけない。

サクラ様の声も。

あの人の声も。

何も。

「誰かいるのか？」

ホタルは息を飲んだ。

聞くまいとしていた筈の声。

力が暴走して、声を探ったのかと疑う。

だが、振り返れば、現実にはシキはそこに立っていた。

「…ここにいたのか…」

何かにホッとしたような声だった。

ホッとしたのはホタルの方こそなのに。

「大丈夫か？」

しゃがみこむホタルの前にひざまずき、尋ねてくる顔は真剣だ。

「…何がですか？」

素直な問いだった。

なのに、シキの眉間に皺が寄る。

「まったく…この子は…」

言うなり抱き寄せられた。

「…っシキ様…」

驚いて身を引こうとするのを、力で押さえつけられる。

力では絶対敵わない。そんなのは、承知している。

それでも、もがくホタルをシキの一言がおとなしくさせた。

「泣いてしまえ」

そんなこと。

できる筈ない。

どうしても、泣くことがあるだろうか。

「泣きません」

答える。

しかし、抱きしめる体を自ら遠ざけるには、あまりにそこは心地好い。

「泣けば良い」

そう言って、促すように。

抱く力が強まる。

「…どうしてですか？…」

サクラ様は幸せなのに。

それは私をも幸せに導く筈なのに。

「寂しいんだろう」

寂しくなんて。

強がるには、この状況は優しすぎる。

いつかは、慰め合うことを拒んだ。

だけど、今のシキの慰めを拒むことなんて。

「泣いてしまえ」

背中を撫でる手のひらから、逃げだすなんて無理だ。

それでも、涙を堪える。

「：奥方には内緒にしておく」

その言い方が少しおかしくて。

笑おうとした筈なのに。

突然、涙が溢れ出た。

「：サクラ様には内緒にして下さるのですか？」

言って、シキの胸元に顔を埋めた。

泣いて良い、とは言ってくれていても。

泣き顔を晒すことは、躊躇われた。

「内緒にしておくよ」

ホタルの心を見透かすようにシキは、隠した顔を胸にしまいこんで

腕に包んだ。

ホタルは諦めて、シキに甘えることを自らに許した。

別に、サクラと離れ離れになる訳でもないのに。

なのに、寂しくて。

遠くに行ってしまう訳ではないのに。

それでも、手が届かない気がする。

痛くて痛くて：どこもかしも痛くて、どうしようもない。

「：君の奥方への想いは：まるで恋だな：」

揶揄する響きを持たないそれに、素直に頷く。

そうなのかもしれない。

恋なんて感情は知らないけれど。

きつと、そうなのだ。

だって。

「サクラ様は特別なんです」

ぼつり、と呟いていた。

「うん」

慰めの抱擁を続けながら、シキが頷く。

止められない涙を、受け入れてくれるそこに落とし続けながら、ホタルは続けた。

「私、サクラ様がいなかったらどうなってたんだろう」

シキに話そうとしているのか。

それとも独白？

こんな話：誰にもしたことはない。

先を促すように、シキの手のひらがホタルの背を柔らかく叩く。

「：サクラ様がいなかったら：私：」

サクラと出会った日のことを。

初めてオードル家を訪れた日のことを。

ホタルははつきりと覚えている。

あの日は、ホタルが生まれ変わった日だから。

両親を相次いで亡くしたホタルは、それまで一度として会った事のない父方の祖父に引き取られることになった。父の部下だという男に連れられて、オードル家の裏門を潜ったのは6つの時。

立派なお屋敷に気後れするほどの気力もなかった。

広がる庭の美しさも目に入らなかった。

自ら動くことができるだけで、あとは何も感じられない少女は、照りつける真夏の日差しの中、黙々と庭の手入れをしている男の元へと連れて行かれた。

それが祖父だった。

父の父だから、当然のように初老の年齢に達していた。

だが、労働で鍛えられた体はたるみを感じさせず、よく日焼けした肌の色艶も見事だった。

もつとも、その時のホタルには、それらも認識できていなかった。
だが。

「…ホタルか？」

祖父の最初の言葉はそれだった。

その声を聞いた途端、ホタルの体は凍りついた。

誰もが汗ばむ暑い季節にも係わらず、足が震えて立てなくなり、その場にしゃがみ込んだ。

祖父の声は、そっくりだったのだ。

あの男に。

ホタルに無情なまでに、声を聞くことを求めた男…世間では父と呼ばれるその存在。

もう、いない筈なのに。
なのに。

今まで、閉ざしていた耳が一気に爆発した。

ありとあらゆる声が、知らない言語が、洪水のようにホタルの頭の中に流れ込む。

ホタルは耳を塞いで聞くまいとするのに。

止まない。

それは、止まらない。

助けて！

誰か助けて！

ホタルは心で叫んだ。

今まで誰かが助けてくれたことなどないのに。

いつだって、自分自身で抑え込むしかなかったのに。

なのに、その時。

「ホタル」

いきなり、耳元で聞いたことのない声がした。

幼い少女の声だった。

「ホタル？」

必死に顔を上げると、驚くほど間近に同じ年くらいの少女がいた。

「…大丈夫」

彼女はにっこりと笑った。

そして、ホタルの手のひらの上に、自分の小さな手のひらを重ねた。

「聞こえない…何も聞こえないから、もう大丈夫」

ホタルが遠耳であることを知っているのか。

少女はそう言って、しばらくの間、ホタルの耳をふさぎ続けてくれた。

すると、本当に止んだのだ。

声という声。音という音。

それらがすべて消えた。

ホタルが驚いたように少女を見やると

「ね？」

と彼女は微笑んだ。

そして、立ち上がり呆然と成り行きを見ている男に笑いかけた。

「ジン！」

ホタルと同じくらい小さな体で、大きな祖父を呼ぶ。

祖父は微笑みを返しながら、ホタルと彼女に近付いた。

「ホタル？」

今度の声は、父とは全く違って聞こえた。

とても穏やかで、優しい声だった。

何故、父と間違えたかと思うほど。

ホタルは頷いた。

すると、祖父はホタルを軽々と片手で抱き上げた。

思えば、あれは生まれて初めての…ただ、むずがる子供をあやすための、優しさに溢れた抱擁だった。

「ここで、私と暮らすことになるんだよ…大丈夫かな？」

ホタルは、もう一度頷いた。

父と少しだけ似た面立ちの祖父は、それでも、もうホタルにどんな不安も与えなかった。

「ありがたいことに、サクラお嬢さまのお相手をさせてもらえるそ

うだ」

言いながらジンは、もう片方の腕に、求めて手を伸ばす少女を抱いた。

「サクラよ。よろしくね、ホタル」

祖父の腕の中で。

サクラの笑顔に溢れて。

ホタルは頷いた。

「ホタルです…サクラ様」

あれから。

あの時から、ホタルにとってサクラは絶対になった。

「あの日から…サクラ様は特別なんです」

シキは何も言わない。

ただ、ホタルを抱きしめたまま。

ただ、ホタルの背を宥めてくれていた。

いつの間にか、ホタルの涙は止まっていた。

だから、ホタルは、そっとシキの胸元から顔を上げた。

これ以上は甘えていられない。

「…明日から、また、笑ってお仕えするんだろう？」

シキの手のひらが、ホタルの頬に残る涙の跡を拭う。

「はい」

答えて、ホタルはシキから離れた。

そして、見下ろしてくる視線に、大丈夫だと微笑んで見せた。

「ありがとうございます」

シキの腕は、ホタルを追いかけては来なかった。

「もう大丈夫です」

シキに告げながら、自分自身に言い聞かせる。

大丈夫。

こんなに泣いてしまったのだから、しばらくは涙なんて出ない筈。だから、サクラ様にも笑ってお仕えできる。

だから、シキ様にも微笑んでお礼が言える。

「おやすみなさいませ」

シキは頷いた。

「…ああ…」

一瞬だけ、ホタルの頬にもう一度シキの手のひらが触れる。

何か言いたげにも見えるシキだったが、結局出た言葉は「おやすみ」の一言だった。

先日の出征の時といい、何か言葉を飲み込むことが多くなった気がする。

この饒舌な騎士が？

まさか。

ホタルは自分の考えに心で失笑し、一礼をしてシキに背を向けた。屋敷に戻るホタルの耳にシキの呟きが届く。

「…強敵過ぎる」

意味は分からなかった。

明日からまた笑顔でお仕えしよう、と心に決めたのに。

泣いたおかげで、ひどくすっきりした気分なのに。

「お仕えできないじゃないですか！」

今朝、サクラの寝室に向かおうとしたら、マアサに止められた。

苦笑いを零しながら、今日はサクラの部屋に近付かない方が良いと言われて。

持って行き場のない気持ちを、はっきりこれが八つ当たりだと分かっている、たまたまなのかタイミング良く現れた目の前の方にぶつけるしかない。

出会い頭に、朝の挨拶もそこに訴えられたにも関わらず、シキは穏やかな笑みを浮かべながら、ホタルの怒りを受け止めた。

「まあまあ…その様子だと暇だろう？私も暇なんだ。こっちおいで」連れて行かれたのは厨房横にある小さな小部屋。

料理長のレンが、軽やかに挨拶をして、シキにお茶を渡した。

「邪魔するな」と、それはそれは厳しく命じられていてね」

誰に、と問うまでもない。

むうっと膨れる怒りは収まらない。

「あのね、ホタル」

シキが指差すまま、椅子の一つに腰掛けた。

「いつからその気だったのかは知らないけどね。アイリに取り上げられる、魔獣狩にかりだされる、ではカイ様もさすがに限界だろう？」

と言う言葉は容赦なくあからさま。

だが、動作は子供をあやすかのように。

手のひらに焼き菓子を乗せてくれる。

こんなものじゃ誤魔化されない。

思いつつ、手に乗せてもらったものは礼を述べて頂戴する。

「ようやく手に入れたとなれば：寝室に籠りたくもなるだろう？」

どうして、こういうもの言いをするのか。

反論する気が萎えて、代りにそれが意味することに顔が熱くなる。

「まあ、せいぜい3日だと思うよ。それ以上は多分タキが音を上げるだろうから」

ホタルはため息をついた。

3日も？

新婚さんって：そういうもの？

その間、ホタルは何をすれば良いのか。

「それとも：アイリみたいに、突入してみる？」

面白そうにシキは言うが、とんでもない。そんなこと、できる筈がない。

ホタルはぶんぶんと首を振った。

「賢明だ」

ぽんぽんとホタルの頭を軽くはたき、シキが今度はカップを手渡ししてくれる。

ここでシキと暢気にお茶をしている状況。

これはいったい何なのか。

「シキ様…お疲れでは？」

頂いたお茶に口をつけて、ホタルはぼそりと尋ねた。

カイが狩りから帰って、サクラの元で癒しているならば、シキだつてそうしたいところだろう。

どなたか。

癒してくれる人の元で、ゆっくりとしたいだろうに。

昨夜は、ホタルの相手をさせてしまった訳だし。

暇だという今も、ホタルを慰めている。

「お休みになられた方が…」

どこかで。

どなたかと。

何故か、更に気分が沈んだ気がする。

だが、本当にそうした方が良いと思っているから。

「一人にしたくないな」

それは？

ホタルは眺めていたお茶から目線を上げた。

思いがけなく、真面目な顔をした騎士に当たる。

「君を、だよ」

ホタルは俯いて、もう一度お茶に口をつけた。

「どこかでこっそり泣いているんじゃないかと思うと落ち着かない」
一体、どんなつもりで、こんなことを言うのだろうか。

ただの同じお屋敷にお仕えする者としての、気遣いだと思えば良いのだろうか。

「君を放っておけない」

ドクンと心臓が波打った。

苦手だ。

この方は苦手だ。

この言葉には、どれほど意味があるのか。

分らない。

聞こえるもの全てを真実だと思って良い筈がない。
言葉をたくさん紡ぐ方は、どれが本当なのか分らない。
分らないから…とても苦手だ。

久しく感じていなかったものが、急激に膨れ上がる。
いたたまれない。

「もう…大丈夫です」

お茶をテーブルに戻した。

「…どうだろうね」

もう一度大丈夫だと告げるために顔を上げたのに。
ぶつかる瞳に負けて、すぐに俯く。

「マアサさんに仕事頂いて、キリキリ働きます」

ホタルは勢いよく立ち上がった。

ひとまず逃げよう。

それしかない。

「頑張っておいで」

シキがヒラヒラと手を振る。

ホタルは一礼して部屋を出た。

苦手。とても苦手。

違う。

もはや、苦手を通り越して。

怖い。

あの方が怖い。

多分、それが一番相應しい。

そろそろ吹く風に冷たいものを感じ始めたある日、秋向けの調度品を整えようとホテルは屋敷の片隅にある小部屋を訪れた。

いわゆる物置だ。

しかしながら、そこは大国の皇子のおわす場所というだけのことではあって、しまい込むには惜しい一級品が整然と並べられている。ここにあるものは自由にして良いとマアサから許しを得ているホテルは、何度か訪れては、その時の気候やサクラの気分に合わせた調度品を調達していた。

ホテルの主は、物欲というものがあまりない。

ドレスや装飾品のような身を飾るものから、部屋の様式や調度品に至るまで。

細かい要求をすることは、まずない。

そうは言っても好みがない訳ではないことを、長年仕えてきて心得ている。

濃い色彩よりは、淡いものを。

硬さを感じさせるものよりも、柔らかなものを。

身につけていて、側において、サクラが穏やかに過ごせるものを。

そんな風に思いながら、ホテルはいつも選ぶのだ。

今回の目的は、サクラの好みそうな暖色系のラグ、カーテン…それから、と必要なものを頭の中に箇条書にしながら、一応ノックをしてから物置に入る。

ラグはあの辺にあったはず、と部屋の奥へと向かいかけ、しかしながら、頭に箇条書きにした物品リストは一瞬にして白紙に戻ってしまった。

溢れる物に埋もれるようにして部屋の隅に置かれているソファに、シキが横たわっていた。

すぐに回れ右をして扉に向かったのは、一人ではないように見えた

からだ。

華やかな布地が、シキに覆いかぶさって。

誰かと一緒？

そう見えた。

嫌な場面に出くわした。

身体の中の血液が急に存在を誇示して、ホタルの中を駆け巡る。

早くここから立ち去ろう。

それしか、思いつかない。

「ホタル？」

だが、扉に手をかけたところで、背後から聞き慣れたのんびりとした声がかかった。

このまま立ち去ってしまう？

それはあまりに無礼だろう。

深呼吸を一つしてから、振り返った。

ホタルの視界にはシキ。

一人でソファに座っている。

その膝には、シヨール。女性ものの、華やかな色彩が目を引き、大判のものだ。

シキは、たまたまここにあったのだろうシヨールを上掛けがわりに、ソファに横になっていたようだ。

その華やかな色彩が、ホタルに幻覚を抱かせたのか。

かっ頬が熱くなる。

なんて勘違いをしたのか。

間抜けだし、いくらシキの噂の数々を耳にしているからとは言え、さすがに失礼かもしれない。

ここのところのこの側近の忙しさは、漏れ聞いている。

僅かな合間をぬって、ここで休息を取っていたのだろうに。

「申し訳ありません」

何を詫びているのかよく分からないまま、頭を下げて部屋を出ようとする。

しかし、それをシキが止めた。

「ホタル、仕事だろう？」

そうだが、差し迫っている訳ではない。

迷うホタルに、シキは「私はさぼっているだけだから、気にせずやってくれ」

と言って、乱れた髪を指で乱暴に梳いた。

口調は柔らかく、表情も普段とあまり変わりなく見える。

だが、見慣れない荒っぽい所作が、その心身の疲れを隠し切れずにいるように思えて。

「大丈夫ですか？」

いつもは彼からかけられる言葉が、つい口から零れた。

貴公子は一瞬動きを止めて、そして、いつもどおりに見える微笑みをくれる。

「大丈夫だよ」

ホタルよりよほど大人で、よほど修羅場を潜ってきているのである。う男に、それ以上を尋ねる気はない。

ホタルは「では、少しお騒がせ致しますが…」と、なくしてしまった物品リストを再度頭に描きながら、見合ったものを探し始めた。

「…ホタル」

目的のラグを見つけたところで呼ばれる。

ホタルは手を止めて、シキの前に戻った。

「はい」

座るシキの前に立ち、見上げてくる男という珍しい構図の、その顔だちの端正さに思わず見入る。

「ホタル」

再び名を呼ばれて、己の無礼な行為に気がつき、慌てて膝をついた。いけない。

「…いや…別に見下ろしてもらって構わないが…」

シキはそう言うが、ホタルはもう一度言い聞かせた。いけない。

「いえ、申し訳ありません」

馴染んでしまつては。

気を緩ませては。

この方は、親しげに話しかけて下さるが身分が違う。

それは、シキに感じる苦手意識が脅威に変わった時に、ホタルが彼と一線引くために見つけた最も己が納得する理由だった。

「ホタル、ケイカが見つかったようだ」

シキがホタルの態度をどう思ったかは、その声からは推し量ることはできなかった。

その声音は、何一つ今までと変わらないように親しげで柔らかい。

ホタルは俯いていた顔を上げた。

「迎えに行きたいが：：：どういう訳かこのところ、魔獣がえらく騒がしい」

シキは笑みに苦いものを含ませて、ため息に近い呼吸を一つ。

確かに、シキの忙しさは尋常ではないようだ。

ここに来たばかりの頃は、カイやタキと執務室にすることも少なくなかったが、最近は屋敷内にいることの方が少ないのではないかと思われた。

「せっかく君が見つけてくれたのにな」

ホタルは、シキの言葉に首を振りながらも、自分の力がこんな風に人の役に立つことが嬉しかった。

「母も随分と落ち着いてきていて：：：ケイカの今の状況を認め始めている」

ホタルはシキによく似た面立ちの夫人を思い浮かべた。

壊れてしまった者特有の笑みを浮かべていたあの女性が、穏やかな母の笑みで娘を迎え入れる瞬間が来たとしたら。それを、シキやタキや、その父である公爵が幸せて心を満たしながら見守ることができたなら。

それは、きっとホタルの救いになる。

嫌いな力だけれど、こんな風に誰かを幸せにするために使えるなら

ば、と。

「もし：少しでもお役に立てたなら：」

「少しじゃない：すごく、だよ」

シキの言葉に笑みが零れた。

「何か礼がしたいが」

ホタルはとんでもないと首を振った。

こんな力が、役に立つと知ったそれだけで十分だ。

「奥方といい、君といい欲がないな」

ホタルの引っ張り出してきたラグを眺めながら、シキが呟いた。

「カイ様も苦勞なさる訳だ」

「そうでしょうか？ サクラ様が欲しいのは：」

カイ様だけです。

そう、言いかけてホタルは止めた。

シキの言動を思うと、妙な方に流れそうな言葉だったから。

「：サクラ様が欲しいのは：カイ様だけ？」

だが、シキがそれを続ける。

やっぱり。

なんだか。

その声音は微妙。

しかし、シキはそれを追求しはしなかった。

代りに「だから：カイ様をサクラ様から引き離す：なんてのはなしな」と続けて、ホタルに首を傾げさせる。

「君への礼：君が求めるなら、可能な限り応えるけどね」

ホタルはぱちくりと目を見開いた。

そして、シキの言う意味が分かって、微笑んだ。

「そんなことお願いしません」

以前ほど、あの二人のお姿に心が騒ぐことはない。

こうやって、慣れるものなのだ。

時間が解決することは、世の中になんて多いのか。

「無期限だから：何か欲しいものができたら言いにおいで」

シキの話はこれでひと段落のようだ。

「はい」

ホタルは頷いて、頭を下げると立ちあがった。

作業を続けようと思ったのだが、すぐにシキに呼ばれて手を止める。

「…それ、どれくらいかかる？」

問い掛けに再びひざまずこうとすれば、それを手で止められる。

その場に立ったまま「30分くらいだと思います…やはりお邪魔ですか？」

尋ねれば、シキは首を振った。

「いや…音には鈍いから眠れる」

違うだろう。

鈍いのではない。今、この場所が平和だと、神経が感じ取っているから眠れるのだろう。

少しでも不穏な気配を察すれば、それが無音であっても騎士は目を覚ますに違いない。

「終わったら起こしてくれ」

シキは、先ほどと同じようにショールを上掛け代わりにして、ソファに横たわった。

「承知致しました」

疲れを隠しきれないまぶたに瞳が覆われたのを見届けて、ホタルは時計を見た。

30分。

時間を確認してから、なるべく静かにと気をつけながら作業にかかる。

ふと耳を傾ければ、シキの穏やかな呼吸が届いて、彼が本当に眠りに就いていることを教えてくれた。

何故か、ひどく満たされた気分で、ホタルはそっと笑みを零した。

名を呼ばれ、シキはまぶたを上げた。

「シキ様」

目の前にホタルがいる。

一瞬、夢を見ているのかと思った。

夢ならば、引き寄せて口づけるところだが。

「30分経ちました」

それが、現実を思い起こさせた。

そうだ、ここで仮眠をとっていたのだ。

シキは体を起こした。

思いがけず、熟睡してしまっただよう。

「私、失礼致します」

立ち上がるホタルに視線を合わせながら、チラリと備えられた時計を見れば、まぶたを伏せる寸前に確認した時間から、きっかり30分後を示している。

「こちらにお茶をご用意しておきましたので、よろしければどうぞ」それはつまり、少なくともホタルの仕事は既に終わっていて。

シキが言った30分に合わせてお茶を準備してから、声をかけたとき。そういうことだろう。

「…ありがとう」

この気遣いがシキを癒す。

だが、もっと違う癒しを欲している。心も体も。

「いえ…失礼します」

ホタルは立ちあがって、一礼した。

やはり、この娘が欲しい。

どんな理由があろうと、手を引くことなどできない。

シキの言葉の一つ一つに、戸惑っている。

シキとの距離を一定に保とうとしている。

気が付きながら、言葉は止まらない。想いは消え失せない。

この娘が、どうしても欲しい。

今この時も。

立ち去ろうとする腕を捕らえて、このソファに横たわらせて。
いつか見た白い肌で、この疲れと…独特の飢えを癒したい。
そんな欲望をなんとか抑えて、シキはホタルを笑顔で見送った。

冬の初め、ラジル邸では大きな変化が起ころうとしていた。

事の始まりは、侍女の一人であるカノンがお勤めを辞めたいと申し出たことだった。

お腹の中に子供がいます、と恥ずかしげながら嬉しそうに告げた彼女は、続けて表情を引き締めると

「この歳で3人目ですよ？働きながら育てるなんて、絶対無理です」
きっぱり言い切った。

確かに、カノンの年齢での出産は、いくら3人目とは言っても身体への負担は大きいのだろう。

しかしながら、この屋敷には5人の子供を持ちながら働き続けているマアサがいる。なんとかならないものかと尋ねるマアサに、カノンは残念そうに首を振った。

「あまり体調が良くないんです。お医者様にも：お勤めは辞めた方が良いと勧められて：そうしたら、主人が心配してしまつて」

そう言われてしまえば、マアサも何も言えない。

そもそも、彼女が侍女としてここで働いていることは、決して生活に困窮しているというような切迫した理由のためではない。

彼女の夫は、この屋敷にも出入りしている腕のいい家具職人だ。何人かの弟子を抱えるほどで、暮らし向きはどちらかといえば上流に入る。

ただ、少女の時にマアサの下で侍女として勤め始めて以来、ずっと共に働き、夫ともこの屋敷で出会い、結ばれたという縁から、また、元来が働き者のカノンだから、特に辞めるという選択肢を選ばないまま今まで働き続けてきたのだ。

体の無理をおしてまで働き続ける理由はどこにもない。

はっきりとした性格の彼女が、潔く決断したことを翻意させるのは困難と、マアサを始めとする屋敷の者達は早々に諦めた。

諦めたが良いが、さて次の侍女をどうするか。

ここの主は、屋敷内に余分な者を置くことを良しとしない。故に、屋敷内の者は、自らの仕事を責任を持って粛々とこなすことを常に求められる訳だが、言いかえれば、一人欠けるとなるとその穴を埋める余裕のある者はいないのだ。

早々に新しい侍女を探さなければならぬだろう。

だが、なかなかこれが難しい。

身元のはっきりした者。器量は二の次で良い。とにかく働き者で性格の良い者。

それから、つまらぬ噂に左右されぬ者。つまらぬ噂を立てぬ者。

これが重要だ。

ここに攫われるように連れてこられた主の妃は、最近でこそゆるぎない寵愛を受けて、世間に正妃と認知されつつあるものの、それでも心ない噂は完全に消えた訳ではない。

耳に入るそれらに浮足立つような者は絶対に屋敷内に入れてはならない。

「ホタルのような者がいれば良いのですが……」

というタキの呟きは、屋敷内の者全ての願いだ。

そんな悩みに頭を抱えているマアサのところに、またまた厄介なニユースが飛び込んできた。

今度は料理人のレンが怪我をした、というのだ。

「いい年をして何をしているの？ニキに頼めば良かったでしょう」庭師に抱えられるようにして厨房に戻ってきた夫を見て、呆れたため息を零す妻。

それを冷たい対応と、誰が責められるだろう。

レンは庭の木になった果実を取ろうと台に乗り、足を踏み外して腰をしこたま打ち付けたのだという。

でっぷりと太ったレンには、少々無理が伴う行動だったのは否めない。

身軽でそういったことが得意な庭師に頼めと言う、マアサの意見は

もつともだ。

「マアサ、あまりレンを責めないでね」

レンが怪我をしたと聞いて厨房に現れたサクラが、夫の前で腰に手を当ててお小言を漏らすマアサにそう願う。

「：承知しておりますわ、サクラ様」

マアサとて、分かっている。

怪我を気遣い、身分を顧みずにサクラが厨房へ駆けつける程、レンを慕ってくれているように、マアサとレンにとっても、恐れながらこの正妃は娘のように愛しい存在だ。

突如として現れた謎の方ではあったが、その優しさや穏やかさはすぐにも知れた。

だから、このお屋敷に馴染むように随分と心を砕き、軍神と呼ばれ、張りつめた日々を送る主の救いなれば良いと願ったものだ。

今やその願いは叶った。

娘は主の愛情を一身に受け、主は彼女の存在に満たされている。

それにより、屋敷内の全ての者に温かなものもたらされている。

欲がなく、あまり多くを望まない妃のために、だからこそ何かできることはないかと、誰もが常に思いを巡らせているのだ。

庭にある木に今年一番の実がなった時、これが正妃の好物だと知っている料理人が、それを焼き菓子にして差し上げたい、と思うのは極々当たり前のことなのだろう。

果実は手に入れたものの厨房には立てず、色付いて芳香を放つ実を焼き菓子にはできないと、しょんぼりする料理人を、やたらと責めるのも可哀想と言えば可哀想だ。

しかしながら、それとは別に大きな問題がマアサのため息を大きくする。

なんとか立つのがやっとという夫に、厨房で忙しく動くことを求めるのは当面無理そうだ。

つまりは、別の料理人が必要なのだ。

そんな訳で、ラジル邸は二人の古参の使用人を失い、否応なく新し

い使用人を雇わざるを得ない状況となったのだった。

サクラに呼ばれて部屋を訪れると、そこはいつになく人が溢れていた。

ホタルはぎよつとして、一瞬戸口で足を止める。

「ホタル」

部屋の奥にいるサクラの手招きに、間に立つマアサと知らない二人の横を会釈しながら通り過ぎて、歩み寄った。

サクラは、先日ホタルが衣替えをして、暖かな色彩へと姿を変えたソファに座っている。

深い緑を基調とした生地が、厳しいと聞いているここの冬を、少しでも過ごしやすくしてくれるようにと願って、選んだソファカバーだ。

座るサクラの橙のドレスが鮮やかに映えて、それはホタルの願いを早くも叶えてくれているようだ。

いや違う。

ホタルは分かっている。

本当はソファなど、ドレスなど、何色でも良いのだ。

この部屋の暖かさは、サクラ自身によるものだ。

曇りがちな外は木枯らしが吹こうかという冷たい空気で満ちているのに、サクラの周りだけが春の日が差し込んでいるかのように暖かい。

女性というのは、誰でも愛されるところなのに美しく変貌するのだろうか。

私でも？

それはどこか羨望めいた疑問。

ホタルには起こりえないことと思いい知しながら、なのに湧き上がる。以前にはなかった思いに戸惑いながら、サクラの傍らに立った。

「新しい侍女と料理人ですって」

それがこの部屋にいる見知らぬ二人のことであることはもちろん分かった。

領きを返しながら、今日から一緒に働くことになる二人を見る。料理人というよりは、衛兵といった感のあるがっしりとした男。それから、スラリと背の高い美しい娘。

どちらも緊張した面持ちで、少々所在なさげに立っている。

「…まもなくカイ様がお戻りになると思うのだけど…」

サクラの呟きは、特にホタルに話しかけているという訳ではなさそうだった。

しかし、ホタルはほとんど反射的に耳を澄ました。

今日は登城の日だったから。

窓から差し込むのは、既に夕方を示す赤を帯びた光。

とうに城は出ているだろう。少し早めに、あちらを出発していれば、既に近くにいる筈。

寡黙なサクラの想い人の声を探すことは難しいかもしれないが、共にでかけた饒舌な側近の声ならば。

少しだけ、聞く範囲を広げれば、すぐ近くにシキの声をを見つけ、続けてそれに短く答えるカイの声が届く。

さはど待つことなく、望む方はお戻りになるだろう。

だが、それをサクラに告げるより先に、扉をノックする音がしてタキが現れた。

「カイ様がお戻りですよ。すぐこちらにいらっしゃいます」

タキは言うど、そのまま部屋の奥へと入り、ホタルが立つ反対側のソファの傍らに立った。

「…やはり…先に別室でカイ様にご紹介した方が良くありませんか？」

サクラがタキに問う。

ホタルのラジル邸初日は、早々にサクラに会わせてもらえた。

だが、それはホタルがサクラの幼馴染だという事情と、カイの特別の計らいで実現したことのようなだ。

一般的には広間で主に面を通すのが先だろう。

まして、妃の私室で主に紹介するなど、あまり聞いたことがない。しかし、心配げなサクラに、マアサが答えた。

「サクラ様とご一緒のときの方がよろしいかと…特にマツリの方はカイ様にお会いするのは初めてですし…」

サクラは、言葉の意味がよく分からないというように首を傾げた。でも、ホタルにはマアサの思うところが理解できる気がする。

漆黒の軍神と呼ばれるこの家の主のことを、この二人はどれだけ知っているだろうか。

戦における非情さは、幾度と耳にしただろう。

伝説の一部に。

まるで神話のように。

皇太子の慈悲深さと、対を成すように囁かれる弟皇子の人となりは、時には、冷酷さや残忍さを伴っている。

カイが軍神として存在する以上、それらは彼の一部として存在するには違いない。

しかし、ここは戦場ではないから。

敵も、魔獣も、ここにはいないから。

「漆黒の軍神が、この屋敷でどれだけ寛がれていらっしゃるか、知っておいてもらった方が良いと思います」

タキが、ホタルが思ったことを、上手にサクラに伝える。

そう、ここにあるのは安らぎと穏やかさに満ちた心地良さ。

軍神はここで、剣を納め、鎧を…全てを脱ぎ捨て、眠りに就く。

ただ一人と望む妻の元で。

「ここは…それが一番顕著な場所ですから」

サクラはタキを見上げていたが、嬉しそうに、そして少し恥ずかしげに微笑んだ。

そのサクラを、何か眩しいものでも見たかのように、タキは目を細めた。

「サクラ様、料理人の方は、カイ様はご存じですの」

マアサの言葉に、サクラの視線が男に動く。

あわせて、ホタルも料理人という男に目を向けた。

「ジンと言います。私の長男ですわ」

紹介されて、骨太な男はにこりともせず、頭を下げた。

そう言われてみれば、どこことなくマアサやレンに通じるものがある。

だが、それよりも、ジン、という名にホタルは懐かしさを感じて、
つい男を見つめた。

それはサクラも同じようで

「ジン、というの？」

気軽に男に語りかける。

彼は少し戸惑ったように目を瞬かせた。

「ごめんなさい。オードルの庭師と同じ名前なの、ちょっと懐かし
くなってしまった」

サクラの視線が同意を求めるように、ホタルに向かう。

ホタルは頷いた。

「私の祖父と同じ名前なんです」

そう言うと、男は少しでも表情を柔らかくする。

それだけのことなのに、武骨でとっつきにくそうにも見えた彼は、
驚くほど人の良さ気な青年へと変貌を遂げた。

最初からこんな顔だったら、すぐにレンとマアサの息子だと気がつ
いたのに、と思う。

「奥方様は苦手な食べ物はないと聞いてますが、父とは味付けなど
も随分と違うと思いますので、何かお気に召さないことがあれば、
何なりとお申し付け下さい」

大きな体にとっても似合うおおらかな口調だ。

そんなところも、祖父と少しだけ重なる。

ここに来てからは一度もオードルに戻っていないから、祖父にも会
っていない。

元気だろうか。元気に違いない。

そして今日もオードルの庭の隅々までに手を入れている筈だ。

急に祖父の顔が見たくなった。

「本当はね、嫌いなものもあるの：だけど、レンの作るものはどれもおいしくて食べれてしまうのよ」

サクラはにっこりと、親しげに笑う。

そのサクラに、再び目を瞬かせ：しかも、心なしか表情が色付いたようなジンを見て、ホタルの懐かしさは一瞬で吹き飛んだ。

サクラ様：滅多やたらに微笑みかけないで下さい！

心で叫ぶ。

サクラの容姿は、確かに並はずれた美貌に恵まれている姉妹に比べれば、凡庸な部類に振り分けられるのだろう。

過去には、それに引け目を感じて俯き加減なところがあり、尚更、サクラを貧相な娘に見せていた。

だが、今のサクラは違う。

見慣れている筈のホタルでさえ、一瞬目を奪われるほど。

愛されて、愛することを覚えた方は、生来の穏やかで柔らかな空気を纏いながらも、強かに艶やかに。

見事なまでに花開いた。

一時なりでもサクラと接する機会があったならば、誰であっても少なからず心惹かれるに違いない。

そう思わずにはいられないし、実際にそうであろうことは、ホタルの遠耳に届けられるサクラの噂話が証明している。

カイに伴われて公の場に出るようになってからというもの、軍神の寵妃を愚弄する噂をホタルが耳にすることはほとんどない。それは、カイの権威に基づくものもあろうが、よりサクラ自身によるものと、ホタルは確信している。

陰で囁かれる嘲笑さえ、今は僅かなのだから。

むしろ、その愛らしさや優しさが敬意と憧憬で語られる。

しかしながら、ホタルには少々心配事が増えてしまったのだ。この方はご自身の魅力に無頓着過ぎる。

もう少し、ご自身の魅力に気がついて欲しい。

いつだったかシキがサクラを花に例え、その無自覚さを指摘したが、まさにそう。

まるでその美しさを自らは知らぬように。

芳香を醸す自身に気がつかぬように。

惜しみなく注がれる想いに咲き誇る者は、あまりに自然にそこにある、何も隠そうとしない。

サクラが誰の想われ人であるか。

その想いがどれほどのものか。

あまりに明らかで、早々と不埒者を愚行に走らせることはないだろうとは思いつつ、しかし、正直なところ、カイ以外の目に触れさせたくない、と考えることもしばしば。

「貴方の料理もとても楽しみにしているの」

そんなホタルの気持ちを知りもせず、サクラはまたもや無防備に無邪気な色香を零れさせた。

ホタルの気のせいではなく、ジンは幾らか頬を緩ませると

「ご期待に添えるように努力します」

答える声と、ノックに続いて扉が開く音とが重なる。

「お帰りなさいませ」

サクラは、公の場に出る時以外結われることのない長い髪と、ドレスの裾をふわりと揺らして、身軽に立ちあがった。

これもまた無意識に違いないのだろうが、新人に見せた笑顔とは一線を画す、とびきりの笑みで夫を迎え入れる。

部屋に現れたカイはサクラに歩み寄ると、極々自然な動作で肩を抱き、長身を屈めるようにして小柄な妻の額に軽く口付けを落とした。この屋敷に勤める者達にとって、いつの間にか馴染みになった、しかしながら、見るたびにほっとさせる光景だ。

マアサは、本当はこれを見せたかったのだろう。

ふと、ホタルはそう思った。

何者も入り込む隙のない、仲睦まじい光景は、この屋敷の象徴の一つに違いない。

この新しく仲間となる者に、これをいち早く見せたかったのだ、きつと。

そんな気がした。

「…久しぶりだな」

正装を解きながら、カイがまず声をかけたのは、ジンの方だった。

ジンははっとしたように、膝について頭を下げた。

隣に立っているマツリと呼ばれていた娘が目を丸くしながらジンを
見て、自分はどうすれば良いのかというようにマアサを見た。

「お前、この屋敷でカイ様に出くわすたびに膝をつくつもりか？」

苦笑いを零しながら、シキがジンの腕を取って立ちあがらせる。

「膝にタコができるぞ」

その言い方がおかしくて、ジンとマツリ以外が笑いを零す。

ジンは仏頂面とも言える顔のまま、シキに頭を下げた。

「相変わらず、無愛想だな」

気軽に話しかけるシキに、ジンはポリポリと頭をかいて、ようやく
苦笑いらしきものを浮かべる。

「…性分なんです」

「知ってる」

そう言って、ポンと肩をたたく動作に、彼らが昔馴染みなのだろう
と知れた。

「…で、こちらがイーファス男爵のご息女？」

シキが続いて尋ねれば、新しい侍女は実直さだけが取り柄のような
硬く勢いの良い動作で、深々と頭を下げた。

「マツリ・イーファスです」

名乗る声は、見た目に反して、かなり幼い。

「イーファス男爵も最近は忙しいだろう？」

シキの問いかけは、子供を手懐ける笑顔と共に。

マツリは、先ほどのジンよりもよほど顕著に頬を染めた。

「はい…あ、いえ、あの…」

あたふたと答えにならない言葉を口にする様に、ホタルはそつと同

情する。

サクラの笑みが無意識ならば、こちらの方の微笑みは思い切り意識的に計算づくめ。

どちらも慣れない者にとっては、心臓に悪いことこの上ないのは共通点。

「マアサ：男爵からは容赦なく使ってくれと言われている」

カイの声が静かに響く。

それだけで、空間に緊張感が走る。

「承知いたしました」

マアサが答えると、その横でマツリの表情が引き攣った。

「カイ様」

サクラが諫めるように名を呼ぶと、カイはちらりと妻を見下ろして

「マツリ」

初めて侍女の名を呼んだ。

ビクリと反応して「はい！」と、元氣な返事が返った。

「カノンは長くここに勤めていた者だ。代りをしようなどとは思わない。できることをやれば良い」

ピンと張ったような声に幾らかの優しさを含ませて、この家の主は慣れない所作の侍女を励ました。

マツリは、一瞬目を見開いて、次には

「頑張ります！」

ぺこりと頭を下げた。

「：カイ様、こっちには激励は？」

シキがジンを指さす。

カイはジンを眺めた。その表情は、何もないのだが。

「そっちは：サクラの激励で十分だろう？」

それは、先ほどのやりとりのことだろう。

どこから聞いていたのか知らないが、それはあまりにちょっと…。

「それは：ちょっと大人気なくないですか」

ホタルの心中を、シキが声にした。

そのまま部屋に留まるかと思われたカイは、だが、タキに耳打ちされて再び部屋を出て行った。

シキがそれに続き、マアサも新たな使用人を連れて出て行こうとする。

そのマアサにサクラは声をかけた。

「少しマツリと話をしたいの」

サクラの申し出にマアサは、嬉しそうに笑みを浮かべると

「ぜひ、そうして上げて下さいな」

マツリを残して、ジンと部屋を出て行く。

残されたマツリは不安そうな表情を、必死に無表情に隠そうとしているようだ。

「歳はいくつ？」

再びソファへと座ったサクラは、前に立つ娘にそう尋ねた。

「13です」

娘というよりは少女という年齢。

やはり見た目より、随分と若いのだ。

背が高く、目鼻立ちも大人びているからだろう。

正直、ホタルやサクラとさして変わらないかとも思ったが、その年齢ならば全くもの慣れていない様子や緊張も納得できる。

何より、13歳という年齢ならば、男爵の娘が侍女として勤めることもさほど珍しくはないだろう。

貴族の娘が、花嫁修行代わりに、身分ある者の館に勤めることはままあることだ。

マツリの年齢ならば、2、3年ばかり勤め、一通りの作法を身につけてからどこぞに嫁ぐのだろう。

ホタルはそんな風に考えた。

だが、当の本人は、ホタルの思考を吹き飛ばす勢いで、聞かれてもいない身の上を語り始めた。

「あの：男爵なんて名ばかりなんです。弟が4人、妹が1人います。母は1人です。あ、もちろん父も1人です。大家族で、父は研究馬鹿で：母は、なんだかとぼけてて：本当に貧乏なんです。だから今回のお話は本当に感謝してます！」

ともすれば悲壮感が漂いそうな話を、家族への溢れる愛情と本人の気合をスパイスに、一気に告げる。

マツリを見上げるように見ていたサクラは、少しして堪え切れないように、ぷつと吹き出した。つられてホテルも零れそうになる笑みを、なんとか抑える。

なんとも、見た目にそぐわないかましい娘ではないか。

少しの間、止まらない笑いに肩を震わせていたサクラだったが、その表情がふと気遣わしげなものに変わる。

「貴女が13歳ということは：まだ、弟さんや妹さんは小さいでしょう？あなたが、家を出てしまっても大丈夫なの？」

マツリは焦ったように、更に慌ただしく言葉を続けた。

「上から、10、8、5、2歳で一番下の妹が、もうすぐ1歳になります。皆、大丈夫です！両親もすごく元気なんです！ただ：貧乏なだけで！」

それに、サクラは首を振った。

「みんな：寂しがらない？あなたは寂しくない？」

マツリはぴたりと忙しない動きを止めた。

まっすぐにサクラを見つめる綺麗な青い瞳が、隠しもしない驚きに満ちている。

マツリがどんなふうにサクラを想像していたのか、知るよしもない。しかし、目の前にいる方は、軍神の寵妃だ。

そして、帝国キリングシークの皇子妃である。

世間知らずな少女が、その言葉から想像した気高い女性像とは、かなりかけ離れていたのだろうか。

「：あの」

マツリは俯いた。

先ほどまでとは打って変わった大人しい声で

「実は…家族と離れるのは初めてなんです」

そう告白した途端、ぽろぽろと涙を零し始めた。

子供そのまま。

涙を拭こうともしない。

サクラが立ちあがって、マツリに近付く。

「マツリ？」

優しい声で呼びかけて、自分よりも幾らも背の高い少女を抱きしめた。

「寂しいし…不安ですけど、自分でお勤めに出ようと決めたんです」
マツリは必死にそう言葉を続けた。

サクラは頷いて、大きな子供の背中を撫でて宥める。

ひつくひつくと際限なく泣き続けながらも、マツリは健気にサクラを見つめ

「経験はありません。でも一生懸命がんばります！」

サクラから離れて一步下がると、勢い良く頭を下げた。

熱意は十分に評価できそうだ。

動作の一つ一つには優雅さのかけらもないが、そんなものは教えれば良い。

ホタルはこの少女の素直さと実直さに、とても好感を抱いた。

「ホタル」

サクラに呼ばれて二人に近付く。

サクラはそつと耳打ちするように少女に告げた。

「いつでも、気がねなくここに来てね。私やホタルは歳が近いから、話しやすいこともあるでしょう？」

マツリがちらりとホタルを見る。

ホタルは頷いて、笑いかけながら

「…あ、でも恋の相談は私ではなく、他を当たって欲しいですけど」
冗談めいて言うと、マツリはポツと頬を染め、そして、この部屋で初めての笑顔を見せた。

こうして、長く人の入れ替わりがなかった屋敷内に、二人の新顔が
加わったのだった。

何やら騒がしい。

サクラの髪を梳いていたホタルは、一瞬だけその手を止めた。

季節は冬の入り口ではあるけれど、今日は日差しが差して暖かい。外の空気を部屋へ誘い込むことを好むサクラのために、中庭に面した窓は開け放たれている。

しかし、騒がしいのはそこではない。

長い髪に櫛を通す作業を再開しながら、ホタルはもう少し聞き耳を立ててみた。

閉め切った扉の向こうから聞こえてくる声や音の出所は、どうやら正門だ。

パタパタと忙しない足音が響いている。

どうしろ、こうしろと指示するマアサの声や、それに答えるカノンやマツリ。

このお屋敷にしては、珍しく落ち着きのない模様が聞き取れた。

しかし、その騒ぎは、まだ、遠い。

ホタルを呼ぶ声も、サクラを伺おうとする気配もない。

ならば、ホタルとしては、気にするまでもない。

サクラと二人で過ごすこの状況は、ホタル自らが進んで壊したいものではないのだから。

「さすがに：少し切った方が良いかもしれないですね」

騒ぎを無視して、ホタルはサクラに話しかけた。

サクラが頷くと、それに合わせて髪が揺れる。

その髪は、女性としても類を見ない長さに達していた。

立てばサクラの背を覆うのはもちろん、膝をかすめて床に届くまであと僅か。

ホタルが精魂込めて手入れしているから、そこには少しのささくれもなく、優しい色合いを湛えて流れる様は、ため息が出るほどに美

しい。

年頃の娘、しかも既に人の妻となった女性が、長い髪を結わずに背中に垂らしておくということに、最初は違和感を感じました。

それが主の命だと知って反感を持ちました。

主が当たり前のように流れを指に取り、口付けを与える姿に胸が痛んだことも一度や二度ではないが、それも今では心が温かいもので満たされるばかりの光景。

それどころか、主の指先で揺れる髪の美しさに惹かれ、手入れをする気合も以前とは段違いだ。

とは言え、この長さは結わないからこそのものだった。

近頃のサクラはカイに伴われ、公の場に出ることが増えている。

そうなれば、結わずにはおけず、この長さはどうしても障害となってしまうのだ。

「切っても構わない：というか、ずっと切りたいて言ってるのに：」

サクラが、いくらかの非難を込めてながらも、柔らかく言葉を零す。確かに、夏あたりから、サクラは折にふれては、髪を切りたいと言っていた。

だが、ホタルはそのたびに、頷きながらもそれを先延ばしにしていたのだ。

だって、本当にきれいなのだ。

それに。

「カイ様はこのままで良いとおっしゃるんですよね」

髪を切らない最大の原因は、やはりそこだと思う。

カイが切ることを許せば、それはあっけないほどに実現するのだからうが。

尋ねれば、必ず「このままで構わない」と返事が返るのだ。

「：少しくらい切っても、良いと思うけど：」

そう言いながらも、サクラにもやはり迷いが見える。

想いが叶う前から、髪だけは常にカイの指先に触れられてきた。

想いが叶った今となつては、敢えて髪にこだわることもないのだらうに。

それでも、主の氣に入っているものを、その許しなく切り落とすことに潔くはなれないのだらう。

結局今日も髪を切ることはなさそうだ、とホタルは確信する。

それに、そんな余裕もなくなりそうだった。

遠くにあつた騒ぎが、徐々に近づいてきていた。

正門あたりから中庭に移動してきたざわめきは、やがてサクラの耳にも届くだろう。

「なにかしら？」

ほどなく、ホタルの予想通り、サクラの意識が騒ぎに向けられる。

ホタルは手を止め、中庭が見下ろせる窓に近付くと、そつと様子を窺った。

一目で、近衛兵だろうと知れる騎士が数人。

それに護られて、中庭を歩くのは。

「女の子がいます」

目に入つた姿をサクラに伝えながら、少しばかり耳を澄ます。

甲高い少女の声が

「カイ！」

恐れ多くも、家の主を敬称なく呼ぶ。

呼ばれたカイは、苦笑いを浮かべながらも、駆け寄る少女を抱き上げた。

「また、大きくなったな」

耳に届いたのは、そんな言葉。

「アヤメ様だわ」

ホタルの横に立ち、同じように庭を見やつたサクラは、少女の名らしきものを呟いた。

聞いたことのあるような、ないような名前。

「皇太子様のご息女」

思い出せない答えを、サクラが教えてくれる。

「ああ」

どうりで、聞いたことはあるけれど、ピンとは来ないはずだ。

カイの兄である皇太子には、ホタルの記憶が正しければ、ご子息が一人、姫君が二人。

確か、ご子息の名前はトワ様。

ご息女は：そう、アヤメ様とツバキ様だ。

思い出して、すっかりしたところで、はっとする。

「お出迎えしなくてもよろしいのですか!？」

隣で、のんびりと眺めているだけのサクラに尋ねた。

どこもかしこも姫君の来訪に、てんやわんやとなっているのが聞こえてくる。

このお屋敷でいつもの平穏を保っているのは、もはやこの部屋だけだろう。

「いい：と思う。私、嫌われているから」

サクラは少し困ったような、それでいて恥じらいを含ませたような、言葉の内容にそぐわない表情を浮かべる。

「珍しいですね。サクラ様、お子様には好かれる方なのに」

控えめな言い方をしたが、実のところ、サクラの穏やかな雰囲気嫌う子供には、今までお目にかかったことがない。

オールドルにいた頃も、親族や客人が集まる機会があれば、気が付くとサクラの周りには子供達が集まっているというのが常だったくらいだ。

「アヤメ様はね。カイ様のお妃様になりたかったんですって」

サクラは庭から、ホタルに視線を移した。

「初対面ではっきり大嫌いって言われて、泣かれて：その後はご挨拶もして下さらないの」

穏やかな口調と微笑みで告げる姿に、怒りや嘆きはない。

少女の嫉妬と、それから生まれる不条理な態度を、受け止めて静観する余裕が今のサクラにはあるのだ。

「今はシキ様にお興入れなさりたいんですって」

冗談っぽく続いたサクラのそれに、ホタルはつい笑ってしまった。
なんというか。

「アヤメ様って…」

サクラが言わんとしていることに気が付き

「面食いよね」

「面食いでいらっしゃるんですね」

声が揃う。

サクラとホタルは顔を見合わせて、同じタイミングで吹き出した。
クスクスと笑いを続けながら、サクラはもう一度庭に視線を向ける。
「最近はい様もシキ様もお忙しくて、お城から足が遠のきがちで
しょう？きつと、我慢できずに飛び出していらっしゃったんでしょ
うね」

ホタルも、サクラに視線の先を合わせた。

カイの腕から滑り出て、現れた笑顔の騎士に抱き着く少女が目に入る。

今日は、屋敷にいらっしゃったのか。

そんな風に思うほど、サクラの言葉通りにシキは忙しい。

その姿を見るのも、数日ぶりだと思う。

シキは柔らかな笑顔で姫君を抱きあげている。

「お久しぶりですね。お元気でしたか？」

優しい声を聞こえてくる。

姫君は嬉しそうに頷いて、シキの首にしがみつく。

カイと同じ黒髪が、ゆらゆらと揺れた。

異国の美姫と誉れ高い母君の血を色濃く引き継いだのであろう目鼻
立ち、遠目にもはっきり見て取れる神秘的な美しさに輝いている。
そして、身分は最強の帝国の姫君。

恵まれ過ぎるほど恵まれた姫君の輿入れ先が、公爵家であることは、
なんの不都合もない気がする。

幼子の戯れ：で済ますには、庭先で睦ましく語らう二人は、あまり
にお似合いだった。

「確か：10歳でいらっしやいましたっけ？…あと5年もすれば、とても美しい女性におなりでしょうね」

ホタルは呟いた。

「ホタル？」

サクラに呼びかけられて、ホタルは微笑み合う姫君と騎士から目を離した。

サクラを見れば、先ほどの楽しげな様子はどこに行ってしまったのか。

心配そうにホタルを見ている。

なぜ、こんな表情をするのか。

「5年くらいなら：待てる気がしません？」

訳の分からないサクラの様子に、意図して明るい声で言ってみる。

「そうしたらサクラ様、晴れて仲良くなれるかもしれませんね」

サクラの表情は晴れない。

そして、ホタルも。

意図しなければ、声に感情が出そうだ。

感情とは？

なんだろう。

この気分は。

一体？

「…ホタル」

サクラの手がホタルに触れようとする。

慰めだろうか。

どうしてか、そう思い。

だが、慰めを受けることなんてない筈だ。

だから、手を避けて。

「お茶をお持ちしますね」

適当な言い訳を口にしながら、部屋を出た。
サクラから逃げたのは：多分これが初めて。

長い廊下を、厨房に向かう。

サクラの表情が、心にひっかかる。

私の何が、サクラ様にあんな表情をさせてしまったのだろう。

眉を寄せて。

辛そうな。

切ないような。

カイに一方通行な想いを抱いていた時に、ほど近い表情。

「ちょっと！」

突然、物思いを吹き飛ばさんばかりに勢いよく呼び止められ、ホタルは振り返った。

少し離れたところで、騒ぎの中心である姫君が、マアサと数人の共を連れて立っている。

ホタルが慌てて膝を折り、頭を下げると、姫君が一人でホタルに近付いてくる気配がする。

そして、ホタルの視界には、華やかなドレスの裾が入ってきた。

「…貴女がホタル？」

まずは、名前を呼ばれたことに驚いた。

だが、それよりもそこにある感情になお驚かされた。

何故だろう。

ひどくトゲを感じた。

「…はい…」

素直に答えながらそっと伺い見れば、近くで見てもやはりとても美しい姫君は、じっとホタルを見つめていた。

見なければ良かった、と後悔するほどに。

黒耀石のように輝く瞳は、声に含まれてるものを裏付けるように、あからさまな敵意を湛えている。

どうして、こんな風に睨まれるのか。

あまりにも激しいそれに、ホタルはただ頭を下げ続けた。

余計な荒波を立てたくはない。

何が姫君の不興を買ったかは知らないが、ここはひたすらに伏しておくべきだろう。

しばらく物言わずホタルを睨みつけていた姫君は、やがて

「…なんでもないわ…行きなさい」

子供らしい声で、不遜に言い放った。

そしてホタルが顔を上げるよりも早く、背を向けて去って行く。

皆が啞然と姫君の行動を見ている。

それを無視して、ずんずん進んでいく姫君の背を、ホタルもまた呆然と眺めていた。

共の中にいたマアサが心配げにホタルを見やったのに、大丈夫ですと頷いて。

それでも、一体なんだったのかという疑問は残る。

訳が分からないまま、深刻だった筈の物思いも吹っ飛んで、ひとまず足は厨房に向かう。

「…ホタルさん！私、どうすれば良いですか!？」

厨房に入った途端、あたふたと落ち着きのなマツリが近付いてきた。まだ、お勤めに入って数日。

そこに突如現れた大物に、かなり動揺してるようだ。

「ここでお袋が何か言ってくるのを待てば良いと言ってるんだがね」奥では、何の動揺も見せない新しい料理人が、茶菓子を皿に準備している。

のんびりした動きにも見えるが実に手際良く、そして盛られていく菓子達はとてもきれいだ。

「…ここでおとなしくしていれば良いと思うわ…何かあれば、マアサさんかカノンさんから指示があると思うから」

ジンの意見に賛成の意を示したホタルの言葉に、マツリは頷きはしたが、やはり落ち着かないように厨房の入り口付近をウロウロとしている。

気持ちは分からなくもない。

勤め始めて数日とは言え、このお屋敷の平素の静かさはマツリも分

かっているだろうから。

それを知っている者にしてみれば、今日は尋常ではない。しかしながら、特にできることもないのが事実。

「ホタル、こちらをサクラ様に」

一方のまったくもっていつも通りのジンから、ホタルはサクラにと準備されたお茶と菓子を受け取った。

それをワゴンに乗せていると、ジンが

「マツリ、こっちに来て、そこに座んなさい」

落ち着かない少女を呼ぶ。

マツリはこれに素直に従って、ジンの示した椅子に座る。

「：ここで、それでも食べて大人しくしてなさい」

マツリの前に出されたのは、茶菓子。

サクラのもののように、きれいに盛り付けられてはいないが、同じものなのは明らかだ。

マツリは驚いてジンを見上げ、次にホタルを見やる。

「ジンさんのお菓子はサクラ様も大好きよ」

食べて良いという意味を込めて言うと、大人びた顔立ちに子供の笑顔が浮かんだ。

「ありがとうございます」

お行儀良く手を合わせて、お菓子を口に運ぶ姿にホッとして、ホタルは厨房からワゴンを運びだした。

サクラの部屋へと向かう足取りが、重い。

こんなこと、今までのホタルにはあり得ない。

戻ったら、サクラ様はどんな顔をなさっているのだろう。

もう、何もないように微笑んで下さるだろうか。

あの表情はきっと私のせいに違いはない。

だとしたら、私が先に元に戻らなければ。

でも、私は先ほど、どんな風だったのだろう。

それはもうなくなって、今はいつも通りなのだろうか。

自分自身を探るホタルの耳に、今までの気分はともかく、それを決して浮上させるものではない足音が響く。

できれば、今は顔を合わせたくない方のそれなのはすぐにも分かったが、残念ながらどこにも隠れ場所はなかった。

結局、先程姫君に呼び止められた辺りで

「やあ、ホタル」

にっこりと笑うシキに出くわした。

窓越しではない近さ。

遠耳ではなく、目の前の口元から零れる声。

「ご用でしょうか？」

いつものとおりに答えたつもりなのに。

「おや、不機嫌だね」

そんな風に言われて、やっぱり自分は不機嫌なのだろうかと考える。だが、不機嫌になる理由は見当たらない。

身分ある方の気まぐれな態度など、気にするまでもないはず。

サクラの表情は、ホタルに不安を与え、心配させるものだが、これも不機嫌とは別の筈だ。

久しぶりのシキは、どうしてかホタルの気分を下降気味にさせたが、これまた不機嫌とは違う。

「そんなことは、ありません」

だから、そう答えた。

シキはじつとホタルを眺めてくる。

つい、つられるようにホタルも、目の前の騎士を見つめた。

幾らか痩せたように見える。

切る間もないのか、少し伸びた髪が顔を隠しがちだった。

なのに、隙間から覗く碧い瞳が、ホタルを凝視していることははっきりと分かった。

言葉と同じように、多くを語りながらもが本心を明かさないう瞳だ。それが、どこことなく荒ぶっているようにも見えて、ホタルはなんとも

言えない居心地の悪さを感じた。

「あの：シキ様？」

用向きはなんだろう。

先ほどまで打って変わって、今は早くサクラの元に戻りたい。

それに、耳を澄まさなくても、少し離れた扉の内から、シキを呼ぶ姫君の声が聞こえてきて、なお、ホタルを急かす。

「：あちらの姫君にもね：お茶を差し上げて欲しいんだけど：」

シキはようやくそう口にした。

ホタルは頷いた。

「承知致しました」

とは、請け負ったものの。

ふと先程の姫君の敵意に満ちた視線を思い出す。

「：マツリでも大丈夫でしょうか？」

あのきれいな瞳に睨みつけられるのは、正直避けたいし。

姫君にしても、ホタルなどにお茶を準備されたくもないだろう。

しかし、言ってから、マツリの様子を思い出し。

「すぐお持ちします」

言いなおして、ひとまずサクラの元へと向かおうとすれば。

「ホタル」

腕を捕えられる。

これも随分と久しぶりではないか？

「：何かあった？」

ひと際近付いたシキが、心配を含んだ声で尋ねてくる。

ホタルは慌てて首を振った。

しまった。

余計なことを、口走ってしまった。

どうやら、シキが何かとホタルを案じてくれているのは、本心からようだ。

それには感謝をしなくてはいけないのだろう。実際に、何度も助けてもらっているのだから。

でも、ホタルことなど二の次、三の次で良い。

というか、本当は気にしてくれなくて良いのだ。

たかだか一侍女だ。多少のことがあっても、このお屋敷が揺らぐこともない。

シキにはもつと大事なことがいくらだってある。

ホタルなどに関わっていられる余裕などないほどに、忙しい筈だろう。

「申し訳ありません」

つい口をついたのはお詫びの言葉だった。

これでは、シキへの問いに答えていないと

「何ありません」

急いで付け加える。

だが、シキの眉間に刻まれた皺はなくならない。

「ホタル」

ぐっと腕を掴む力が強まって、引いてくれないようだと思える。

どうしてだろう。

本当に、ホタルのことなど放っておいてくれ良いのに。

ホタルは迷いながら

「…何故か…姫様には嫌われているようなので」

俯き、呟く。

甘えている、と自覚しながら。

シキが何らかの答えをくれること。

そして、宥められること。

それを、多分どこかで期待していて、そしてそんな自分が嫌になりながら。

「…お茶をご用意するのは私ではない方が宜しいかと…」
もつともらしいことも口にする。

「子供は正直だな」

シキからは、そんな呟きが返ってきた。

そして、意外にも小さな笑い。

ホタルは、つい顔を上げて、首を傾げた。

シキはホタルの腕を引いて、廊下の真ん中から人が滅多に通らない脇の細い廊下に移動する。

ワゴンが置き去りにされてしまつてホタルは焦つたが、腕を掴むシキの力は揺るがず、引きずられるしかない。

「アヤメ様は奥方もお嫌いだ」

足を止めるなり、唐突にもシキはそう言った。

それはサクラ自身にも聞いたことだった。

「はい。そのようにお聞きしました」

だから頷く。

「それはカイ様が奥方を寵愛していらっしゃるが故の……まあヤキモチな訳だけど」

確かに。

それはそのとおりなのだろう。

ホタルは、もう一度頷いた。

「はい」

不意にシキの声から、笑いが消える。

「：君が嫌われる理由はなんだろう？」

突然の質問に、ホタルは少し考えた。

私自身が嫌われる理由？

もちろん、過去に会ったことがある筈もない。

あの姫君にとって、私は何だろう。

一介の侍女。

本来なら齒牙にもかけぬ存在。

だけど、そう私は。

「サクラ様の侍女だから、でしょうか？」

出した答えは唯一だ。

だが、シキは首を振った。

「不正解」

でも、それ以外には何も思いつかない。

他の理由？

例えば、遠耳が忌み嫌われる、とか？

そんなことを、姫君がご存じの筈がない。

「…分かりません」

ホタルは首を振った。

すると、シキは少し身を屈めるようにして、ホタルに囁いた。

そんなことをしなくても、ホタルの耳はどんな言葉も聞き取るのに。

「君が嫌われるのはね…俺が君を好きだからだ」

それは…。

ホタルは一瞬頭に浮かんだ、その単語の意味を押しやった。

そんな訳がない。

だから、この場合

「恐れ入ります」

これが、模範解答だろう。

侍女として、上の方に気に入られていると言われたら、褒められたのなら、これで正解の筈だ。

しかしながら、予想外にシキは妙な顔をした。

「そう返してくるか」

再び、眉間に皺が寄った。

少しの間を置いて、何か言おうとしている唇に、気がつかない振りをして

「シキ様、姫君がお呼びです」

聞こえることを口にする。

いくつか向こうの扉の内で、姫君は忙しなくシキをお召した。

お伴の方々の戸惑いまでが、ホタルの耳に届くようだ。

「…お茶を頼む」

やがて、シキはそう言った。

「マツリに運ばせてくれればいい」

その声は、はっきりとした感情に縁どられていて、ホタルを驚かせた。

いわゆる、これは不機嫌。

「：承知致しました」

今度はシキが不機嫌らしい。

だが、知らないふりをして、厨房に向かう。

まずは戻って、姫君にお茶を運ぶようにマツリに言おう。

そして、サクラ様のお茶を淹れなおそう。

きっと冷めてしまったから。

そんな段取りを頭に作り上げながらも。

考えてしまう。

何か間違えただろうか。

よく分からない。

サクラの表情も。

シキの不機嫌も。

なにより、自分のこの重い気分。

分からないことばかりだ。

身体が重い。

ベッドの上でゆっくりと眠ったのは、もう何日前のことになるうか。

「お前も：お疲れだったな。ゆっくり休めよ」

一晩中飛び続けて、ようやくねぐらに辿り着いた翼竜の長い首を撫でながら、シキは本心から労いの言葉をかけた。

遠出する際には必ず共となる心優しい翼竜は不満げな様子もなく、むしろ疲れているのはそちらだと言わんばかりのおおらかさで、大きな顔をシキの肩に押し付けた。

ゴツゴツとした、しかし暖かい頭を撫でてやりながら、周りに人気のない気軽さについていたため息が零れる。

こここのところの、この忙殺ぶりときたら、一体何なのだ。

夏頃から横行し始めた、徒党を組む魔獣達。

これが、帝国キリングシークの綻びの象徴かと俄かに活気づく反勢力。

それらを排するため、制するために奔走する日々は、何も考えずに戦場を駆け巡っていた頃と比べてさえも、よほどシキを疲弊させる。魔獣相手はまだ良い。

単独から集団へと姿を変えたことに少しばかりの：いや、多大なる違和感はあるても、剣を振るって絶てば良いだけの存在は身体の疲れをもたらずだけだ。

休めば、元にも戻ろう。

だが、人が相手となると疲れさせられるのは、むしろ精神なのだ。敵と定めて殺すだけなら、今更心を痛めることもないのに。

本意を探り合い、妥協点を見出そうとし、その駆け引きの結果としての抹殺は、虚しさを伴うのだと思い知らされる。

虚しさは心に鬱積していき、重いしこりとなってシキに消し去りようもない疲労感をもたらししていた。

現状打破に繋がらない、ただ危機を排除するだけの闇での殺戮。いつまで、それを繰り返すのか。

終わりが見えないだけに、疲労感は解放のしようもない。

それでも、まだ、マシなのかもしれない。

まだ、世界は平和へと向かおうという意思を持っている。

漆黒の軍神は自国に在り、微動だにせず。

未だ、キリングシークの権威は揺ぎない。

他国にそう知らしめることには成功している筈だ。

それは救いだ。

もつとも、いつまでもつかは分からない。

いずれ、その存在に頼るときは来るのかもしれない。

「シキ様」

名前を呼ぶ声に、疲れと薄暗い方角へ進んでいた思考を隠して振り返る。

カノンが立っていた。

侍女のものではない衣装を身につけて、小さなカバンを一つ携えている。

「長い間、大変お世話になりました」

にこりと微笑み、静かに頭を下げる女性の言葉に、ふと思い出す。

「…ああ…今日が最後か」

そういえば、一か月程前から勤め始めたあのマツリという少女は、辞めるカノンの代りだった。

カノンがいつ辞めるのかまでは把握していなかったが、この忙しい日々の中、少なからず縁のある女性に、どうやら最後の挨拶ぐらいはできるようだ。

「何時頃産まれるんだ？身体には気を付けて…」

無難な別れの言葉を口にしようとするシキを、カノンは笑みを消した険しい表情で見ている。

気づいてシキが言葉を止めると、カノンは静かに歩み寄ってくる。

「大丈夫…なのですか？」

氣遣わしげな言葉と共にカノンの手が上がり、少し遠慮がちながらしきに伸びる。

シキは身を引いて、それを拒んだ。

「触らない方が良い」

向けられていた指先が、ピタリと動きを止める。

「昨日は…人を殺したから」

かろうじて返り血は洗い流した。

しかし、あの独特のまとわりつく生温かさはまだ肌に残るようだ。

「シキ様」

カノンは手を下ろさない。

その手を掴んで引き寄せたのは、もう随分と昔な気がする。

染みつくような血の匂いと滑りの感触を、甘い芳香と肌の滑らかさで消すために。

柔らかな身体で、疲れた心身を癒すために。

僅かな迷いもなく、ただ闇雲に抱いたのは確かにこの女性だった。なのに、不思議なものだ。

母になったその瞬間から、穢れた身体では触れることさえもできない存在になるのだ。

「触れたら汚れる」

お腹の中にあるまっさらな命に、ほんの僅かな穢れも与えたくない。と。

こうして向き合うことにさえ罪悪感を伴う程。

その存在は神聖なものに、姿を変える。

「…何をおっしゃってるんですか…」

カノンは華やかな顔立ちに母の笑みを浮かべて、シキの言葉を易々と否定した。

「それがこの子たちのために流す血だと存じておりますのに…どうして、穢れなどと申しましょうか？」

そして、手は再び動き、最近は伸び放題にせざるを得ない髪に触れる。

額にかかる幾筋かの金髪を指先で払う仕草は、過去の情人というよりは、やはり母親のそれに近い。

「お疲れですね…男っぷりが上がってますよ」

軽い口調の中に、多大な心配が含まれている。

優しい指先が髪を耳にかけてくれるのに任せながら、なるべく疲れを見せないようにと気を使いつつ微笑んで見せた。

そして、彼女が囁いた過去の睦言を思い出す。

『怠惰な男なんて御免です。男は何かに打ち込んで、少々やつれていくくらいの方が魅力的なんですよ』

戦場帰りの疲れた身体を優しく受け止めて、年上の情人はそんな風に言った。

『でも、それも命あればこそです。』

だから、何があっても貴方は戻らなければならないのです。

戻れば…いくらでも、こうして抱きしめて差し上げることができるのですから』

実際に、カノンは戦いに疲れたシキを、無条件に抱きしめてくれた。多分、今のシキにもそういう存在が必要だ。

だが、それはもちろん目の前のカノンではない。

そして、数多くいる筈の情人でもない。

それは、たった一人。

「それで、カノンの旦那は仕事漬けの日々なんだな」

思い浮かぶ幻影を振り払い、シキは軽い言葉を返した。

その存在を今思い出すことは、あまりにシキには切ない。

「あの人は仕事が好きなんです」

カノンはクスクスと笑いを零してシキから手を引いた。

夫のことを話すとき、カノンの表情は妻のそれに変わる。

「…シキ様」

母であり、妻である、元情人は、ふと表情を固くした。

「お体にはくれぐれもお気を付け下さいませ」

一瞬だけ、ベッドから出るシキを見送る時に見せた貌が、そこに浮

かんだ気がした。

それとも。

母も、妻も、情人も。

心配する時の表情は似通っているのか。

そういえば。

振り払った筈なのに、また、思い出す。

一度だけ送り出してくれたあの侍女も、そんな貌をしていた、と。

型どおりの言葉と教え込まれた優雅な礼をしながらも、その表情は心からシキの無事を祈っているのだと告白していた。

だから、頬への口付けを止められなかった。

「シキ様？」

黙りこくったシキを、母の表情に戻ったカノンが覗きこむ。

「…分かってるよ」

振り払うことを諦めて娘の存在を胸にとどめる。

「カノンも大事に」

カノンは頷き、だが、少しだけ何かに迷うように唇が動いた。

やがて

「ところで、今日で最後なのでご無礼を承知で申し上げたいことが
改まって言う。

シキは思わず、小さく笑い声を洩らした。

「今更だろう」

促すように言えば、カノンはふと真面目な顔をする。

今度のそれは、何の表情か。

「ホタルへのお戯れ、おやめ下さいませんか」

いきなりといえば、いきなりだ。

だが、察しが良いものであれば、シキのホタルに対する態度に気が
ついても不思議ではない。

「ホタルは…シキ様の…いえ、お相手がどなたであってもですが…
遊び相手には向いておりません」

そんなこと、言われるまでもない。

改めて思い出すまでもなく、胸にとどまる娘。

あれほど遊び相手に似つかわしくない者もないだろう。

「珍しいな：カノンがこういうことに口を出してくるのは」

シキは軽く返した。

だが。

「仕事に支障が出る？」

カノンの心配する所以が、そこにあるならば問題だ。

それは、きっとホタル自身を一番追いつめる。

「いえ、真面目な子ですから」

カノンは眉を潜めた。

「でも、だからこそ：お戯れはおやめ頂きたいのです」

言い淀むように唇を舐めて。

覚悟を決めたように、きっぱりと言う。

「シキ様に戸惑うホタルの姿は、見ていて可哀想です」

まっすぐに振り落とされる剣のように容赦ない言葉。

ホタルがシキに戸惑っている。

そんなことは分かっている。

シキの態度に。言葉に。

本心を知りたいと思っている風もなく、ただ、どうして良いのか分

からず困惑している。

それは承知だ。

だが、その姿は他人から見ると。

「：可哀想：か」

そう言われても仕方ないのだろう。

確かに、己は誠実な男ではない。

もの慣れない娘を、戯れで手折ろうとしているように見えて当然だろう。

だから、そのことに怒りや悔しさはない。

「でも：無理：なんだな」

カノンに応えるというよりも、自分自身でそれを確認するように。

「無理？」

シキは頷いた。

「遊びじゃない。カノンの言うとおり、ホタルは遊び相手には向いていない。遊びなら…あんな面倒な娘、相手にしない」
言ってから、まったくその通りだと思った。

こちらが歩み寄れば、心を開いたようにも見えるのに。
少しでも手を伸ばせば、スルリと逃げる。

本気の言葉さえも、サラリと流される。

心の中は、女主のことでいっぱい。

笑うのも、泣くのも、かの女性のためだけ。

「…カノン…笑いたい時には笑った方が良いよ」

ふと見やった元侍女に、ため息をつきながら言ってやる。

カノンは口元をヒクヒクとさせていたが、すぐに堪え切れないように吹き出すと、声を立てて笑いだした。

身体を折り曲げるようにしておかしくて堪らないように笑うカノンを怒る気にもなれない。

何故なら…カノンが今の夫と結婚すると、本気で愛しているのだと聞いた時に、シキも同じように笑ったからだ。

あの時のシキの笑いはなんだったのだろう。

無愛想で無口な職人氣質の男に恋する女を笑ったのは、嘲るためではなかった。

恋に落ちた者の不器用さが愛しかった。

手慣れた筈の女の、その滑稽さがどうしてか羨ましく思えた。

だから、なんだか、笑わずにはいられなかったのだ。

多分、カノンも同じだろう。

「…シキ様が…ホタルを…ですか…」

ひとしきり笑い、まだ呼吸が整わない中、カノンは呟いた。

「意外？」

尋ねれば、どうしてか、ひどく優しく微笑んだ。

「…いいえ…なんとなく納得、です」

年上の元情人の口調は、穏やかさで満たされていた。

「手強いでしょう？」

尋ねるそれも、嘲笑を含むものではない。

「うん：手強いね」

シキは頷き

「しかも：強敵がいるし」

続ける。

もちろんシキにとっての強敵は、かの寵妃以外に他ならない。
ところが。

「ああ：ジンですか」

カノンからは思いがけない人物の名が出てきた。

「ジン？」

あまりに想定外。

シキの反応に、カノンは形の良い眉を右だけ器用に上げた。

「あら？」

対するシキは、眉間に深い皺を寄せる。

「ジンって：あのジンか？」

「あらら：私、余計なことを言ってしまったのかしら」

カノンは焦ったように、誤魔化す微笑みを浮かべていたが、シキが
じっと見つめると、諦めたように肩を竦めた。

「マアサさんは、ホテルをジンに嫁がせたいと望んでいます」

確かにマアサはホテルを気に入っている。

以前、レンがそんなようなことを言っていたような記憶もある。

「近くカイ様やサクラ様にも正式にお話があると思います」

それは、随分と真実味のある話ではないか。

だが、正直なところ、想定外。

ホテルがあまりにその手の話に無縁な雰囲気をもっているから。
しかし、考えてみれば年頃の娘だ。

器量も悪くないし、何より気立てが良く、働き者。

とくれば、そんな話の一つや二つあっても不思議ではない。

しかも、マアサが絡んでいるとなると、それは急に現実感を帯びてくる。

「…シキ様…顔、怖いですよ」

カノンの声に、存在を忘れていた女性に目を向けた。

既に笑いも焦りも消えて、ただただ柔らかな笑みでシキを眺めている。

「本気なんですねぇ」

しみじみと呟く姿が、少々癪に障る。

本気だとも。

そう言っているではないか。

「…そう言ってるだろう」

カノンはピンと来たようだ。

「あ、ホタルにも疑われてるんですか？」

嫌な言葉だ。

だが、疑われるなら、まだ良い方だとも言える。

「…疑われてる、というよりも…そもそも分かってない」

あの娘には分からないのだ。

シキが、ホタルを好きだということが理解できていない。

まるつきり、あり得ないことだとも言うように。

直截的な言葉までもが、曲解される。

『好き』という言葉に『恐れ入ります』という返事をもらったのは、初めての経験だ。

それに何ら返すことができずに、大人げなく突き放してしまったのは何日前のことか。

「自業自得…ですねぇ」

カノンは呟いた。

そんな単語、もう何度も呟いている。

だが、今までのことをとやかく言われても、それは過去だと言えない。

事実、今のシキはホタル以外はいらないのだから。

どんなに疲れても。

どんなに欲していても。

他にはいない。

思い出すのは、無理やり奪った口付け。

一瞬触れた頬の柔らかさ。

慰めるために引き寄せた筈の身体の細さ。

それだけ。

たった、それだけの記憶だけが、現実にあるどんな柔らかな存在よりもシキを煽り、そして癒す。

「本気なら：私は応援します」

カノンは、やけにはっきりと言いきった。

「貴方も見つけたのなら」

続けたそれに、今もカノンがシキを想っていてくれるのだと知る。過去とは違う想いだったとしても、カノンは確かにシキを想っているのだろう。

「だから、ホタルの花嫁道具を揃える時にはぜひうちの旦那にお願いしますね」

いきなりカノンは家具職人の女房の顔をして見せた。

「：まだ：あの旦那を働かせる気なのか」

シキは呆れたように呟いた。

だがその言葉に含まれる、シキの想いがホタルに届けば良いというカノンの願いを、シキは決して聞き逃しはしない。

だから。

「いいよ」

カノンの願いに、約束する。

「思い切り腕を振るうよう旦那に言ってくれ」

そして、ふと気が付いて付けくわえた。

「ジンに同じこと言うなよ」

冗談交じりに、だが、かなりの本気を込めて言えばカノンは、再度大爆笑して

「承知しました」

と、力強く請け負った。

「…公爵家からのご吉報をお待ちしております」
いつになるか分からないけど。

あの娘に、己の本気を分かせてみせる。

手に入れてみせる。

その時こそ、シキはこの身体と精神を癒すことができるだろう。

新しい使用人が勤め始めて、あつという間に時は過ぎた。

マツリが慣れるまではと屋敷に通っていたカノンが去ってからだけでも、数えてちょうど1ヶ月が経とうとしている。

しばらくは、長くそこにあった人の姿が消えたことを屋敷自体が憂うように、寂しい空気が満ちていた。

しかしそれも、徐々に去りつつある冬の寒さと共に消えかけている。そして、僅かばかり残る愁いをかき消す勢いで、マツリは今日も元気に動いている。

お勤めに出るのは初めてだと言っていた彼女だが、実際のところよくやっていると云って良いだろう。

もちろん知らないことや分からないことは、山ほどある。カノンの穴を完全に埋めることは、簡単ではない。

しかし、本人が貧乏だと語った家でも、令嬢然として優雅に過ごしていた訳ではないのだろう。体を動かすことは苦にならないようだったし、家事自体にも疎くはないようだった。

もの覚えも悪くはなく、一度教えれば、次からはそれをきちんとこなしていた。

大人びた見た目と裏腹な幼い動作はバタバタと騒がしく、最低限に躰けられてはいるものの、優雅とは程遠い身のこなしはマアサのお小言の対象ではあったが、それでも彼女の存在はカノンの不在を補うのに一役二役は買っていた。

一方のジンといえば、新人らしからぬ落ち着きようで、黙々と仕事をこなしていた。

元来寡黙な男であるらしく、陽気な両親のように、気軽にサクラやホタルに話しかけてくることはない。

だが、一時は城の厨房に勤めていたというだけあって料理の腕は疑いようもなく確かで、こちらは古参の料理人の穴をほぼ完璧に埋め

ていた。

この新しい仲間二人がよく一緒にいる、と先に気がついたのはサクラだった。

「厨房の勝手口あたりとかにね、よく一緒にいるの」

そう言われて、特に意識した訳でもないが、ほどなくサクラの言うとおりであることにホタルも気がついた。

この二人の組み合わせは、遠目にはお似合いの恋人同士にも見えたが、よくよく考えてみれば、年齢差は親子にこそほど近い。

聞くともなしにホタルの耳に入ってくる二人の会話は、大抵がマツリが仕事の失敗やら疑問やらを、それこそ子供が父親に報告するかのようにジンに話すというものだ。

それは、一方的にマツリが懐いているように見えなくもなかった。

ジンの迷惑になるようならば、一言言わねばならないだろうかと考えもしたが、ほんの少しでも気をつけてみれば、時折返すジンの言葉や仕草には、こちらも弟妹を思いやるような優しさが含まれており、どうやらこのままにしておいても問題なさそうだった。

「ジンさんは男兄弟ばかりで妹みたいにマツリがかわいいし、マツリは長女なので甘えられるジンさんに懐いている…という感じでしようか」

結論付けて、世間話のひとつとしてサクラに報告すれば、ジンの作ってくれたお菓子をフォークに差しながら、サクラは頷いた。

「…そんな感じなのかしら」

甘い香りの焼菓子を口に運ぼうとするサクラのその手が、ふと止まる。

「あの二人を見てると…なんだか懐かしいの」

何かを思い出そうとするように首を傾げて、視線は少し上向き。

「私は気がついちゃいました」

ホタルが最近発見した事実は、多分サクラの気になるそれと一致しているだろう。

「あの二人を見ていると…昔、お屋敷にあったクマとウサギのぬい

ぐるみを思い出しませんか？」

オードルの奥様のお手製のぬいぐるみのクマは、小さな子供が必死に抱えなければいけないほどに大きな茶色。侍女頭が作ってくれたのは、いつでも片手に抱いて歩けるほどのピンク色のウサギ。

幼いサクラのお気に入りだったそれらは、別々の者によって別々の時期に作られたものののに、並べるととてもしっくりとお似合いだった。

大きなクマと小さなウサギ。

新しい使用人たちは、あの子達をどこか彷彿とさせるのだ。

ホタルの言葉は、見事にサクラの疑問に答えたようだ。

思い出すように動きを止めていたサクラは、やがて、ぷっと吹き出す。

「それだわ」

クスクスと声を上げて笑うサクラは、久しぶりだ。

この笑顔のきっかけをくれた二人の存在に、ホタルは感謝した。

最近、サクラは沈みがちだから。

理由ははっきりしている。

カイの外出の頻度が、ここひと月ばかり明らかに増えている。

破魔の剣を携えての遠出は、側近や狩人だけの力では、制することのできない魔獣の存在を示している。

それは、あの魔獣よりも大きく強いのだろうか。

アルクリシュで遭遇した無数の小さな魔と、巨大な魔獣。

思い出そうと言う意思など欠片もなくとも、その惨劇はサクラの頭を過ぎるだろう。

サクラを庇って傷を負った軍神の姿を、幻に見て表情を沈ませるに違いない。

あの時、血を流したのはカイだったけれど。

軍神以上に傷ついたのはサクラかもしれない。

ホタルはそう思い、サクラに寄り添う。

「…私、あの子達大好きだったわ」

サクラは懐かしむように囁いた。

『いつまでも幼い子のように、その子達を抱いてはいけませんよ』

そう言っ、厳しい顔の家庭教師が、サクラからあれらを取り上げたのは幾つの時だったろう。

多分、10歳ぐらいだったと思う。

分かっていると頷きながら、それでも溢れる涙を止められない幼いサクラの姿は、ありありと思い出すことができる。

あんなに哀しそうなサクラを見たのは初めてだったから。

ホタルはとても動揺した。

それでも、あの幼い子は、今のサクラほどに辛そうではなかった。

大人になったサクラは、涙は流さないけれど。

穏やかに微笑んではいるけれど。

切り裂かれんばかりの胸の内は、隠しきれぬ筈もない。

そして、サクラの傍らにいるホタルも、もう幼い子供ではない。

ポロポロと涙を流すサクラの横で、おろおろとしながら必死に背中を撫でることしかできなかったホタルではないから。

「サクラ様、今日は暖かいですよ」

ホタルは窓から見える青い空にサクラを誘う。

この数日で、季節は驚くほど春めいてきた。

「ニキさんが、春の花が綻び始めたよ」

慰めの言葉はない。

だけど、少しでもその心に陽が差すように、と。

ホタルの意図を汲んで微笑んだサクラは

「…行きましょうか」

お茶を終えて立ち上がった。

暖かさに重々しさをなくした春先のドレスの布地が軽やかに揺れる。サクラの心も、少しでも軽くなれば良い。

どれほどの魔獣がこの世界にいるのか、なんてもちろん分からない。人同士の争いが終焉しつつある現在において、軍神はそれでも役目

を終えることはなく、戦いに明け暮れる。

サクラはどんなに辛くても、軍神を送り出し。

戻るのをただ待って。

戻れば、笑みと温もりで、男を癒すのだ。

ホタルは、そのサクラを支えたい。

望みはそれだけだ。

それだけの筈。

なのに。

どうして。

どうして、こんなに苦しいのだろうか。

痛みを共有しているのだとは言えない。

それを口にするのは躊躇われるほどに、サクラの想いは深い。

ならば、この痛みは何なのだろうか。

深くは考えまいと思う。

深く考えてはいけない気がした。

「：でね、この髪をこちらに持ってくるの」

ホタルはサクラの髪のひとつ房を三つ編みに編み込み、それでクルリと他の髪を巻く。

それを、神妙な顔つきで見つめながらマツリは頷いた。

「普通の長さだったら、これで大体纏まるわ」

湯浴みを終えたばかりのサクラの髪は、しっとりと湿っている。

常よりも纏めやすいそれを、ホタルから受け取ってマツリが教えられた通りに結び上げていく。

少し前に、マアサからマツリに髪の手結方を教えるように、と指示されていた。

昼間は何かとバタバタしていて、なかなか機会がないので、思い切って就寝前の一時に教えることにして、許しを得てマツリをサクラの部屋に呼び寄せた。

たわいもない話をしながらの、余興にも似たこの作業は、春の静かな雨に、なお表情を曇らせるサクラの気を紛らわせるだろうか。そんな思いもあった。

「…私：こんなに長い御髪を見るのは初めてです」

マツリは長い髪に四苦八苦しながらも、なんとか髪をまとめ上げた。体を動かすことだけではなく、手先も器用な少女なのだ。

「ホタルが切ってくれないの」

サクラが笑いを含んだ声で、ホタルを非難する。

マツリは結い上げた髪から、ホタルへと視線を移してくる。

「否定はしませんけど」

ことのほかサクラの髪をお気に召している主は、決してそれを切ることを禁じてはいない。

とはいえ、あえて切るようにとは間違っても命じはしない。

いっそ切るようにと命じられればホタルも覚悟を決めるのだが。

主は楽しげに、愛しげに。

長い長い髪を指先で遊ぶ。

それが、いつしかホタルにとっては、捨てがたい光景になっている。許される限り、ホタルが手をかけ、結うことができる限り、切ることを避けたいと思ってしまうのだ。

「…じゃあ、次の結い方を」

言って、ホタルはマツリが結い上げたそれを、あっさりと崩して戻す。

梳いて均したそこに、次の形を与えようと手を伸ばしかけた。だが

「きれい」

素直な感嘆の言葉を零すマツリに、つい手が止まる。

マツリはボーっとサクラの髪を見つめている。

「結うのは大変だけど…この長さに慣れておけば大抵の髪は楽に結えるようになると思うわ」

ホタルは結局次の結い方を教えることをやめた。

まだまだ日はある。

何も今日慌ただしく、教え込む必要はないだろう。

「…三つ編みにして、これでまとめて差し上げて」

マツリは元気に返事をする、再び真剣な顔つきで緩やかに三つ編みを作り上げて、受け取った柔らかかなりボンでまとめた。

「…明日は晴れるかしら…」

雨音にサクラが耳を傾ける。

晴れば良い。

願いつつ外に耳を向けたホタルの頭の中に、晴天よりもサクラを笑顔に導くであろう音が届く。

「サクラ様」

ホタルは、サクラに声をかけた。

そして、バルコニーに近付くと、扉を開け放つ。

風もなくまっすぐに落ちる静かな雨が、部屋に降り込むことはない。空を見上げる。

隣でサクラとマツリも雨空を見上げた。

ホタルの耳に届く音が少しずつ近づき大きくなってくる。

それが音ではなく姿となって視界へと飛び込んでくるタイミングは、サクラもホタルも変わらない。

暗い雨空に、なお黒い衣装を身にまとった軍神が現れる。

「…カイ様！」

竜をバルコニー近くに寄せたカイは、浮かぶ背中からサクラの前に降り立った。

跪いてそれを迎え入れながら、ホタルは羽音の時点で気が付いていた違和感を、視覚という感覚でも確認した。

「おかえりなさいませ」

俯いていてホタルには見えないが、サクラは心底ほっとしたように笑みを浮かべていることだろう。

そして、その柔らかく穏やかな微笑みは、きつとどんな言葉よりも、戻った男を安らぎの入り口へと導くに違いない。

カイは、ずぶ濡れのマントをバルコニーに脱ぎ捨てた。
現れたのは、光に満ちた剣。

それを無造作に手放した。

ふわりとサクラの髪が舞い上がり、風が巻き上がる。

先ほどマツリがまとめた髪は、突風に乱されて。

だが、それは剣がサクラに戻った証だ。

例え、刹那であろうとも。

軍神が剣を手放し、身を休める瞬間の到来。

カイは自由になった両手でサクラを抱きあげた。

「しまった：濡れるな」

咄くカイの首に、サクラの腕が回る。

「おかえりなさいませ」

ホタルは立ち上がり、カイへとタオルを差し出した。

抱かれたままのサクラが受け取り、カイの濡れた髪をそっと包む。

「マツリ、マアサさんにカイ様がお戻りになったとお知らせして。

それから湯浴みの準備を」

ホタルにならって膝まづいたものの、目の前の光景に呆然としてい

るマツリに声をかける。

マツリは、はっとしたように裏返った声で返事をする、立ち上が

ってそそくさと部屋を出ていった。

「：シキ様は？ご一緒ではないの？」

尋ねたのはサクラだった。

ホタルの心臓が一つ大きく跳ねる。そして、少々早めに鼓動を刻み

続ける。

そう、常ならば主と共に戻ってしかるべき側近が、今はここにいな

い。

竜の羽音が一頭分しか聞こえなかったのは、間違いではなかったの

だ。

「所用があるというから、許した」

言葉の少ない軍神は、そうとだけ告げた。

所用、というそれが何なのか。

サクラが尋ねることはなく、もちろんホタルが口を挟むことなどできよう筈がない。

ただ、知っただけだ。

あの騎士は帰らないのだ。

どうして？

ふと思い、それを押しやる。

だめ。

あの方が、どこで何をしようと関係ない。

考えることさえ間違っている。

だが、疑問は頭を巡る。

帰らず何をしているのか。

寂しさを紛らわせているのか。

「あの：カイ様？」

カイは濡れた足元を気にする風もなく、サクラを抱いたまま歩き始めた。

どうやら部屋を出るつもりらしい。

主の意図は分からないながらも、自身の思考にストップをかけて、ホタルは慌てて扉を開けた。

「湯浴みは、終えたのか？」

既に夜着に着替えたサクラの姿に気が付いているだろうに、カイはそう尋ねた。

「はい」

素直に頷くサクラは戸惑うようにカイを見つめる。

大人しく抱かれていた体が身じろぎ、首に回った腕がおずおずと外れる。

「：別に：もう一度浴びたところで問題はあるまい」

主の言わんとしていることに、気が付いたのはホタル。

付いて行きかけていた足を止めて、扉あたりで二人を見送る態勢に入る。

「…は？」

サクラは何を言われているのか分からないようだった。
ホタルをじっと見てくる。

こういう時に、私に答えを求めるのは、本当に、本当にやめて下さい！

引き攣る笑みを見せたホタルに、サクラはぱっとカイから身を離れた。

「…っあの…私、カイ様の部屋で待ってますからっ！…」

抱き上げられていては逃げられる筈もないのに、もがき始める。

口にした言葉は、多分、サクラの最大級の誘い文句に違いないのに。

「…俺は待てんな」

カイは口元に悪戯めいた笑みを浮かべながら、もがく細い体を肩に担ぎあげた。

思いがけず、ホタルに向かい合ったサクラは首まで真っ赤だ。

「ホタル！」

名を呼ばれて、ホタルは更に引き攣った。

私に一体どうしろと？

まさか、私ごときにこの主が止められるとでも？

「…えーと…行ってらっしゃいませ？」

と、頭を下げる。

「ホタル！」

それは悲鳴に近かった。

申し訳ありません、サクラ様。

心で一つだけ詫びを入れて、ホタルは部屋に戻った。

サクラの部屋ではなく、カイの寝室の準備をし始める。

側近がいれば、さぞかし嬉しそうにからかったのだろうが。

いない今は、やけに静かに雨音が響くだけだ。

「…お手伝いします」

控えめなノックの後に、マツリが顔を覗かせた。

長く主の眠ることのなかったシーツを直していると、ため息の混じ

った声音でマツリが呟いた。

「本当に：ご寵愛を受けていらっしゃるんですね」
単純な感嘆だけが、そこには含まれているようだ。

ホタルは手を止めて、マツリを見た。

目は潤み、頬は赤い。

どことなく心ここにあらず、と言った感じだ。

13歳には刺激の強すぎる光景だったのだろう。

マツリは手だけはきちんと動かしながら、常ならば叱責を恐れて口にしないようなことを呟き続けた。

「サクラ様のお噂はいろいろと聞いていたのですが」

ホタルはそれを咎めず聞いていた。

「：あんなにきれいな方だとは思いませんでした」

つい、笑みが零れる。

素直な少女に、軍神の寵妃が美しく映えるという事実が、ホタルには嬉しい。

「それに：あんなにお優しい方だとも」

称賛の言葉が続く。

「でも：先ほどは、ちょっと：びっくりしちゃいましたけど：」

ちらりと見れば、マツリは何を思い出したのか、顔を真っ赤にしている。

湯浴みの準備をするように言ったのは、酷だったかもしれない。

カイのあの様子では、サクラが無事に解放してもらえたとは思えないし。

とはいえ、この少女がどんな場面に出くわしたのか、聞く勇氣はない。

「仲睦まじいのはいつものことだけど：今回は：少し長くお出かけでいらっしゃったから」

宥めるように言いながら、再び浮かび上がる面影にどうしてか胸が痛んだ。

長いおでかけは、あの方も一緒だ。

もう、随分会っていない。

あの姫君の一件以来かもしれない。

あの方だって、きっと。

疲れた身体を癒し、宥めているのだろう。

どこかで。

誰かと。

いや。

何故、こんなことを考えるの？

関係ない。

あの人がどこで何をしようと。

何も。

「…今夜はもう休みましょう」

ホタルは言って、マツリと離れた。

ぼんやりと廊下を歩いて、自身の部屋へと向かう。

今夜は、もうサクラから呼ばれることはないだろう。

だから、耳を閉ざす。

早く、部屋に帰って寝てしまいたい。

そんな風に思いながら。

「ホタル？」

突然の呼び掛けに、ギクリと肩が竦んだのは、その声が今は一番聞きたくない声に酷似していたからだ。

「大丈夫ですか？」

だけど、まったく違う口調に、それがタキだと気が付いて、そっと力を抜く。

タキは屈むようにして、ホタルの顔を覗き込んできた。

「あの？」

問い掛けの意味が分からずに、ホタルは首を傾げた。
何も。

大丈夫かなどと、問われる理由はない。

ホタルはいつものとおりのもりだ。

「…大丈夫ではないようですね」

言うなり、タキはホタルを抱き上げた。

「タキ様!？」

あまりに突然で、あっさりとホタルの体は宙に浮く。

「おとなしくしてなさい…真っ青ですよ」

険しい顔で見下ろされる。

この端正な顔は、こんな表情を作ることもあるのだ。

片割れが見せることのない小難しい表情に、それがホタルをかき乱す方ではないのだと思い知った。

タキは娘一人の重みを微塵も感じさせない歩調で、ホタルを厨房横の小部屋へと連れて行くと、一つの椅子に座らせた。

「若いお嬢さんを落ち着かせるなら、甘いお菓子と紅茶というのが、わが家の定番なのです」

そう言って、手のひらにお菓子を乗せてくれる。

そういえば、同じ顔をした方も、この場所で、こんな風にお菓子でホタルを宥めたことがあったと思います。

「アイリには太ると余計に怒られたりもしますが…」

この策士殿が愛妻にはまったく頭の上がないことは、十分に知っているから。

ホタルは小さく笑いを零した。

「貴女はもう少しふくよかにおなりなさい…小さな子供を抱いているようでしたよ」

タキは柔らかな口調で言いながら、ほらとばかりに菓子の入った籠ごとをホタルに寄せた。

そして、暖かなお茶を差し出してくる。

恐縮してそれを受け取りながら、重なる過去の光景を振り払う。

暖かいカップを手にして、自分の指先がひどく冷えていたことにホタルは初めて気が付いた。

「貴女は遠耳なのだそうですね」

何の気負いもなく、さらっとタキが呟いた。

なのに、身が強張ってしまうのは、どんなに言われても、やはりこの力を誇る気になどなれないから。

「シキから聞き出しました…あいつは案外口が固いので、苦勞しましたよ」

さりげない言葉にシキを庇うものがある。

「今、シキは妹に会いに行っています…貴女が教えてくれた情報を元に見つけ出した妹を」

ああ。

そうなのか。

そういえば、妹君が見つかったと言っていた。
忙しくて迎えにいけないと、そう零していた。
そうなのか。

あの人は、誰かではなく。

妹君の元にいる。

ほっとして。

それがまたホタルを傷つける。

どうして、安堵の息をつくのか。

「また、我が家へおいでなさい。母も会いたがってますよ」

ホタルは首を振った。

そういう身分ではない。

だって、ただの侍女なのだから。

あれは特別な状況だったのだから。

「ホタル」

タキが呼ぶ。

ホタルは顔を上げた。

目の前に、シキに良く似ている筈の、だが、まったく違う方の顔がある。

「貴女のような遠耳は、初めて見ます」

微笑むそこに、言葉の真意は見当たらない。

ただ：この男は、ホタルの力の使い道を、いくらでも知っているに違いない。

きつと、あの父親以上に。

いや、あの父親よりも、よほどこの力は有意義に使われるだろう。

「私でお役に立つならば、なんなりと：」

気がつけば、そう呟いていた。

「貴女をそのように利用するつもりはありませんよ」

タキは心外だというように、はつきりと告げた。

「貴女はサクラ様の大事な侍女ですから」

優しい言葉だ。

何よりもホタルが望むような言葉。

こんな風に、望む言葉をくれるところは、とてもよく似ている。

小さな声でお礼を言いながら、ホタルはお茶に口をつけた。

「：ところで」

目の前で同じようにお茶を飲みながら、タキが何でもないことのように尋ねてくる。

「シキをどう思いますか？」

その真意は分かりかねた。

だが、一瞬、カップの中のお茶が揺らいだ気がした。

「あれもいつまでもフラフラとして、公爵家跡取りの自覚がない」

ホタルの動きに気が付いたのは分らない。

タキは、同じように平坦な口調で続けた。

「というのは、父の言葉ですが：確かに少々自覚に欠けるようですね」

カチャリと小さな音を立てながら、タキのカップがテーブルに戻る。

「シキは貴女に興味があるようです」

興味？

それは？

タキの言う意味は、何なのか。

「貴女はシキが今まで相手にしてきた方々とあまりにタイプが違うので油断してたのですが」

タキが探るようにホタルを見つめてくる。

ホタルは、カップをテーブルに置いた。

茶色い波が揺れぬように、そっと。

「貴女はシキをどう思っているのでしょうか？」

シキが興味持っている。

では、貴女はどうなのか。

目の前の方は、そう尋ねているのか。

「どう、と言われましても…考えたことはありません」

これは、嘘？

本当？

考えたくない。

考えないようにしてきた。

そして、答えはもちろん出していない。
どうか。

ホタルが出さないその答えを、この聡明な方が見つけませんように。

「では、お気をつけなさい」

タキは言った。

ホタルの言葉の奥を見ることを、敢えて避けたようなあっけなさで。

「はあ」

気を張っていた分、少々間拔けな答えを返してしまう。

だが、それがむしろホタルがこの話題に気がないように見えたようだ。

タキは諭す年長者のしたり顔をして見せた。

「はあ、ではありません…嫁入り前の大事なお嬢さんに何かあったら…しかも…」

タキは何か言いかけてやめた。

声にならないものは、ホタルには知れない。

だから、この時は、タキが何を言いたかったのかは分からなかった。
「気をつけます」

ただ、そういう答えでいいのだろうか、とそれを心配した。
いつかは、正しいと思った言葉が、シキを不機嫌にさせた。
今度の答えはこれであっているか。

「大丈夫です。私、立場を弁えております」
何も。

考えない。

答えはこれ以外にない。

あの方は、ただ同じ屋敷に勤めるだけの…そう目の前の方と何ら変わりない筈。

だから、この答え。

「いや、ホタル、そういう…」

ホタルの答えにタキは眉を寄せて、何やら言葉が続けようとした。
だが、それを久しぶりに聞く声が遮った。

「おや、ホタルじゃないか」

レンだった。

ホタルは救われた気分で、

「もう、お加減は良いのですか？」

尋ねて微笑んだ。

レンは頷きながら

「…もう、すっかりね。この休養で、ますます太ってしまったよ」
そう言って、ホタルの横に座った。

「ホタルがシキ様ではなく、タキ様とご一緒とは珍しい」

質問に他意はないだろう。

だが、ホタルは思わずタキを見た。

「…私だって、たまには若いお嬢さんと話がしたいと思うんだよ」
レンは笑いながら、タキがホタルにと差し出した茶菓子を口に一つ
放り込んだ。

太ったと言いつつ、それをどうにかしようという気はないようだ。

「そういえば：シキ様はお戻りにならなかったようですねえ」

のんびりとした口調のそれに、タキは負けないのんびりさで答えた。

「ちよっとね」

レンは身を乗り出した。

「：いよいよご結婚なさるのではという噂を聞きましたよ」
トクン。

心臓が煽られた。

別に驚くことではない。

同年のタキもカイも妻がいる。シキにそんな話があっても、何ら不思議はない。

「そんな噂は昔から事欠かないよ」

タキは苦笑いを零して呟いた。

「私、そろそろ部屋に戻ります」

ホタルは立ちあがった。

「ホタル」

タキが声をかけてくる。

さっきは良く似ていると思ったのに。

その声は、まったく違って聞こえた。

「……おやすみ」

何か言うのか見つめる先、タキは、結局そう言っただけだった。

「おやすみなさいませ」

答えて、部屋を後にする。

泣きたい気分だった。

だけど、泣く理由なんてない筈だった。

だから、ホタルは唇を噛み締めて、シーツの中に潜り込んで。
ひたすらに眠りが訪れるのを待った。

シキの言葉も、タキの言葉も考えないようにすることが、日々を変わることなく過ごしたいと望むホタルができるただ一つのことだった。

そして、その術を、ホタルは知っている筈だった。

簡単なことだ。

サクラのことを考えればいい。

今日のサクラ様のドレスはどれにしよう。

天気が良いようなら、庭にご一緒しよう。

そんなことを考えればいい。

そうすれば。

「ホタル？」

その筈なのに。

名前を呼ばれて、ホタルは自分がサクラを目の前にしながら、物思いに捕われていたことに気付かされる。

「何か心配事？」

心配事なんてない。

こんな風に氣遣われることなど、何もない筈なのに。

サクラはじっとホタルを見つめている。

「…庭に行きましょうか」

やがてそう言って立ち上がった。

以前、出征中の軍神を思っ沈むサクラを庭に誘って慰めた。

すると、やはり、サクラのこれも慰めだろうか。

慰めが必要な程に、私は目にみえて沈んでいるのだろうか。

春先の庭は華やかに色付いていた。

だが、しかし、それよりもなおホタルを引き付けたのは、遠目にも

はつきりと見て取れるその存在。

庭の片隅に立っている騎士だった。

「シキ様：お帰りになったのね」

サクラが呟くと、それが聞こえたようにシキが振り返る。

久しぶりの姿に、意味も分からないまま鼓動が跳ね上がる。

また少し髪が伸びた？

いくらかお痩せになった？

それほどにお忙しいのか。

一旦跳ねあがった心臓が、今度はズキンと痛みを訴えた。

どうして。

いや。

この痛みは納得できるかもしれない。

心配なだけだ。

誰だって、見知った者が疲れ、やつれた様子を見せれば心は痛む。

こんな風にだってなるだろう。

遠くのシキは傍らにいたタキに何かを告げた。

無意識にも閉ざすホタルの耳に、その言葉は聞こえない。

タキが頷くのだけが見て取れる。

シキが、こちらへと近付いてくる。

サクラに帰還の挨拶をするのだろう。

ホタルは、サクラから一步下がった場所で膝を折って頭を下げた。

ざわつく心など素知らぬ風に、体は侍女としての所作を完璧にこなす。

「ただいま戻りました」

礼を終えて顔を上げたホタルの目に、サクラの前で膝をついて頭を下げるシキの姿が映る。

騎士としての、主君の寵妃へのごくごく当たり前の礼。

もっともサクラが恐縮してしまうので、この屋敷においては滅多にお目にかかることはない。

「お帰りなさいませ」

サクラは答え。

「…あの…立って下さいませんか？」

やはり困ったように、シキに願う。

シキは顔を上げた。

近くで見るシキの面は、やはり記憶にあるより少し頬が削ぎ落とされているようだ。

「お願いしたいことがあります」

「お願い？」

サクラの表情は、更に戸惑いを深めた。

「ホタルをお借りしたいのです」

サクラの背後、ホタルは身体を震わせた。

何を言うのだろう。

思わず、タキがいた方を見やる。

先ほど二人の男が立っていた場所には、もう誰もいない。

「ホタルをですか？」

「はい」

サクラが振り返ってホタルを見た。

自分がどんな表情をしているのか分からないまま、ホタルは小さく首を振って拒否を示す。

拒否してしまってから、己がそんな身分ではないこと、拒否する方がよほどサクラの不審を煽るだろうと気が付いた。

「よろしいでしょうか？」

尋ねて、サクラの返事を待つことなく、シキは立ち上がった。

返事を返す代りに、サクラは身をずらしてシキとホタルを対峙させる。

サクラという小さな盾を失って、ホタルの目の前はシキだけになる。まっすぐに見つめてくる碧の鮮やかさに耐えきれず俯いた。

「…夕暮れまではお返しいただけますか？」

サクラが動き出す。

行きたくないと縋りたい思いを抑えて、ホタルはそこに留まった。

「間違はなくお返ししますよ」

パタパタという足音に、そっと視線を上げれば、マツリが駆け寄ってくるのが見えた。

相変わらず、手ばかりの無い。

現れた幼い侍女が、サクラの傍らに辿り着いたのを見届けて、ホタルは逃げ道のないことを悟った。

行きたくないという気持ちに、足が動かずにいると、ぐっと腕を掴まれた。

「おいで」

口調は相変わらず穏やかで。

腕を引く力が、有無を言わず強いのも変わらない。

半ば引きずられるようにして連れていかれたのは厩舎。

庭師が馬の轡を握って待っていた。

「…っシキ様!？」

いきなり、シキは屈み込みホタルを肩に担ぎ上げた。

一瞬の浮遊感の後、馬の背中にストンと乗せられる。

まるで何も入っていない麻袋を乗せるかのように、軽々と。

啞然とするホタルの背後にシキが軽やかに飛び乗ると、馬はすぐにも走り出した。

慣れない馬の動きに身体が揺れる。

トンと背中当たるそこがシキの胸であることに、身体以上に心臓が揺れ動く。

できるだけ、シキから離れるように前に屈みこみ、馬のたてがみにしがみついた。

着いた先はスタートン邸だった。

乗せた時と同じように軽々と、シキの手によってホタルは馬から降りされる。

腕を引かれて導かれたのは、屋敷の中ではなく庭。

そこに、知らない女性が一人。

質素な身なりと化粧気のない面。公爵家の庭先にはそぐわない姿ながら、そこに凜と立っている。

そして、金髪と碧眼のその色彩には、見覚えがあった。

それは、今ホタルの傍らに立つ男と、とてもよく似ていた。

「貴女がホタルさん？」

女性が奏でる声。

知っている。

この声は。

気が付いてホタルは膝を折った。

いつかは遙か彼方にあつた声。

「初めまして、ケイカです」

間近に聞くそれには僅かな棘もない。

にこりと微笑むそこに一片の陰りもない。

それは、この女性が不本意な形でここにいないのではないことを、ホタルに伝えている。

ケイカはゆっくりと歩き出した。

シキにそつと背中を押されて、ホタルはその後ろに続いた。

「：この庭、私がここにいた頃と変わってないの」

ケイカが庭を見渡して呟く。

「私の部屋だった場所も：何一つ変わってなくて驚いたわ」

それは、スタートン夫人の内では、5年前と何も変わってないからだ。

18歳の娘は、今もこの屋敷にいて。

ちよつとした諍いで、拗ねて部屋に閉じこもってしまっただけだから、何も変わらない。

本当なら、5年の間に様々なものが変化するのは当たり前なのに。だから、この目の前の女性は、18歳の娘ではないのも当たり前。5年前のこの方が、どんな風だったのか。

ホタルはもちろん知らない。

だが、穏やかな口調で話す女性は、紛れもなく大人の強かさで満ちている。

それを5年前から変わることのできない夫人と屋敷はどう受け入れたのだろうか。

「私、ここには戻るつもりはないの」

ケイカは足を止めて、ホタルに向き直った。

迷いのない碧眼は、ホタルとシキを交互に見つめた。

「私は：自分の生きる場所を見つけてしまったから」

視線が懐かしむように、庭を見渡す。

「ここは、もう、私の生きる場所ではないから。：でも」

ホタルに戻ってきた瞳が微笑んだ。

「：私を見つけてくれてありがとう」

労働に慣れた、貴族の令嬢のものではない指先が、ホタルの手を握る。

「もう一度ここへ来る機会を与えてくれてありがとう」

ホタルは何も言えない。

礼を言われても、結局、この方が戻らないのであれば、救われないのではないか。

娘を想う母も。

母を想う息子も。

「母様！」

離れたところで、小さな子供の声が響いた。

この声にも聞き覚えがある。

見やれば、3歳程の子供が、がっしりとした男性の肩にちょこんと座って、ケイカを笑いながら見ている。

「アキ」

ケイカは二人の方へと駆け寄る。

ホタルの横をすり抜けていく女性からは、潮の香りがした。

「ホタル」

シキが名を呼ぶ。

その顔を見ないまま、ホタルは呟いた。

「奥様は大丈夫なんでしょうか？」

「…ホタル：見てごらん」

促されて、ケイカが走っていた方を振り返る。

笑い合う親子の傍らに、老夫婦が歩み寄っているのが見えた。

微笑みながら。

老婦人が、男の肩にいる子供に手を伸ばす。

子供は無邪気に、その手に向かって身を滑らせた。

スタートン夫人は子供を抱いたまま、ホタルへと近付いてくる。

ホタルは、礼で彼女を迎えた。

「ホタルさん」

顔を上げれば、そこにある笑みはホタルが恐れたものではなかった。
現実感に満ち満ちた穏やかな微笑み。

「…ケイカはここには戻らないそうよ」

その言葉に絶望を感じさせるものはない。

「でも、今までとは違うわ」

夫人の隣に、初めてお目にかかる公爵と、若い夫婦が並んだ。

夫人の腕にいる幼子が、祖父の口髭に無邪気に手を伸ばす。

常は威厳に満ちてもいよう公爵は、目を細めてその手が髭に触れる
のを許していた。

「私たち、ちゃんと分かり合って認め合っているの」

夫人は子供を、ケイカに渡した。

そして、自由になった両手で、ホタルの手を握る。

「ありがとう」

ケイカの声を聞いたときと同じ言葉。

「私たちを助けてくれて…ありがとう」

ホタルは泣きたくなった。

哀しいのではなく。

辛いのではなく。

嬉しくて、泣きたいなんて。

「：私こそ：ありがとうございます」

答えていた。

ただただ嫌いなこの力。

なくなってしまうえば良いと思えない力。

私の力がこんな風に役に立つのだと教えてくれて。

「ありがとうございます」

心からの言葉を口にした。

夕食を一緒に、と勧める夫人に丁寧な断りを入れるホタルを、シキは次回を約束する形で母親からなんとか引き離して屋敷から連れ出した。

ここまでの道のりは少しでも早い方が良いと馬を使ったが、帰りは馬車を用意する。

今回は、きちんと御者が御者台に座っているのを見て、ホタルはほっとしたようだった。

扉を開けて手を差し伸べれば、ホタルは素直に従って車に乗り込む。シキはホタルに続いて馬車に入ると、ちょこんと腰かけている娘の隣に座った。

「：一人で帰れます」

相変わらず頑なだ。

「きちんと奥方に返さないとね」

ホタルの逃げを、そんな言葉でサラリとかわし、シキは馬車を発進させた。

しばらくは車輪の回る音だけが、車の中にリズムを刻んでいた。少しして、ポツリとホタルが呟いた。

「この力：嫌いです。でも、今日は少し好きになれました」

ホタルが己の力に嫌悪：いや、もしかしたら憎悪：に近い感情を抱いていることには気が付いていた。

力の話が出ると、この娘は限りなく無表情になる。その中に見え隠れするのは、哀しみと苦しみのみだ。

「それは良かった」

あの夜、庭の片隅で抱きしめた娘が語ったのは、独白に近かった。サクラへの行き場のないホタルの想いを放つために語らせたことだったから、ところどころ事情の分からない部分があっても、敢えて口を挟むことはなく聞き役に徹した。

サクラという存在が、ホタルにとってどれだけ大きなものか。

思い知りながらも、ホタルがぼつぼつと話すのを聞いているうちに、ふと思いついたことがあった。

ホタル・ユリジア。

ユリジアというのは、あの騎士と同じ名だ。

ホタルは、あの男の娘なのだ、と気がついた。

そうは言っても、シキはホタルの父である男と面識はない。

ただ、平民から騎士号を手に入れるまでになった優秀な男だと、言ってみれば立身出世の代表者のような名として記憶している。

剣の腕前はもちろん素晴らしいものだったが、とにかく情報通な男だったと伝え聞いている。

ホタルから零れ落ちた告白からすれば……。

父親は娘の遠耳を利用したということになるのだろうか。

まだ、幼い娘に……特殊な能力を持つとはいえ、国間の事情など分かる筈もない幼子に……敵方の政情を聞くよう命じたのか。

それは、なんて残酷なことか。

戦乱にあった各国の王や宰相達は、どれほど残忍で汚れた会話を交わしたのだろう。

幼いホタルは、どんな想いでそれを聞き、父親に語ったのだろう。

己ならば、絶対にそんなことはさせない。

幼い少女に、まして愛しい者に、そんなこと聞かせたくはない。

力は力としてそこにある以上、それは変えようもない。

それを強い意志を以て、駆使するならばそれも良いだろう。

だが、この娘は違う筈だ。

「君は私たちの恩人だ」

そうだ。

こんなに優しい力なのに。

それを厭い、卑下することしかできないなんて。

「…本当に感謝している」

ホタルは、驚いたように目を見開き、やがて嬉しそうに微笑んだ。
零れ落ちるように。

花開くように。

いつか、未だ咲き誇らず…と思った娘は、確実にその時を迎えつつある。

それを手に入れたという欲求は膨れ上がるばかりで。

「…シキ様」

ホタルがシキを見上げる。

狭い馬車の中。

あまりに近いホタルの存在。

馬にするべきだったと、シキは正直悔やんだ。

「お帰りなさいませ…ご無事のご帰還、心よりお喜び申し上げます」
シキの欲望に本当に僅かにも気が付かないのだろうか。

それとも…この打ち解けきらない態度は牽制なのか。

「もう少し…打ち解けてくれないものかな」

誘いをかけてみる。

ホタルは少しの間を開けて、首を振った。

「そういう訳には…もう十分過ぎるほどシキ様には、よくしていただいてますのに…これ以上甘えることはできません」

まっすぐな答えに、前者だと知る。

気が付かないのだ。

シキの想いに。

欲望の所在に。

だったら…教えてみる？

「ホタル」

シキはホタルの頬に手のひらを当てた。
柔らかな感触が、剣ばかりを握っていた指を、シキの想像以上に刺激する。

「そういう侍女然とした対応は：私を落ち込ませる」

ホタルは手を拒みはしなかった。

いや、心では拒否しているのかもしれない。

しかし、慣れてない侍女は、無礼なくこの手を退ける術を知らないのだ。

「君は：私にとって侍女以上だ」

この手をどうするか。

次は：どこを触れる？

「：私は：サクラ様の侍女です。それ以上はありません」

指先を頬から顎に滑らせるか？

手のひらを背中に回すか？

引き寄せて、キスをしたら：唇だけでなく、その肌の至る場所に口付けたら。

そこから、この娘に伝わるだろうか。

シキの想いが、どんなもので、どれほどのものか。

だが、結局、そうはしなかった。

そうでなくても、目の前のホタルは不安げにシキから離れていくことを願っている。

「：君は：頑固だなあ：」

結局そう言って、頭をポンポンとはたいた。

ホタルの表情が少し和らいで。

シキは微笑んで見せれば、小さな笑みさえ見せてくれた。
まだ。

今はまだ、ホタルの笑顔を優先させることができる。
もう少し。

そんな余裕がいつまであるのか分からないけど。

まだ、大丈夫だ。

「縁談？」

それは、ホタルにとってあまりにもいきなりな話だった。

「：そうなの」

答えるサクラの方も、その顔にはっきりと困惑を浮かべている。

「私に、ですか？」

尋ねてから、間拔けな問いだと思った。

サクラとホタルしかない状況で

「縁談があるの」

とサクラが言えば、言う本人はすでに人の妻なのだから、普通はホタルの、ということになるだろう。

しかし、あまりにも唐突過ぎて、それが自分自身への話だとは思えないのがホタルの正直なところだ。

一方のサクラは、ホタルの抜けた反応に笑いもせず、戸惑いと神妙さの入り混じった複雑な顔つきで頷いた。

「マアサから話があったの：ホタルを：」

そう続けてから、ほんの少しの間をおいて。

「ジンのお嫁さんに：って」

サクラの迷いが、その微妙な間に含まれているように思えた。

ホタルはサクラの口から出てきた名前を、心で反芻する。

ジン。

一瞬、浮かんだのは祖父。

そんな訳がない。

となれば、マアサの息子のジンに違いない。

その相手もまた、あまりに予想外だ。

祖父と同じ名に懐かしい想いを抱くことはあっても、特別な感情が
あろう訳はない。

大体、サクラの食事の好みなど何度か聞かれはしたが、それ以外の

会話などほとんどしたことがないのだ。

悪い人間ではないということ承知しているが、それ以上のことは何も知らない。

もっともホタルにとっては、相手が誰であろうと、それはさして問題ではない。

「結婚なんて：しません」

そう、しない。

できる筈がない。

この身はそれを許されない。

「私、一生サクラ様のお側にお仕えするんです」

過去に封じた苦しみと悲しみが、強固な扉を破って飛び出しそうになるのを押しとどめて、それだけを言葉にする。

サクラは、じつとホタルを見つめていた。

ホタルの真意を探ろうと言うよりは、サクラの言葉によってホタルが傷ついたり困ったりすることがないようにという気遣いの視線だと知っているから。

「そう決めています：サクラ様もそう望んで下さいますよね？」

なるべく明るい口調を心がけてそう告げた。

だが、サクラは、また、迷うようにふと視線を下げる。

薄く紅を引いた唇が揺れて。

「そうしていいって」

ようやくそう言う。

「はい？」

サクラの言葉の意味が分かりかねた。

そうしていい。

許諾の意味のそれは、何をそうして良いと言っているのか。

「結婚してからも、今のままお勤めしていいって」

意を決したように顔を上げて、はっきりとサクラは言った。

「ここにお勤めしたまま、ジンと家庭を築けば良いって：そうマアサは言ってるの」

確かにマアサ自身が結婚し子供を抱えながらこの屋敷に勤めているのだから、その条件は不思議ではないのかもしれない。

しかし、言いながら、サクラの顔は決して明るくはない。

ホタルも、それを聞かされたからと言って、心は一つも晴れはしない。

明らかに、めでたい話をしている空気ではないものが二人の間に広がる。

「…タキ様からも…悪くないお話だと」

サクラはそう続けた。

サクラに他意はないだろう。

タキという信頼のおける人物が、この婚姻に賛成の意を示していると、そう言っているだけだ。

しかし、タキの名前が出たことに、ホタルはひどく動揺した。

先日の会話が、一瞬にして細部まで思い出される。

ホタルに興味を持つシキを、公爵家の跡取りの自覚がないとそう言った。

もちろん、ホタルはシキと…などと大それたことを考えたことは一度としてない。

あの時だって、己の身を弁えているとそう答えたではないか。

だが、タキはホタルを遠ざけたいと考えているのだろうか。

誰かに嫁がせてしまいたいと？

だから、この話を勧めるのだろうか。

シキが興味の対象に手を伸ばす前に。

ホタルがそれを受け入れる前に？

そんなことあり得ないのに。

そんな心配は不要なのに。

多くの大好きな人が、ホタルにはいる。

サクラのことは愛していると言って良い。

だが…一人の男性を愛して、家庭を築き、家族を成すなんてことはホタルにはあり得ない。

そういう意味ならば、ホタルは誰も愛さない。
そういう意味ならば、誰もホタルを愛さない。
誰も。

そう、誰も！

だって：だって、この身は呪われているのだから！

「結婚なんてしません！」

思いがけず、鋭い声が出た。

サクラが驚いたように目を見開く。

「：すいません：」

はっとして、詫びながら。

「でも：しません」

もう一度、そう言う。

だが、違う、と思う。

しない、等と意思を口にするこことさへ憚れる。

「結婚なんて：できません」

そうだ。

これが相応しい。

できない。

できる筈がない。

この身が、誰かに愛されるなど。

この身が、何かを育むなど。

許される筈がない。

「ホタル？」

サクラが眉を寄せる。

止めなければ。

そう思うのに、一度飛び出してしまった言葉は止められない。

胸の奥にしまい込んでいたもの。

サクラによって、いくらも癒されて、奥深くにしまい込んでいられたものが扉を突き破る。

「私、そんな資格ありません！マアサさんやジンさんだって、私の

ことを知れば、そんなこと望む筈がありません！」
そうだ。

誰だって。

ホタルがこの世に生まれおちた理由を知れば。

この身に流れる呪われた血を知れば。

ホタルを忌み嫌い、触れたいなどと、思わないだろう。

あの方だって。

ホタルを好きだという、その意味をあえて考えないようにしてきた。
優しさも慰めも、そこに想いがあるとは思わないようになってきた。

だって、受け入れることのできない想いだ。

身分だけではない。

何よりも、この身にその資格がないのだから！

「サクラ様だってご存知でしょう！？私が…」

「ホタル！」

今度はサクラが激しい声でホタルを止めた。

ホタルははっとした。

泣きそうな顔のサクラが目の前にいる。

ぎゅっと小さな拳がドレスを握った。

唇が震えながら言葉を綴る。

「…お断りするわ…」

小さな声で、だがはっきりと。

そして、強く

「でも、ホタルに資格がないからじゃない」

そう続ける。

「ホタルがジンを好きではないから…だから、だわ」
いいえ。

ジンは嫌いではない。

祖父と同じ名前の、多分とても優しく誠実な男だ。

私が嫁げる筈もない。

そうだ。

理由はそれだけ。

私には許されないことなのだ。

それ以外に、理由などない。

ない筈なのに。

どうして浮かぶのは…あの方なのだろう。

どうして、今この時に、あの人が言う『好き』という言葉がこんなに痛いのだろう。

「ホタル？」

サクラの声が優しさを含む。

そして、ホタルは泣いていることに気がついた。

急いで手の甲で拭きとろうとすると、それをサクラの手に止められる。

「泣かないで…って言わないから」

サクラの指がホタルの涙を掬う。

「これは私のための涙ではないから」

ポタポタと滴となって、涙が床に零れ落ち幾つものシミを作っている。

「これは…ホタルの想いだもの…」

サクラのためではない涙。

誰のためでもない、ホタル自身の想いが溢れて零れる。

「…だから…いくら泣いても良いの」
どうして。

止まらない。止められない。

「…っサクラ様…」

腕を伸ばし抱きつければ、小さく柔らかな体が受け止めてくれる。

「…その涙は…誰を想って流れるの？」

問いかけには答えることはできない。

ただ、前の私はなんて楽だったのか、と。

毎日、サクラ様のことを考えていればよかった。

嬉しいこと、楽しいことがたくさんあった。

辛いことも寂しいことも
だけど。

それでも。

こんなに苦しくはなかった。

痛くはなかった。

サクラ様のことで泣いていればよかった私は、なんて幸せだったのか。

こんな涙はいらない。

こんなのは…どうして。

「ホタル」

サクラは気がついていいのか。

ホタルが何を、誰を思っ泣いているのか。

「…ホタルは変わったもの」

サクラが言う。

「ねえ、気が付いてる？」

ホタルの体を抱きしめながら、サクラは柔らかに問いかける。

「ホタル…身体が丸くなった…」

ホタルは首を振った。

「前は子供みたいだったけど、とても…女性らしくなった」

また、首を振る。

いらない。

そんなの。

女性らしい身体なんて。

女性として愛されたいなんて。

望んでない。

望んで良い訳がない。

「仕種も表情も…変わったもの」

何度も、何度も。

首を振る。

「ホタル…どんなに否定しても、私、気が付いてしまったの」

それでも、認めるわけにはいかない。

認めてしまったら、サクラの側にさえいられない、きっとだから。

何も言わずにただ、涙を零すことしかできない。

「…ごめんね、ホタル」

何故、サクラが詫びるのか。

「気がつくのが遅くてごめんね」

ホタルは壊れたように、首を振り続ける。

「ごめんね…何もしてあげられなくて」

何も？

いいえ、そんなことはない。

こうして側にいてくれる。

こうして一緒に。

そして、気が付いた。

ホタルだって何もできなかった。

サクラの想いを分かっても、何もできなくて。

ただ一緒に思いを共有したいと願っただけだった。

サクラもそうなのか。

「ホタルも…こんなふうに苦しかった？切なかった？」

頷いていいのだろうか。

それはこの想いが、サクラのそれと同じだと認めることになるのか。

「…ホタル…私、ホタルが好き」

ホタルだって。

サクラが好き。

「…ホタルに幸せになって欲しいの」

ホタルもサクラの幸せを願ってる。

同じようにサクラも？

「何がホタルの幸せ？」

分からない。

何も求めてはいけない身。

なのに、この心は求めているのか。
何を？

誰を？

分からない。

分かりたくない。

だけど、多分、もう間に合わない。

それは明らかになりつつある。

どうすることもできないのに。

どうなる筈もないのに。

ただ、確実にはっきりと。

ホタルはただ涙を零す。

何も否定できないのに、首だけを振り続け。

サクラはただホタルを抱きしめていた。

ようやく空に光らしきものが浮かび上がる、夜と朝とが完全に入れ代わる少し前。

それが、ホタルの目覚める時間だ。

もっとも、今日に限って言えば目覚めたという清々しさはまったくない。

昨夜はほとんど眠れなかったから。

泣いて腫れてしまった瞼を濡れたタオルで冷やしながら、巡る思いと想いを押しやる：シーツの中で寝がえりを打つばかりの一夜。

空がうつすらと白くなってきたときは、やっと朝が来たとほっとした。

体を動かせば、意味のない物思いから解放されるだろう。

手始めに、いつもよりよほど乱れてクチャクチャのベッドを降り、ざっとシーツを整えた。

そして、寝間着を脱ぐ。着慣れた紺色の侍女の衣服を手にして、ふとそこにある鏡を見やった。

薄手の下着を身に付けた自分自身が、寝不足を隠せない顔でこちらを見ている。

指先で首筋と鎖骨を辿り、さらにそつと胸元に触れる。

鏡の中、豊満とは程遠いものの、ふつくらと丸みを帯びた膨らみが白い布地を押し上げている。

『ホタルは変わったもの』

サクラの言葉を思い出す。

確かにこの身体は、こんな丸みを帯びていただろうか。

サクラとはまったく違う：もっとギスギスと骨ばった、子供のような体ではなかったか。

いつからだろう。

ホタルとサクラの体つきに大きな違いが顕れたのは。
出会った頃、二人の間に、さほど体格の違いはなかった。

むしろ、幼い頃には、髪や肌の色、目鼻立ちもまったく似ていないのに、皆が口を揃えて『そっくり』というほど二人は似通っていた。多分にそれは、ホタルがサクラに傾倒していたためだろうとは思う。だって、ホタルはそう言われることが、とても嬉しかったから。

だから、体付きが似ていることは勿論だったが、所作や仕草までも無意識に似せていたように思う。

それから、ずっと、同じように成長してきた。

いろいろなところで二人の間に身分という違いがあることを知らされることは多かったけど、時の流れによる成長は平等に訪れていた。だが、いつからか違ってしまった。

あれは…そうだ。

初潮が訪れた頃からだ。

それも、二人はほぼ同時期に始まった。

あれから、変わっていったのだ。

サクラの体が丸みを帯び、柔らかさと艶やかさを増して行くのに、ホタルは何も変わらなかった。

手足が長く、スラッとはしていても、そこには柔らかさやまろやかさはなく、いつまでも少女じみていた。

サクラが体と共に仕草や心も女性として愛される存在へと変化していくのを眺めながら、ホタルはそれを拒否したのだ。

そんな資格はないと。

だから、そんな体は必要ないと。

そんな頑な拒否を、体は受け入れたのか。

サクラとホタルの違いは広がっていった。

やがて誰も二人を似ているとは言わなくなった。

だけど、それで良かったのだ。

小さくため息をついて、服を身に付けて部屋を出た。

朝食までには、まだ時間がある。

少し頭を冷やそう。

昨夜一晩かかって冷やせなかったものが、どうしたら冷やせるかを考えて、ひとまず庭でも歩いてみようと思い立つ。

幸いなことに季節は春。

動き出す虫の足音、草木の茎が伸びようとして軋む音や、花が開こうとして揺らす空気の音を探ってみようか。

そんな始まりの音を聞けば、行き場を見失って立ち尽くすホタルの心も何か見つけられるかもしれない。

決めて、厨房に向かっていた足をとめ、方向を転換する。

中庭に向かうために廊下の角を曲がったところで、俯き加減のホタルは何かに出くわした。

「おはよう：随分と早起きなんだな」

頭上から落ちてくる声に、頭の中が真っ白になる。

この声は、もはや聞き間違える筈もない。

「ホタル!？」

どうして、こんな時に会ってしまうのだろう。

ずっと、まともに顔を合わせることなどないほどにお忙しかったではないか。

何故。

どうして。

こんなに時に。

「ホタル!」

腕が掴まれる。

ぐっと引かれて、トンと体が当たったのはその人の胸だった。

「いきなり逃げるのは：あんまりじゃないか？」

そう言われて、ようやく自分が何をしたのか気がついた。

どうやら、挨拶一つすることもできずに、走りだしてしまっただけ。

「おいで」

腕を捕えられたまま、背中を押されるようにして、近くの扉の内に引っぱり込まれる。

乱暴とまではいかないまでも、強い力に振られるようにして部屋に放られた。

倒れ込まずに済んだのは、壁に背中が当たったからだ。

頭の両脇に腕で囲いを作られて、あっさりと捕らわれの身になる。

ギクリと強張ったまま身動き一つできなくなった。

あまりに近すぎる場所にシキがいる。

「…で？」

こんな近くでサクラ以外の声を聞いたことなどない。

それほど近い声に、顔を上げられず俯いたまましていると、思いがけず強引な指が顎を掴んで上を向かせる。

これもまた冗談では済まされない距離に、シキの顔があった。

「何故いきなり逃げられるんだ？」

凄まれる。

こんな顔もするのだ。

いつもののんびりと構えた表情ではない。タキが時折見せる厳しい表情にも似ていない。

初めて見る姿は…正直、かなり怖い…かもしれない。

「…申し訳あ…」

シキの拳が、ホタルの顔の壁を叩く。

ダンッ！と激しい音がして、ホタルの肩はビクリと揺れた。

「ホタル…俺は結構怒っている」

それは、分かる。

自分でも驚く無作法だ。

「…だけど欲しいのは詫びじゃない。逃げた理由を聞いているんだよ」

そんなこと、ホタルにだって分からない。

体が勝手に動いたのだ。

逃げたことだって、シキに捕まって気が付いたぐらい。

何も考えなどない。

思う間もない。

何もかも…本当に、分からない。

「分かり…ません…」

そう答えて、ずるずると壁伝いにしゃがみ込む。

昨日、散々サクラに抱かれて泣いたのに。

また、涙が零れそうになる。

「…ホタル？」

シキの声が、幾分柔らかくなる。

ホタルの前に膝をついた。

顔を見たくなくて、そして見られたくなくて、握った拳で目元を覆う。

「分かり、ません…どうして？」

逃げた理由なんて知らない。

ただ、そんなの、シキのせいだ。

それ以外は何も分からない。

「…ホタル」

完全にその声から怒りが消える。

「…怖がらせたな？…すまん…」

そんな詫びまで口にするシキに、今度はホタルが腹が立ってくる。

無礼に逃げたホタルが悪いのだ。

それを叱責されるのは当然のことなのだ。

なのに、何故、シキが詫びるのだ。

そんな風に…優しくしないで欲しい。

甘やかしてなんて、くれなくて良い。

そして。

「何故、好きだなんておっしゃるんですか？」

そんなこと、言わないで。

そうしてくれれば普通にできるのに。

少しぐらい優しくされたって、甘やかされたって。

例え：ホタルがシキを好きだったとしても。

その想いは秘めて、身分も己自身も、きちんと弁えてお相手するこ
とができる筈なのに。

なのに、シキが『好き』だなんて言うから。

とてもとてもたくさん声を聞いて生きていた。

声になるならば何でも聞くことのできるこの耳に届くのが、本意ば
かりではないことは百も承知。

その中に潜む真実と嘘を見極めることには長けていると思っていた。
なのに、シキのその言葉は意味さえ分からない。

どれほどの真意があるのかなんて、分かる筈もない。

ただ、その短い言葉一つでこんなに心は揺れ動く。

「言わないで：下さい」

優しくしないで。

甘やかさないで。

好きだなんて言わないで。

「ホタル」

ひどく優しい声。

ダメだ。

そう思うと同時に、ポタリと雫が落ちた。

壊れてしまったように、昨日から涙が流れる。

これが、零れて溢れる想いだなんて認めたくない。

「：思うんだが：君は俺のことが好きだろう？」

耳元で声がする。

軽く言われたその意味を理解するのに、少し時間がかかった。

「君を見ていると、どうやら、そうらしいという気がする」

自ら作っていた闇が更に暖かく深いそれに変化して：抱きしめられ
ていると分かった。

「：っ離して：」

敬語が飛んでしまう。

もがいて、離れようとするのに、シキの力は緩まない。

ぎゅっと更に抱きしめられて、ホタルの周りがシキでいっぱいになる。

ホタルは、泣きわめきたいのを必死に抑えた。

この人、嫌い。

大嫌い。

必死に目を逸らしていたのに。

一生懸命封じ込めようとしたのに。

なんて、あっけなくそれを暴くのか。

「ホタル」

頬を大きな手の平が包む。

顔を無理矢理上げられた。

「悪い……からかってる訳じゃない」

その詫びにホタルは一瞬もがくのをやめた。

拘束する腕が少し緩む。

これも考えるより先に体が動いた。

「……貴方なんて……大嫌い！」

ホタルは、緩んだシキの腕から逃げ出す。

追う腕を避けて、扉に向かおうとすれば、しかし、あっけなく腰を腕に捕えられて引き寄せられる。

「ホタル……一つ言っておくけど」

ぐっと胸元に閉じ込められて。

「こういう時、逃げるのは煽るだけだよ」

耳元に囁かれたそのの意味もまた、ホタルの分からないものだった。そして、いつもののんびりとした口調を取り戻しながら、そこに僅かな怒気と多分な熱気を含んでいることに気がつく余裕は、今のホタルにはまったくなかった。

気が付けば。

ホタルという存在が現れてから増えた『気が付けば』という己の行

動。

対外的な場面での、双子のタキの様子があまりに冷静沈着な印象が大きいせいか、シキ自身はむしろ感情を表に出すタイプだと思われがちだ。

だが、そんなことはない。

むしろ、感情の起伏はタキの方が大きいと思う。

それをタキは抑え込んで冷静であることに長けているだけだ。

本当は、シキの方が感情の起伏には乏しい。多様に見える表情も計算したもの。

笑みも怒りも。

面に出すというよりは、演出しているに過ぎない。

それが、ホテルが絡むと変わってしまう。

ホテルという侍女とうまくやろうというだけならば、多分、それほど難儀なことではない筈だった。

なのに、できなかった。

頭で考えるより。

常に身体が、気持ち動く。

そして。

そして、今、気が付けば腕の中に焦がれた娘がいる。

つい先ほども、魔獣を相手にしていたのは現実か？

少しばかり離れた森に頻繁に出没するというそれを葬った後、安宿で湯場を借り、ざっと身づくろいを済ませて、戻ってきたところにホテルに出くわした。

運が良い、と思ったのは一瞬。

どうしてか、娘は一言と発することなくいきなり走り去ろうとした。最初に湧き上がったのは戸惑い。

つい先ごろまで、シキが手の打ちようがないほどに、侍女としての対応に徹していたのに。

それが、何故、いきなり逃げるのか。

シキの真意に気が付いた？

侍女然とした態度さえかな繰り捨てて、シキとの距離を置くことを選んだ？

そう思ったら、一気に怒りが湧いてきた。

だが、捕まえて問いただしてみれば、そうではないとすぐに知れた。ホタルと違って、こちらは色恋沙汰に疎い日々を送っている身ではない。

だから、気が付いた。

この娘は…認めたのだ。

シキの『好き』という言葉を。

そして、この娘自身もシキを嫌いではない、ということ。気が付いた途端に…手に入れたという欲求が走り出した。

それでなくても、狩りから戻ったばかりで気持ちが高揚している。そうは言っても、ホタルが大人しく抱きしめられていてくれれば、少しばかり濃密なキスを与えて解放してやれたかもしれない。

もう少し、ホタルの気持ちが整うのを待てただろう。

それぐらいは、シキも大人のつもりだ。

だが、娘は逃げようとした。

しかも、トドメに

『大嫌い』

正直、その言葉がこれほどに心臓を抉るとは思っても寄らなかった。ドクン、と一つ鼓動が大きく跳ねたかと思うと、次にバクバクと煽り。

それに連動するように怒りが湧いた。

シキの想いを、素知らぬ風にしてかわし。

今度は己の気持ちから目を逸らして、逃げるのか。

それに振り回されて、かき乱されて。

手に入れぬまま終わるのか。

そんな気は毛頭ない。

そうして気が付けば、シキの腕は逃げる娘の腰を掴んで引き寄せていた。

全く慣れないホタルを捕えることは、難しいことではなかった。

捕えた腰を強い力で引き寄せれば、娘の華奢な体は背中からシキの胸元へと落ちてくる。

すっぽりと包むように抱きしめた。

焦がれた娘だ。

欲しくて、欲しくて。

他の何者もいらないと。

ただ唯一欲しかった娘が手中にある。

ホタルは、訳が分からないのだろう。

もがいて逃げようとするでもなく、ただ、強張ってシキに抱きしめられている。

シキは手のひらを、腰から胸元に寄せた。

華奢なことは承知していた。

だが、思いがけず手のひらに、確かな質感。

もう片方の手のひらで、腰から脚を辿る。

この娘の身体は、こんなに円やかだったのだろうか。

以前、抱きしめた時よりも幾分柔らかさを増したように思える身体を、更に抱き寄せれば、ようやくのようにホタルがもがいた。

シキに、放す気などもちろんない。

ようやく触れた娘だ。

「…ホタル…逃げるな」

命じて。

言い直す。

これは命令じゃない。

侍女に無体な欲求をぶつけたい訳ではない。
だから

「…逃げないでくれ…」

願い。

「ホタル」

名を呼びながら、首筋に唇を落とす。

小さく音を立てて口付けると、細い肩がビクンと揺れる。

胸に大人しく置いていた手を動かし、衣服のボタンを外す。

そして、もう片方の手は、長いスカートをそっとたくしあげ、直接膝から腿を撫でた。

愛しい存在が腕の中にいることに、頭は思考を停止させているのに。行為を知り尽くした身体は勝手に動く。

「…っや…」

ようやくホタルから出た声は弱々しい拒否。

強張っていた身体は、細かに震え始める。

止めてやるべきかもしれない。

過ぎる冷静な考え。

だが、身体が止まらない。

薄い布地越し胸のふくらみを手のひらで包む。滑らかな脚に、直接触れる指先。

煽られる。

ホタルがカタカタと震えてはいても…触れているシキに、嫌悪を感じていないことはどうしてか伝わる。

「いい子にしていれば…俺は優しいよ？」

無意識の掠れて甘い声に苦笑いが浮かぶ。

ボタンを外し終えて緩めた服が、肩を滑り落ち肌を露にする。

真っ白で艶やかなそこに口付け。

唇を滑らせて、項へと。

白い肌着を脱がせながら、とうとう何も隔てるものない肌を手に入れる。

ホタルが、ビクンと大きく跳ねた。

「…ホタル」

宥めるように囁いて。

脚を撫でていた手のひらを、内へと上へと徐々に動かす。

そして、そっと、だが、確かな意図を持って、そこに触れる。

「…っいやあ」

ビクンと体が揺れ、今までにない強い拒否がホタルの口をつく。
だが、シキは止められなかった。

何故なら…指に僅かに触れたホタルが、シキの望むように反応して
いたから。

だから、ホタルの戸惑いを抑え込む。

心が身体についてきてくれれば良いと願いながら。

「ホタル…大丈夫…何も怖くない」

遠耳の鼓膜を撫でるように甘く。

そして、そつと指先を沈める。

「…っあ…」

ホタルの口からささやかな声が漏れた。

シキは束縛を緩めた。

ズルズルと俯せにうずくまるホタルは、既に逃げられる状態ではな
い。

その力のない身体を仰向けにし、上に重なる。

シキを遠ざけようとするように、突っ張る腕は何の妨げにもならな
かった。

細い両手首は、シキの片手でまとめて拘束してしまえるほど。

「…ホタル…」

名を呼びながら、どこもかしこも華奢な首筋、肩、鎖骨に口づけ、
手のひらで肌を探る。

だが。

「ホタル？」

ふとシキが捕えている両手首から力が抜ける。

解放すれば、それは投げ出されるように力無く床へと落ちた。

「…お好きになさればいい…貴方はそれが許されるのでしょうか？…」

覚悟を決めたかのように、顔を背け瞳を伏せる。

侍女然とした対応は傷つける、と言ったことを覚えているのか。

一気に頭の中が醒めていく。

「…そうだな…許されるだろうな」

眩いて、ホタルの顔を自分へと向けた。

ホタルは、もう泣いてはいなかった。

シキに無理やり煽られて、幾らか熱を含んでいるように見える瞳は、しかし、諦めを浮かべて力ない。

「でも、それじゃあ意味がないんだよ…ホタル」

シキは体を起こした。

そして、ホタルの腕を掴んで起こす。

「悪かった」

はだけた衣服を合わせてやり、晒された脚をスカートで覆った。

ホタルは人形のように、力なくそこに座っている。

乱した衣服から覗く肌の白さが、一瞬醒めた筈のシキを煽るようだ。ホタルから僅かに視線を逸らして

「…だが…君も悪い」

つい零れる本音。

ホタルがシキのタガを外したのだ。

「…あんな風に逃げられては…追わずにはいられない…追って捕まえてしまえば…手にいれなくなる…しかも」

シキはちらりとホタルを見やった。

ホタルは、ぼんやりとシキを見ている。

「マアサの息子との結婚話まで出てるらしいじゃないか？」

言えば、なんとも言えない…困ったような辛いような感情を面に走らせる。

そこに縁談を喜ぶ感情がないことに心底ほつとした。

「マアサが本気って言うだけでもマズイのに…タキが絡んでるんじゃない、うかうかとしてられない」

シキは、我慢しきれずにホタルに手を伸ばし、そつと指先を頬に触れた。

「俺が焦って君を俺のものにしようとしても仕方がないと思わないか？」

ホタルが僅か身を引いて指から逃げるのを、今度は追わずに逃がし

てやる。

そして、ホタルの温もりが残る指先に口付ける。

「好きなのは俺の方だ」

ホタルは俯いた。

「信じられない？」

娘は、頷きはしなかった。

だが、否定もしない。

「誰にでも言うと思ってる？」

これにも応えはない。

「…自業自得か」

呟いて。

それでも、言わずにはいられない。

「ホタル、俺は君が好きだよ」

もう一度指を伸ばす。

顎を捕えて、そっと、だが拒否を許さない力で、顔を上げさせた。

「…いつでも…欲しいと思ってる」

ホタルが泣きそうに顔を歪めた。

抱き寄せたかったが、まだ燻る体は今度こそ止まらないかもしれな
いから、できない。

「…サクラ様のところに戻りたい…です」

ようやくホタルから出た言葉はそれだった。

戻したくない。

あの女主は、マアサやタキの比ではないほどに強敵だ。

だが、引きとめる術はない。

「…どうぞ」

言うとうらりと立ち上がる。

「一度部屋に帰って…顔を洗って、服と髪を整えて」

自分で乱しておいてなんだが。

「…そのままじゃ…奥方が心配する」

ホタルは振り返らないまま、だが、素直に小さく頷いた。

ホタルは、固い筈の廊下をフワフワと浮遊感の中、おぼつかない足取りで歩いた。

タキの言葉が思い出される。

『シキは貴女に興味があるようだ』
興味。

そう興味だ。

あの方には、たくさんの情人がいる。

『貴女はあまりに違うので』
だから、面白がっているだけだ。

『公爵家跡取りの自覚がない』
貴族の方のお遊びだ。

あの方にとっては、寂しさを紛らわす遊び。

小さな子供が、新しい玩具を手に入れたがるように。

ホタルに手を伸ばすのだ。

気にしないでおけばいい。

なのに。

今度はシキの言葉が浮かぶ。

『君が好きだよ』

どうしよう。

『いつでも欲しいと思っている』

どうして、あの声に真実を聞き取ってしまったのだろう。

これが戯れではないと、思えてしまったのだろう。

どうすることもできないのに。

ただの興味だと。

ただの戯れだと。

そう思えたら良かったのに。

苦しい。

胸が痛い。

逃げたい。

どこへ？

あの方のいないところへ？

でも、ここにはサクラ様がいる。

サクラ様のいない毎日なんて、考えられない。

ここ以外に行くところなんて。

あるはずがない。

大きなため息が一つ。

耳に届いたそれに、ホタルは周りを見回した。

安易に屋敷から出られない、でも散歩が大好きな妃のためにと、庭師が精魂込めて手を入れているラジル邸の庭は、ここ数日続いた好天気のおかげもあって、この数年来で一番の美しさだという。

納得のその華やかさの中に、まったく似つかわしくない大きい大きなため息が、また聞こえてくる。

この屋敷の中に、自分以上にため息をつきたい人間がいるなんて、もう一度続けざまに聞こえてきたそれに、ホタルはため息の方向を見つけた。

「どうしたの？」

ホタルの様子に気が付いたサクラが尋ねてくる。

その足元には、純白の魔獣がピタリと寄り添っていた。

今、サクラの内に『破魔の剣』はないから。

だから、この魔獣はサクラの傍らにすることができ。

少し前から屋敷を空けている主に、サクラの中で眠っていた剣が呼び寄せられたのは昨夜遅くのことだ。

早ければ数時間で戻る剣は、昨夜のうちに戻ることはなく、今朝になって現れたタオという名の魔獣が、しばらくは剣が……そして、サクラの想い人が戻ることはないのだと告げていた。

「ちょっと……こちらに良いですか？」

迷わず、見つけた方向にすたすたと歩き出す。

裏庭は、華やかな花ではなく、様々な背丈の樹木が並んでいる。

その中をホタルは進み、サクラは何も言わずに後について歩き、当たり前のようにタオが続く。

そして、庭の隅で背丈の低い木々に隠れるようにうずくまる姿を発見。

「マツリ？」

「わあ！」

そっと声をかけると、ため息の発信者は、滑稽なほど肩を跳ねさせて振り返った。

アーモンド型の瞳を真丸に見開いて、現れた女主と先輩侍女と、おまけの魔獣を順々に見やる。

「何してるの？」

サクラが首を傾げながら近付くと、マツリは焦ったように何かを背後に隠した。

何かある、と分かりすぎる態度だ。

サクラはホタルの脇を通り過ぎて、マツリの前にストンとしやがみ込む。

相変わらず身分を顧みない無頓着な様子に、多少は慣れたであろうマツリがそれでも口をパクパクさせる。

「：話したくないなら良いのよ？」
にっこり。

いえ、それでは話せと言っているようなもんですよ。

無邪気な脅迫にホタルは苦笑いを零して、タオがサクラの横に座ったのを見てから、反対側の隣に屈み込んだ。

「悩み事？」

二人の年長者を前に、おずおずとマツリは隠していた手を前に出した。

「こんなの：どうすればいいんですか？」

ほっそりとした手にあるのは封書だった。

淡いピンク地に、白い花の透かしが入っている、いかにも……な見た目に、それが何かは、なんとなく知れる。

サクラもホタルも、受け取ることなく、ただ差し出されたそれを眺めた。

「読んだの？」

サクラの尋ねに、「はい」と素直な返事。

遠くの声聞くことはできても、封書の中身を知ることが、もちろんホテルにだってできない。

しかし、マツリの様子からして、その中身は13歳の少女をときめかせるものではないようだ。

「この方に、興味はないのね？」

マツリはぶんぶん頭を縦に振る。

「全然っ。知らない方です」

力強い、はっきりとした答えが返ってくる。

サクラは何かを思い出すように、視線を上に向けた。

「なら、放っておけばいいと思うけど……ねえ？」

多分、母親の教えをなぞっていたのだろう。

作法に厳しいオードル夫人は何と言っていただろうか。

ホテルも記憶を探る。

『興味のない殿方からの恋文は、身分に関係なく放っておいてよろしい』

そうだ、確かにそう言っていた。

『きちんとしたお付き合いの申し込みならば、家を通すのが筋です。でなければ、そのような恋文は、殿方の戯れが大半とお考えなさい』

3人の娘の母にとって、娘達の将来は何よりも重大事だ。

それに、オードルのお屋敷には若い侍女が何人もいて、彼女はそ
の者達のこととても親身に気にかけていた。

『ホテル、貴女も大切な預かりものなのですから』

そんな風に。

このため、その手のことには殊更厳格だった。

『興味のある方や、文面に真摯さを感じて心が動いたなら、お返事を書くのも良いでしょう。ですが、忘れてはいけませんよ。こういったことで、傷つくのは常に女性の方なのです。ですから……恋の選択権は、身分ではなく女性にあるのですよ』

と、付け加えた女性は、だから、とホテルに一つ命じたのだ。

ついでに思い出したことがあったが、それはひとまず頭の隅に追

いやる。

「はい。放っておけば良いと思います」

ホタルはそうとだけ答えた。

実際に、何通か受け取ったことのあるその類は、ホタルはすべて迷わず抹消してきた。

「……持っていたくないです」

見た目は大人びていても、そこはまだまだ幼さの残る少女だ。その気持ちにも同意できた。

「破って棄てる？」

ホタルは提案した。

「いっそ、燃やす、とか」

サクラは更に上に行く意見を述べた。

マツリとしては、サクラの意見に乗りたいたいようだ。

「良いでしょうか？」

マツリがサクラに尋ねる。

「良い？」

しかし、サクラはホタルに振った。

「どうして、私に聞くんですか？」

こちららも、その手のことに慣れている訳ではないのだから。

しかしながら、サクラはさらっと。

「もらったことないもの」

答えた。

「ええ!？」

驚きの声を上げたのはマツリだ。

「こういうのって、こういうのって」

持っているのも嫌だとばかりに、指先でつまんでそれを見せる。

「そんなに珍しいことなんですか!？」

「私がもらわなかっただけ。姉や妹にはたくさん来てたわ」

ホタルは苦笑いを浮かべた。

サクラにまったく恋文の一通も届いたことがないなんて。

これは、解いておきたい誤解だ。

「違います。サクラ様宛のものだって何通もありましたよ。でも……私とオードルの奥様で処分してました」

先ほど、夫人の言葉と共に、思い出したことを告白する。

「そうなんですか!？」

これも、サクラ本人ではなくマツリ。

反射的な問いかけは、少なくとも身分ある方の前では慎むように。後でそう注意しなければ、と考えながら。

「そうです」

隣で、声には出さずとも視線で尋ねてくるサクラに答えた。

サクラは、ぐっと眉を寄せる。

また、考えるように上を見て。

「なぜ？」

結局、理由が思い当たらなかったようで、そう尋ねてきた。

サクラの知らない理由を、ホタルは知っている。

もう時効だろうと、当時を思い出しながら正直に話す。

「サクラ様の嫁ぎ先は……奥様の中では既に決まっておりましたから。だから、余計なものは見せないようにって指示されまして、徹底的に排除しました」

サクラの眉間の皺が解けて、ぱちくりと瞬かせる。

「知らなかったわ」

オードル夫人としては、サクラの妹であるアオイのお披露目がひと段落した時点で、ゆっくりと結婚話を進めようと考えていたようだ。

だが、当のサクラがアオイのお披露目で、輿入れ先としては文句の付けようのない帝国の第二皇子に攫われるようにして娶られてしまったのだから、その話はそのまま夫人の胸にと納められ、目の目を見ることはなかった。

ふと、サクラは興味を持ったように、ホタルに顔を寄せた。

「私の嫁ぎ先って？」

サクラの興味はもつともだろう。

だが、相手については名を言わぬ方が良く、ホタルは判断する。「そこまでは知りません。何にしても、サクラ様に結婚話があったなんてことは、他言無用です。マツリも黙っててね」

相手についても、実は夫人から教えてもらっていた。

夫人はとてもホタルを信頼してしてくれたから。

その信頼を裏切らないためにも、ホタルはこの先一生、相手の名を言うことはないだろう。

今更とはいえ、こんなことが誰かれの耳に入るとは望ましいことではない筈だ。

特に。

「特に、カイ様には絶対、ぜーったい内緒です」
いや、別に。

当時のサクラの夫候補が出現したからって、カイが何かするとはもちろん思っていない。

だが、きっと気分の良い話でないだろうし。

それが原因で不機嫌になられると、何かと不都合が多そうだ。

「分かりました」

ホタルの考えはマツリに通じたようで、素直に頷いて了承する。

サクラの方は、何か納得いかないような顔をしていたが。

「……マツリ、そこにいるのか？」

聞こえた声に、話はそこで終わる。

ガサガサと音がして現れた大きなクマ……ではなく、屋敷の料理人。

ホタルの心臓が、ほんの少し規則正しい鼓動を乱した。

「と、失礼しました」

サクラの姿を目にとめて、ジンは頭を下げた。

サクラはにこりと笑いかけて、挨拶を返しながら、

「あ、マツリ」

思いついたように、マツリの手元を指差す。

「それ、厨房で焼いてもらったら？」

マツリは現れた大男から、視線を手に持っているものに移動させる。

忘れていた不気味なものを思い出したと言わんばかりに、手紙の縁を摘まんで

「これ、焼いて頂きますか？」

ジンに見せた。

ジンは、料理を作るときの繊細さとは打って変わった、実に無造作な動作でそれをマツリから取り上げる。

「何だ？」

サクラとホタルが手に取ることさえを躊躇ったのに、彼はあっさり、表と裏を確認した。

「あー！ 見ちゃだめです」

マツリが焦ってそれを取り返す。

ジンはマツリを見下ろし、さしたる反応を含んでもいない声で

「恋文だな……燃やすのか？」

マツリは取り返したものの、やはり触りたくないという風に縁っこを持っている。

本当にどうやらその手紙が嫌のようだ。

その潔癖さがホタルは少々心配になった。

大きなお屋敷に勤めていれば、こんなこと多々ある。

手紙だけならまだしも、直接遊びに誘う者だって少なくない。

13歳はまだ子供と見る者が大半であろうが、しかし、マツリは見た目は大人びているし、何よりきれいで可愛い。

今後、数多くの誘いが来ることは安易に予想ができる。

そのたびに、こんな過剰な反応をしていたら疲れてしまうだろう。サクラも同じように心配しているだろうかと思いを隣を見た。

だが、サクラは意外にも微笑んでマツリを見ている。

「ここで俺に渡すのか？ 後で厨房に持ってくるか？」

ジンの声がして視線をそちらに戻せば、マツリが彼に手紙を渡し

ていた。

ああ、信頼してるんだな。

そう思った。

封の開いた手紙をあっさりと手渡すぐらいに。

マツリはジンを信用しているのだ。

先ほどの心配が少し薄らいで、サクラの笑みの理由も悟る。
信頼できる者が近くにいるなら大丈夫だろう。

「でな、マツリ。お袋が結構な剣幕で探してたぞ」

手紙を懐にしまいながら、ジンは思い出したように告げた。

「ええ!？」

マツリはぎょつとしたようにジンを凝視する。

「どちらで!？」

「客間」

ジンが答えるやいなや、走り出さんとする少女を、サクラが止める。

「マツリ。一緒に戻りましょ」

そう言って立ち上がったサクラに、マツリがホッとしたように笑顔を見せる。

なるほど、サクラが一緒なら、マアサのお小言も短くて済むだろう。

ホタルもサクラにあわせて立ち上がった。

「ホタルは、厨房に寄ってお茶の用意をしてくれる？」

当たり前に一緒に行くつもりだったホタルの足を、サクラが留めた。

驚いて見やると、サクラは微笑んで

「ね？」

一瞬戸惑ったものの、ホタルは頷いた。

「一応……走っていった方が良いかしらね」

サクラは呟くと、マツリとタオを連れて木々の合間に姿を消した。
それを見送って、ではと厨房に歩き出す。

ジンは厨房の主なのだから、当然ホタルと同じ方向に歩き出す。微妙な空気。

結婚の話はサクラからマアサに断ってもらった。

マアサからは、気にしないようにと声をかけてもらったが、ジンのその後、直接話しをする機会はなかった。

そもそものが、そうやって親しく話す間柄ではないのだ。

だが、気にはなっていた。

結婚を断って、ジンは不快に思っただろうか、と。

「ホタル」

隣を歩くジンに呼ばれて、ホタルは歩みを止めないままに顔を上げてジンを見た。

端正とは言い難いが、実直そうな細い瞳がホタルを見下ろしている。

「縁談の件な」

思い出していたそれを直接本人の口から聞かされて、ホタルは反射的に詫びの言葉を口にしかけた。

「っあの」

しかし、ジンの野太い、やんわりとした声がそれを遮る。

「気にしないで欲しい」

ジンは頭をポリポリとかきながら

「お袋が突っ走って話がそちらに行ってしまったがね。正直、私としても、君を妻にと言われてもね」

ジンが足を止める。

ホタルも、それに合わせて立ち止った。

「あー、決して君に不満があるとか、そういうことじゃないんだが」あまり会話が得意ではないと分かる朴訥とした話し方。

だが、その真意は十分にホタルの耳に届く。

この人は優しい。

この人はまっすぐだ。

この人と結婚すれば、きっと大事にしてくれて。

間違いなく幸せになれるだろう。
でも。

「私……結婚なんて考えられなくて
ホタルは結婚はしない。できない。」

この人は、いづれ誰かと結婚し、家庭を築くだろう。
でも、その相手はホタルではあり得ない。

「君の方から断ってくれてほっとしてる」
ジンは、少し微笑んだ。

「私じゃ、あの母親に太刀打ちできないからな」
ホタルは笑った。

確かに。

マアサに押されて結婚させられてしまうジンを想像することはあ
まりに簡単だ。

「でな。今まで通りにしてくれるとありがたい」

それはホタルの方こそお願いしたことだった。

「はい」

頷いて、ジンが歩き出すのについていく。

今まで通り。

サクラ様がこのお料理をすごくお気に召してました、なんてこと
を気兼ねなく伝えるような。

そんな今まで通り。

それは、少しも難しいことではないだろう。

毎日のホタルのお勤めは、カイの部屋の扉をノックすることから始まる。

トントンと2回、木製の重厚な扉を叩く。

部屋の主も、その妻も寝起きは悪くないから、大抵は中からの返事を待って……そして、少々の覚悟を持って、扉を開けて中に入る、というのが日々日常。

だが、ここしばらくは、この場面だけで言うならば、随分とお気軽な気分で扉を開けることができていた。

この部屋の主は、現在不在。

故に。

「おはようございます」

声をかける相手はサクラ一人。

「おはよう」

ベッドの上で体を起こすサクラは、多少の寝乱れた様子はあっても、きちんと寝着を身につけている。

この部屋の主がベッドを共にしていれば、そうではない日が少なからずあって。

何があったのか、なんてこと、経験はなくても、知識で想像だけは安易にできてしまう。

お二人はご夫婦なのだから、それは当たり前で。

私は侍女なのだから、そんな場面のお世話も当たり前。

思っている、ついついぎくしゃくしてしまう。

ぎくしゃくするホタルを見て、サクラもまた恥ずかしさにぎこちなくなってしまう、ということが随分と続き、ようやくのように最近は何もない振りを、なんとかかんとかすることができるようになってきた。

でも、今日もここにはサクラが一人。

寂そうなサクラを思えば、早くここでお二人で過ごせれば良い、
と思える余裕さえある。

「タオも、おはよう」

サクラの慰めとなるタオは、ベッドの脇に寝そべっていた。

ホタルが声をかけると、返事は尻尾がしてくれる。

「今日も、良い天気になりそうね」

カーテンを開けると、その光を感じてサクラが呟く。

「はい」

こうしていると。

サクラのお世話に、精を出していると。

時折、ふと零れるため息さえ気が付かないふりをすれば、何もな
かったのではないかと思えてくる。

シキに好きだと言われたこと。

抱きしめられて、触れられて。

そんなの全部全部、夢だったのではないかと。

思えてくる、のか。

思いたい、のか。

「ドレスはどれにしますか？　もう、随分暖かいですから、薄手の
ものにしましょうか」

あの日……シキに触れられた日、多分ひどい顔をしていただろう
ホタルにサクラは何も言わなかった。

ホタルも、何もサクラに話さなかった。話せなかった。

あれから、すぐにシキはカイと共に屋敷から姿を消して、以来、
顔を合わすことはない。

いつも通りの日々が過ぎていく。

最初は上っ面だけだった日常も、徐々にホタルの心を鎮めていっ
て。

もしかしたら。

シキに会っても、今までと同じように……ただの侍女のとしてご
挨拶ができるのではないか。

ここ数日に至っては、そんな風に思えるまでに落ち着きを取り戻しつつあった。

「……あ……」

衣裳部屋で何着かのドレスを選んでいたホタルの耳に、サクラの呟きが耳に入ってくる。

「サクラ様？」

部屋に戻ると、タオがバルコニーに立っていた。

サクラを見れば、その長い髪がフワフワと揺れている。

兆し。

タオがバルコニーから、立ち去って行くのが目に入る。

戻ってくる、のだ。

そう思った途端に、サクラの髪がふわっと舞い上がった。

そして、一気に吹き荒れる。

サクラの周りのみ、訪れる突風。

想い人の帰還を先触れする小さな嵐。

バタバタと寝着がはためき、髪が渦を巻きながら上へ横へと広が
り乱れる。

それは一瞬。

ピタリと風がやむ。

『破魔の剣』が、一足先にサクラの元へと戻ってきたのだ。

「カイ様……お戻りになられますね」

サクラは頷いた。

そして、バルコニーへと目を向ける。

既に、そこに白い魔獣はいない。

いたとしても、剣が戻ったサクラは、タオには近付けない。

サクラの表情にカイが戻る喜びと、タオが去ってしまった寂しさが浮かぶ。

「着替える前に戻ってきて良かったですね」

クチャクチャになったサクラの髪を手先で軽く整えながら、努めて明るく声をかければ。

「本当。もう少し、おとなしく戻って来てくれないしら」
サクラも微笑みながら、そう答えた。
戻ってくる。

多分、その側近も共に。

今まで通りの態度が取れる気がしていたのに。

その筈なのに。

もう既に、それが無理だろうと、ホタルは感じていた。

多分、無意識にも避けていたのだと思う。

その人がいるであろう場所。

その人がいるかもしれない場所。

それが解決にはならないとしても、とにかく可能な限り避けて、
顔を合わせないように。

そうしていたのだろうと気が付いたのは、その人に出会ってしまった時だ。

「ホタル」

背後から名を呼ばれ、そのまま走り出してしまいたい衝動をなんとか抑えて、足を止める。

振り返り、だが、一瞬たりとその顔を見ることもできずに頭を下げた。

普通に。

礼をして、頭を上げて。

御用向きを尋ねなければ。

そう思うのに。

下げた頭は上げられなくて。

用向きを尋ねることなど到底できる筈もなく、身勝手にも早く立ち去って欲しいと願うばかりだ。

「ホタル、そろそろ、顔、上げないか？」

以前と何一つ変わらない声。

その声に微かなりにも乱れた感情を、聞き取ることにはできない。
あの時のような。

知らない男の声ではない。

「ホタル」

もう一度呼ばれて、ホタルは仕方なく頭を上げた。

だが、シキの顔を見ることはできず、その足元あたりに視線は落ちる。

ジンの時には、できたのに。

気にしないようにと言われて。

それに頷いて。

あれから、以前と何も変わらないように接することができるのに。

「ホタル」

視界の中にあるシキの足が、一歩ホタルに近付く。

「……何かご用がおありでしょうか」

一歩、後ずさりながら。

なんとか侍女としての応対に徹しようと、呼ばれた声に応じる。

しかし、何の動揺も感じられないシキの声に対して、ホタルの声

は震えて上ずっていた。

「そんなに警戒しなくても、何もしないよ」

言われてしまって、顔が熱くなる。

そんなこと言われても。

どうにもできない。

あんなことがあって、どうして、シキはそんな風に平然としていられるのか。

これが経験値の差だともいうならば、それはどうしてか腹立たしい。

「ホタル、そんなに怯えないでくれないか？ 本当に、何もしないから」

真剣な声に促されて、ホタルはようやく顔を上げて、シキを見た。
端正な顔が、本当に以前とまったく変わらぬ優しげな笑みを浮か

べて、ホタルを見ていた。

何もなかったことに。

今後何もない。

シキがこんな風に何もなかったという態度を取ってくれるならば、ホタルの方は自然な態度を取るのにもう少し時間がかかるかもしれないけれど。

いずれは、元に戻るかもしれない。

そう考え至って、ホタルが体の力を僅かに抜いた、その時。

「しばらく、はね」

聞き逃しそうなほどに、サラリと付け加えられた言葉。

「……し、ばらく？」

心で呟いたつもりが、つい声に出ていた。

シキは、まるで意を得たと言わんばかりににっこりと。

「そう。しばらく、だ」

繰り返した。

「俺が君を好きで……君が欲しいと思ってることに変わりはないよ」
迷いなく。

僅かに揺れることもなく。

きっぱりと伝えられるそれに返す言葉。

拒否を口にしようとして、でも、それができなくて。

「御用がないようなら失礼してもよろしいですか」

必死に声にした言葉は、棒読みのようなそれだった。

「奥方のところにはカイ様がいるよ？」

行くところがあるのか、と言いたいのだろうか。

でも、どんなに居場所がなくなっても、シキの側にだけはいられない。

ホタルは一礼して、シキの横を通り過ぎようとした。

しかし、シキにそれを止められる。

以前ならば、腕を掴む程度。

なのに今は。

腰を抱かれ、近くの扉の内に引き込まれた。

「シキ様！」

扉が閉まる音が耳に届くより先に、胸元に抱き寄せられそうになるのを、腕を突っ張って拒む。

だが、こんな状況にも慣れているかのように、シキは拒む手をそつなくかわし、あっけなく目的を成し遂げた。

「何もしないって！」

シキの腕の中に閉じ込められて、力では叶う筈もなく。

無礼を承知で、非難を唇に乗せた。

シキは小さく笑いを零す。

そして。

「俺の中では、こんなのは何かに入らない」

悪びれもせずに、そう言っただけだ。

「……っな……最低です！」

緩まない腕にもがきながら。

思わず詰る。

もう身分がどうか言っている場合ではない。

「この状態でそういうこと言うかな、この子は」

どんな状態かを知らしめる手が、細い腰を強く抱き寄せる。

密着が増して、周りがシキで囲まれる。

「……っいや」

もう何がなんだか。

また、泣きたくなる。

訳が分からなくて、だけど、ただ、おとなしく抱かれることなどできる筈もなく、必死に離れようともがいた。

そんなホタルの耳元で、シキが笑いを消した声で囁く。

「大人しくしてた方がいいよ」

そんなの。

「なるべく俺を刺激しない方がいい」

そんな勝手なこと。

聞けない。

聞ける筈がないのに。

「俺にこれ以上動かないで欲しいなら……おとなしくしておいで」
そう言っ、シキはぎゅっとホタルを抱いた。

これ以上？

それは……この間のように？

かあっと体が熱くなって、固まる。

それは、ずるい。

そんな風に言われたら。

おとなしくするしかない。

「ホタル」

信じられないくらい間近で、シキの声が少し掠れて響く。

それに、ぶるっと体が震える。

逃げたい。

だけど、シキが動くなと言うから。

動いたら……と言うから。

おとなしくしているしかないではないか。

なんて、ずるいんだろう。

ホタルから逃げ場を奪って。

その腕に閉じ込めて。

「君が欲しいよ」

そんな言葉が聞こえてきても、ホタルは身動き一つできない。

シキも動かない。

シキの呼吸と鼓動が耳に響く。

ただただ逃げたいだけだった筈なのに。

気が付くと、その鼓動に耳を澄ましていた。

これは、この人が無事に戻ったことの証だ。

あまりに、緊迫感を感じさせないから忘れてしまいそうになる。

この人は、つい先ごろまでカイと共に出征していたのだ。

相手がどんなものかは知らない。

でも、カイは剣を呼んだ。

そういう相手。

そこに、多分、きっとこの人もいた。

熱く火照るような体の、背筋だけがゾクリ、と凍った。

思わず、全身を覆う温もりに縋りそうになって。

何もかも受け入れてしまいたくなつて。

なんとか、必死にそれを抑えた。

いったいどれだけの時間が過ぎたのだろう。

ふと、シキの腕の力が緩んだ気がした。

そして。

「ホタル……どこ？」

何より大事な声が耳に届く。

ホタルははっとして、身を引いた。

「サクラ様」

主の名を呟き、僅かに力の緩んだ腕の中から逃れようと身を振った。

思いがけず、あっさりとホタルは解放され、ホタルは思わずシキを見やる。

シキはほんの少し驚いたような表情で。

そして、どこか嬉しげにホタルを見つめていた。

「失礼します」

シキのその表情が何なのか分からないまま、頭を下げた扉に向かう。

「好きだよ、ホタル」

背中に声がかかった。

振り向かず。

「私は……好きじゃありません！」

自分に言い聞かせるように。

「でも、俺は、君が好きだよ」
もう一度繰り返されるそれを振り払うように、ホタルは、部屋を飛び出した。

シキの声が追いかけてくる気がして、不作法を承知でホタルは走った。

そんなに遠い筈のないサクラの部屋を、いつまでも辿りつけない遙か彼方に感じながら。

ようやくのように到着した時には、何のせいか心臓がバクバクと跳ねていた。

扉の前で、何度か深呼吸をしてから、ノックする。

「失礼します」

中には、カイがいた。

寛いだ様子でソファに座っている。

その横に、サクラがいる。

カイの傍らにいるとは思えない不安げな表情で。

「ホタル！」

ほっとした様子で名を呼ぶと、立ち上がってホタルへと駆け寄ってきた。

主の指先で遊ばれていた毛先が、スルリとそこから逃げ出すのを視界に納めながら、慌てたサクラの様子にホタルの方が驚いた。

「何度呼んでも来ないんだもの！」

華奢な指先が伸びてきて、ホタルのこれも細い指先を捕える。

「心配しちゃった」

きゅっと手を握られた。

「……申し訳ありません」

詫びを口にしながら、ホタルは血の気が引くのを実感していた。

サクラは何度もホタルを呼んだのだ。

聞き逃した？

サクラ様の声を？

こんな風に、不安にさせるほど？

そんなに幾度も名を呼ばれて、気がつかなかったのか。

その間、ホタルの耳には何が聞こえていたのか。

「ホタル？」

呼ばれて、ホタルはサクラを見つめた。

サクラも、やはりホタルを見つめていて。

「……あのね、髪を結わないといけないんですって」

結局、何かを咎めることなく、問うこともなく。

いつものように柔らかな笑みを取り戻して、ホタルを呼んだ理由だけを口にした。

庭先の異変に、不幸にも最初に遭遇したのはマツリだった。

真夜中にマツリが庭を歩いていたのは、眠れなかったためということだったが、いくら庭とはいっても危ないと、後でマアサと、何故かジンにまで、こっぴどく叱られていた。

もう2度と夜中に庭は歩きません、と涙目で誓うマツリが怖かったのは、遭遇した災難なのか、並んで説教する母と息子か。

いったいどちらなのかと、サクラが笑いながら首を傾げていた、というそれは後日の余談になるのだが、とにかくそれに一番最初に出くわしたのはマツリだった。

その時、ホタルは既にベッドに入り、未だ訪れぬ眠りを待ち焦がれている状態だった。

意識して閉じていた訳でも、広げていた訳でもない耳に、女性の息を飲むような細かい悲鳴が届いたのが、ホタルが遭遇した最初の異変。

ホタルはベッドの中で耳を澄ました。

聞こえてきたのは、小さな怯えた声。

意志を持って拾った声がマツリのものだと、その時に気が付いて飛び起きた。

どこから聞こえるのか。

マツリに何が始まったのか。

広げて探る音の世界に、マツリの乱れた呼吸と、それから……苦しげな呻き、だろうか？

それは、多分、男性のもの。

ホタルはベッドを降りて、ショールを羽織った。

声は、裏庭から聞こえていた。

先日、マツリが恋文に戸惑い、うずくまっていたあたりのもう少

し奥。

「……貴方は」

声の元に辿り着いたホタルの目に、最初の飛び込んできたのは一人の男だった。

見覚えがある男だ。

左の面を走る大きな傷跡。浅黒い肌と銀の髪。

見覚えがある、で済ますには、あまりに印象深い姿の男は、あのアルクリシュの森で見た狩人に違いない。

「あんた、ここの者だったのか」

男の方もホタルを覚えていたらしい。

だが、今は改めての自己紹介をしている場合ではないことを、お互いに十分理解していた。

隻眼の狩人は、もう一人男を連れていた。

いや、正確に言うならば、彼は男を担いでいた。

苦しげな呻き声を上げているのは、こちらの男だ。

狩人の肩の向こうに上半身が折れていて、ホタルから顔は見えない。

だが、見える下半身は、血に塗れ、所々に深い傷が口を開いていた。

手当。

医者。

マツリ。

そう思うのに、足が動かない。

硬直して少しも動けないと思うのに、その一方で意志とはかけ離れたところでカクカクと震える。

なんて不甲斐ないのだろう。

こんな状況、何度も聞いた筈なのに。

なぜに、どんなに酷い言葉や声を聞き続けても、視界に納めた途端にそれは知らない世界になってしまうのか。

心は、残忍な場面に慣れずに、痛むのか。

狩人はホタルを責める風もなく、黙ってそこに立っている。

何かを待っているようだ。

彼が何を待っているのかを、ほどなく聞こえてきた音でホタルは知った。

背後にザワザワと、茂みの揺れる音が流れてくる。

体が動かない時でも、この耳だけはきちんと音を届ける。

草木の揺れる音に紛れて、足音が聞こえた。

小さな飛び跳ねるような微かなそれと、足早に向かって来る人のそれ。

誰のものなのか、声を聞く前に気が付いて、スツと肩の力が抜けた。

「ホタル？ と、マツリ？」

聞き慣れた声が間近で響いた。

ほんの一瞬前は、ベッドの中で聞きたくないと耳を塞いだ声。

でも、今は何よりもほっとする声だ。

固まっていた体が解け、ホタルは振り返った。

シキが立っている。

足元には、昔サクラの可愛がっていた魔獣によく似た、白い毛玉が跳びはねていた。

深夜にも関わらず、外出着を身につけて、片手には剣を握っている。

その僅かにも寛ぎの感じない姿に、ほっとした筈の心がキリキリと軋んだ。

「イト」

シキが男に声をかける。

そうだ、あのアルクリシュの森で聞いた名はそれだ。

シキは、へたりこんでいるマツリ……ホタルは初めてマツリがそこにいたのだと気が付いたのだが……を避け、ホタルの横を通って狩人に近づいた。

「悪いな。ここが一番近かった」

狩人が詫びを口にした。

シキは、軽くそれを受けて、怪我人に目を向ける。

ホタルやマツリのように、血塗れのけが人に感じる恐怖はまるでないようだった。

「ホタル」

突然名を呼ばれ、ホタルはビクリと体を揺らした。

「医者を呼んでくれ」

言われたことは、もちろんすぐに理解できた。

「はい」

そして、先ほどは固まって立ち竦むしかなかった体は、不思議なほどに自然と動き出していた。

イトが運んできた男は、今夜が峠だろうと医者は言った。

シヨックから立ち直ったらしいマツリが、甲斐甲斐しく額に浮かぶ汗を拭き続けている。

拭いても拭いても、汗は滴る。

苦しげな呼吸と呻き声が途切れることなく漏れ続ける。

まだ、命は繋がっている。

途切れそうな命が、なんとか生きようともがいている証だ。

シキは見知った狩人を見下ろし、朝日が差し込む頃には、彼の呼吸が穏やかなものになっているよう心底祈った。

だが、いつまでも、ここで生死を彷徨っている者を見守っている訳にはいかない。

「マツリ、明日には世話人を寄越すから、悪いが今晚は看てやってくれ」

じっとけが人を見つめるマツリに声をかける。

少女はシキを見上げて頷くと、すぐに視線をベッドの住人に戻した。

その視線は、シキの祈りと同じものを含んでいる。

祈ることを少女に任せ、シキは部屋を出ようとした。

ちょうどその時、控えめなノックがし、すぐに扉が開いてイトが覗く。

イトは声を出さず、一つしかない視線でシキを呼んだ。

「行くのか？」

部屋を出て、後ろ手に扉を閉じながら隻眼の狩人に尋ねる。

「ああ。ゆっくりしてる場合じゃないからな。あいつを襲った魔獣を追う」

イトは言いつつ、既に足を進めている。

横に並んで歩きながら、シキは己が知る最も優秀な狩人に尋ねる。

「どんな状況だ？」

イトは歩みを止めもせずに、マントを羽織った。

血の匂いが漂うそれに、新しいものを用意させようかと思ったが、どうせすぐに血に塗れるのだろうと留まる。

イトは、短く答えた。

「異常、だな」

この男がそう言うのならば。

「異常、か」

そうなのだろう。

繰り返すそれに、イトは頷いた。

「傷痕を見ただろう？」

シキは瀕死の狩人の傷痕を思い浮かべる。

牙の痕、爪の痕。無数に身体に散る過去のものの中にあつた、生々しく血に濡れたそれ。

一匹の魔獣に負わされたものにしては……そう、違和感があつた。牙の形や爪の形が同一ではないと思わしきものが、幾つも刻まれていた。

「ああ。一頭じゃないな。しかも小物じゃない」

シキの意見に、イトは同意を示して頷いた。

「狭い領域に大物が2頭。以前なら考え難い状況だ」

そうなのだ。

小さな魔獣でさえ群れることのない連中なのだ。

それは、大きなものになれば尚更顕著となる。

恐ろしい程の縄張り意識は、人間の領土への執着以上で、そこから生じる諍いは熾烈を極める。

まことしやかに、人の羨望じみた教訓として教えられた「獣は命を賭けては争わない」などという常識を、奴らはあっさりと裏切るのだ。

「まして、奴らはつるんであいつを襲った感がある」

続いたイトの言葉に、シキは眉を寄せた。

そんなことがあり得るのか？

「まさか」

言いながら、それが事実なのであろうことをシキは、自らが既に確信していることに気が付いた。

魔獣に対峙するたびにシキ自身が、その変化を実は感じていたのだから。

そして、思い出す。

今年の夏の惨劇を。

大きな魔獣と、それに群がる小さな魔獣。

あの時の異常さが、徐々に広がっているのだろうか。

「いや、まさかじゃないな」

シキは呟いた。

「何人かの狩人は異常な事態に気が付き始めてる……あいつも、その一人だ」

イトとシキは屋敷の外に出た。

まだ朝は遠く、辺りは闇に包まれている。

しかし、この土地特有の熱波は、日差しのない夜でさえ容赦ない。

「2頭の魔獣が共存しているという異常事態に気が付いて、俺を呼び寄せた」

魔獣が単独で行動するように。

狩人もまた単独で行動することが多い。

大きな獲り物に際して、自ずと組むこともあるが、それが軍隊のように組織として常に成り立つことはない。

それができない、それをしないからこそ、彼らは狩人であり、狩人でしかありえないのだ。

あの負傷した男もそうだ。

自らの剣のみを頼りに、独りで生きていく者。

そんな男が、イトを……狩人の中で最も腕が立つと、一目も二目も置かれている男を、呼び寄せたのか。

どれほどの事態が、あの男の信念を曲げて、イトに助けを請う状況を招いたのか。

「ひとまず両方に俺の魔獣を付けてある。2頭一緒にいれば手っ取り早いが……まあ、近い方から片付けるしかないな」

2頭に襲われて瀕死の怪我を負った仲間を目の前にして、この男は2頭一緒にいれば手っ取り早いと言う。

そこに、この男の絶対的な自信と……己への執着のなさを見る。

「片方は私が引き受ける」

フードをかぶろうとしていたイトの動きが一瞬止まった。

そして、フードをかぶることなく、シキを見やる。

「大丈夫なのか？」

その問いに、シキは首を傾げる。

「あんたの相手は魔獣だけじゃないだろう？」

この男は、無頼のようで、無法のようで。

その実、恐ろしく世情に聡く、人情に厚い。

かつて、この男が多く兵を束ねる頭領であった片鱗を、そこに垣間見た。

「お前、いい奴だなあ。タキなんか遠慮なくこき使うぞ」

シキが笑いながら軽く答えると、イトも分かりずらい笑みを頬に浮かべる。

「……大丈夫みたいだな」

頷く。

大丈夫だ。

まだ、この身は戦いに赴くことに疎まない。

まだ、疲れて動けぬ程ではない。

「第一、そんな近くにいますなら、放っておけないだろう」

「正直助かる……俺は、どっちを追う？」

イトは今度は手を止めることなくフードを被った。

シキは迷わず答えた。

「近い方を。私は馬を使う」

イトに異存はないようだ。

「分かった」

答えて、歩き出し、だが、その足が再び止まる。

「俺達も単独で一頭ずつ片付けてる状況じゃなくなるかもな」

シキは肩を竦めた。

「そいつは、厄介だな……お前らみたいなの、誰が統率するんだ？」

「軍神やあんたになら、従うさ」

フードの奥に見えるイトの隻眼は真剣だ。

この男が言うならば、本当にそれが必要になるのかもしれない。

「もっとも……あんたは一人の方が性にあってるみたいだけだな」

イトの声には少しだけ笑いが含まれているようだ。

確かに、そうだ。

軍を率いる身ではあるが、正直、単独の狩りの方が性に合ってい

ると思う。

馬上で兵を操るよりも。

自ら剣を振るう方を。

もっとも、それは

「お互い様だろう」

この狩人も同じだ。

率いることの、従えることの重さを知っているからこそ。

「従うのも、従えるのも面倒なだけだからな」

答えも重い。

イトは今度こそ留まることなく歩き出した。

「魔獣はグルが追ってる」

シキを狩り場へと導く、魔獣の名を告げて。

屋敷へと戻ると、カイが自室のある2階から降りてくるのが見えた。

寝着を身につけてはいるが、少しも寛いだ風でないのは、隣に妃がいないからか。

「大丈夫なのか？」

けが人がいる部屋の方を見やりながら尋ねてくる主に頷いた。

そして、確信を持って答える。

「イトが連れてきたってことは助かる見込みがあるってことですから」

カイもまた頷いた。

カイのイトに対する信頼は、シキへのそれと何ら違いはない。

「私も行きますよ」

カイはもう一度頷きながら、ポツリと零した。

「もどかしいな」

ここにも一人。

自らの地位や立場を顧みず、一人で戦うことを良しとする者がいる。

「貴方はおとなしくしてて下さい……今、貴方に何かあったら、キンググシークは傾きかねない」

シキは苦笑いを零しながら進言する。

今は、軍神が闇に紛れて剣を振るう時ではない。

それは、シキやイトが担うところだ。

カイが剣を振るうことは、もはや象徴なのだ。

破魔の剣を、軍神がかざす時。

それは、民衆を脅かす強大な存在を散らす時。

剣により魔が霧散し、民に安堵をもたらす時。

そうでなければならぬ。

カイとしては、不本意であろうとも、既に軍神とはそういう存在なのだ。

軍神が、闇で秘密裡に魔獣を狩っているなどということが知れば、それはむしろ、世界に不用意な不安の種をまくことになるかもしれない。

平穏を迎え入れつつあるとはいえ、まだ、世界は不安定な場所で揺れている。

小さな綻びは、すぐにも再びの戦乱を招くだろう。

「タキのようなことを言う」

カイが小さく笑い、呟いた。

つられて、シキも笑いを零した。

まったくだ。

いつから、自分はこんな説教くさい人間になったのか。

カイの立場が変わったように、シキも少しずつ変わっているのだろうか。

「奥方を愛でていれば、もどかしさなんて感じる暇もないでしょう…… ゆっくりして下さい。来るべき時に備えて」

シキは意識して、そんな軽口を叩いた。

それは、カイの気に召したようだ。

色の違う双眸が柔らかく和む。

「では、寝室に戻るか…… ゆっくりさせてもらおう。来るべき時に備えて、な」

「そうして下さい。必要な時は最中だろうとなんだらうと、ご出陣いただきますから」

久しぶりの軽快なやりとりに、こここのところの余裕のなさを思い知る。

それはカイも同じなのだろう。

しかし、軍神には寵妃がある。

疲れた心身を、ただ純粹な想いで包み込み、癒してくれる存在が。そして、己には……ふと浮かぶ面影を振り払うように。

「そろそろ行きますよ」

「氣を付けてな」

笑いの消えた声でカイが言う。

シキはカイに一礼し、歩き出した。

厩舎は静かだった。

だが、シキの氣配を感じた途端、何頭と並ぶ馬達がいなく。少し離れた場所にいる翼竜が、羽をばたつかせたのだ聞こえた。戦いに赴くことに血を騒がせる輩に、苦笑いが零れる。

もつとも、己も同類か。

居並ぶ駿馬の中から、相性の良い一頭を連れ出して庭の外に出る。空を見上げる。

イトの遣い魔が、夜空を旋回しているのが見えた。

主が優秀ならば、奴らはこんなにも頼りになる存在なのだ。

「グル！」

呼べば、鳥に似たそれは、旋回を止めて南下し始めた。

南には、森がある。

シキは馬に跨がると、イトの魔獣が導く方角へと走り始めた。

空が明るくなってきた。

そっとカーテンの端をめくり、朝の訪れを確認したホタルは、背後で横たわる男を見遣った。

隻眼の狩人が連れてきた瀕死の男は、魔獣との戦いには敗れたが、死に神との戦いには勝利したようだ。

男に近付き、穏やかな呼吸を繰り返す様子にホッと息をつく。よかった。

もう大丈夫だ。

浮かびかけた笑みは、だが、一瞬と頬を緩めることなく失われた。目の前にある消えかけていた命。

無数の牙と爪の痕。

この男性がそれを負った場所に、あの方は赴いたのだ。昨夜のうちに。

耳に、かの人が屋敷から出ていく音を聞き取りながら。後を追って縋りつきたい想いを抑え込んで。

自らを抱きしめて、ホテルは部屋の隅にうずくまって。手が届かない程に馬の蹄の音が遠ざかるのを待った。

無事に帰ってきて下さい。

どうか。

そう願いながら。

そうすることしか、この身は許されないのだから。

だから、ただ。

無事にお戻り下さい。

ただただ、祈るのだ。

何もかも聞きたくないと閉ざしていた筈の耳に、小さな音が届いた。

ピチャン。

そんな小さな音。

ピチャン。

もう一度。

これは……ああ、水音だ。

ホタルはしゃがみ込み、立てた膝に埋めていた顔を上げた。知らない間に、窓の外は闇に満ちている。

今は何時なのだろう？

そんなことを考えるのも放棄して、どれぐらい経ったのか。

サクラから離れた途端に……否、サクラの側にいる時でさえ離れない願いを余して。

一人になれば、なおさらで。

眠ることさえ望めないから、諦めて、窓辺で外を眺めているうちに、多少なりはウトウトとしていたようだ。

ピチャン、とまた耳に届く。

一体どこからだろう。

見上げた月の位置は、遥かに遠い。

こんな夜更けに、何の水音だろうか。

まさか、と思った。

だけど、と思う。

動きかけた身体が止まる。

行っとうするの？

行っとうなるの？

だけど、そのまま眠りに就くことなんてできる筈がない。

ホタルは立ち上がり、すっかり慣れてしまったような夜の廊下を静かに歩き始めた。

水音の所在はすぐに知れた。

湯浴み場だ。

そして、その人は、そこにいた。

床に座り込んでいるようだ。

頭からすっぽりと布地を被り、姿は見えぬ白い小山があるようだったが、ホタルにはそれが誰だか知れた。

「シキ様？」

名を呼ぶ。

細く震えた声だった。

白い生地はピクリとも動かない。

「シキ様」

もう一度、名を呼ぶ。

白い山が揺れて、シキが顔を上げた。

布地の隙間から蒼い瞳が覗き、ホタルを捕える。

そこにいつもの明るい彩りはない。

怖い。

思わず後ずさる。

シキはしばらくの間、ホタルを無言で眺めて、やがて布地から顔を出した。

「やあ、ホタル」

その声は、いつも通りに聞こえた。

でも、なにか違う。

先ほどは、明らかに怖いと感じた瞳も、既にいつものように見える。

でも、本当に、そうだろうか。

「ちょうど良い……悪いけど、着替えを準備してくれないか」

何も違和感を感じる筈のない柔らかな口調。

だが、拭いきれない不穏さに、ホタルは、もう一步後ずさる。

「着替え、ですか？」

ホタルの問いかけに、シキは微笑んだ。

その笑みも……いつものようで、いつもと違う。

「後先考えずに水浴びに興じてしまったんでね」
怖い。

目の前にいるのは、本当にシキなのだろうか。

穏やかな雰囲気も。

優しい視線も。

何かが違う。

怖い。

ホタルは肩にかけていたショールを掻き合わせ、シキから目を逸らした。

その視線の先に、まがまがしい紅が映る。

何だろう？

よくよく見てみれば、それは、無造作に丸められた布だった。

脱ぎ捨てられたシキの上衣だ。

気づく。

だが、どうして、こんな色なのか。

昨夜、出掛けた時、身に着けていたのは濃紺だった筈。

そして、ぞっとする。

濃い藍を、なお紅に染め上げるのは。

「シキ様！」

ホタルは、シキに駆け寄った。

感じた違和感も恐怖も吹き飛んで、心配する思いだけが体を動かしていた。

座り込んだままのシキに前に膝を付き、礼儀など捨ててその身に触れる。

「あれ、血ですよね！？どこか……」

「私の血じゃない」

シキの静かな声が遮った。

「魔獣の血だ」

冷たい、まるで感情のない声だった。

間近で見つめた瞳は、やはりいつもと違う彩りを湛えている。ここを去った方が良い。

ホタルの本能がそう告げた。

いつもよりよほど簡単にこの方から逃げられる。

シキの望む着替えを取り行けば良い。

早く、ここを立ち去るべきだ。

そう思うのに。

ちがう感情がホタルをここに留める。

「……お一人で行かれたのですか？」

シキが出立する前に聞こえてしまった、あの狩人との会話。

あの言葉の通りに、この方は一人で行かれたのか。

「相変わらずいい耳だね」

シキの声が、ほんの少し感情を取り戻した。

だが、そんなことではホタルの心は納まらない。

「いつもお一人なのですか！？」

自分でも驚くくらいに、激しい声が出た。

シキの笑みが少し変わり、宥める色を含む。

「……ホタル」

呼ぶ声がいつもの優しさを戻しつつある。

だが、ホタルはそれらを拒否するように首を振った。

「どうしてですか!？ 何故、そんな危険な……」

身分のある方なのでしょう？

本来なら、多くの部下を従えて……違う、そんなことを言いたいのではない。

どうして。

どうして、敢えて命を危険に晒すのだ。

こんなに。

こんなに、心配しているのに。

こんなに、その身の無事を案じているのに。

「ホタル、怒ってる？」

シキの軽い口調が癪に障る。

「怒ってません！」

答えながら、それでも、なお感情が高ぶる。

これは怒りなのか。

哀しみなのか。

何がなんだか分からない。

ただ、痛い。

どこもかしこも痛くて、泣きたい。

「カイ様も以前はよくお一人で魔獣狩りに出て、タキに怒られてたなあ」

のんびりとそんな風に言われて。

「シキ様！」

責めるように、名を呼ぶ。

更に非難しようと口を開きかけ、だが、先ほどの刺々しさを完全に払拭した笑みにあたって言葉を失う。

「タキの説教はうるさいだけなのに、どうして君が怒るのは心地好いのかな」

シキはそう言って、どうしてか、ホタルから目を逸らした。

「シキ様？」

呼び掛ける。

シキは顔を伏せた。

「ホタル……俺から逃げた方がいいよ」

いつもに戻ったように思えた声に、また冷たさが……そして、新たに熱が混じる。

ホタルの身が竦んだ。

「今なら逃がしてやるから」

そう言うシキの身体は微動だにしない。

「今君に触れたら……この間のようにには止めてやれない」
シキの望んでいること。

それが分かった。

逃げなくては。

そう思うのに。

ホタルもまた、シキの腕に手をかけたまま、動けない。
どうして。

こんな状態のこの方を置いていけるだろうか？

「シキ様」

戸惑いながらも名を呼ぶと、いきなり抱きしめられる。

逃げてても良いと言われて動かなかった体は、途端に怯えて腕から逃れようと動いた。

だが。

「……ホタル！」

こんな風に名前を呼ぶのはずるいと思う。

そんな風に切羽詰まったように。

縋るように。

まるで、ホタルしかいないとでもいうように。

そんな風に呼ぶのはずるい。

いつも、いつもこの人はずるい。

「ホタル……君が好きだよ」
首を振る。

もちろん、横に。

無理だから。

「君が欲しいよ」

そんなこと、無理だ。

どんなに望まれても、それはできない。

「ホタル」

お願いだから、呼ばないで。

もう、離して。

思うのに。

「……暖かいな」

ホタルを抱いて呟くシキの体は、この夏の最中に、冷え切って凍えるようだ。

「君は暖かいよ」

いいえ、誰と抱き合ってたって暖かい筈。

貴方はいくらだって、それを手に入れられる。

相手がホタルである必要なんてない。

貴方は、ただ暖かさを慈しむだけなのでしょう？

それを求めて、安易に手を伸ばすのでしょうか？

それが許される人だ。

だけど、ホタルは違う。

許されないのだ。

手を伸ばしてはいけないのだ。

何も望んではいけない。

「……っ離して、下さい」

自分から離れられなくて、お願いしたのに。

なおさら、強く抱き寄せられた。

だめだ。

思うと同時に、涙が零れた。

泣きたくないのに、次々溢れてくる涙が止められない。

「それは、ずるいな」

シキがため息みたいに言う。
ずるいのはシキの方なのに。

「泣かれたら、離すしかない」

言いながら、でも、離してくれない。

だから、涙が止まらない。

暫く、シキはホタルを抱いたまま固まっていた。
やがて

「ホタル……泣いても離せないみたいだ」

何かを決めたように、腰を強く引き付けられた。
胸に隠していた顔を上げるように指に促される。

「あのキスはなかったことにしてもいいよ」

囁きながら近づいてくるきれいな顔を見つめる。

「何度なしにしても、全部俺がもらうから」

そして、キス。

あの時……もう、随分と昔の気がする、あのキスとは、まったく
違うゆっくりとしたキス。

拒む術もなく、受け入れる。

私は、この人が好き。

もう、認めるしかない。

でも、認めたからってどうなるのか。

身分が違う。

立場が違う。

何よりも、ホタルにそれは許されない。

なんとか生きることだけを許された身なのだから。

こんなこと許される筈がないのに。

「ホタル」

長いキスの合間に名前を呼ばれた。

身体が勝手に動く。

ホタルの思いとは別に、抗うことをやめてしまう。

そして、裏腹に、目の前の男の首に腕を回す。

冷たい体を温めるように、身を寄せた。

だめなのに。

誰にも愛される資格のない身を顧みず、私は何をしているの？

「ホタル……本当に離せない」

シキがホタルを抱き上げる。

「もう、絶対に逃がしてやれない」

確信に満ちた囁きに、ホタルは絶望に似た想いを抱きながら。

それでも、既に逃げる意志もなく、シキに身を任せた。

運ばれたのは、屋敷の一角にあるシキの部屋だった。

何度か所用で訪れたことのある部屋。

こんな風に抱かれて、しかも、そのベッドに横たわることなど想像したこともなかった。

「……ホタル」

いつかのように。

声が変わる。

でも、それは知らない男の声ではなくて。

「シキ様」

呼ぶと、微笑みながら額にキスが落ちる。

ホタルは目を閉じて、全てをシキに任せた。

経験はもちろん、まともな知識もない。

だから、ただ、シキの邪魔をしないように、と。

シキの指先が寝間着の紐を解く。

この衣は、こんなに頼りないものなのだ。

そう思うほどに、あっけなくシキの前に肌を晒す。

重なってくるシキもまた、何も身に付けていなくて。

「……っん……」

初めて全身で感じる他人の肌。

知らない感触。

知らない暖かさ。

「ホタル」

名を呼ばれる。

先ほどキスを受け入れたように。

「シキ様」

腕を伸ばして、ぎゅっとしがみつく。

「どうしたらいいのか分かりません」

情けないくらい細かい声で、そっと告白する。

どうすれば、貴方を拒めますか。

どうすれば、私を止められますか。

「ホタル」

シキは困ったように微笑む。

「どうしていいか分からないのは俺の方だよ」

掠れた声で囁いた。

シキはぐっすりと眠っているようだった。

長い腕が、広い胸が、ホタルを包み込んでいる。

こんなこと、許される筈がない。

私は、なんてことをしてしまったのだろう。

なのに。

シキが好き。

そればかりが溢れてくる。

どうしようもない程に。

どうすることもできないのに。

「……シキ様」

囁くと、眠ったままの男の腕が、それでもぎゅっと力を込める。

ホタルは、しばしそこに留まった。

そして、やがて、その腕から、そっと滑り出た。

失った存在を探るように腕がシーツを彷徨ったが、隠しきれない

疲労に塗れた心身が目覚めることはなさそうだ。

ホタルは急いで身支度を済ますと、部屋を出た。

自分の部屋へと走りながら。

涙が溢れて止まらない。

あんなに優しいなんて。

あんなに暖かいなんて。

知らなくて良かったのに。

知ってはいけなかったのに。

私は……なんて、大きな罪を犯したのだろう。

シキは、慌てていた。

焦っていた。

怒りさえ覚えていた。

それより何より、これはちょっとした恐慌状態に陥っていると言っているのかもしれない。

眉間に皺を寄せ、大股に、足早に、廊下を歩いていく。

常に飄々としているように見える男のただならぬ形相に、家人達はぎよつとし、だが誰として理由も聞けず、にそそくさと道を譲る。

シキは、目的の部屋に到着すると、乱暴にノックし、中からの返事を待たずにそこを開けた。

「失礼しますよ」

とってつけたような挨拶に、部屋の主は驚くこともなければ、憤るでもなく、シキから傍らへと視線を向けた。

シキが訪ねたのもまた、この部屋の主ではなく、そちらの方だ。

シキの主君であるカイの寵妃。

そして、シキが愛してやまない娘の女主。

「ホタルはどこですか？」

今は柔らかな笑みもなく、見つめてくるその人に、シキは何の前置きもなく切り出す。

「暇が欲しいと言うので許しました」

サクラも、また端的に答えた。

だが、それはシキの欲しい答えではない。

「どこにいるんですか？」

繰り返す問いに、サクラは今度ははっきりとその意志を述べて寄越した。

「言いません」

「奥方様！」

思わず、声が荒立った。

しかし、サクラは怯むこともなく、もう一度シキに答えた。

「ホタルの居場所は、シキ様には教えられません」

それは、ホタルの意思なのか。

そうなのだろう。

だからこそ、この妃は、絶対に折れない決意でシキに向かい合うのだ。

しかし、何故なのか。

数日前、ようやくのように手に入れた……そう思った娘は、朝、目覚めると既に腕の中から消えていた。

それは、不覚としか言いようがない。

だが、長く彷徨い求めた果てに辿り着いたその場所は、想像や願望を遥かに超えて心地好く。

疲れていた心身の全てを洗い流し、ただただ深い眠りの淵に誘われたのだと思えば、甘い苦笑いが浮かぶばかりで。

初めて知る、一人で目覚めることの寂しさをも、切ない愛しさで噛み締めたのだ。

もつとも、それは、無情に遠征を命じるタキの声にさっさと消されたのが。

しかも、ちらりと顔を見ることが叶わず、追い立てられるように屋敷を出立する羽目になった。

それでも、極上の癒しで満たされた身体はいつになく奮い立ち、振るう剣に力は漲っていた。

どれほどの相手と対峙しようと、戻る場所があるというそのことだけで、命への執着が心を強くした。

なのに。

まさか。

こんな最悪の状況が待っているとは。

すべきことを成し遂げて、ようよう戻ってみれば、屋敷のどこにもホタルはいない。

マツリを捕まえ、問い質してみれば、数日も前に屋敷を出たというではないか。

理由は分からないと怯えたように答える少女に、それ以上を聞ける筈もなく、ここに直行した。

悔しいが、この正妃以外に、ホタルの行方を尋ねることができる人はいない。

「私、ホタルから、何も聞いてません」

苛立ちを隠もしないシキに、静かな声が語りかける。

何も聞いていない？

だが、シキがこうして現れることを予期していたような落ち着きようではないか。

「でも……ホタルがここを離れたかったのは、シキ様のせいなのでしょう？」

シキはサクラを見つめた。

サクラは、優しげな顔立ちに似合わぬ、辛い表情を浮かべている。それが、ホタルに重なる。

ホタルもこんな表情で、サクラに暇を願い出たのだろうか。

そして、それはシキのせいなのか。

何故だ？

あの時、ホタルは拒んだか？

己は、あの娘に無理を強いたか？

そんなことはなかった筈だ。

絡め合った指先。

お互いに何度も名を呼び合った。

あれらが全て、シキの一方的なものであろう筈がない。

だが、ホタルは、逃げたのだ。

戯れだと思われた？

何度も、好きだと告げたのに？

あの娘らしく、身分差を気にした？

終わりを見越した？

まだ、始まったばかりなのに？
どれも、違う気がする。

ただ、こんなことになるかと分かっていたら。

あの朝、おめおめと離しはしなかった。

どんな手段を使っても、ホタルをこの腕の中に留めおいたのに。

「ずっと側にいてくれるって約束したのに……それを、ホタルに破らせたのはシキ様なのでしょう？」

聞こえてくる言葉は変わらず静かだった。

なのに、茶色の瞳から涙が溢れる。

滅多に泣かないサクラの涙。

そして、その泣かない、泣けない主の代りに、いつも、ホタルが
こうして泣いていた。

声を上げることなく。

肩を震わすことなく。

大事な人の想いを思っ流す、静かな涙。

シキを捕えた、ホタルの涙だ。

サクラのためにだけ流れていたそれが、己のために流れた時、僅
かばかりの嬉しさもなかった。

それを笑顔に変えることだけを、ただ願った。

今、ホタルはどこかで泣いているだろうか。

それは、サクラを想って？

それとも。

「サクラ様。ホタルを私に頂けませんか？」

ホタルの涙が、誰を想ったの涙でも構わない。

ただ、それを笑顔にするのは、己でありたい。
だから、どうか。

あの娘を、この腕に。

「……いや、です」

小さな子供のように、サクラが小さな声で答える。

「でも……それは私が決めることではないのです」

続いた言葉は、分別のある大人のそれ。

そして、少女のように、手の甲で涙を拭いながら

「どうぞ、ホタルにお尋ね下さい」

成熟した女性の笑みを見せた。

「でも、どこにいるのかは教えて差し上げませんけど」

シキは肩を竦めた。

「貴女は、私の味方になってはくれないのですか？」

この妃は、こんなに強情だったのか。

しなやかな、健気な印象が強い女性のその夫をちらりと見やれば、シキの反応を苦笑いしつつ眺めている。

「どうやら、夫である人は、案外に妃の頑なさをご存じらしい。

「本当は、貴方に差し上げたくないもの」

ぼつりと、今度は子供が拗ねたように呟いて、サクラは俯いた。

手入れしてくれる者のない筈の長い髪が、しかし優雅に揺れて、小さな顔を覆い隠す。

「シキ様は……ホタルを泣かすから」

何を言うのか。

ホタルを泣かすのは、いつだって。

「貴方の方がよほど泣かせるでしょう」

サクラは、ぱっと顔を上げた。

もう涙は、すっかり止まっていたが、少しばかり名残を残した瞳がじっとシキを見つめた。

「それで、シキ様はよく私を睨んでいるの？」

そんな自覚はない。

「睨んでませんよ」

だから、答える。

「睨んでましたよね？」

サクラは、傍らで黙って成り行きを見ていた第三者に判定を求めた。

「睨んでたな」

この判定者は、かなりサクラ寄りだと思うが、はっきり言われると違うと言い切る自信はない。

確かに、この妃こそが、最大の敵だと思っていたのだから。

ホタルを手に入れるには、この妃を打倒……とは言わないが、それこそ懐柔しなければならないと。

だが、違うのだ。

ホタルを手に入れるための、障害はこの方ではない。

今はそれに気が付いている。

「……ホタルは、何を背負っているのですか？」

あの頑なさ。

サクラしかない。

サクラしかない。

そう告げる、そこに隠れているものはなんなのだ。

「それは……私からはお話できません」

予期していた答えだ。

「ただ……シキ様が全てを受け入れて下さるなら」

サクラは受け入れたのだろう。

そして、ホタルはサクラを唯一と認める。

「……ホタルが全てを乗り越えて、シキ様のところに行くと言うならば」

サクラとシキは、ホタルに求めるものが違う。

だから、シキが受け入れたことで、すんなりホタルが手に入るとは思えない。

それでも。

受け入れてみせる。

乗り越えさせてみせる。

手に入れてみせる。

「私には止められません」

「言わせますよ」

シキはきっぱりと言い切った。

「必ず、俺の元に来ると言わせませう」

そう。

必ず。

「手段は選びません」

抱きしめて。

キスをして。

何度でも、ホタルが頷くまで。

「手段、を聞いてもよろしいですか？」

シキの言葉に不穏を感じ取ったらしいサクラが眉を寄せて、尋ねてくる。

「シキ、やめておけ」

サクラよりもよほどシキを知るカイの制止を無視し、答える。

いつもの、本気が戯れか分からないような響きで。

しかし、本心だけを。

「ホタルを探し出したら……もう、貴女には返しません」

サクラの眉間の皺が、さらに深まる。

「シキ」

カイが遮ろうとする。

だが、シキは続けた。

ホタルの居場所を、決して言わないであろうサクラへの、ちょっとした意趣返しだ。

「そのままどこかに閉じ込めて、ベッドに引きずり込んで……俺のものになると頷くまで何度でも……」

シキの言う意味を理解したサクラが、ぱっと顔を赤らめる。

人妻になっても、変わらない少女のような反応に、してやったりという思いと、幾らかの罪悪感を感じていると

「シキ」

少しばかりの憤りを含んだ声が、咎めた。

シキは大人しく口を一度は閉じたが、再びサクラに告げた。

「ホタルを愛しています。貴女の大事な友人を決して不幸にしない

と誓います」

シキにとって、寵妃の侍女ではない娘。

サクラにとっても、ただの侍女ではない娘。

お互いにとって、何にも代え難い大事な存在を。

不幸にしないと。

神に。

主君に。

そして、娘が誰よりも敬愛する貴女に誓うから。

「全ては私の大事な友人の望むままに」

サクラはそう言って、ホタルが愛してやまないような、シキを力付けるような、柔らかく深い微笑を浮かべた。

女の人が窓辺に座っている。

鮮やかな赤毛が印象的な、きれいな女の人。

ホタルは、その人を『かあさま』と呼ぶ。

だけど、女の方は、決して返事をしない。

その瞳は、ホタルを、ホタル以外の何もかもを見ていない。

ただ、窓の外を見ている。

その唇は何も語らない。

ただ、空虚な微笑を浮かべ続け、時折、思い出したように一人の男の名を呟く。

そして、その耳は。

かつては、世界のありとあらゆるものを聞いたであろうその耳は、何も聞かない。聞こえない。

ただ、一つの声を探し続けている。

憎み続ける男の姿を。

恨み続ける男の名を。

呪い続ける男の声を。

その人の世界は、それだけなのだ。

今、見ていたのは白昼夢だろうか。

ホタルは、はっと我に帰り、辺りを見回した。

もちろん、そこに女の姿などありはしない。

そもそも、あの人は、もうこの世にはいないのだ。

あれは、母の姿。

父が亡くなった後の、母の姿だ。

その死を受け入れることができず、窓辺で毎日男の帰還を待ち続けた女。

戻ってくれば、怯え、憤り、詰ることしかなかったのに。

憎んでいた男。

どれほどに恨んでも恨みきれない男だったろうに。

その男の死を、どうして女は受け入れられなかったのだろう。

立ち上がって、真昼の幻を見た場所に近付く。

サクラの元を辞して……いや、シキの腕の中から逃げ出して、辿り着いた場所がここだなんて。

辛い想いばかり心で、辛い思い出しかないこの場所を訪れる。

随分と自虐的な行為だ。

だが、だからこそ、ホタルは泣くこともなく、淡々と日々を過ごせているのかもしれない。

ここは、ホタルが産まれた家だ。

両親が共に亡くなり、祖父と暮らすためにオードル家に行くことになるまでの、数年間を暮らした家ということになる。

それは、キリングシックからいくつもの国を隔てた、田園と森林が国土のほとんどを占めるというのんびりとした小国にあった。

その中でも、戦乱時にもさほど混乱に巻き込まれなかったような片田舎の、そのまた森の一角の一軒家という、戦で名を上げた男の棲家とも思えぬ平和な場所。

ラジルやオードルのお屋敷ほどの建屋ではないが、一介の庭師の息子の家屋とはかけ離れた立派な住屋だった。

元の主の名はジオ・ユリジア。

平民から騎士の称号を手に入れた男として、今なお知る者の少ない男。

彼は人里から少々離れたこの場所に屋敷を建て、そこに妻と娘と

住まわせていた。

それから彼女たちを世話する中年夫婦が一組、近くに暮らしていた。

もう何年も人が暮らしていない建屋なのに、ホテルがここを去った時から、ほとんど変わらぬように見えるのは、その夫婦が今この屋敷を手入れしてくれているからに他ならない。

父が遺した数多くの財産の一つ。

父は功績を上げ、名を広め、それなりの富と名誉を手に入れた。

父の死により、名誉は語り草になり、富はホテルのものになった。父の遺したものなど何もいらなかった。

その中でも、特にこの屋敷はホテルにとっては不要なものに違いなかった。

だから、去ってから10年以上もの間、一度として訪れたことなどなかった。

なのに、突然、現れたホテルを、かつて世話をしてくれた夫婦はうれし涙で迎え入れ、何も言わずに家のカギを渡してくれたのだ。

いい思い出なんて、何もない家だ。

ただ、ただ、辛い記憶しか蘇らないのに。

それでも、ここ以外思いつかなかった。

オールドルに戻ることも一瞬考えたが、今はとにかく……そう、独りになりたかった。

自分という存在がどんなものだったか。

ここを去ってから、忘れがちだった。

祖父からの愛情。

サクラからの親愛。

それらが、ホテルにここでの日々を忘れさせ、いつしか、自分自身が何者であったかも忘れさせた。

「『かあさま』なんて呼ばないで！」

女はよくそう喚いた。

暴力こそ振るわれることはなかったが、それは情愛故というよりはむしろ、例え憎しみをぶつける行為であってもホタルに触れたくないというのが、女の心内だったと思う。

「お前なんて産みたくなかったんだから！」

そう言って、泣き崩れる。

喚いているか、泣いているか……無表情で自己の世界に閉じこめるか。

女の毎日はそれだけだ。

幼いホタルにとって、母親というのはそういうものだった。

だから、何の思いもなく、泣き喚く女をただ見つめているだけ。

「また騒いでいるのか？」

男の声に、床に突っ伏すように泣いていた女が、ビクリと身体を震わせて顔を上げた。

その顔は恐怖に青ざめている。

「……よくもまあ、そんなに泣いてばかりいられるものだな」

呟きながら、身にまとっていたマントを脱ぐ。

その下は軍衣。腰には剣。

ホタルの見慣れた男の姿だ。

父親という男は、『兵士』なのだという。

その中でも何十という部下を従える『優秀な騎士』なのだと聞かされていた。

大きな帝国の一部隊を率いて、この戦乱を治めるために奔走している偉い方なのだ、と。

もちろん、母親に聞いたのではない。

ホタルの世話をしてくれるササメという女性が教えてくれた。

ホタルには、それがどういうことなのか、良く分からなかった。

ただ、ホタルはこの男が嫌いだった。怖かった。

「ホタル、こっちおいで」

でも、呼ばれれば、ホタルは男に近付く。

だって、この男は『とおさま』だから。

『とおさま』の言うことを聞かない子は悪い子ですよ、とササメが言うから。

だから、ホタルは『とおさま』の言うことを聞く。

そして、かあさまと違い、『とおさま』はホタルが言うことを聞けば優しかった。

聞かなければ、容赦なく折檻された。

だから、ホタルは『とおさま』の言うことを聞くのだ。

男はホタルの前に膝をつき、微笑む。

そして、ホタルの髪を撫でた。

ギクリと身体が強張る。

『とおさま』に触れられるのも、大嫌いだ。

だが、『とおさま』はよく、ホタルの髪に触れた。

母から受け継いだ緩く波を打つ赤毛。

それから、ササメは『大きくなったらホタル様は、お母様のようなきれいな女性になれますよ』と言う。

嬉しくはないけれど、ホタルは母に似ているようだ。

だが、この父からは何も受け継いでいない。

陽に良く焼けた浅黒い肌と、濃い茶色の髪と瞳。

抜けるような白い肌のホタルとは、似ても似つかない容姿の男は、しかしホタルの『とおさま』。

「後でまた、とおさまにいろいろ教えてくれるね？」

その問いに、ホタルは頷いた。

とおさまは、ホタルにいろいろなことを聞いた。

ホタルはとおさまの望むままに、聞こえるものを話した。

とおさまがホタルに望むのはそれだけだった。

「良い子だ。ササメのところに行っておいで」

そう言いながら立ち上がり、ホタルの背後で泣きつづける女の元へと向かう。

「……いや……」

男に気が付いた女が、細い声で拒否するのが聞こえる。

ササメの元に向かいながら、ホタルの耳は男女の声を否応なく聞き取った。

「いや！ 近付かないで！」

女が男から逃げようと後ずさる、ドレスを引きずる音。

それを追う……しかし、決して急くことのない男の足音。

「戦場から戻ってきた夫に挨拶もなしか？」

閉ざし方の分からない耳に、無情な声。

部屋を出る寸前に見やった視界には、嫌がる女を抱き寄せる男の姿。

「どうして、こんなことをするの！？」

女が悲痛に叫ぶ。

「こんなこと、必要ないのに！」

男の答えは聞こえない。

争うように、衣擦れの音がする。

「どうして、私を抱くの！？」

再び、争う音。

ホタルは走り出した。

音は後を追いかけてくる。

どさり、と倒れ込む音。

布が引き裂かれる微かな音でさえ、ホタルの耳は聞き取った。

「いやあ！」

女の悲鳴。

ホタルは走った。

走って走って、父の言いつけを守らず、ササメの元には行かない。

そのまま走り続けて、一人で庭に出た。

庭の中、一番大きな樹木に駆け寄って、その幹に耳を当てる。

優しい音を探す。

何でも良いのだ。

風。

水。

鳥。

母という女と、父という男の声以外ならば。
なんでも良い。

ここにいと、どうしても過去の思い出を辿ってしまう。
それでも、あの方のことを考えるよりは良い。

あの方のことを考えると。

胸が痛い。

息ができないほどに。

だから、過去の幻影を追う。

女はホタルが去った時と同じ部屋にいた。

そして、やはり泣きながら、床にうずくまっている。
ただ。

ドレスは既に女の身にかろうじてまとわりついているだけ。
結われていた髪は解けて、長い赤色が女の周りで波打っている。
それらを整える気力もないように、ただただすすり泣く。

しかし、ホタルの気配を感じ取ると、女はほんの少しだけ身を起こした。

感情のない瞳でホタルを眺めて。

やがて、その視線が嫌悪と憎悪で不気味に輝く。

「お前は誰も愛してはだめ」
低い声で呟いた。

呪詛。

何度も何度も繰り返されるそれ。

「お前の血肉は私の憎しみと恨みでできているのだから」
ユラリと身体を起こし、四つん這いにホタルに近付く。

ホタルは身動きせず、女を見つめた。

「お前には、誰かを愛する資格も、誰かに愛される資格もないわ」
じっとホタルは、女を見た。

女もホタルを見た。

やがて、女の瞳から止まっていた涙が、再び溢れて零れる。

いつもは泣きわめくか、すすり泣くか。

なのに、この時は、ただ静かに涙を流す。

「……あの男が待ってるわ……行って……」

そう言っ、女は床に伏せた。

「誰も愛さないで、誰にも愛されないで……このまま、ここで朽ち果てるの」

背中に眩きが届く。

ホタルは振り返った。

「私もお前も……憎しみと恨みでできた……あの男の傀儡だもの」
そう言っ、女は目を伏せた。

『お前の血肉は私の憎しみの恨みでできているの』

母の言葉を、どうして一瞬でも忘れてしまえたのだろう。

この身は、誰にも愛される資格などない。誰も愛してはいけない。
母の憎しみと恨みの結晶は、おぞましくて穢れたものなのだ。

独りでひっそりと生きて、いずれ独りで朽ち果てるべきものなの
に。

どうして、忘れて。

あの方に触れてしまったのだろう。

許される筈なのに。

ある夜、女はふらりとホタルの寢室に現れた。

薄い布で仕立てられている寝着。

結われていない長い髪。

それらがユラユラと揺れて。

蒼い顔の女は、亡霊のようだった。

「……あの男、死んだわ」

ベッドの上で身を強張らせて、現れた母を見つめるしかできないホタルに、女は一瞬微笑みかけ、だが、それは笑みにならないまま消える。

「どうしてよ」

ホタルを見下ろす瞳には、狂気。

少しばかりの知も理も感じられない。

「どうして生きているの？」

ホタルの首に、女の手が伸びる。

華奢な手のひらが、それよりもなお弱々しい幼子の首を掴んだ。

「あの男が産ませたのよ」

ぐっとその手に力が籠り、ホタルはベッドに押し付けられた。

女はホタルに押し掛かるようにして、首を掴む手に力を入れる。

「あの男のためにだけ産んだのよ」

喉が締めつけられる。

呼吸ができない。

苦しい。

だが、もがきもせず、ホタルはされるままになっていた。

目の前の母の、狂気に満ちた無表情をただ見つめていた。

「なのに、お前は生きているの？」

気が遠くなる。

女の顔がぼやけて。

もう終わるだろうか。

そんな風に思った瞬間、女はホタルを離し、がくりと座り込んだ。急激に空気が身体をめぐり、ホタルは激しく咳き込んだ。

「お前は……生きていける？　ねえ、あの男がいなくて……お前は生きていけるの？」

女の瞳から涙が溢れる。

暗闇で見る女の涙は、何故か紅にも見える。

「……あの男がいない……だったら、私はどこにいるの？」

そのまま、女は崩れた。

女の問いに応える術もなく、ホタルはただ横たわる屍のような母を見つめていた。

そして、母は壊れた。

そこにいるのは、ただ、微笑むばかりの骸。

喚くこともない。

泣くこともない。

ただ佇み、ホタルにさえ微笑んで見せた。

そして、僅か一ヶ月ばかりで、父の後を追った。

そう、追ったのだ。

骸のない……剣のみが掲げられた墓標の前で、女はその剣で自らを貫いた。

ホタルに残されたのは、莫大と言って良いだろう遺産。

それから、母が消し損なった命。

誰も愛してはいけない、誰にも愛されてはいけない、という呪詛。それらを背負ってオードルに引き取られたホタルだったが、思いもかけず幸せな日々が与えられた。

祖父は、息子に僅かばかりも似ていない孫を、とても可愛がってくれた。

サクラは、ホタルの何もかもを受け入れて、その上で側に置いてくれた。

でも、分かっていた。

この身は、誰も愛してはいけない。愛されてはいけない。

母は多分……己の憎しみと恨みの結晶が、綿々とこの世に引き継がれていくことを厭うたのだ。

だから、ホタルは愛してはいけなかったのだ。

ただ、朽ちる時を待つべきだったのに。

なのに、愛してしまったのだ。

忌むべき身が……一時なりでも愛されることを許してしまったのだ。

これは、どれほどの罪だろう。

どれほどの罰が、この身に与えられるのだろう。

ただ、どのような罰も受け入れようと。

愛してしまったこと。

それはもう消せようもないのだから。

何もしたくない。

動くのも嫌だし、考えるのも嫌。

だが、どちらもしないでおくことは、とても難しい。

眠りに逃げてみただけで、むしろ夢の方が制御がきかなくてたちが悪いと思い知った。

仕方がないから、体を動かすことを選択してみる。

長く人の暮らしていない家は、しかし心ある管理人によってきちんと手入れがされていて、工具を片手に奮闘する必要はなかったが、それでも家中を隅々まで掃除するならば、1日や2日はかかるだろう。

庭も荒れてはいなかったが、祖父を真似ていろいろと手を入れてみるのも良いかもしれない。

そんな風に考えてみる。

だが、考えるだけだ。

実際のところ、身体は動かない。

天気の良いさに誘われて、外には出てはみたものの、結局、何もせずにはボーっと空を見上げていた。

ラジルのお屋敷がある辺りに比べれば、ここはなんとも過ぎやすい。

夏の青空も心地良い。

澄み切った雲一つない晴天。

誰かの瞳を思い出させるような……でも、あの方の瞳はもう少し色が濃い。

そして、感情で彩りは変化するのだ。

ああ、また。

結局、考えてしまう。

どうしよう。

涙が出そうだ。

ここに来てから、一度も泣いていないのに。
どんなに辛い思い出を辿ってみても、心がいくら揺れて動いて痛んでも、涙は出なかったのに。

空を見上げ続ければ青さに胸が痛み、下を向けば重力に負けて滴が落ちそうになる。

ホタルは顔を上に向けて瞳を伏せた。

「良い天気だな」

不意に、声が聞こえる。

幻聴まで聞こえるのか。

そう思った。

耳はずっと閉ざしていたから。

ここに来てから、未だかつてないくらい上手に耳を塞いでいた。
なのに。

「……空に何かあるのか？」

また。

空の空虚さにも似たまっさらな思考を抱えながら、ホタルは視線を声の方向に向けた。

「やあ、ホタル」

まるで、ラジルのお屋敷の一角で出会ったかのような挨拶だった。
幻覚。

もしかして、母のように壊れてしまったのだろうか。

聞こえない声が聞こえている？

見えない姿が見えている？

人が見た私は、今、微笑んでいたりするのだろうか。

「ずっと……そんな風に泣いていたのか？」

だが、その人は言う。

その手が頬に触れる。

実物だ。

幻影ではない。

幻聴でもない。

涙を拭う温もりに、ホタルは目の前のシキが現実だと気が付く。

ホタルは体から、急激に力が抜ける感覚を初めて味わった。

座り込んでしまいそうな体を、必死に保つ。

どうして、ここにこの方がいるのか？

探した？

追ってきた？

ホタルを？

まさか。

どうして？

いや、そんなことはどうでもいい。

逃げなくては。

この方から、逃げなくては。

「逃げるな」

ホタルの心中を察したように、シキが言う。

先程の気軽さを含ませた声ではない。

「逃げるなら、有無を言わず、今すぐ抱くよ？」

にっこりと笑って言うそれが、本気だと笑わない瞳が告げる。

空にも似たと思った鮮やかな青が、怒りと悲しみと……そして、

欲望に昏さを宿す。

逃げ切れないだろう。

この方が本気なら、ホタルは逃げ切れない。

「……中にどうぞお入り下さい」

だから、諦めて家への扉を開いた。

失礼に当たるとは思いつつ、ホタルはシキを客間ではなく居間に通した。

この屋敷内で、人が留まれる空間はそこしかない。

他の部屋は、まだ、まともに扉を開けてもいないのだ。

どの部屋を紐解いたところで、楽しげな思い出などないから、と。家具には白い布地が掛けられていて、窓は開け放たれたことがないばかりか、カーテンや雨戸さえもが閉じられたままだ。

シキは、ホタルの背を軽く押して、先に部屋に入れた。

そして、シキ自身は閉じた扉にもたれて立つ。

ホタルの逃げ道を塞ぐように。

ホタルは無言で、部屋の中央に進んだ。

「一つ、言っておくとね」

先に口を開いたのはシキ。

「サクラ様はこの場所を教えて下さらなかったから」

サクラの名が出たことに、ホタルは組んだ自らの両手がピクリと反応したのを見た。

「探すのには結構苦労した」

サクラは、シキにこの場所を言わずにしてくれたのだ。

本当を言えば、サクラにだって居場所を告げずに、去ってしまいたかった。

でも、そんなことはできる筈もない。

決して誰にも言わないで欲しいと、身勝手な願いを告げて去ってきた。

サクラはそれを聞き入れてくれたのだ。

そして、この方は。

「こんなに公爵家の名前を使ったのは初めてだよ。爵位なんて面倒なものだと思っていたが、案外便利なものだな」

貴族然とした空気を纏ってはいても、それをひけらかすところを見たことのない方の言葉。

「それに、こんなにタキをこき使ったのも初めてかもしれない」

驚いて振り返れば、自嘲気味に笑うシキがいた。

そうまでして、ホタルを探したのか。

どうして。

そんな価値、ホタルにはない。

この方には、求めればいくらだって手に入るものがあるだろうに。ホタルなど、一時の気の迷いだと。

それこそが妥当だろうに。

「ホタル」

名を呼ぶ声に、胸が痛む。

ホタルは一度は上げた視線を、再び下に向けた。

「いい加減諦めないかな」

言われたことの意味が分からない。

「諦める？」

問い掛けるつもりはなく、小さく繰り返した言葉に、シキの答えが返る。

「そうだ。君は俺を好きだろう」

また、あっさりとそれを言う。

もう、ホタルの中では否定しようもない想いを。

それでも、ホタルは首を振った。

ホタルの力のない嘘を、シキは容赦なく暴く。

「好きなんだよ……俺の腕の中では、サクラ様の声が聞こえなくなるくらいに」

確かに、いつかは、そんなことがあったかもしれない。

でも、だめなのだ。

それを認めてはいけない。

「ずっと側にいるという約束を破ってまで、サクラ様から離れざるを得ないくらいに」

ホタルは、もう一度、首を横に振った。

声は出せない。

シキを見ることはできない。

首を振る以外のことは、何もできない。

「もう諦めて、俺のところにおいで」

シキが扉から離れる。

足音が近づくことでそれを感じながら、頑なに床を見つめた。

そして、ホタルに手が届くほど近くで、次の言葉ははっきりと耳に届いた。

「君は俺の妻になるんだ」

ホタルは思わず、顔を上げた。

見上げた先に、シキの真剣な顔がある。

「結婚してくれ」

聞き間違いだ。

こんなこと、あり得る筈がない。

この方の妻に？

「ホタル。俺と結婚して欲しい」

もう一度。

それが聞き間違いでないと知り、ホタルは今までになく激しく首を振った。

「そんなこと……無理です！」

硬く強張った喉から、無理やり声を出す。

掠れて情けない言葉は、シキに聞こえただろうか。

「どうして？」

聞こえはしたようだ。

至って柔らかく、気負いのない問い掛けが返ってくる。

だが、ホタルを見下ろす視線は、僅かばかりの笑みもなく。

「どうして……って……だって」

シキは静かにホタルの答えを待つ。

結婚。

この方の妻になる。

子を産み、育て……この方と家族になる？

そんなの無理だ。

「シキ様は、爵位を継がれるのでしょうか？」

以前、タキがそう言っていた。

この方はいずれは公爵家の当主となるのだ。

「そうだな。タキはアルクリシュに行くだろうから……俺が継ぐん

だろうな」

シキの是という答えに、ホタルは返した。

「私、一騎士の娘です」

どんなに優秀だったとしても、父は平民出身の騎士に過ぎない。

そして、ホタル自身は、ただの侍女だ。

「そうだな」

シキは認める。

ホタルは言い募った。

「公爵家に入るなんて無理です」

そう、無理だ。

そんな恐れ多い。

「そうかな？」

「そうです」

だが、シキはため息をついた。

「そんなつまらない理由なら、引けないな」

つまらない理由ではない。

いや、つまらない理由だと言うなら、それでもいい。

納得して欲しい。

身分が違う。

立場が違う。

それを理由にして欲しい。

でなければ。

「ホタル。それが理由なら、俺は君を手に入れるよ」

シキの手が、ホタルに伸びる。

ホタルはそれを避けて、部屋の奥へと逃げた。

シキは追っては来なかった。

だが、狭い部屋の中。

逃げ切れる筈がない。

「ホタル」

ホタルは首を振った。

だめなのか。

それでは、この方は納得してくれないのか。

「私……だめです。だって」

ホタルは諦めた。

シキの言うのとは、違う意味での諦めだ。

「私は騎士の娘ですらないのです」

シキの顔は見れない。

俯いて、ホタルは一気にそれを口にした。

過去、これを聞かせたのはサクラだけ。

祖父だって、気が付いているかもしれないが、話したことはない。

「私の父親は名も分らない遠耳の男です。その人は、北部の男で

……抜けるような白い肌の持ち主だったそうです」

以前、シキが何気なく言った言葉。

『君は……少し北の方の血が入っているのか?』

それは間違っていない。

父だという騎士とは、まるで似てないホタルの真っ白な肌。

これは、北部の民族のみが持ち得るものに違いない。

優秀な騎士の娘だから、今の立場がある。

ユリジアの娘だから、ここに居場所がある。

だから、シキにそれを指摘された時、どれほどこの事実が知れぬ

ようにと祈ったことか。

だが、今、ホタルは自らそれを明かす。

「父は、いえ、貴方の知る優秀な騎士は、母の遠耳という能力を手

に入れて、平民から騎士の称号を手に入れました。でも、それだけ

では満足しなかったのです」

ユリジアという男が何を望んだのかは、分からない。

栄誉や身分に固執しているようには見えなかった。

母やホタルには贅沢な暮らしをさせたが、自身は戦場で過ごすばかり

だった。

でも、あの男は母以上の能力者を望み、手に入れる手段を選ばな

かった。

「ユリジヤは、更に強い力を持つ者を手に入れるために、遠耳を持つ男と母の間に、私を産ませたんです」

まるで血筋の良い駿馬を掛け合わせるが如く。

遠耳の母に、同じ力を持つ男の子供を身ごもらせたのだ。

より遠くを聞く者を。

より遙かを語る者を。

それだけを望んで。

「父は嫌がる母を押さえつけ、北部の男に犯させたのです。私はそうやって産まれたのです」

母は錯乱して、それをホタルに告げた。

それは幼いホタルには意味の分からない言葉だった。

やがて、その意味を知った時。

ホタルは母の呪詛の本当の意味も、また知った。

「母はユリジヤを蔑み、私を憎んでいました」

母は、どうしたかったのだろう。

父以上に母という女は知れない。

望みもしない子を産み落とすことを課せられ、それを成してもなお、男に囚われ続けた女。

彼女は何を望んだのだろう。

自由か、破滅か……それとも、あの男の情愛？

母の想いはホタルには分からない。

ただ、分かっているのは。

「母は、私を呪っていました」

そう、母はホタルを呪っていた。

「何故生まれたのかと。この世に私という存在があることがおぞましいと」

繰り返し、そう告げられた。

「私の体は、母の憎しみと恨みでできているのだとそう言いました」
だから。

「誰を愛することも、誰に愛されることも許さない、許される筈がないと……そう言っていました」

なのに、どうして。

「なのに……申し訳ありませんでした」

忘れてはいけなかったのに。

「私がどんな人間か、私が一番よくわかっているのに」

どんなに心が揺らいでも、自分自身にそれを許してはいけなかったのに。

こんな己を、一時でも誰にも触れさせてはいけなかったのに。

「お許し下さい」

ホタルはそう乞うた。

どうか。

許して下さい。

そして、もう。

このまま。

「……許せないな」

低い声が響く。

静かな足音が聞こえた。

「シキ様？」

顔を上げたホタルが見たのは、近付いてくるシキ。

身が竦む。

知っている顔。

少し前に、知ってしまった男の顔だった。

「お願い……シキ様」

ホタルは首を振った。

ホタルはおぼつかない足取りで後ずさる。

壁が背中当たったが、しかし、近づいてくるシキから少しでも離れようと壁を伝う。

だが、シキはあっけなくホタルの行く先を阻んだ。

「……お願いです。私などに触れないで」

呪われた身。

憎しみと恨みで作り上げられた存在。

そんなおぞましいものに触れないで。

願うのに。

「もう、遅いよ」

シキの手が上がる。

「俺は君を愛している」

もう先はないのに、それでもホタルは身を縮めて、シキから離れようともがいた。

「君は俺が好きだと、一言言うだけで良い」

シキの手が自らの上衣を解き、脱ぎ捨てる。

「そうすれば……どんな理由があっても大丈夫だと、分かせてあげるよ」

衣を取り払った腕が伸びる。

逃げ道はなくて。

「……っいや！」

捕われて、引き寄せられ。

「シキ様！」

お願い。

触れないで。

叫びは、口付けに呑み込まれた。

夏の薄手のドレスは、寝着よりはよほど複雑な作りでホタルを包んでいたのに。

物慣れた男の手にかかれば、なんとも不甲斐なくあっさりと内に隠してあったものをさらけ出す。

一度として会ったことのない父親から受け継いだ白い肌。

おぞましさの象徴の一つのようなそれを、シキの指先が辿り、唇が触れる。

あの夜も、優しかった。

それ以上の細やかさで、余すところなく触れようとでも言うように。

ありとあらゆる場所が、シキに暴かれていく。

「ホタル……愛してるよ」

肌だけでなく。

内までその言葉で埋め尽くすようにと、繰り返される。

「俺が好き？」

幾度目かの問いかけに、薄れゆく意志を奮い立たせて、首を横に振るう。

既に深く繋がる体を、更にシキは引き寄せた。

ホタルは背を反らし、唇を噛み締め。

「ホタル」

残忍なまでに甘い囁きに、ただただ首を振る。

好きではない。

愛してなどいない。

言い聞かせる。

「……っや……あ」

なのに、シキの動きが、ホタルの理性を掻き乱す。

「好きだろう？」

宥めるような。

唆すような。

そして、縋るような問い。

思わず、頷きそうになる。

なんとかそれを押し止め、シキの肩を力の入らない手のひらで押し戻す。

「……お願いです……シキ様……やめて……」

涙が溢れて零れる。

こんなこと、許されない。許される筈がない。

母の恨みと憎しみが、ホタルを通して、シキを侵食し穢していく

かのように思えて。

また、ホタルに罪を重ねさせる。

「ホタル」

シキはふと動きを止めた。

涙で歪む視界の中、真摯な眼差しがホタルを見下ろしている。

「君のどこにおぞましさがあるんだろう？」

乱れて顔を覆う赤い髪が、シキの指先で撫でつけられる。

指先は、額と頬を辿り、何度も口付けを受けて、色付きを濃くした唇に触れた。

「……君のなにかもが、俺に愛されるためにあるのに」
愛されるためにあるなんて。

そんな筈なのに。

だが、ホタルは首を振ることも忘れて、シキを見つめた。

「この身が憎しみでできると言うなら」

シキの指は、ホタルの顎に触れ、首筋から肩を撫でる。

「俺はそれを変えてみせるよ」

そんなことが、できるの？

この身体の隅々までに蔓延る母の憎しみや恨み。

それを変えることなんて、できるのだろうか。

「……君の全部を……俺の想いで満たすから」

貴方の想い。

それで、私の中が満たされる？

そうしたら、母の憎しみは、恨みはどこに行くの？

「他の何も残らないくらい、入り込む隙がないくらい……君を俺の全部でいっぱいにするよ」

そんなことが、出来得るだろうか。

でも。

そんなことができるなら。

「俺が空っぽになるくらい……俺の全部を君に注ぐから」
シキはホタルを抱きしめた。

「だから、君の想いで俺を満たしてくれ」
本当に？

本当に、そんなことが許されるのか。

この身は貴方で満たされる？

この想いは貴方に向けられる？

「俺を愛してくれ」

シキが願いを口にする。

「俺と君の想いだけで……君も俺も存在するよ」

それは詭弁だろうか。

信じて良い言葉なのだろうか。

どんなにたくさん言葉の聞いた耳でも、それは分からなかった。
だけど。

信じたい。

信じてみたかった。

「ホタル」

ホタルはシキを押しつけようといていた腕を、シキの首へと
回した。

「ホタル、愛しているよ」

ぎゅっとシキにしがみついた。

ぼろぼろと際限なく涙が溢れて零れる。

言っても良いのだろうか。

その言葉を。

それを口にして。

そこに何があるだろうか。

「……好きです」

一言。

それだけなのに、ホタルの内から流れていく。
母の憎しみ。

母の哀しみ。

ホタルを長く呪縛し続けてきたものが流れて出て、それらは浄化されていくようだ。

「……っ好き……シキ様……」

シキが言った数だけ返すように。

「ホタル……愛してるよ」

好きです。

愛しています。

その言葉を繰り返す。

そして、言葉の数だけ。

ホタルにシキが満ちていって。

シキがホタルで満ちていく。

飽きることなく抱き合って、気が付けば、窓から月光が差し込んでいた。

少しでも身じろぐと、隣に横たわる腕に引き寄せられて、抱き込まれる。

「ホタル？」

「もう、逃げませんか」

そう言うのに。

シキの腕は緩まない。

「俺と結婚するな？」

好き。

愛している。

それには、いくらでも応えられる。

でも、それは。

「……シキ様、それは……」

できない、と思う。

この身がどんなにシキに満たされたとしても。

やはり、シキとホタルでは身分が違う。

タキだって、言っていたではないか。

ホタルに興味を持つシキを、公爵家跡取りの自覚がないと。

「……頷くまで、離さない」

思い知らすように、腰を抱かれて。

ホタルは素直に胸元に身を寄せた。

トクン、と鼓動が耳に届く。

この音を聞いていると、世界はそれ唯一になる。

「愛してるよ……君は、俺の妻になって……俺に愛されて生きていくんだ」

夢のような未来を、シキが口にする。

ホタルは答えずに、目を伏せてシキの鼓動を追った。

今は、もう何も考えたくない。

この瞬間を、噛み締めたい。

「ホタル？ 眠い？」

ホタルは頷いた。

規則正しく耳元で打ち続けるそれが、長く安眠から離れているホタルの意識を遠くに誘う。

「……眠っていいよ」

シキが言う未来は、きっと来ない。

望まれれば、いくらだって心も身も差し出すけれど。

シキの元で、生きていくなんて。

誰もが許さない。

公爵家の方々や、世間。

それに、タキだって。

ああ、そういうば、タキ様に嘘をついてしまった。

そう思った。

シキ様を好きではないとそう言ったのに。

弁えている、とそう告げたのに。

ごめんなさい。

シキ様を好きです。

愛しています。

きちんと忠告して下さったのに。

ごめんなさい。

「……タキ様……」

申し訳ありません。

ホタルは夢うつつの中で、心からタキに詫びた。

「タキ？」

シキの声がひどく遠くに聞こえる。

「ホタル……眠る前に呼ぶのが俺以外の男ってのはどういうことだろうな？」

そんな弦きが聞こえてきたが、ホタルはもう目を開けることはできなかった。

ホタルの穏やかな寝息に、その眠りが深いものであることを悟り、シキは抱いていた体をそっと離れた。

ラグの上に横たわる華奢な体に、脱ぎ捨てた自らの上衣をかけて覆う。

「……ん……」

ホタルは失われた温もりに戸惑うように身じろいだものの、しかし、それを求める素振りはなく、体を覆う布地を引き寄せながら、丸まるように手足を縮める。

それが、ホタルがどんな風に生きてきたかを象徴しているようで、心が軋んだ。

『息子は言うておりました……ホタルは至宝なのだ』

サクラがホタルの居場所を決して口にしないだろうと確信したシキが、次にしたこと。

その場で主からしばらくの暇の許可を半ば無理やりに取り付けた。タキを捕まえ、暇を得たことと幾つかの頼みごとを伝え、間髪を置かず翼竜に飛び乗った。

行く先は、サクラの実家であるオードル家。

シキはまず、オードル家で庭師をしているという、ホタルの祖父の元を訪ねた。

そこにホタルがいると思っていた訳ではない。

シキが追うことをホタルが想像していたかどうかは分からないが、祖父の元というのは逃亡先としては安直すぎる。

だが、他にホタルの居場所を問うべき人物は思い当たらなかった。

キリングシック国内にあるオードル家には、夕暮れ時には到着することができた。

突然の来訪に驚く妃殿下の美しい姉に非礼を詫び、詳しい話をする間も惜しんで庭師との対面を望めば、聡い彼女はシキの尋常ではない様子に何かを感じてくれたのか、すぐさま庭へと歩き始めた。急く気持ちを抑えて、ピンと伸びた背中の後を歩きながら、己の焦りにも似た慌ただしさがこの屋敷全体を包み込んでいることに気が付く。

そして、今オードル家がこのキキヨウの婚礼と、三女の縁談とに混乱に近い状況にあらうことをふと思い出した。

「こんな時に申し訳なかったね」

再度の詫びに、案内人は女神と名高い美貌を優雅に微笑ませた。

「いいえ。周りが騒がしいばかりで、私やアオイは普通に過ごしますから……ジンはこのあたりにいると思うのですが」

庭に着いて、キキヨウは周りをぐるりと見渡し。

「ジン！ ジーン！」

その名を呼んだ。

親しみに溢れたそれが、ホタルの祖父のこの家での立場を何より雄弁に教える。

「キキヨウ様、確かに私は爺ですが、そんな大声で呼ばずとも、聞こえますよ」

そう言いながら茂みから現れたのは、ホタルとは似ても似つかないがっしりと大きな老人だった。

「そんなつもりではないわ……お客様だから、急いでいたの」

キキヨウは笑いながら、シキに男を示した。

「ホタルの祖父です」

もちろん、面識のない男だ。

頭部は白髪がそのほとんどを占めていたが、ところどころに濃い茶が残る。老人に相応しい、落ち着いた瞳も濃い茶だ。

労働を主としている者らしい日に焼けた骨太の体に、今はまった

く似合わない花束を抱えている。

「ジン、こちらはシキ様よ。カイ様の……サクラの旦那様の側近の方。貴方にお話があるんですって」

キキヨウは極々簡単に、シキをジンに紹介した。

敢えて身分などを告げずにいてくれるのだろう。

それでも、サクラの旦那様……つまりは、キリングシーク皇帝の実弟の側近、という人物は、ジンにとってみればまるで雲の上の存在に違いない。

しかしながら、ジンは僅かなうろたえも見せずに、シキに一礼をした。

「それはお母様の？」

キキヨウが、ジンの持つ花束を指差す。

「はい」

ジンは答えた。

「私が持つて行くわ」

「鎮静効果のあるものを選びましたので、寝室に置いていても大丈夫ですよ」

キキヨウは礼を言いながら、ジンから花束を受け取ると、シキに一礼して館へと歩いて行く。

何を詮索することなく、早々にジンと二人にしてくれる気遣いに、彼女がサクラの姉であることを実感しながら感謝した。

「……ジン・ユリジアと申します」

両手が自由になった老人は、その場に膝をついて改めて礼をする。貴族と庭師。

それは埋めようもなく、歴然とあるものだ。

分かってはいても、ホテルが思うであろう身分の差をまざまざと見せつけられたようで、シキの焦りには苛立ちが加わった。

「立って。丁寧な礼を受けている余裕はないんだ」

それでも声からは、尖った感情をきれいに拭い去って、ジンを促す。

ジンが立ち上がったのを確認するやいなや、シキは本題を口にした。

「ホタルがサクラ様の元を辞した」

深く皺を刻んだ表情が、ほんの少しだけ驚きを乗せる。
そして。

「ホタルは……サクラ様の元を辞しましたか」
何かを納得したように呟いた。

「そんな日はやはり来るのですね」

深い皺に埋もれそうな瞳は庭を、いや、もっと遠くを見ている。
夕暮れ時の赤い空のその向こうを。

シキはその老人を見ていた。

こうして探すように見ても、ホタルとほんの少しも似たところのない老人だった。

「こちらに戻って来てはいないんだな」

ここまでのやり取りでそれを察し、シキは確認した。

「はい……戻ってきておりません」

穏やかな話し方で告げられたのは予想していた答えだ。

とは言え、シキは小さく落胆した。

「サクラ様の元を辞したならば……ここには、私の所には戻らないでしょう」

続いた声には、確信が多分に含まれていた。

両親のないホタルにとって、ただ一人の親しい身内であろう老人のそれに、シキは違和感を覚える。

「あの娘は、私に遠慮しておりますから」

今度の言葉には、寂しさが滲んでいた。
家族だろうに。

遠慮などというものがあるのか。

この老人とホタルの距離感は、何に起因するものなのか。
「居場所に心当たりは？」

この祖父は、ホタルがサクラの元から去ったことをさえも知らない

かったのだ。

そして、年頃の娘が消えたというそれを、うろたえることなく静かに受け止めている。

ますます大きくなる違和感と、ホタルの逃亡の覚悟を感じながら、シキは更に問いを重ねた。

ジンは少し考える素振りをするでもなく、首を振る。

「まったく？」

一つの心当たりもないというのだろうか。

そう思ってから、幼いホタルがここに引き取られ、その後ずっとジンとサクラの側で生きていたことを考えれば、ある意味それは当り前なのだと気が付いた。

「はい。申し訳ございません」

それでも、だ。

「幼い頃、暮らしていた場所は？」

そんな場所くらいなら、思いつきそうではないか。

ジンは困ったように、首を振った。

「存じません……息子が兵に志願し、恐れ多くも騎士の称号を得てからは、縁が途絶えておりましたので」

穏やかな表情に、ふと自嘲の笑みが浮かんだように見えた。

この男の息子。

それはホタルの父親に他ならない。

ジオ・ユリジア。

「息子は草花をいじることしか能のない私を、早々に見限ったようです」

ジンは言って、ぐると庭を見まわした。

つられて、シキも庭に視線を移す。

ラジルの館の庭よりも、色鮮やかな花々が多く植えられているのは、若い令嬢のためにとの心遣いだろう。

様々な彩りがそこかしこで咲き誇りながらも、調和を乱すものがない優しさが溢れる庭だった。

これがこの祖父の人柄だとしたら。

それを見限ったという、優秀な騎士だと伝わるこの男の息子は、一体どんな人間だったのだろうか。

「恐れながらお尋ねいたします。シキ様は……何ゆえに、ホタルをお探しでしょうか」

初めての老人の問いに、シキははっきりと答えた。

「ホタルは私の想い人だ」

ジンは少しばかり、目を見開いた。

驚きを表した表情は、しかしすぐに変化する。

あからさまな哀しみへと。

「あの子は、貴方様から去ったのですね」

サクラ様ではなく。

そう心で続いたのであろう言葉。

多くを語った訳でもないのに、全てを悟ったように言う。

「どうか、追わないでやって下さいませんか」

どうしてか、この言葉を予想していた。

聞け入れる筈のない願い。

それはきつとホタルの願いでもあるだろう。

「息子……ホタルの父親は、変わった力を持っていました」

応えないシキをどう思ったのか、ジンは幾らかの沈黙を経て、突

然そう口にした。

「ジオ・ユリジア」

シキは、その名を呟いた。

戦乱に散った何人もの英雄の中の一人。

ジンは頷いて少し間を置いてから、言葉が続けた。

「その者が持つ能力を見る能力……とでも申しましょうか」

老人は、庭より遠くを見る瞳のまま。

「能力を見る力？」

問いかけることで先を続けさせながら、ホタルの知らない場所で、この話を聞くことに後ろめたさも感じていた。

だが、きっとシキはこれを知る必要があるのだ。
だから、老人は語る。

ジンの視線が、シキに移る。

そして、シキの心中を宥めるように頷きつつ

「その力に、持つ者が気が付いていようといまいと。持つ者がそれを表に出していようといまいと……遠耳を持つ者や千里眼を持つ者、あるいは使い魔なども、どんなに相手がそれを隠していようと、見る事ができていたようです。それから、そんな特殊なものでもない……そう、算術に長けているとか、剣術にぬきんでいる……そんなものも感じとれていたようでした」

聞いたことのない話だ。

だが、もし、本当にそんな能力があったのだとしたら。
人はそれを、どう使うだろうか。

潜在的な能力をも見たというならば。

シキの頭には、それが簡単に浮かんだ。

戦火の惨状に惑う幼い子から、力のある者を拾い上げて。

家を焼かれて、行き場のない者達を集め。

剣術に長けた者を、集めて育てて軍を成す？

算術に長けた者には、学ばせ商いを？

そんな風にして、自らの砦を作り上げていくことは容易に想像ができる。

「……そんな能力がなければ、おとなしく庭師に納まっていたかもしれない」

シキの思考を読み取るようだった。

ジンを見れば、老人の目に少しばかり迷いがある。

シキは視線で先を促した。

「ジオは、他人の能力だけでなく、自身のことも見透かしております」

シキの見つめる先で、老人は今までの無表情でそれをはっきりと口にした。

「己には子を残す能力がない、と……そんなことまで、息子には分かっていたのです」

思ったより、驚きはなかった。

ホタルがジオ・ユリジアの娘ではないことを示す告白を、静かに受け入れた。

それは、ホタルに対するシキの想いを、僅かなりとも揺らがすものではない。

そして、それは間違いなくホタルを頑なにさせる一因だろう。

ホタルはユリジアの娘ではない。

ならば、ホタルもまた、ジオ・ユリジアが見出した遠耳の子供なのだろうか。

男はホタルの能力を利用して伸し上がったのか。

いや、違う。

それでは、少しばかり時間に差異が出る。

ホタルがこの世に生まれた時、既にジオ・ユリジアは騎士としての地位を確立していた筈だ。

「一つ聞いても？」

こんな事実を付きとめたからといって、何の救いにもならない。

それこそが、ホタルが逃げた本当の理由だとしても。

それが、どんなことだったとしても。

知っても知らなくても、シキの想いに変わりはない筈だ。

そう思いながらも、それを尋ねずにはいられない。

「ホタルの母親は……どんな女性だった？」

しかしながら、ジンはそれにも首を振った。

「存じません……息子は一度として、私の前に妻という女性を伴って現れることはありませんでした。どのように知りあったのかも、どこに住まわせておったのかも……何も存じません」

そして、この老人も息子に何も問うことはなかったのだろう。

「一度だけ、ここを訪れて妻子があることを告げて行きました。その時に、息子は言っておりました」

その時を思い出すように。

老人が瞳を伏せた。

シキは言葉を待つ。

やがて老人が瞼を上げた。

「……ホタルは至宝なのだ、と」

「至宝？」

「はい……子を成す能力のない己が、この世に送り出すことのできる、最高の宝なのだ、と」

今度はシキが目を閉じる。

ホタルのあの遠耳。

送り出した？

力を見る男が、その力を駆使して。

ただ遠くを聞くだけではない。

使いようによつては、各国の脅威になり得るあの力。

単なる遠耳とは違うあれば、一人の男が意図的に作り上げたものだ
だということのか。

何が行われたのか、想像をすることは難しくはない。

例えば、戦火で拾い上げた遠耳の男女。

それが在れば。

人はそれを繰り返して、優秀な牛馬を作り上げてきたのだから。

無情に徹すれば……優秀な男の手にかかれれば、それは簡単なこと
だっただろう。

男はそれで良い。

その存在に何を願ったのかは分からないが、目的を遂げた。

だが、ホタルの母は何を思つてホタルを産んだのだろうか。

実の父は？

男の願いに崇高な意義を見つけた？

自ら望んだ？

己らが産みだすその存在を、どう思っていたのか。
いずれにしろ。

それがホタルにとって幸せな状況ではなかったことだけは、今までの彼女の言動から簡単に導くことのできる答えだった。

「……それは、正しかったのだろうか」

正しい筈はない。

思いながら、つい尋ねていた。

目の前の、思慮深い瞳でシキを見つめている老人に。

「どうなのでしょうか」

老人は一度はそう答えた。

しかし、すぐに首を振り。

「いえ、多分、間違っていたのでしょう。他人の能力を見透かす男でしたが……心を見透かすことはできなかったようで」

不意にどこにも似ていないと感じた彼の中に、ホタルを見つけた。彼女を育てたのはこの老人なのだろうと思わせる頑固そうな、それでいて優しい瞳。

「……ホタルは可愛い孫です。あれの幸せを願うばかりで……老い先短いこの年寄りの心残りはそれだけです」

ああ、この老人は。

ホタルを慈しみ、育て上げた者だ。

ホタルが己の血を分けた孫ではないことを。

息子の狂気が作り上げた存在だと知った上で。

それでも、幼子を抱き上げて。

この祖父の愛情と。

サクラからの信頼と友愛で。

ホタルは、闇から救われたのだ。

重く暗いそこから、その二人に救われて。

だが、そこからは動けずにいる。

「ホタルの幸せを願っています。そして……それを分かち合うのが私であることを望んでいます」

シキの言葉に、老人は何も言わなかった。

ただ、深く、深く頭を下げた。

相変わらずホタルは体を縮めるようにして寝入っている。
シキはその傍らに、再び横になる。
ホタルは丸まったまま動かない。

その後、幾人かのホタルやジオ・ユリジアの所縁の人物を探し出し訪ねた。

最終的に、この場所に辿り着いたのは、ホタルをオードル家に送り届けたという人物から聞き出すことができたからだ。

「ジオ・ユリジアは優れた上官でした」

40歳ほどと思われる、柔らかな物腰の男はそう言った。

この男だけではない。

出会った誰もが、ジオ・ユリジアを褒め称えた。

「私は戦で両親を失いました……町のゴロツキだったんです。それをあの方は拾い上げ、生きる術を教えてくださいました」

剣の使い方、算術、読み書き。

「私だけではありません……多くの者が、あの方にそうやって救われたのです」

何十……もしかしたら100を超える子供が、彼によって多くの知識を与えられたのだという。

ジオ・ユリジアは、そうして多くの知識を与えながら、その個人人の優れた部分を見出し導いた。

「誰でも一つ二つは優れたものを持っている……ユリジア様が良く言っていた言葉です」

この男は、過去には兵士でありユリジアの元で戦ったという。

ユリジアが殉死した際に自らも傷を負い、今は町の片隅で子供相手に算術や読み書きを教えているそうだ。

ユリジアが与え、この男が身につけた能力で生きている。

そんな人物に何人も会った。

ある者は言う。

『この世の平和を望み、自らを犠牲にされた方でした』

私欲の少ない男だったようだ。平和な世界を語り、それを実現することに全てをかけていた。

そのために、己の持ち得る力を駆使していた。

それらから見える、ジオ・ユリジアという人物は確かに崇高な理想を掲げた清廉な騎士に違いなかった。

だが、男は間違えたのだ。

『妻子をとて大事になさってました』

そんな言葉も良く耳にした。

妻子を戦地から遠く離れた土地に置き、自らは常に戦火にある。

そして男は、よくよく妻子を気にかけていたらしい。

多分、妻は遠耳を持つ女。そして、その力を引き継ぐ娘、ホタル。気にかけていたのは、妻子という存在か、力のみか。

聞く術はないが、だが、人づてに聞く話の中に、妻という女、そしてホタルにも彼なりの想いがあったのだらうと思われる。

だが、男は間違えたのだ。

掲げた理想の大きさに、目の前にある小さな者達の願いを聞き逃した。

シキはホタルを抱き寄せた。

頑なに丸まっていた手足が緩み、シキの胸元に小さな存在がすり寄る。

「……俺は間違えないよ」

聞こえるか聞こえないかの……ホタルが起きていれば間違いなく聞こえるのだろうが、そんな小さな声で囁く。

「君は俺の宝だ」

だが、ここに在るのは錬金術師が作り上げた秘薬ではない。

ここに在るのは。

「……愛しているよ、ホタル」

君は俺に愛され慈しまれるべき存在だ。

俺の生きる糧になる。

俺の家族となり、俺と共に生きていく。

ホタル、俺は間違えないから。

隣にその人がいる。

これが現実だと知るたびに、涙が出そうな程の幸せに満たされる。

「好きだよ」

囁きに頷く。

抱き寄せる腕に身を委ねることばかりか、自ら縋ることさえ赦され、むしろそれを請われた。

「愛してる」

幾度と繰り返されるその言葉は、その人が言った通り、体の隅々までに蔓延っていた闇を払拭し、真新しく美しい光を注ぎ込むようだ。

いつまでも、こうしていられれば良い。

そう願わずにはいられない。

だけど、そんなことができる筈がない。

この人は帰らねばならない。

多くの使命を持つ人には、在るべき場所がある。

この人を待つ者は、たくさんいるのだろうか。

「シキ様」

シーツの中でまどろむ人の名を呼んだ。

寝返りで返事をし、起きようとしないう様が、子供のようだと少し笑える。

しかし、すぐにその笑みを消して

「シキ様」

もう一度。

気だるげに腕があがり、寝乱れた金髪を手の平がかきあげる。

現れた鮮やかな碧眼に、己の姿があることが不思議であると同時に、手放しがたい喜びに溢れた。

それを抑え込んで、言うべき言葉を胸の内に用意する。

「早起きだね」

ホタルは既に身支度を終えていた。

シキはそれを目に止めて

「……そんな風に身なりまで整えて……何か急ぎですることがあるのか？」

不機嫌な様子で呟きながらシートから伸びてくる腕が、再び白い波に引きずり込もうという意図を持っているのに気が付いて、ホタルはそつと、しかし、確固たる意思を持って身を引き、逃れる。

「ホタル？」

不審げな呼び掛けに、出来る限りにと平静を装いながら、用意したそれを告げた。

「シキ様、そろそろキリングシートにお戻りにならなくては」

シキはシートに包まり、起き上がる意志のかけらもないような顔で「戻るよ」

あっさり答えた。

ホタルは安堵と落胆の吐息を零しかけ。

「君が俺と戻ると言えば、すぐにも」
息を飲む。

この数日の間。

何度もシキはそれを口にした。

『結婚しよう』

『俺の元においで』

そのたびにホタルは首を横に振るう。

だって、できる筈がない。

シキの元になど行ける筈がない。

好きだと。

愛していると。

いくらそれらに頷いても。

「できません」
できない。

どんなに想いを認めても、どうにもならないことはあるだろう。

「なら、俺は戻れないな」

そして、堂々巡りになる言葉の応酬。

こんな風に争いたい訳ではないと、お互いに言葉を止め、口付けで、身体を重ねて。

そうして、答えを出さずに過ぎてきた数日間でもあった。

だが、いつまでもそうしている訳にはいかない。

「お願いです。どうか、お戻り下さい」

「俺は一人では戻らないよ」

ホタルは唇を噛んで、俯いた。

どうしてだろう。

何度とこの会話を繰り返しても、一向に交わらない平行線が続くように思える。

ホタルにあった闇を、シキが光を注ぎ込んで払拭したとしても。

ホタルとシキの間に、歴然とある身分差は失われる筈もない。

それを、どうして、なきもののように振舞えるのだろうか。

「ホタル」

シキが半身を起こす。

近づいてくる気配に後ずさるも、すぐに腕を捕われた。

胸に閉じ込められて、素直に何も遮るもののない温かな素肌に頬を寄せる。

「シキ様が好きです」

でも、貴方の妻になど、なれる筈がない。

「ここでシキ様をお待ちする、というお約束ではだめなのですか」

ホタルは囁くように尋ねた。

シキの腕に、ぐっと力がこもる。

痛みを感じるほどの抱擁の中

「……そして俺は、愛せない女性を妻に迎えるのか？」

その声は残酷に冷たく響いた。

一瞬、シキの言う意味が分からなかった。

だが

「君に想いを馳せながら、愛していない女性を抱いて、愛しあってもいない両親を持つ子を産ませるのか？」

その意味に身体が震えた。

愛し合ってもいない両親？

そこから産まれ出る命。

それは……ホタルのように、母となる女性に疎まれるような？

そんな存在を創り出すことになるのだろうか。

そんなこと。

「シキ様！」

顔を上げて、シキを見やる。

そんなつもりではない。

言いたいが、言えない。

「君が言っているのはそういうことだよ」

シキは穏やかな、しかし笑みのない表情で断言した。

そうだ。

確かにその通りだ。

シキの身分から言えば、いずれは妻を迎えない訳にはいかないだろう。

そして、その女性は、当然のようにシキの子を産むことを望まれるのだ。

「……私は」

何の言い訳ができるだろうか。

身分を口にして、シキの妻にはなれないと言う已だ。

シキの身分故に付いて回る世間のしきたりを否定し得る術はない。

「……シキ様……私は……」

やはり、間違っていたのだろうか。

シキから逃げ続けるべきだったのか。

受け入れてはいけなかったのか。

だが、すべては今更だ。

自ら望んで抱かれたこの腕から、もはや逃げ出すことなどできない。

シキを拒むことも。

この想いを封じること。

できる筈がない。

「悪い……言いすぎた」

シキの腕が、再びホタルの頭を胸元に引き寄せた。

解放することのない、優しいばかりの抱擁だ。

ホタルはそこに顔を埋めて、涙を堪えた。

「君は何にこだわっているんだろうな」

ふとシキが呟く。

「俺を愛してると言うのに……俺が愛してると言うのに……君の縛るのはその二つだけの筈だろう？」

共有する秘密を確認するような問い掛けに、ホタルは頷いた。

過去の暗く重いばかりの呪縛は解き放たれた。

そして、現在のホタルを縛る言霊は、その二つだけに違いない。

「何が君を頑なにさせるのか、俺には分からないな」

本当に分からない？

それとも、もしかして分かってないのはホタルなのだろうか？

「……俺が公爵であろうとなかろうと、戦場で討たれば、ただの屍だよ」

ホタルを抱く腕は、変わらず力強さと温かさで溢れている。

なのに、口から迸る言葉は、ホタルの身を凍えさせた。

「いつ、剣で貫かれるかも知れない。明日にも、牙に引き裂かれるかもしれない。そうしたら、後は大地に還る時を待つだけの骸だ」

ホタルは思わずシキの背に手を回した。

今はここに在ることに安堵できずに、繋ぎとめるように強く縋る。

「嫌です……そんなこと、言わないでください」

言葉だけであっても、そんなことは口にしないで欲しい。

シキがいなくなる。

戦場で。

闇の中で。

動かぬ、冷たいばかりのモノになり果てて。

浮かぶ光景は地獄そのものだった。

「ホタル……本当のことだよ」

シキは優しく、だが、はっきりとそう告げた。

「発つ時はいつだって死を覚悟してる」

「シキ様！」

これ以上強く抱くことなんてできない。

それほどに腕に力が籠る。

分かっているから。

それが、真実であると。

「だから……君の元から向かいたい。君の手で送り出して欲しい」

その言葉は、不意にホタルの脳裏に、過去の光景を映し出した。

ユリジアが出征する時には、日頃決して自ら男に触れることのない母が、必ず支度に手を貸した。

あれは、何だったんだろう。

「私がシキ様を送り出すのですか？」

それは、なんて辛いことだろうか。

ホタルは顔を上げた。

目の前のシキは相変わらず緩やかな穏やかさばかりで。

だが、その瞳は自らの死の覚悟を語る者らしい鋭さと昏さを宿している。

「ああ……だけど、それは最期の別れのためじゃない」

シキの手が、ホタルの頬を包む。

「君の元に戻ると……約束するためだ」

戻る。

私の元へ。

この人が、愛しているという私のところ。

あの男は……

ジオ・ユリジアは、必ずここへと戻った。

295

己を憎む女と、己が作り出した呪われた子供が待つこの屋敷に、どんなに戦場が遠く離れていようと、どれほどの傷を負っていても。

必ず、この屋敷に戻ってきた。

そして、どんなに母が拒もうと、その身を抱き寄せた。

そこにどんな想いがあったか。

ホタルは知らない。

きっと誰も知らない。

それは、あの人達自身でさえ、分からなかったのかもしれない。

だが、ホタルは分かっている。

シキはホタルを愛していると、故に戻るのだ。

そして。

「生きて戻れば君を愛せる。君に愛されることができる」

そして、私はこの方を愛している。

ホタルは腕を伸ばして、シキの首へ巻き付けた。

シキがホタルを受け止めて、なお抱き込む。

どちらが抱きしめているのか。

どちらが縋っているのか。

分からないくらいに。

「俺はそうありたいと……そうあるために、君の元に戻りたいと……

……そう願っているだけだ」

涙が零れる。

尽きることない。

涙も。

想いも。

枯れることなく、溢れ続ける。

「それだけのことなのにな」

そうだ。

ホタルだって、それだけだ。

「……君を妻に迎えるというのは、そういうことだ……それ以外な

んて何もない」

ホタルの胸元に埋められたシキの表情は分からない。

だが、声に苦々しく、苦しげなものが混じる。

「君の言うことは分かるよ。俺の妻になることは、君には辛いことも多いだろう」

ああ、本当は分かっているらしいのだ。

ホタルが頑なな理由を、きちんと分かっている。

分かっている、それでも、ホタルを娶ることを望むのだ。

「それでも……俺は君を手に入れたい。俺の全てを君に与えたい」

ホタルは零れ落ちる涙をとどめようと、深呼吸を一つした。

「これが俺のわがままな願いか？　ならば、君は何を願う？」

胸元のシキの頬に手のひらを添えて、いつもその人がホタルにするように顔を上げさせた。

珍しくもきつく寄せられて皺を刻む、シキの眉間に口づける。

願うことは。

「……貴方のご無事を」

唇を滑らせ、目元に。

「貴方が私の元に戻ってきて下さることだけを」

シキの唇が、キスを返す。

ホタルの首筋に。

浮かぶ鎖骨に。

「……私を愛して下さることを……私の想いを貴方が受け入れて下さることを」

「叶えるよ」

シキの手がまとめてあるホタルの髪を解く。

母親から受け継いだ鮮やかな紅。

嫌いだったそれも、シキが触れれば愛しく思えた。

「君が待っていてくれるなら、必ず戻る」

抱き合いながら、整える間もなく乱れたままのシートに倒れ込む。

「君が待っていてくれるなら、俺は迷うことなく戻るから」

シキが重なり、なお、隙間を埋め尽くすようにきつく、きつくホタルを抱きしめる。

「……ホタル、俺の願いを叶えてくれ」

ホタルは重なるシキの重みを全身で受け止めて。

更に、自分自身の持て得る力全てを以て、シキを抱く。

「はい」

ホタルははっきりと頷いた。

ホタルを抱きしめるシキの身が一瞬慄いた。

「貴方が私の願いを叶えて下さるように」

「君が俺の願いを叶えてくれるように」

それは、契りの誓いのように。

「君の」

「貴方の」

指先を絡めあう。

額を重ねて。

「願いを叶えます」

以前……もうずっと昔の気がする……街で夫人とシキに出会い請われて、このスタートン家を訪れたあの時も、足取りは重かった。でも、あの時とはあまりに状況も気持ちも違いすぎる。

覚悟を決めての来訪とは言え、シキに伴われて屋敷へと足を踏み入れた時は身体が震えた。

「ああ、ホタル」

最初にホタルを迎えたのは、想い人にそっくりな方。

心底安堵したような声と、優しい笑みを浮かべて近づいてくるタキを目にした途端、心苦しさと胸がいっぱいになり、ホタルは深く、深く頭を下げた。

「どうしたのですか？ 顔を上げて」

声もやはりシキによく似ている。

そして、この声に諭すように言われたことを思い出し、お詫びしなければという決意を再び奮い起こして、息を吸ったその時だ。

ボスツという鈍い音と、

「……っぐ！？……」

全くタキらしからぬ呻きが聞こえてきた。

何事かと慌てて顔を上げると、腹部を押さえてうずくまるタキと、傍らに立ってそれを見下ろすシキが視界に飛び込んできた。

この光景は何なのか。

訳が分からず、ホタルは呆然と立ち尽くすことしかできない。

「……っお、まえ！？……」

苦しげに眉を寄せながら、タキが必死に顔を上げてシキを見やっていた。

シキは、静かな様子でタキを見返すも。

「あ、悪い。つい」

どこか褪めた視線と、少しも悪びれない態度で詫びを入れた。

いったい、何が起こったのか。

啞然とするばかりで、タキに声をかけることもできずにいるホタルへと、シキの視線が向けられる。

どうしてか、どこか非難めいたものを含んだそれに、ホタルは身を強張らせた。

「ホタルが眠る前に、タキの名を呼んだ」

このシキの言葉は後になって考えてみれば、人前で軽く口にするには意味深だったのだが、状況の異常さにうろたえるホタルは、この時、ただその意味を考えることでいっぱいだった。

眠る前に、タキを呼んだというそれ。

身に覚えがあるような、ないような。

いったい、いつのことだろう、と考えて、多分、あの時だと思に至る。

「私！」

同時にどこかに飛んでいってしまったお詫びの言葉を思い出した。

ホタルは慌てて、立ち上がりつつも辛そうに身体を折るタキに駆け寄る。

「私、タキ様にお詫びしなければと」

腹部を押さえて背を丸くするタキを助けようと手を差し伸べると、横から飛び出してきたシキの腕に阻まれた。

「シキ様!？」

胸元に引き込まれるようにして抱きこまれて、タキから遠ざける。

もがいて逃れようとするも、力の差は歴然すぎてままならない。

「シキ様! 離して下さい!」

抱き締める、親密過ぎるシキの動作に焦り、訴えるのに。

しかし、シキは更にホタルの腰を腕に捕らえて引き付けた。

「詫びって何だ？」

ホタルの訴えをまったく無視して、問いかけるそれに重なるように

「詫び、ですか？」

タキも、また問う。

ホタルは慌てて、タキへと顔を向けた。

「はい！ タキ様にご忠告頂いてましたのに、己を弁えずこのようなっ……」

シキの腕から離れようと努力しながらも、タキへ答える。

お詫びしなければ。

ずっとそう思っていた。

タキは言ったのに。

シキがホタルに興味を持っている。

お気をつけなさい、と。

あの時、ホタルは、シキに想いはないと答えた。

気をつけると。

己を弁えていると。

なのに。

「申し訳ありません」

心からの詫びを口にするのに、どうしてかタキの視線はホタルの背後に注がれている。

シキに殴られたか蹴られたかした腹が痛むのか身体は前のめりのまま、だが、その面は、どうやら痛みではないもので青ざめているようだ。

「タキ」

シキの低い声が、広々とした客室に重く響いた。

聞いたことない声音にホタルが振り返ろうとすると、今度は前にいる方が

「ホタル！」

これも聞いたことのないような焦燥に満ちた声で名を呼ぶ。

シキの表情を確認することなく、ホタルはタキへと向き直った。体勢を整えてホタルに向き直るタキは、明らかに動揺している。

「何のことですか！？」 申し訳ありませんが、心当たりがありません

ん」

あまりに、彼らしくもない態度に、今度はホタルが焦ってしまふ。
「あのっ、以前、厨房横で……シキ様に気をつけるようにとご忠告を……」

「タキ」

ホタルの言葉を遮る、地を這う低い声。

タキの視線が一瞬ホタルの背後へと上がり、ぎよっとしたように強張ったかと思うと、すぐさまホタルに戻ってくる。

「ホタル！ 違いますよ！」

あまりに常とは違うタキの形相に、ホタルはつい身を引き、無意識に後の人に寄り添った。

「シキをどう思っているかと貴女に尋ねたときのことでしょう！？」
タキの心の荒波が伝わってくる。

ホタルは声も出せず、コクコクと頷いた。

「ああ！ やっぱり誤解してますね。いや、あの時も私の言葉を曲解しているとは思ったんですが」

「タキ」

3度目の呼び掛けは、もはや、それだけで脅迫だった。

タキは引きつった表情ながらも、自らを落ち着けるように大きく深呼吸をした。

「あの時……私の尋ねに、貴女がシキを想っていると、一言言ってくれば事はすんなり行っただけですよ！」

出てきたのは、まだまだいつもの落ち着きとはかけ離れた声だった。

「マアサからは貴女とジンの縁談の相談を受けていましたし、シキが貴女に興味を持っているのは明らかでしたし……私としては貴女の心内を確認した上で動きたかったのですが……」

未だ本来の姿を取り戻せないタキの言葉は、結局終わりの方は心もとなく尻すぼんだ。

ホタルの心内？

そんなものを知ってどうするつもりだったのか。

ホタルはじっとタキを見つめた。

いつもの冷静さを取り戻せないまま、タキはたじろぐように天井を見上げる。

「貴女がシキを想ってくれているなら、マアサには断りを入れて、あとはシキに任せておくつもりだったのです」

そんな風に聞こえる言葉だっただろうか。

むしろ『ホタルに興味あるシキは、公爵家跡取りの自覚がない』と、そうも聞こえるものだったと思うのだが。

もっとも、そうでなくても、自分自身の想いを認めたくないホタルにとっては、否定するしかない状況ではあった。

ホタルとタキは、お互いに妙な気まずさを抱えつつ、黙り込む。

少しの間の後、ホタルの腰を抱く背後の気配が、ふと柔らかくなった。

背中ですれを感じ取ったホタルの緊張が少しばかり解け、それに連なるようにタキの焦燥も消えていく。

「それで、ホタル本人に聞くか？ 年頃の娘相手に、それは浅はか過ぎるだろう」

当代きつての策士に投げつけられる言葉に、容赦はない。

タキは少々決まり悪げだ。

ぼそぼそと。

「まあ、私が悪かったのでしょう。それは認めます。ですが……私はシキと違って色恋事は苦手なのですよ」

そう言ったタキの足元を、ホタルの背後から伸びたシキの足が蹴る。

先ほどは、腹部に入っただけであらうそれを際どく避けて、タキはようやく一心地ついたように微笑を浮かべた。

「とにかく……私は貴女がシキを受け入れてくれるならば、それを歓迎します」

ホタルを抱いていたシキの腕が緩んだ。

背後を見上げれば、いつもの通りに微笑んだシキが、見下ろしていた。

「……これで、少しは君の不安も和らぐのかな？」

極めて軽妙な口調ながら、そこに本気の問い掛けを聞き取って、ホタルは強張るばかりだった頬を僅かながら緩めた。

「不安？」

タキが尋ねるのに、シキは困った表情を見せながらそれを明かす。「このお嬢さんはね、身分差とやらが気になってしょうがないらしい」

タキが片方の眉を上げて、ホタルを見やった。

それは、とてもシキに似た表情で、今度はホタルが少しばかりたじろぐ。

「それは……いくらお前が奮闘したところで、どうしようもない不安だろうな」

シキは嫌そうに眉を潜めた。

「不本意だが、否定できない」

そっくりな二人に眺められて、ホタルはなんとも居心地の悪さを覚えた。

責められている風ではない。

なのに、とても、自分が悪い気がするのはどうしてだろう。

だいたい、身分差を気にするのは当たり前だと思うのだ。

揃いも揃って、それが何でもないような風をするこの方達が特別だろうに。

妙な静けさを保つ部屋の向こうで、サラサラと優雅にドレスを操りながらも、忙しくこちらに向かう二人分の足音がホタルの耳に届く。

やがて、足元の忙しさをそのままに、早いリズムのノックが響いた。

「ホタルが来てるんですって？」

この方は、いつ、いかなる状況においてもこういう登場の仕方を

なさるのだ。

部屋に充滿していた珍妙な緊張感を見事なまでに打ち碎き、ホタルにこれまた一風変わった感想抱かせて現れたのは、タキの愛妻であるアイリだった。

その背後から、満面の笑みを浮かべて、スタートン夫人が顔を出す。

「ホタルさん、久しぶりね」

「……奥様、アイリ様には、ご機嫌麗しく……」

ほとんど反射的に、膝を折って挨拶をしようとするのを、アイリがあっけらかんと阻止する。

「ああ、もう、そんな堅苦しい挨拶はいらないわ。顔を上げて」

勢い良く言われてしまえば、中途半端な挨拶を置いてきぼりにして、ホタルは顔を上げるしかない。

アイリは相変わらず、華々しく美しい。

たった一度しか会ったことがないにも関わらず、旧知の友人であるかのように懐かしげに微笑みかけて下さったのだが、どうしてかそれが強張った。

アイリは、思わず見惚れる程の鮮やかな金の瞳を見開いて、じつとホタルを見つめる。

何か、まずかっただろうか。

しかし、深く考える間もなく、スタートン夫人がホタルの手を取った。

「いくら貴女にお会いしたいと言っても、シキもタキもちつとも会わせてくれないのよ」

恐れ多い言葉と、ぎゅっと握られる手のひらの強さに、ホタルは返す言葉もなく恐縮するばかりだ。

こんな風に親しげにしては下さっていても、ホタルがシキに嫁ぐなどと聞けば、どのように驚かれることか。

つい先ごろまで、精神的に不安定だった方が受ける衝撃を思うと、ホタルの心は不安でいっぱいになる。

「もういくらでも好きな時に会えますよ……いえ、しばらくはこの屋敷に置き留めるつもりですし」

だが、シキは、世間話を話すようにサラリと、それを夫人に告げた。

それは初耳のホタルも驚いてシキを見やった。

「何を言っているのかしら、この息子は？」

夫人の柳眉が寄せられる。

ホタルは、夫人に握られた手をそっと引こうとした。

だが、思いの外、強く握られていて離すことはできない。

「ホタルを妻に迎えます」

耳に届いた短い単語に、身体が震える。

ホタルがシキの妻になる。

それは、この母君にどんな風に聞こえたのだろう。

公爵家の後を継ぐ息子が、一介の侍女を娶るというその言葉。

「……なんですって？」

夫人は、シキをじっと見て、問いを返した。

「ホタルと結婚します」

シキは、またもすんなりと答える。

何の気負いもないそれに反して、ホタルの身体は強張るばかりだ。

「結婚！？ シキと！？」

シキの言葉に派手な反応を示したのは、タキの傍らにいたアイリだった。

ホタルに駆け寄ってくると、そのままの勢いでホタルの肩を掴む。

「シキで良いの！？」

考えてみれば、失礼な物言いだったのだが、その時のホタルにそれに気がつく余裕はない。

夫人に手を、アイリに肩を囚われて、頷くこともできずに俯くばかりだ。

「ホタルさん」

そんなホタルの手に、強い圧迫感。

夫人が捕えたホタルの手を、ぎゅっと握ったのだ。

「なにもこんな息子に嫁がなくても、貴女なら引く手数多でしょう？」

ホタルは顔を上げられないまま

「私のような者が申し訳ございません」

何度も心で唱えたお詫びの言葉を、必死に声にする。

覚悟を決めて、ここに來たのだ。

「でも、私、シキ様のお側に置いていただきたいのです」

心を奮い立たせて、顔を上げ夫人にそう告げる。

ホタルの耳は、今まで数えきれないほどの覚悟を決めた声を聞いて來た。

それは、どんな小さな覚悟でも、どんなに切羽詰まった覚悟でも、同じようにホタルの耳に響き渡った。

固く、熱く、迸る声。

今のホタルの声もまた、同じ。

覚悟を決めた者の声だ。

夫人はしばしホタルを見つめた。

双子と同じ彩りの瞳には、もちろん驚き。

やがて、その彩りが優しく和んだ。

「……本当に？」

そう尋ねてくる。

ホタルは頷いた。

「はい」

それだけの返事。

でも、とても勇気のいる言葉。

そして、やはり覚悟を秘めた固く熱い声。

「本当にシキに嫁いでくださるのね？」

ホタルの手を握る夫人の手に、なお力が籠る。

そして、優しく和んだ瞳が、きらりと光った……気がした。

「タキ」

夫人は、何も言わずに状況を静観していた息子の一人を呼んだ。「ボタンにホタルさんのお部屋を準備するよう伝えてちょうだい」ホタルは今後、このボタンという名の者に、とても世話になることとなる。

だが、今のホタルにとっては、知らない名前だ。

「分かりました」

タキが答えながら、扉へと向かう。

そのタキの背中に、夫人は追加で注文を出す。

「私の続きのお部屋を、ね」

タキは足を止め振り返り、夫人を見つめた。

そして、その視線がホタルを通り越し、この状況をやはり静観していたシキへの到達する。

タキの視線を辿るようにして、ホタルの視線が、夫人の視線が、シキを捕えた。

「母上」

シキは眉を寄せた。

そうすると、先ほど柳眉を寄せた夫人の面影が、そこに現れる。

「なあに？」

ホタルが返事をする夫人に目を向ければ、その方はにっこり、と微笑んでいる。

その笑みも、また双子を彷彿とさせた。

人を誑かすような、煙に巻くような……あまり、よろしくない時の笑みだ。

「ホタルさんはご不満？」

問われて、慌てて首を横に振る。

この家に入ることを受け入れてもらうだけでも恐れ多い。

何一つ、不満があらう筈もない。

「私は不満ですよ」

シキが更に眉を寄せた。

「そう？でもね、まだ、結婚した訳ではないのだもの。正式に結婚

するまでは、ホタルさんは、ラジルからの大事なお客様よ。貴方から死守する義務が私には生じるの」

ここにきて、ホタルはようやく夫人が何を心配しているかに気が付いた。

途端に、なんだか気恥ずかしく、先ほどの違う意味で俯いた。

「……貴女の続き部屋はやり過ぎでしょう？」

シキ様、もう抗議しないで下さい。

そんな願いも言葉にできず、心で訴える。

夫人はホタルの手を離し、シキへと近付くと、びしっと指先を息子の鼻先に突き付けた。

「貴方の今までの素行を思えば、私と同室にしたいくらいです」

「母上！」

続く親子の攻防。

どうすることもできないホタルの横で、アイリが小さな笑いを零した。

ホタルが顔を上げれば、とても嬉しそうなアイリと視線が絡む。

「さつき、ホタルを見てびっくりしたわ」

アイリは笑みを深くした。

先ほどホタルを見つめたアイリの表情は驚きだったのか。

何に、驚いたというのだろうか。

「前に会った時の貴女は、かわいいばかりの女の子だったのに」

それは去年の夏のこと。

まだ、シキへの想いをはっきりと自覚していなかった頃の話。

「もう、違うのね」

そう、違う。

もう、ホタルはあの頃のホタルではない。

「シキもさつきは違ってみたのだけれど」

言いながらアイリの視線は、なおも母親に食い下がっている往生際の悪い男に向けられた。

「式はいつ頃にしましょう？」

「そんな制約があるなら明日にでも」

親子の攻防戦。

アイリは首を傾げた。

「気のせいだったのかしら」

ホタルもまた、シキを見た。

ホタルの視線に気が付いたのか、シキが母親からホタルへと顔を向けた。

そして、困ったというように。

でも、柔らかく静かに。

微笑んだ。

「ううん、やっぱり変わったわ」

アイリが呟く。

どんな風に？

あの方は。

私は。

どんな風に変わりましたか？

聞いてみたかったのだが。

「明日は無理ねえ。ウェディングドレスだってあつらえなくてはいけないし」

夫人の発言に、勢いよく手を上げたアイリには聞くことができなかった。

「はい！ 私と一緒に選びます！」

どうやら、アイリの興味ある話題が飛び出しらしい。

「ドレスはぜーったいカルフです」

著名なドレス工房の名を口にしながら、アイリが夫人に近付いていく。

入れ替わるようにシキが夫人から離れる。

「そうねえ。やはりそこよね……調度品は……」

聞こえてくる会話に、ホタルへと近付きかけていたシキが、足を止め振り返って答える。

「家具類は、エリシカで。カノンに予約済みですから」
だが、シキが会話に加わったのはそこまでだった。

以降は、主役である筈の二人に見向きもせずに、二人の女性の話は盛り上がっていく。

シキがホタルの横に立ち、見下ろし微笑んだ。

ほら、大丈夫だろう？

そんな声が聞こえた気がした。

ホタルも笑みを返した。

この屋敷に一步踏み込んでから、ずっと固まっていたものが溶けて流れていく。

「……ありがとうございます」

自然と、そう言っていた。

貴方が、闇から私を救ってくれた。

貴方が、立ち竦むだけだった私を先に導いてくれた。

だから、今、ここにいられる。

こんな幸せがこの身に訪れるなど、思いも寄らなかった。

「それは……こちらこそ、かな」

シキが言う。

「覚悟を決めてくれて、ありがとう」

ホタルは首を振り、もう一度口にした。

「ありがとうございます」

これは、大騒ぎの方々に。

当人達をほったらかして盛り上がるご婦人たちには、聞こえていないだろうけど。

でも。

ありがとうございます。

夫人に、アイリに、タキに。

本当にありがとうございます。

サクラに、祖父に。

今まで、ホタルを受け入れてくれた全ての人に。

ホタルは何度も繰り返した。
ありがとうございます、と。

翌朝、シキはラジルの屋敷に向かっていた。

ホタルを探し出し無事に連れ帰ったからには、早々にそれを主君とその妃に報告すべきだろう。

しかも許しを得たとは言え、随分と長い暇を過ごしたのだ。

しばらくは激務を覚悟しての出仕だった。

しかし、そんな状況とは裏腹に、いつもならば馬を駆って数分の道のりを、シキは馬車でゆっくりと進んでいた。

一人ではない。隣にはホタルがいる。

「お会いして、直接お詫びとご報告がしたいのです」
出掛けようとしたシキに、ホタルはそう願い出た。

その気持ちは当然のものだろう。

しかし、だ。

迷うシキだったが

「ホタルさんの主人はサクラ様なのですもの。早々にご挨拶しなくては礼に反しますよ」

母からもきっぱりと言われてしまった。

二人に強く請われれば、否とは言える筈がない。
だが。

しかし。

正直な心情を吐露すれば、ホタルをサクラに会わせるのは、もう少し先延ばしにしたいところだった。

身も心も、ようやく手に入れたばかりなのだ。

ホタルの心を疑う気は毛頭ない。

ないが、あの妃は特別だ。

今ここで、あの強敵に引き合わせたら、ホタルの心は再びサクラの側に寄り添い、離れたくないと望むかもしれない。

そうになったら、どうやってホタルを取り戻せば良いのか。

などと、考えて。

一体、己はいつからこんな弱気な男になったのかと呆れ、自らを奮い立たせて馬車へと乗り込んだのが、数分前のこと。

馬車は一定の速度で動いている。

だが、スタートンとラジルはさほど離れてはいない。

あともう少し揺られていれば、到着してしまうだろう。

ちらりと隣のホタルを見遣れば、そんなシキの心中などまるきり知らぬげに、サクラに会えるのが嬉しいと上機嫌だ。

その様子は常にも増して愛らしく、シキとしては嬉しいやら腹立たしいやら。

「シキ様？」

馬車に乗り込んでからずっと黙りこくっていたシキを、ようやくのようにいぶかしんだらしいホタルが、覗き込むようにして声をかけてくる。

昨夜から涙腺が緩みっぱなしの古参の侍女が、『シキ様の婚約者の様の装いをお手伝いすることができると、またも感涙にむせびながら結いあげたホタルの髪は今までにない華やかさで、ホタルの細い項や首筋を際立たせている。

明るい萌黄色のドレスから覗く肩と鎖骨に色香を漂わせながらシキを見上げてくる様は、無邪気なだけにタチの悪い誘惑だった。

このドレスの選択は母だろう。

さすがだ。敵か味方は知れぬが、母は母。

シキの好みをしっかり把握した上での、今日のホタルの装いだろう。

しかし、宣言通りに自らの部屋の隣に婚約者の部屋を用意させ、がっちりガードを固めておきながら、シキを煽るようにホタルを着飾らせて目の前にちらつかせるとは随分と意地の悪いことだ。

「シキ様、どうかなさいましたか？」

黙って、じっと見つめていると、ホタルは居心地悪げに身を引いた。

「……嬉しそうだな」

嫌みっぽい口調になってしまった。

しかし、ホタルは首を傾げて。

「嬉しいです、けど」

何がシキの機嫌を損なっているのか、本当に分からないようだ。

シキはプイッとホタルから視線を逸らした。

まっすぐにホタルを見て発言するには、あまりに大人げない言葉だと自覚がある。

「会わせたくない」

それでも、言わずにはいられない。

「はい？」

ホタルはきょとんとシキを見つめた。

それを逸らした視線の隅で確認しながら。

「君をサクラ様に会わせたら……離れられなくなりそうじゃないか」
ここで、すぐさまにこれを否定してくれたなら、シキの機嫌もいくらかは上昇したかもしれない。

が、しかし、残念ながらホタルは失敗した。

「……そんなこと……ありません」

ぼそりと返ってきた返事はかなり精彩にかける。

その正直さに笑いたいような、やはり本人もサクラから離れられないかもしれないと幾らかは思っているのだという事実に泣きたいような。

「……今の間は何かな？」

ひとまずは、そんな風で機嫌直滑降をアピール。

そして、これではあまりに大人げないと、深呼吸をひとつしてから、大人の自分自身を呼び起こす。

「俺はサクラ様がどれくらい君の中で大きな存在か知っているよ」
穏やかな口調を心がけて。

「君が今どれだけサクラ様に話をしたい思いでいっぱいとも理解している、つもりだ」

そうだ。

分かっている。

何もかも承知して、ずっと傍らにいたのはあの方だ。

ホタルを救おうという意味ではなく、ホタルの力を利用しようという意図もなく。

ただ、極々自然体でホタルの側にいてくれた存在。

それはホタルにとって何よりの救いだっただろう。

今、ホタルが自分自身の解放を誰よりも伝えたいと願う相手はサクラに違いないし、ホタルの変化を何より喜ぶのはサクラであろう。だが、しかし、分かるからこそ、この行き場のない嫉妬心だ。流した浮き名は数知れず。嫉妬されることに慣れてはいても、元来の執着心のなさから、嫉妬することにはほとんど無縁な色恋沙汰をこなしてきた。

よもや、今になってこんな感情を、しかも女性相手に持つことになろうとは思ひもなかった。

とはいえ、会わせない訳にもいかないことも、理性が承知している。

「せめて、もう少し時間を置きたかったな」

少しばかりの足掻きで、そう締めくくれば、ホタルはじっとシキを見つめてきた。

そういえば、昨日スタートン家に到着して以降、キス一つしていない。

珍しくも淡いピンクの紅を引いた唇に口付けたい衝動に駆られた時、それが声を紡いだ。

「それはどれくらいですか？」

それが『もう少しの時間』を尋ねているのだと気が付き、そこを突くのかとホタルの妙な生真面目さがおかしい。

少々ずれているようにも思える問いに、幾らかの不機嫌を取り払いながらシキは適当な時期を挙げる。

「結婚式のと、とか？」

昨夜、母との話し合いの結果、それは次の春にと決まった。

シキとしてはさっさとホテルを妻とし、新婚生活を堪能したいところではある。

だが、婚約時期はある程度持つべきという母の常識的意見に、あちらこちらにホテルを披露しなければいけないという父の政略的意図も加わり、これはなかなか覆しがたいと判断して、強固な反抗は止めた。

それに、他の理由もあった。

この秋には、キキヨウ・オードルの結婚式が執り行われる予定になっている。

そして、これは内々の話ではあるのだが、近くアオイの興入れ先も決まる可能性が高い。

何かと騒がしい主達の周りに、シキとホテルの結婚という大事を加えるのはあまりに酷だと判断したのだ。

時期的には、不満はあれど無難な線だと納得してはいた。

「そんなに待てません！」

それは、ほとんど反射的な答えだったろう。

故に、かちん、ときた。

何故なら。

「……日を決めたときはそんなこと言わなかったな」

シキと両親が顔を突き合わせて話をしている間中、ホテルは、その時期について何ら自らの意志を口にせず、ただただ従う意思を見せていた。

日が決まった後も、不満げな様子を見せることなく、両親に礼を述べるばかりだった。

シキにしてみれば、母の妨害が半年以上も続くという、拷問の始まりを意味しているというのに。

「やっぱり、会わせたくない」

再び気分は最悪だ。

「シキ様！」

どうやら、自らの失言に気がついたようだ。

ホタルは、座席から腰を浮かさんばかりに身を乗り出して、シキの胸元に手を添えて訴えてくる。

「あの！　だって！」

言葉がうまく見つからないのだろう。

多分、何を言ってもサクラ大事、サクラに会いたい、という思いばかりが溢れてしまうから。

それを分かっている、黙って待つ自分も、母に負けず意地が悪い。

「……ごめんなさい」

とうとう、ホタルはそう言って俯いてしまう。

これは、いじめ過ぎた。

シキは胸元のホタルの小さな手を、手のひらで包み込んだ。

「悪かった。　ちょっとした大人げない嫉妬だ」

顔を上げないホタルの頬に手を添える。

ホタルの手がきゅっとシキの衣を握り、ふわりと身体が揺れたかと思うと胸元に滑り込んでくる。

「……これから、ただでさえ母の妨害で君に触れられないだろうに」
本人にはそうだという意志がないのは重々承知している。

だが、密閉された空間で、こうも素直に身を委ねられては、誘われていると判断しても仕方がないのではないか。

「これでサクラ様が君を抱きしめたら……俺はどうやって応戦すれば良いのかな？」

シキは寄せられた身を、腰に手を回してさらに引き寄せた。

そして、柔らかな頬に唇を触れる。

「……シキ様？」

多分、その手のことに疎いホタルにとってみれば、馬車の中でシキが何らかの行動を起こすなどとは思ってもみないことなのだろう。

だが、シキにしてみれば場所など、どうでも良い。

ホタルが身を強張らせながら、離れようと身じろぐ。

しかしながら、そんなことを、許す訳がない。

ホタルから近づいて来たのだから。

そんな気はなかったなんて。そんなつもりではない、なんて言い訳は知らない。

「ホタル」

唇を寄せると、シキの意図を正確に察知したホタルの手のひらが自らの口元を隠して覆う。

「だめ、です」

僅かに頬を染める様が、既に幾度と抱き合ったとは思えないほどに初々しい。

しかし、物慣れた男にとって、その制止は誘いにも等しい。

シキは、口元のホタルの手のひらに口付ける。

「だめ？」

やんわりと手のひらを退けて、更に求めて近付けば、触れる寸前で「紅が取れるからだめだとボタンさんが……」

忠告されているのだと告白する。

古参の侍女は、このホタルの姿を見て、シキが大人しくしている筈がないと読んでいたらしい。

しっかりと、ホタルに御進言下さったようだ。

それにどんな顔でホタルは返事をしたのか。

少し見てみたかったと思いつつ、ここはシキを幼い頃から世話してくれているボタンへの敬意を込めて、唇へのキスを諦める。

「分かった」

そうは言っても、抱き寄せた愛しいばかりの娘をこのまま離せる筈もない。

少し前までは少女と見間違えられることも少なくなかったとは到底思えない、鮮やかな女性に変貌した想い人。

「これで我慢しておくから……おとなしくしておいで」

シキは呟きながら、惜しげもなく晒され、惑わす色香を零れ落とし続けているホタルの首筋と肩に唇を這わせ始めた。

馬車が止まったことに気がつく。

到着してしまったのか。

ホタルにサクラを会わせたくない故に、道のりを短く感じていた筈なのだが。

途中から確実に理由は変わった。

馬車の外の御者から、到着しましたと声がかかる。

分かったと答えを返しながら、名残惜しさに手離し難いのを、これが最後と言ひ聞かせ、ホタルの耳元に口付けた。

「……っも、や」

か細い声が、腕の中でぐったりとしてしまったホタルから零れる。ホタルが本当に大人しくしていたのを良いことに、少々、調子に乗りすぎたらしい。

唇以外なら良いだろうとばかりに、晒す肌の至る場所に執拗な程のキスを降らせてしまった。

途中から、ホタルから甘い吐息が漏れ始めて。

止めて欲しいと懇願する声が混じって、でも、それが誘いにしか聞こえなくて。

気がつけば、膝の上にホタルを乗せて、まるで情事の如く色付く肌を慈しんでいた。

「シキ様の馬鹿」

口付けが途絶えて少し。

ようやく落ち着いて来たホタルの、しかしながら潤んだ瞳が、それでも必死にシキを非難している。

「大丈夫。痕はつけてない」

ついでにドレスも、己の衣も乱れていない。

我ながら、よく腕がさずに堪えたものだと感じるのに。

「そういうことじゃないです!」

涙目のホタルからは、厳しく叱責を受ける。

それを得意の笑みで交わし、

「悪かったよ。ほら、サクラ様に会うんだろう」

かなり惜しいが、膝から降ろして、少しだけ髪とドレスを整えてやってから馬車の扉を開ける。

これも古くから仕えている御者がほっとしように恭しく頭を下げるのを、何をしていたかばれているのだらうと思いつつ、それはホタルには内緒だと心に決めた。

手を貸して、多少おぼつかない足取りのホタルを馬車から降ろしながら、ふと頭上に気配を感じ、シキは顔を上げた。

大きな羽を広げた黒い影が旋回している。

グル。

イトの遣い魔だ。

何かあったのか。

妙に胸がざわめいた。

「シキ様？」

シキの様子に気がついたホタルが、その視線を追って空を見上げる。

「……鳥、ですか？」

遠目には鳥にしか見えないだろう。

勇壮にも見える、だが、決して歓迎できるものではない姿。

「いや、イトの遣い魔だ」

隠しても意味はない。

この胸騒ぎが予兆だとするならば、シキはホタルとの穏やかな一時をしばらく手離すことになるだろう。

答えを聞いて、ぎくりとホタルの身が強張った。

「おいで」

シキはホタルの手を取り、自らの肘に導く。

何かあったとしたら。

シキ自身が、再び血に塗れる場所に向かわねばならない状況ならば。

今この時に、ここへとホタルを連れてきたのは、正解だったかもしれない。

そんな風に思いながら、久しぶりとなる屋敷へと足を踏み入れた。

シキの予感に残念ながら的中したようだ。

一見したところ屋敷の内は、常と何ら変わりがないように見える。しかしながら、そこかしこにピンとした奇妙な緊張感が張り巡らされ、それは一步一步奥へと進むにつれて顕著に肌を刺し始める。

シキがありがたくもない確信を得るのと同じくして、腕に添えられていたホタルの手が、きゅっと握られた。

「……何か聞こえるのか？」

遠耳の娘は、シキより先に何かを聞き付けたのか。

内容ではなくその心中を慮って、尋ねてみたが、ホタルは首を振った。

ならば、シキと同じなのだろう。

気配。それだけで、この屋敷に、今、何かが起きてることに気がついている。

戦の渦中でシキが生きるために身に付けたそれを、この小さな娘に備わっていることに、ふと哀しさを感じ、なお愛しさが募る。

そのホタルの緊張が、ストンと落ち去る。

握る手のひらの力でそのことに気がついたシキの耳に、抑えきれない焦りを含ませた足音が聞こえてきた。

「ホタル！」

そして、声。

出所を探せば、階段を駆け下りてくるサクラの姿が目に入った。

「サクラ様！」

シキの腕からスルリと手が離れ、ホタルがサクラへと向かって走り出す。

一抹の寂しさはあるが、しかし、それを引きとめるほど狭量ではないつもりだ。

と、思う端から。

嫉妬せずにはいられない。

サクラの手と、ホタルの手が、感心するほどに同じタイミングで伸ばされて、お互いを抱き締めあう。

一瞬の戸惑いもない二人の動作に、シキはつい苦笑いを零した。

「サクラ様！　ごめんなさい！」

ホタルの目からぼろぼろと涙が溢れる。

サクラの指先がそれを拭う。

サクラに涙はなく、ただただ安堵に満ちた笑みがあるだけだ。

「お帰りなさい」

涙を拭う指先は、それが止めどないことに諦めて、腕はホタルを強く抱きしめた。

そして、その視線がシキに向かう。

ほっとしたように。

祝福するように。

惑いのない微笑みを向けられる。

まだ何一つ語っていないにも関わらず、この妃が大凡を間違うことなく把握しているのだろう。

敵わないな。

シキは降参する。

そして、主君へのものと寸分変わらぬ、敬意を以て深く一礼をした。

それから、屋敷はちょっとした騒ぎになった。

「ホタルさん！？」

ホタルの姿を見つけたマツリが大きな声でその名を呼び、屋敷に来訪を告げる。

ホタル自身は知らぬこととはいえ、今回の失踪の折りには、血相を変えたシキにその所在を詰め寄せられ、半べそで知らないことを告げた少女は、その後も随分と気を揉んだのだ。

ホタルがいなくなったことで、仕事は増えた。

よく分からないことがあっても、皆、忙しくて聞くに聞けない。それより何より、あんなにシキ様が顔色を変えてお尋ねになるなんて、いったいホタルさんには何があったのだろう！？

多大な心配や不安はマツリから幼さを取り除き、元より大人びていた容貌は物憂げな風情に彩られ、美しさを際立たせている。

「マツリ！」

しかしながら、ホタルが名を呼べば、バタバタと騒がしく駆け寄って来る姿は、相変わらずの不作法ぶりで、しかも、勢いそのままに抱きついてくる様は幼子以外の何者でもない。

「どこに行ってたんですか！？ 心配したんですよ！」

ぽろぽろと涙を流しながら訴えてくる己よりも背の高い娘の頬を、先ほどサクラがホタルにしたように撫でてやりながら、幾度と詫びを入れているとあちらこちらから使用人達が集まってくる。

あつと言う間に、ホタルの周りは見知った顔でいっぱいになる。

心配したことを口々に訴えながらも、帰還を喜ぶ声が屋敷の一角に満ち溢れ、それに、胸をいっぱいしながら、ホタルはサクラを見遣った。

サクラは、笑みを深めて頷いた。

言葉にしなくても、もう、大丈夫だと分かってくれている。

幼い頃から、ホタルに対して何一つとして特別なことを求めなかったその人は、ホタルの変化も、また特別なことではないようにふんわりと受け入れて下さるのだ。

ホタルは視線をシキに向けた。

小さな人の群れから一步離れて、ホタルを見ている。

ホタルの視線に気がつくど、やはり、こちらの方も全て承知の表情で頷いた。

しかし、その表情がふと強張る。

すぐにその理由は知れた。

奥の間から、タキが顔を出したのだ。

手招くでもない双子の元に、シキは静かな足取りで近付いて行き、

その部屋へと入っていた。

嫌な予感。

周りを暖かな空気に包まれながら、ホタルの心には重いものがコロンと転がった。

「さあさ、皆仕事に戻りなさい」

一通りの挨拶やら恨み言やらが済んだところで、マアサがパンパンと手を打った。

そして、屋敷の中では、一見いつも通りの日々が始まった。

無言のタキに呼ばれて、シキが入った部屋は執務室だ。

この屋敷にいる時は、シキが最も長くいることになる部屋は、以前と何も変わってはないない。

調度品も。

独特の張りつめた空気も。

そして、この部屋の主も。

「随分と良いタイミングで帰ってくるものだな」

部屋の奥に立っているカイは少しばかり皮肉めいても見える笑みを浮かべながら、シキを迎え入れた。

「そうは思っただけなら、長く暇を頂いた心苦しさも幾分軽くなりますよ」

軽口で答えながら、しかし、やはり何かしらが起きているのを実感する。

「目的は無事に達してきました。何なりとお申し付け下さい」

短い言葉で経過を報告すれば、カイは頷きでそれに応える。

ひとまずはここまで。

カイが視線でタキを促した。

「アオイ様がイルドナスの王に請われて、内々にかの国を訪れているのは知ってるな？」

その問い掛けが、この嫌な予感のどこに繋がるのかまだ分からないながら、シキは頷いた。

アオイ・オードル。

サクラの妹だ。

元より天使とも呼ばれる極上の容貌で世間に名を馳せていた美女は、今やこの国一番の渦中の人物であると言って良いだろう。

誰もが目を奪われる美しい娘。

それだけでも妻にと望む男は後を絶たぬのに、軍神の寵妃の妹という付加価値の付いた彼女は、国の内外を問わず、少しなりとも地位や能力の自負ある者達にとって、この上なく魅力的な存在となった。

こぞって、ひれ伏し願う男達を前に、野心のある娘ならば、さぞかし世間を騒がせましたのだろう。

だが、しかし、シキの知るアオイという娘にはそういった気配が微塵もない。

幾度か見たことのあるアオイは、まさに……そう、天使だ。

噂には聞いていたアオイの姿を実際に目にした時は、その呼び名になるほどと納得した。

確かにアオイの美しさは尋常ではない。

だが、天使というそれは、決して容姿だけのことではない。

辺りがどんなに喧騒に塗れていようとも。

取り巻く者達に、どんな思惑が溢れていようとも。

いつも穏やかな笑みを浮かべ、人の世のことは預かり知らぬ風に、泰然とそこに佇んでいる。

穢れを知らない、知ろうともしない。

皆がいる世界とは、何かを隔てた向こう側にいる。

アオイ・オードルはそんな娘だった。

そのある意味人間離れた風情が、アオイを天使にするのだ。

「そのアオイ様を、イトがゲルンの森で拾ったそうだ」

タキが続けた言葉の意味を、掴み損ねた。

オードルの天使……いや、今や、キリングシークの天使と呼ばれる娘。

呼び名が、一貴族名から国を掲げるまでに変化しように、アオイへの求婚もまた、国内の有力貴族に留まらず、近隣遠方の同盟国までが輿入れ先として名乗りを上げるようになった。

オードル家当主は己の一存では手に余る大事になってしまった娘の嫁ぎ先を、キリングシックに託した。

もはや、アオイの存在は、誰もがそれを望んでいなくとも、キリングシックの手駒の一つにせざるを得ないまでになっていたのだ。

アオイの身柄を国が引き受けたことにより、その争奪戦はなお激しくなったが、それも致し方ないことと宰相達は皇女の輿入れ先を選定するが如くの厳格さで求婚者たちを振るいにかけていったと聞いている。

そんな求婚者達の中でもひと際熱心に、アオイ・オードルを正妃として迎え入れたいと申し出てきたのが、同盟国であるイルドナスの若き王だ。

これには正直なところ、キリングシックの宰相達は一様に疑いと驚きを以て受け止めたようだ。

さもありなん。

イルドナスは、最も強大な同盟国の一つではあったが、先頃、即位したばかりの王は完全服従の先代とは態度を一変してきていた。隙あらば、キリングシックに取って代わる。

そんな野心が見え隠れする王からの申し出は、友好を望むものか、人質を差し出せとの要求なのか。

優秀な密使からの念入りな報告と、熱心なイルドナスの使者の請願により、結果としてその申し出を受け入れる前提で、アオイは内々にイルドナス王に謁見しに向いたのだ。

かの国には、馬車で1週間ばかり。

あちらには数日の滞在で、一度は国に戻る予定だった筈だ。

数えてみるに、予定通りならばそろそろ帰途に就こうかという頃ではないだろうか。

それが？

「……森？ イルドナスの国ではなく？」

ゲルンの森は、イルドナスとキリングシークの中心部あたりに位置する。

2国が争っていた際には、幾度と剣を交えた場所だ。

「イルドナスは、未だ何も言ってきたくないが……アオイ様が森で彷徨っているところをイトが保護したと……」

その森にイトがいること自体は不思議ではない。

あの森には魔獣が溢れている。

狩人であるイトが、そこにいることは十分にあり得る話だ。

しかも、あの森の近くにはイトが時折身を寄せる場所がある。

だが、なぜ、そこにアオイがいるのだ？

「イトが送ってきたものだ」

タキが、差し出してきたものを受け取る。

「見覚えは？」

手のひらにちょうど納まる大きさのずっしりとした質感のそれ。

「イルドナスの勲章だな……あまりいい思い出はない」

戦場で何度と奪ったものだ。

自らが討ち取った相手が誰であるかを確認するために。

動かぬ屍から、さらに奪い取ったもの。

血に塗れて、本来がどんな色だったのかも知らなかったそれが、

本来は金と銀に縁どられ細かな細工の施された美しいものだと分かったのは、2国間で同盟が結ばれてからのことだ。

だが、今、タキの手から受け取ったそれは、戦場で拾い上げたものと同じ彩りに塗れていた。

シキは、それを裏返す。

「おい、この名」

見知った名が刻まれている。

イルドナスのかなり地位の高い貴族のものだ。

戦中でも、戦が終わってから、幾度と顔を合わせた男。

「斬ったのはイト？……の訳ないな」

イトは滅多なことでは人は斬らない。

いや、正確に言えば、イトはカイが命じない限り、許さない限り、人は斬らない。

無頼に見える隻眼の男は、軍神に剣を捧げている。

何があっても……そうだ、自らの命が危険に晒されても、あの剣が理由もなく人の命を奪うことはない。

「これが、イトの書いて寄越した手紙だ」

手渡された紙切れには、書きなぐった文字で淡々と事実が語られている。

森で女を一人拾った……アオイ・オードルと名乗る、天使のような女。

連れらしい者は、既に魔獣に食い荒らされ、男女の区別もつかず。転がっていた勲章と、女の耳飾りを一緒に送る。

指示を寄越せ。

「イルドナスの貴族が、アオイを連れて森を彷徨っていた？」

文面から読み取れることを、タキに尋ねる。

「そのようだな」

タキの答えから、シキの知らないことを多く知る策士も、これに関してはさほど情報がないのだと理解する。

「訳が分からないな」

呟くと、タキが肩を竦める。

「この件に関しては、ハク様が全て仕切っているからね。私としても口も手も出すことは差し控えている……いったい、何が起きているのか、想像はできても何も確証がない」

アオイの輿入れ先に関して、カイは一切の言及を避けている。

元より、政治的駆け引きは、己の担うべきところではないというのがカイの一貫した態度だ。

漆黒の軍神と呼ばれる己の存在が、ともすれば皇帝の地位を揺るがしかねないことを、カイは十分に理解し、そうなってはならないと肝に命じている。

故に、決して政治の表には立たない。

それは側近であるタキやシキも同じだ。

皇帝が動くことこそに支障があると判断すれば暗躍することはあっても、あくまで軍神の側近であり、軍神が望まぬことは成さない。アオイの輿入れ先の選定にあたって、それは例外ではない。サクラの大事な妹の身の振り先ではあっても、それは既に甘い感情や、温い感傷に左右されるべきではないことは明らかなのだ。

だから、カイは沈黙を守る。

カイが沈黙を守るならば、その腹心のタキもまた静観するしかない。

シキにしても言わずもがなだ。

タキの言うハクが、この件を取り仕切っているのならば、尚更、カイを始めとしてこちら側が手を出す必要などない筈だ。

国の最長老の宰相は、年を経た者特有の老練した手腕と洞察力に長けた、信頼に値する人物だ。

何も心配すべきことはない筈だった。

何も手を回す必要はない筈だった。

何が起こったのかは知れないが、それは間違いなく不測の事態に違いない。

「拾ったのがイトというのは出来過ぎだな」

黙っていたカイが、そう口にした。

静かな口調だったが、シキはそこに憤りと安堵を感じ取った。

アオイの身に起きたことを隠すイルドナスへの怒り。

それに気がつかなかった己やキリングシックへの怒り。

それでも、イトの元にアオイがいるという安心感。

「カイ様」

タキの呼び掛けは、主君に指示を促すものだ。

カイは淡々と指示を出した。

この主は、どんな命令を下す時も、常に静かだ。人を殺せとも。

人を救えとも。

いかなる声も、変わらない。

それが、命じられる者にとっては救いであることを、きっと分かっているのだろう。

「こちらに向かわせろ……ただし、詳細が分かるまで不要な接触は避ける」

「はい」

タキは頷いた。

何も問うことはない。

イトならば、全てを任せられる。

言外に含まれるイトへの全面的な信頼。

それは、ここにいる全ての者に共通している。

「……午後には密偵からの報告があるかと思われます」

タキの報告に頷きつつ、カイが歩き出す。

シキはその後に続いた。

城に向かうのだろう。

タキが密偵の報告を待ったために残るならば、供はシキが請け負うところだ。

「シキ」

カイが振り向くことなく、名を呼ぶ。

「はい」

答えれば、やはりいつもと変わらぬ声が響いた。

「しばらく家には帰れんだろうな」

珍しい気遣いだ。

いや、今までのシキには不要な気遣いだったただけだ。

カイは何も変わっていない。

変わったのは、シキだ。

「構いませんよ。帰ったところで、母の妨害工作でキスの一つもまともにできないんです」

軽い口調に、本気のぼやきを含ませれば、小さな笑いが前から聞

こえる。

「その妨害はいつまで続く？」

面白がる口調ではあっても、そこにはシキとホタルを公認する意思がある。

予想だにしない事件の勃発で後回しにした主君への報告の続きを口にする機会が与えられたのだ。

「来年の春まで、ですね」

まだ先の話だ。

その間、いったい何度シキはホタルの元から発つだろう。

そのたびに約束を交わし……それを果たせるだろうか。

「そこまで帰れんことはないな」

外に出たところでカイの足が止め、空を仰いだ。

少し後ろでシキも足を止め、カイが探したものを同じように探す。

旋回し続けるグルが、動きを変化させて降りていくのが見えた。

タキが指示を出すために呼んだのだろう。

「キスは無理でも、顔を見に帰るくらいの時間は欲しいですね」

これは、人使いの荒い双子の兄に言うべきかもしれない。

言ってからそう思う。

「それはお互いに、だな。タキに言っておけ」

カイも同じ意見のようだ。

シキは頷き、呟いた。

つい笑みが零れた。

そう、まったく。

こんな想いがあるなんて。

存在は知っていても、己の内にあるなんて。

「お互いに……ですね」

カイがよく響くその声で淡々と語る話を、サクラは取り乱すことなく、そして途中で一言と尋ねることなく最後まで聞き終えた。

これは、もちろん既にサクラは承知のことではあったが、アオイがイルドナスへの興入りを前提として、かの王との謁見に出向いていることから始まり。

そこから何者かに攫われたこと……攫った者は、既に死亡していること。

そして、森で彷徨ってるところを、隻眼の狩人に救われ……現在、この屋敷に向かっていること。

カイに許されて、サクラの傍らに座るホタルの耳には、僅かにその呼吸が息を飲んで止まったり、鼓動が速くなったりするのが、はっきりと聞こえ、決してその人が冷静ではないことを伝えてくる。

だが、サクラは黙って、登城時の正装を寛がせることなく語る夫を見つめていた。

やがて、全てを語り終えたカイが口を閉じる。

サクラの前に立つカイから一步下がった場所に、シキが控えている。

サクラよりよほど動揺している己の居場所を探すように、ホタルはシキを見つめた。

沈黙を守って主君の背後に立つ婚約者は、ホタルの視線に気がつくとも固い表情を僅かに緩めながら、大丈夫だと言うように頷いて見せてくれる。

それだけで、ホタルの中で惑っていた事実が落ち着くところに納まっていく気がした。

「アオイは無事なのですね」

夫の静かな口調で語られた、それでも、身震いせずにはいられない恐ろしい出来事を再度頭の中でなぞったかのような間を開けて、

サクラはそう呟いた。

それは問い掛けではなかった。

むしろ、無事を確信して、ほっとしているような響きを持っている。

「イトが側にいる。大丈夫だ」

カイの声にも、また、確信以外のものはない。

ホタルは、軍神の絶対的な信頼を得ている狩人の姿を思い出した。あの容貌は、間違える筈もない。グレンダだ。

かつては父に命じられ、その動向を探ったこともある流浪の兵達。キリングシークにより滅びた一族の一人であるのだろうあの男が、どういう経緯で軍神に仕えているのかは知る由もない。

が、カイはあのグレンダの狩人を全面的に信頼している。

そして、それはシキも同じだった。

ならば、シキが信じる男を、ホタルがどうしても、信じないことがあるだろう。

今、アオイ様はあの方の側にいるのだ。

ホタルの脳裏に、アオイの姿が思い浮かぶ。

ホタルが知る中で、最も美しい女性だと迷わず言える。

どのような状況にあっても、褪せることない光彩を放つオードルの天使。

どこか、人であらざる雰囲気をも纏った女性ではあるが、しかし、攫われ、森を彷徨うなど、どんなにか恐ろしい思いをされただろう。隻眼の狩人の庇護の元、無事にここまで戻ることを、心から願わずにはいられない。

「サクラ」

サクラが落ち着いたのを見計らったように、カイが寵妃を呼ぶ。

サクラは祈るように項垂れていた顔を上げた。

「このまま城に戻らねばならん」

言いながら、ソファに座るサクラの前に跪き、手を取る。

許されたとはいえ、主を立たせたまま、己がサクラの傍らにい

るということに、今更ながら、ホタルはうろたえた。

だが、立ち上がろうと身じろいだのを、カイが視線で制す。

「カイ様」

サクラは、小さな手を包み込む大きな手のひらの上に、更に自身の手に乗せた。

「大丈夫です。イト様を信じて、待っていれば良いのしょう？」

健気に微笑んでさえ見せるサクラだったが、その表情が泣き出す前兆を含んで歪む。

それを隠すように、サクラは俯いた。

「ごめんなさい……本当に、分かってるの」

カイの手を握る指先に力が入る。

「大丈夫だと分かっているのに……」
当たり前だ。

どんなに傍らにいる男が信頼できる者であったとしても。

アオイの身に起こった不幸を思えば、冷静でいられる筈がない。

「サクラ」

俯くサクラの頭に、吸い寄せられるようにカイの唇が触れる。

抑えきれないようにサクラの腕が伸び、カイに縋った。

「ホタル」

不意に、カイがホタルの名を呼んだ。

傍らで、ただ二人を見守るばかりだったホタルは、慌てて返事をする。

「はい、なんででしょうか」

カイはサクラを抱きしめたまま、ホタルを見遣った。

「……できれば、サクラの側にいて欲しい」

そんな風に、カイに請われたことはかつてない。

そして、ホタルは気がつく。

ああ、そうだ。

私はもう侍女ではないから。

だから、この方は、こうして、私の意志をお尋ねになる。

ホタルは頷いた。

例え、侍女ではなくとも。

ホタルにとって、サクラが大事な方であることに違いない。

こんな不安げなサクラを置いて、どこに行くことができるだろう。

むしろ、ホタルから願ひ出たいくらいだ。

「はい。お側にいさせて下さい」

答えて、こちらも黙ったまま主君とその妃を見ていた、シキに視線を向ける。

シキは少しだけだが、微笑んだ。

仕方がないな。

そんな笑みだ。

「シキ」

だが、その笑みもカイに呼ばれて、すぐに消え去る。

「……すぐに城に向かう」

その言葉に、シキは静かに頷いた。

「承知しました」

カイの腕の中にいるサクラが、顔を上げる。

シキはそのサクラに一礼し、身を翻す。

「ホタル」

呼ばれてそちらを見遣れば、かつての女主が友人を思いやる視線でホタルを促してた。

ホタルは頷いて見せ、シキについて部屋を出た。

「……2、3日で戻れると思う。その間は、サクラ様の側にいて差し上げてくれ」

シキの言葉。

カイの言葉。

サクラの視線。

それら、全てがホタルが侍女ではないということを、思い知らせる。

不快ではない。

ただ、無条件でサクラの傍らにいることの許される立場ではないのだということが、一抹の寂しさを心にもたらしたことは否めない。だが、それも少し前を歩くシキの背を見て、消え失せる。

これが婚約者としての立場で、初めて彼を送り出す状況であることに気が付いたから。

過去、何度かこの人を送り出した。

それは、一侍女として、一騎士を送り出すものだった。

そこにある気持ちを押し殺して。

礼を尽くして。

無事を祈る。

そんな見送りしかできなかった。

「シキ様」

ホタルは先に行くシキの背に声をかけた。

シキの足が止まり、振り返る。

ホタルを見た途端、困ったように微笑んだ。

「そんな顔しないで」

どんな顔をしているのだろうか。

分からない。

どんな顔をして送り出せば良いだろうか。

前は、どんな顔をして送り出していただろうか。

「おいで」

言葉も表情も、何もかもがどうすれば良いか分からないホタルの腕を捕えて、シキは手近な空き部屋へと滑り込んだ。

「さて、婚約者殿」

腕はそのまま引き寄せられて、ホタルはシキの胸に納まった。

「ここは、できれば……笑顔でキスして欲しいところだな」

望まれるまま、ホタルは手をシキの首へと回した。

少し驚いたような表情のシキはそれでも身を屈め、ホタルは届いた頬へと軽く口付ける。

「……俺は子供じゃないから……こんなキスじゃ満足しないよ？」
言うなり、ホタルの顎は捉えられ、唇が合わさる。
拒む理由などない。

ホタルは望まれるままに身を任せ、深くなる口付けを自らも求めた。

「……まだ、足りない感じだ」
それはホタルも。

でも、きつといくら続けたところで、満足はしないだろう。
だから。

「無事にお戻りになったら……」
いつかも、そんなことを言った。
それを思い出す。

「なったら？」
あの時は、お好みの方とどうぞ、と言った。

でも、今はもちろん違う。
「お好きなだけ……して下さい」
シキは満面の笑みを零した。

「……満点の返事だな」
多分、シキも覚えている。

「戻るよ。君のところに、必ず」
名残惜しげに額に口付けて、シキの腕がホタルを離した。

「お気をつけて」
待ってます。

だから、必ず戻って来て下さい。
祈りの深さは以前にも増して。
知らない痛みが胸を過ぎる。

それでも、いつかのように逃げるように膝を抱えてうずくまることはない。

持てる全ての想いを込めながら、まっすぐにシキの背を見つめていた。

30 (前書き)

＊場面に流血等の状況描写があります。

気分的に、そういうものは読みたくないという読者様がいらっしやいましたら、読むのは避けられた方が良いでしょう。(ストーリー的に、読まないとは全く分からない、ということにはならない場面です)

目の前に倒れている3つの遺体。

明るく照らされた森の中には、あまりにも似つかわしくないように思えるその存在。

いっそ、誰に発見されることなく、この場で一夜を明かしていたならば、闇の住人達に喰い荒されて、大地に容易く戻れただろうに。この者達にしてみたところで、それこそが本望だったかもしれない。

だが、残念ながら、滅多に人の通ることのないこの場に倒れながら、彼らはよりによってキリングシークの兵士に発見された。

それは運が悪かったのか。

それとも、必然か。

「グレンダですので、まずは貴方様にお知らせしました」

傍らにいた腹心の兵士の報告に、シキは頷いてそれを労う。

どんなに紅に塗れても、その姿は隠しようもない。

浅黒い肌。銀の髪。紫の瞳。

一目でそれと分かる者達の不審な動向は、まずはシキに知らされるのが、キリングシークの優秀な軍にある暗黙の規律だ。

かつて、グレンダの消滅に立ち在ったという因縁故の。

現在、グレンダの元頭領に最も近い存在とされる故の。

「どれも一太刀です。グレンダの腕は重々承知しているつもりですが……正直身震いしました」

遺体の検分を終えた別の兵士の報告に、シキは並べられた遺体に目を向けた。

シキとさほど違わないと思われる年頃の男のものが2つ。

胸を貫かれた者。

首をはねられた者。

いずれも、見覚えのない顔だ。

そして、初老の男が1人。

首を斬り裂かれ、その面は真っ赤に染まっていたが、その1つだけは見覚えがあった。

名までは記憶にないが、間違いなくグレンダの幹部だった男だ。

「首をはねた剣と、こちらの老人の首を斬った剣は同一と思われる」

兵士が剣を差し出す。

そして、もう一振り。

「男の胸に刺さっていた剣がこちらです。他の剣の痕はありません」
グレンダの者が持つ剣は、どれも似通っている。

誰が持つ剣にも多少は施されている装飾の類を一切排除した……
振るい、断つためのだけのもの。

だが、抜かりなく磨きあげられた刀身は、どんな宝石よりも鋭く
光る。

「第3者がいたと判断するには、その痕跡がまったくありません……
しかし、この者達の相打ちというのも……」

遺体を見ることに慣れた筈の兵士は、だが、これには判断が付き
かねると正直なところを口にする。

シキはその報告を聞きながら、既に一つの確信を得ていた。

確かにグレンダは強い。

男のみに留まらず、女子供に至るまで。

剣を振るい、命を断つ術ならば、キリングシークの兵士を遥かに
上回る手腕を誇るだろう。

だが、この男を一太刀で仕留める者など。

恐怖にひきつる若い骸と、同じように死を迎えたとは思えぬ程に。
一人だけ、穏やかとも言える死に顔を晒す老人。

これだけははっきりと覚えている。

この男は……あのイトに剣を教えた男だ。

グレンダに生まれ落ちた者達を剣士に育て上げることが使命であ
った男。

あのかつてグレンダを率いた隻眼の悪魔を作り上げた男を、かすり傷負わすことなく断つことができる者など。

「……他に不穏な動きは？」

シキは、兵士に尋ねた。

この者達が、どのような末路を辿ったかを、推測することは不要。そういう意味での問い掛けを、聡い部下は間違えることなく受け止めた。

「何もありません」

シキは頷いた。

この鮮やか過ぎる残虐さを成し遂げられる者など、ただ一人を除いてはいよう筈もない。

これは、絶対だ。

ならば、理由は本人に聞けば良い。

「……弔いますか？」

シキは3つの遺体の耳元をちらりと見遣る。

「いや」

世間には知られていないグレンダの弔いは既に終わっている。

「どこかに埋めてやるだけでいい」

傍らの兵士は、何も問いはしなかった。

数人の者に運ばれていく骸に、心で送る言葉を口にしながら、シキは次の行動のために傍らの兵士に一つのことを尋ねた。

そして、今、目の前に広がるのは……昼間の光景を凌駕する地獄絵。

ほんの少し前まで、それは見慣れたものだった。

足元に折り重なるようにして転がる遺体の数々。

充満する血と死の匂い。

だが、今はこれが地獄だと感じていた。感じる事ができていた。それが、どんなに幸せなことを思い知りながら歩みを進め、そこに生ある存在を見つける。

イトだ。

この男には、今もこれが日常なのだろう。

幾つもあった筈の生き方から、この地獄に棲みつくことを選んだ希代の戦士は、これだけの死を作り上げたのだろうにも関わらず、肩で息する気配もなく、悠然と立っていた。

鍛え上げられた兵士でも易々とは振ることさえできない大きな剣は、大方の獲物を狩り終えて今は静かに降ろされている。

しかしながら、血を滴らせながらも不気味に輝く様は、未だ、飢えを満たしていないようにも見えた。

その主は、じっと動かない。

多分、まだ、神経を張り巡らせている状態だろう。

気配を探っている。

生き残りはいないか、と。

息遣いを探っている。

シキ自身もまた己の気配を消しながら、そして、周りに残党の気配を探りながら、イトへと近付く。

どうやら、既に刺客に動ける状態の者はいないようだ。

それでも緊張を解かぬままにイトに近付いていく。

声をかけることが憚れる張りつめた背中。

気配を消すことを止めて、敢えて、イトの間合いに入った瞬間。

男の剣が振り上げられ、シキに向かって落ちてくる。

想像していたそれを、シキは鞘に納めたままの剣で受け止めた。

「イト！」

ようやく、その名を呼ぶことができる。

血に塗れた男は、少しの高揚もない視線でシキを確認すると、あつさりと剣を降ろした。

「お前……相変わらず容赦がないなあ」

フードを外して、苦笑いを零しながら、思わずそう呟いていた。それは、周りの惨状に対するものであり。

止めた腕がしびれるほどに、力強い剣に対する素直な感想だ。

「あんたが来たってことは……俺はお役御免か？」

シキの言葉に何ら反応はなく、イトは静かな口ぶりですう問いかけてきた。

ここからなら、キリングシックまでは半日ばかりだ。

どんなに遅くとも、明日中にはラジルの館に到着することができ
るだろう。

それを前に、軍神の側近が天使を迎えに来たと。

今回のことは厄介事に巻き込まれたに過ぎない筈のイトにしてみ
れば、そう考えるのは極々当たり前なのかもしれない。

さっさと天使を引き渡し、元の狩人の日々に戻りたいところなの
だろう。

「いや」

しかし、シキはそうではないと、首を振った。

「確認に來ただけなんだが」

改めて、ぐるりと周りを見渡す。

「見事だな」

折り重なるように倒れる男どもの遺体から流れ出た血で、床が紅
に染まっている。

血の海、とはよく言ったものだ。

だが、どこまでも続き、床を覆い尽くすかと思われた血潮が、あ
る場所からぷつぷつ途切れる。

安宿に在りがちな木造りの質素なベッドの周り。

そこには一滴の点さえない。

そして、そのベッドの上に……アオイ・オールドを見つけた。

惨状を作り上げたのはイト。

だが、原因はこの天使。

男達は、この天使を葬るために、ここに現れたのだ。

しかし、近づくことさえできなかったのだ。

天使を護る、一つ目の魔物を前に、誰一人として。

一滴の血をも、天使に降らすことはなかった。

シキは、アオイを見つめた。

白いシートに包まれて、ただただイトのみを視線で追いかける天使……いつものように貴婦人然とした身なりをしていないことは、その美しい容姿を少しも損なうものではない。

だが、違和感。

これは、本当にあの天使か？

イト以外の何も見ていない鮮やかな瞳。

あの緑は、もっと。

もっと、遠く遙を見つめるだけのものではなかったか？

シキは、イトに視線を戻した。

イトは、黙ってシキを見ている。

敢えて、アオイから意識を逸らしているようにも思える隻眼に、シキは行くべき先を指差した。

「とりあえず、行った方が良いんじゃないか？」

イトの視線がシキから離れ、アオイを捉える。

一瞬、ほんの少しだけだったが、男の表情に後悔が過ぎったように見えた。

イトは遺体は無造作に避けて、アオイに歩み寄る。

手が届く場所にイトが辿り着くやいなや、アオイの体は一瞬と迷うことなく、血に塗れた胸へと自ら崩れ落ちた。

その姿は天使ではなかった。

恐怖の中、信頼する男に縋る、一人の娘。

身を寄せるアオイを抱き寄せるでもなく、引き離すでもなく受け止めているイトに、シキは近付き、話しかけた。

「森に、グレンダの残党らしき遺体が3つ転がってた。あれ、お前だろう？」

嫌みなほどに、ことさらはつきりと尋ねた。

正直な返事を返す筈がないと分かっている男ではなく、その血塗れの腕の中で、それでも先ほどよりよほど安堵して見える天使を見やりながら。

こちらの方が、何らかの変化があるのではないかと思つてのことだ。

だが、アオイはイトの腕の中で、シキの言葉にまったく反応しなかった。

「知らねえよ」

イトの答えは予想通りだ。

己の痕跡を一切残さずに残党を討つことは、この男にとってさほど難しいことではないだろう。

だが、敢えてそうする意味はなんなのか。

「傷跡は、お互いの剣のものだった。お前のその馬鹿でかい剣の痕じゃない。一見、仲間割れの同志討ち」

あの場にいた兵士は、結局、そう結論付けた。

そう考えても不思議はない状況だ。

それを、シキもあえて否定しなかった。

だが、違うのだ。

「けど、お前だろ？」

シキは、既に、あれがイトの仕業であろうことに確信を得ている。

これは疑いようもない。

知りたいのは、イトがそうした理由だ。

イトはアオイを抱き上げ、シキを見つめてきた。

さほど背丈は変わらない。

お互いに、まっすぐに見据える。

シキは、イトの嘘を見抜くために。

イトは、多分、嘘をつき通すために。

「なぜ、そうなる？」

イトの問いに、シキはまたも苦笑いを零した。

何故？

愚問だ。

「俺は、お前の腕を知ってる」

それ以外の理由などいないだろう。

イトは眉を寄せる。

貌に走る傷痕が引き攣れ、巧みに男の本心を隠した。

「何が起きてる？ その天使絡み以外で何かもめてるのか？」

それとも……あれも、またアオイ・オールドル故に築かれた地獄なのか。

ならば、イトがグレンダを斬ったことには納得できる。

イトはグレンダを生かすために、その身を、剣を、軍神に託した男だ。

魔獣の狩人として生きることを選んだ男は、時に剣を魔獣以外に振るうこともあるが、それは軍神の命以外にはあり得ない。

故に、イトが今グレンダを斬るとしたら、それはアオイに関わる理由以外ではない。

だが、なぜ？

グレンダの残党が、イルドナスに雇われているということもあり得なくはない。

そうならば、イトがあれが己の仕業であることを隠す理由はない。たくさんの『何故』に答えることのできる唯一の男は、だが、

「もし、ここでこの娘を引き取ってくれるなら、その方が良い」結局、そう言っただけだ。

それに、初めてイトの腕の中のアオイが反応した。

ピクリと体が揺れて、イトの衣を握る手のひらに力がこもる。そういうことか。

アオイが天使ではなくなった理由。

それをシキは知る。

天使は、その感情で、人になる。

そして、隻眼の狩人は？

「それじゃ返事になってないんだが」

アオイの指先の力強さはイトにも伝わっているだろうに。

イトは、ちらりとも胸元のアオイを見はしなかった。

まっすぐにシキを見つめる。

「グレンダの遺体のことは知らねえ……そいつらは、あんたの方が知ってるんだろ」

シキは足元に転がる遺体に目を向けた。

イルドナスの放った刺客だろう。

天使を護っているのが、一つ目のグレンダだと知っていたのだろうか。

いや、知っていたには違いない。

それでも、ここにやってきたのだ。

「お前みたいな裏道を知り尽くしたのが連れていても、数日でかぎつけらるほど目立つ天使を、いくら優秀とはいえ一騎士がどうやって10日も連れて歩けたんだろうな？」

シキは最後の切り札を口にした。

隻眼の狩人に、探り合う会話は通用しない。

「何が言いたい？」

イトの隻眼が眇められる。

「誰かが手引きした、とか。敵の先を先を読んで……どこかに天使を呼び寄せようとしていた、とか？」

シキは天井を見上げる。

薄汚れたそこに、今にも滴りそうな血飛沫が飛んでいるのを見つけ「そんなことをできる人間に心当たりはあるんだが、理由がなあ……」

視線をイトに戻した。

「と、うちの片割れが」

ふと笑えた。

この状況で、普通に会話している己とイト。

正気なのだろうか、と。

一瞬浮かんだそれを打ち消して、タキの言葉を思い出す。

『イルドナスは、アオイ様を血眼になって探していた……これは間違いないようだ。騎士の容姿も十分に把握していた筈だし……何よりも、連れているのはあのアオイ様だ。足取りが掴めない筈はない』

と思わないか?』

タキの言わんとしていることは、理解できた。
そして、また、シキも実感した。

兵士に「隻眼の狩人と天使の二人連れは今どこにいるか?」と尋ねてみれば、半日と経たぬうちに答えは返ってきた。

それほどに、アオイという娘の美貌は際立つのだ。

『しかも、見つかったのはゲルンの森だ……あそこにはウスラヒがいる。彼女なら、騎士を手引きして自らの元に呼び寄せることも可能だろう。だが……理由が分からない』

シキを介して告げられたタキの言葉は、イトの隠そうとしている一端を見事に突いたようだ。

「あんたの片割れは……相変わらず穿ったものの見方が得意だな」
珍しくも感情を垣間見せて、イトが苦笑いを浮かべる。

「イト?」

先を促す。

だが、イトはそれ以上は語らない。

「何もねえよ」

そう言うだけだ。

「明日、キリングシークに到着する。それで終わりだ」

どうやら、この男は、今、語る気は毛頭ないらしい。

それが、アオイがここにいるからならば。

アオイを思う故ならば。

どんなに、問い質したところで答えはないだろう。

「まあ、いいか」

シキは引いた。

今、語る気はなくとも。

語る必要があるならば、アオイがキリングシークに到着した時に、それは自ずと語られるだろう。

「今日ここに来たのは俺の独断だし……森の遺体はタキには内緒にしてあるし」

そう言つて、イトから目を逸らし、その胸元の娘に微笑みかける。
血の氣のない、だが、それでもなお美しい娘。

この状況で微笑む己は、もしや狂人にさえ見えているかもしれない。
い。

思いながらも、笑みを消さずに問いかける。

「私を覚えてますか？」

もう天使ではない娘が、コクリと頷いた。

「もう少し、この男とご一緒頂きますよ」

優しい口調で語る。

アオイは、もう一度頷いた。

イトはアオイを抱いたまま、シキに背を向けかけて。

「ここの後始末は頼んだ」

一言言い捨てる。

まるで、小さな紙くずを片付けろとばかりの口調だ。

シキはあたりを見回して、眉を寄せた。

「軽く、面倒を押し付けてくれるなあ……」

答えるシキ自身も、心は痛まない。

ちよつと大きな後片付けを頼まれた、というように。

「まあ、了解。氣をつけてな」

行けとばかりに手を振ってみせた。

アオイは一瞬として、シキを見なかった。

この凄惨な光景の中、唯一正気である人のように怯え、イトの腕
に縋るばかり。

ついこの間まで羽根を背に掲げた天使だった娘。

恋を知って天使が、人に堕ちるならば。

堕ちた天使に視線をやることはなくとも、言葉ではいかに語ろう
とも。

一度として、その腕から手離そうとはしなかった隻眼の悪魔と呼
ばれる者は。

何に変わるのだろうか。

それはシキの関与すべきことではない。
分かっている。

これはイトのアオイの問題だ。
だが。

イト、俺達は手に入れなければならない。
もう、そこにはいない同胞に呼び掛ける。

明日が来るという確証など、どこにもないのだ。
どこが正気で。

どこが狂気か。

そんなことさえ、いつ見失うかもしれない。
だから、見つけたならば、迷うな。

手に入れなければ。

見失ってはいけない。

そして。

ホタル。

その名を呼ぶ。

地獄の中、平然と立ってられる。

これを地獄だと感じられる。

正気と狂気の狭間。

これも俺達の居場所に違いない。

そして、手に入れた場所の意味を噛み締める。
ここから戻る場所があるという、その意味を。

スタートン家は、屋敷を中心にぐるりと庭が囲っている。

中庭を持たない森の中に屋敷が佇むような様式は、隣国のものにより近く、この国にあっては珍しいものだ。

小さな頃から何度も聞かされている話によれば、元は鬱蒼とした木々が生い茂るばかりだった庭とも言えぬ敷地だったのを、隣国からまだ幼いと言って良い少女を妻に迎える事になった当主が、少しでも慰めになればと大改築を敢行し、四季折々の花々が常に彩りを競うような庭を作り上げたのだという。

戦乱の幕開けを予感させる不穏な空気の中での、隣国間の同盟を強めるために結ばれた有力貴族同士の婚姻だった。

重い責務ばかりを言い渡されて嫁いできた少女にとって、この庭は心の慰めであり、何よりもこれを用意したという当主の心遣いが彼女の救いだったろう。

そして、また、当主にとってはこの庭を喜び、夫となる者に心を開き、純粹に無事を祈る少女こそが戦で荒んだ心身の支えとなったに違いない。

後になって、これが己の両親の話であり、ようするに語った父母による惚気だと知って気恥ずかしさを覚えたものだが、確かにその庭の美しさはキリングシック内でも指折りと誉れ高く、戦乱の時にあっても母は自ら手を入れ、決して花を絶やすことはなかった。

そして、この庭の隆盛さが象徴するかのように、いかなる時も隣国との同盟は決して揺らぐことはなく、今現在に至るまで最も親交の深い国として存在している。

その庭の片隅に、こじんまりとした離れがある。

こじんまり、とは言っても、きちんと調度品の整えられた部屋が2つと湯浴み場が設えており、人が暮らすのに十分耐え得る造りになっている。

小さな子供の頃は、どこか秘密めいた隠れ家にも見えるこの場所が双子とその妹のかなりのお気に入り場所で、特に咎められることもなかったから、よく入り込んで遊んだものだ。

それなりに世の中のあるこれが理解できる年頃には、ここで、両親が愛を語り合ったのであろうことは容易に想像がついて、だからといって、それが理由でもあるまいが、なんとなく足が遠のいていった。

だいたい、その年頃には既にカイの側近として、この屋敷よりもラジル邸に滞在することの方が多かったし、何より、もう秘密の隠れ家を安全な我が家に持つ身ではなくなっていた。

戦線に赴く。

戻れば、どこかの情人の元に一時身を寄せて。

そして、また、戦に戻る。

そんな風な日々の中、正直、その存在さえ忘れていた。

だが、今、シキはそこにいる。

イトと別れて、地獄の始末を付けて。

ふと、どこに行くかを迷った。

明日、いや、もう既に今日だが……キリングシックに辿り着いたイトが、全てを自ら語るならば、今シキが語るべきことは何もない。ならば、カイやタキには会う必要もない。

正直、会わずに済むならば、そうしたい。

僅かでも、あの地獄に連なるものには、何一つ近付きたくない。

何よりも、今、会いたいのは、たった一人。

ホタル。

少しでも声に出せば、それは、あの娘に届くかもしれない。

いや、傍らにサクラがいるのであろう今は、聞こえないだろうか。ホタル。

もう一度、心で。

本来ならば行き場に迷うことなど、あろう筈がない。

シキの戻るべき場所は、あの娘の元だけだ。

だが、ホタルへと戻れないのならば、途端にシキは途方に暮れる。そのことに気が付かされて、それを手に入れたことの嬉しさと、一抹の恐怖にも似たものを感じながら、結局不意に思い出した、ここに落ち着いたのだった。

久しぶりに訪れたそこは、家の者がきちんとかまめに手を入れているのだらうと思われた。

長く人が訪れた気配はないものの、調度類はすぐにも使える状態だった。

その一つであるベッドに、倒れ込むように横になり、目を閉じる。浮かぶのは先ほどまでいた場所。

血。

肉。

骨。

別に、そんなに衝撃な絵図でもないのに。

未だ、そこに立っているように鮮明に脳裏に描く。

まだ、あそこから戻れていないと実感する。

できれば、眠りたかった。

そうすれば、目覚めた時に、今在る現実に戻るだろう。

しかしながら、高揚した心身は、少しも休む気配がない。

少し前なら、女を抱いて沈めた高ぶりが、身の内に燦り続けている。

「ホタル」

今度は気がつかぬうちに声になった。すると。

「シキ様？」

突然、耳に響く。

幻聴かと。

疑いつつ、身を起こせば、そっと扉が開かれて。

「驚いたな」

幻覚かと思わせる娘が、覗き込んだ。

「……シキ様」

シキの姿を目に止めて、ほっとしたような笑みを見せる。

ああ、これで、戻ってこれるだろう。

先ほどまで、シキを留めていた場所から。

「ホタル」

今度は、そのいる存在に呼び掛けた。

ホタルは、スルリと部屋へと入ってきた。

この時間だ。

もちろん、眠っていたのだろう。

着ているものはドレスではなく薄手の寝間着。肩にショールを羽織っている。

いつもなら、自ら器用にまとめ上げる豊かな赤毛は、三つ編みとなって背中に垂れている。

手に入れた娘のまだ見慣れていない姿はどこか現実感が乏しく、まだ、シキの中の一欠片はどこかに留め置かれているような違和感があった。

ホタルはシキのいるベッドに近付き、その端にそっと腰かけた。

僅かに揺らぐそれが、予想以上にシキの神経を波立たせる。

「ここに……戻ってたのか。サクラ様は？」

何かを誤魔化すように問い掛ければ、ホタルはじっとシキを見つめたままで答えた。

「カイ様が昨日の夕方、お戻りになったので……私もこちらに戻りました」

まっすぐなホタルの視線。

「そうか」

受け止めきれずに、逸らして俯いた。

高ぶる想いと身体は、愛しい存在を前に暴走するか、委縮するかのどちらかしかないようだ。

「……シキ様」

ホタルの声の名を呼ぶのを、この上ない喜びと、底のない切なさ

で聞いた。

まったく、本当に。

今までの己の経験は何だったのかという程に、持て余すものばかりだ。

「シキ様……抱きしめて……下さらないのですか？」

ホタルの言葉に身体が慄いて、思わず苦笑いが浮かんだ。

一体、俺はどこの、純情少年だ？

いや、純情少年ではないからこそこの、この状況だ。

そんな風に、己自身を茶化して勇氣に変えながら、なんとか顔を上げる。

どれほど離れていないところから、ホタルがなおもじっとシキを見つめていた。

「そうしたいのは山々だけどね……抱きしめるだけでは済みそうにない」

手を伸ばして、ほんの少し触れることさえ躊躇う。

高揚した身体が欲するものはあまりにあからさまだ。

「母の御膝元でって……俺は平気だけど、君には酷だろう？」

シキの言いたいことはもちろんホタルに伝わった。

赤らめた顔を隠すようにして、今度はホタルが俯く。

シキも俯き加減に。

お互いに視線を合わせないまま。

それでも、ここから立ち去って欲しいなどは、僅かも思わなかった。

「……ここに」

先に口を開いたのはホタルだ。

「うん？」

「シキ様が戻ったのに気が付いたのはお義母様です」

意外な言葉に、シキは顔を上げた。

てっきり、音を聞いたホタルが気が付いたものと思っていた。

「私、聞くのが怖くて、ずっと耳を塞いでいたので……気がつか

くて」

シキの考えを読み取ったように言う。

それよりも、聞くのが怖いというそれに、シキの胸が痛んだ。

そんな風に思わせてしまったことに。

これからも、きつと、シキがどこかに赴くたびに、ホタルは耳を

塞ぎ、無事を祈るばかりの娘になる。

だが、それでも己は赴くのだろう。

「それで、あの……今夜は」

ホタルは更に俯いて。

抱きしめたい思いを、堪え切れずにシキは手を伸ばしかけた。

「……お部屋に戻らなくて良いと」

ホタルが小さな声で、そう告げた。

ホタルにしてみればそれを口にすることは、かなりの勇気が必要としたに違いないのに。

不覚にも、一瞬、その意味を把握し損ねた。

動きの止まったシキをどう思ったのか、ホタルは立ち上がる気配を見せた。

思わず笑いが零れた。

さすが母親、だ。

鞭と飴を見事に使い、いよいよシキをホタルへと溺れさせるつもりらしい。

「お許しが出ているなら……」

この激情を、留める理由はない。

離れかけた身体を引き寄せ、抱きしめ、そのままベッドに沈める。

「ホタル」

ようやく、口付けることができる。

焦がれた温もりを、心身の隅々にまで満たして欲しい。

「……シキ様」

ホタルは一瞬身体を強張らせたが、すぐに柔らかくなるとシキへと腕を回した。

ああ、戻ってきた。

本当に、今、この瞬間に。

シキは、ここに戻ってきたのだ。

「シキ様！」

ホタルがギュッと抱きついてくる。

このために生きている。

性急に純白の肌を求めながら。

「俺達みたいなのは、いつ尽きる分らない」

あの時、同胞に言い損ねた言葉が、口をついた。

どうしてか、言わずにはいられない。

「シキ様？」

ホタルには意味の分からない言葉だろう。

だが、シキは続けた。

「……だから、手に入れなければ」

言い聞かせる。

聞こえる筈のないイトに。

否、自らに。

「迷っている時間などない」

そうだ。

抱きしめることに迷っているなんて無駄だ。

手に入れることを躊躇するなんて愚かだ。

「シキ様」

こうして名を呼んでくれる存在。

抱きしめてくれる存在。

それが、生きる糧だろう。

違うか？

「ホタル……君がいてくれて良かった」

シートに沈む婚約者は、シキの言葉に微笑んだ。

それにつられるように微笑みながら、でも、泣きたい気分だった。

「……君が……俺の帰還を願ってくれている。ここでこうして俺を

抱きしめてくれる」

いつか誓った。

必ず、ホタルの元に戻る、と。

「だから、俺はあそこから戻ることが出来る」

それを叶えられる喜びが、胸を満たす。

「シキ様」

ホタルの手がシキの頬を包む。

温かなそれに少し力が込められ、シキは導くままに娘に顔を寄せ
る。

自ら唇を触れてくれる娘を拒む理由が在る筈もない。

「お帰りなさいませ」

ようやく。

戻ってきた。

夏の盛りもとうに過ぎ、短い秋はそうと気づけばあっという間で、早くも季節は冬を迎えようとしていた。

今日のサクラの装いは、秋の名残を惜しむように、色付いた葉を思わせる紅のドレス。あまり派手な彩りを好まないサクラらしく、それを薄手の白い紗で包み込んで、色合いを柔らかくしている。

相変わらず長い髪は結われておらず、少し冷たさを含み始めた風にフワフワと揺らされていた。

その傍らには、マツリが寄り添っていて、それが今のこのお屋敷では当たり前前の光景なのだと分かってはいても、ふと寂しさを覚えしてしまう。

なんとなく声をかけそびれて、門から中庭へと続く敷石の上に佇むホタルの背中を、横に立っていたシキがポンと押してくれる。

頼りがいのあるそれに促されて一歩踏み出すと同時に、サクラがホタルに気が付いた。

「ホタル！」

嬉しそうに微笑んで駆け寄ってくる姿に、つられるように駆け足になってサクラの元に辿りつく。

「サクラ様！」

ホタルの方の本日の装いは、これもまた、秋の葉を彷彿とさせる黄色。濃淡の違う糸と生地が複雑に組み合わされたもので、もちろん秋色のサクラに合わせた訳ではなく、義母となる方と侍女頭が選んで着せてくれたものだ。

衣装を扱い慣れた二人に言わせると、ホタルの髪や目鼻立ちには少しばかり華やかな衣装の方が合うのだそうだ。

ずっと地味なものばかり身につけてきたホタルにとっては、着慣れないものばかりで戸惑いや気恥ずかしさも少なくはないが、これも花嫁修業の一つだと言われてしまえば粛々と受け入れるしかない。

世間的に見れば「今をときめく」と冠のつく娘二人は、少々肌寒さを感じる庭で、ひしと抱き合い再会を喜んだ。

その姿は、名だたる方々を伴侶に持つ身とは思えない無邪気さで、とかく作法に厳しいオードル夫人の目に止まりでもしようものならばお小言の一つや二つも飛び出しただろう。

しかし、幸いなことに、ここには二人を咎める者は誰もいない。「会いたかった!」

「私입니다! シキ様が意地悪で連れて来てくれないのです!」

ホタルの言い分に、どこか憧れにも似た視線で二人を見つめていたマツリがぷつと吹き出し、慌てて笑いを引っ込める。

ホタルの後ろを歩いて来たシキが、眉間に皺を刻んでそれを聞いていたからだ。

「……三日前に会っただろう? あれは?」

シキが挟みこんできた問いに、ホタルは、むっとして見せながら答えた。

「あれは、会ったとは言えません」

シキの言うあれ、とは、キリングシック皇帝の一の姫であられるツバキ様の、お誕生日会のことだ。

サクラはカイの正妃として。

ホタルは、シキの婚約者として。

それぞれの立場で出向いたそこで、はしゃげる筈もなく。

形式ばった挨拶を交わした後は、ただ時折目線でお互いを労うことしかできなかったあれが、どうして会ったと言えるだろうか。

しかも、主役のツバキ様はにこやかにホタルを迎え入れて下さったが、例のアヤメ様といえば、それはそれは敵意に満ち溢れた視線でホタルとサクラとを交互に睨みつけて下さって、これで二人揃って楽しげにしていたらあの姫君はどうなるのかと思うと、易々とサクラに近付くことさえ憚れる様子だった。

「まあ……確かにね。でも、一週間前にも来たばかりだ」

それは、前にここを訪れた時のこと。

でも、そんなのは。

「一週間なんて、すごい前のことです」

ほんの少し前まで、サクラと毎日一緒に過ごしていたのだから。もちろん、シキのことは好き。愛している。

でも、それとは別にサクラが側にいない日々は、やはり寂しい。これは、シキの機嫌を損ねようとも、どうしようもないホタルの気持ちだった。

「はいはい」

シキは呆れたように軽く肩を竦めると、一足先に屋敷へと入っていく。

その背中を見送ってから傍らの人に目を戻せば、同じようにシキを見送っていた。

そして、何故かクスリと笑う。

「サクラ様？」

「……睨まれなかった」

ホタルの問いの混じった呼びかけに、サクラはそう答えた。意味が分からず首を傾げる。

サクラはちらりとホタルを見てから、一步踏み出した。

ホタルは、その横に並んで歩き、その少し後ろをマツリが付いてくる。

「以前はよく睨まれたの」

クスクスと笑い声の混じったかつての主の言葉は、ホタルには全く意味不明。

「はい？」

「最初はね、遠くからよく見ていらっしやるなあって。それが、どうやらホタルと一緒にいる時だけらしいって気がついて」

シキがスタスタと歩いて行った道のりを、サクラはゆったりと進んでいく。

その隣でホタルは話の続きを待った。

「何なのかしら、なんて思っていたら……いつの間にか、私が睨ま

れるようになって。今度は何故かしら、って思ってたんだけど」

いったい、それはいつのことなのだろう。

そんなこと、ホタルは全然知らない。

気がつかなかった。

この方の、おっとりした空気に紛れがちな鋭さに、改めて感心してしまう。

幼い頃から、妙に人の機微に聡い方ではあった。

それは、ホタルの聞こえない声を聞く耳を持っているのではないかと思う程だ。

だからこそ、過去には美貌の姉妹の狭間で、とても辛い思いをされた。

でも、そのくせ、色恋沙汰には、変に疎くって。

特にご自身のことについては、まるで、その手の話が自分の周りで起こり得ることはないと言わんばかりの鈍感さで、どれほどオードル夫人やホタルが苦勞したことか……。

もう少し、その身に向けられる不埒な方々の心にも鋭いと助かるのに、と何度となく思ったものだ。

「シキ様って」

サクラがピタリと歩みを止めた。

そして、過去を振り返っていたホタルに向き直る。

「やきもち焼きさん、よね」

半歩下がったところで、またもマツリが吹き出す。

サクラの口調は、からかう風ではなかったが、かあつと頬が熱くなる。

サクラはホタルの様子に笑みを深め、続いて、背後のマツリに目を向けた。

「ね？」

マツリがどんな表情をサクラに見せたのか。

ホタルには、振り返って確かめる勇気はなかった。

ただ、心の中で言い返すのが精いっぱい。

いえいえ、カイ様だって相当独占欲が強くていらっしやいますよ。公の場で見える機会が増えたあの主の牽制ときたら、軍神と呼ばれるその片鱗を垣間見る思いだったりするのだ。

でも、きつと今は何を言っても勝てない気がするから、黙ってサクラに付いて行く。

「ホタル、大変」

大変？

そうだろうか。

サクラ様は、大変？

カイ様の束縛は、サクラ様を困らせている？

いえ、この方のしなやかさはカイ様を受け入れて、なお、強張ることも縮こまることもない。

ホタルから見れば、むしろ大変なのは。

「あ……大変なのは……シキ様？　かも」

思わず、今度は、ホタルがプツと笑いを飛ばす。

そう、今まさにホタルだって思っていた。

大変なのはカイ様の方？　かも。

サクラはいきなり笑いだしたホタルを不思議そうに見つめている。

「カイ様、大変」

先ほどのサクラの口真似で、その不思議に答える。

サクラは、尚更に怪訝な顔をしたが、どうやらマツリはホタルの言いたいことが分かったらしく、止められない笑いに肩を震わせている。

「カイ様？　大変？　どうして？」

それは。

「サクラ様が……相変わらず、サクラ様だから、です」

愛されて。

美しくなって。

この方は変わられた。

でも、やはり、変わらない。

だから、カイ様は惹かれて、そして、大変。
ホタルも。

どこかが変わっても、それでも変わらないからこそ、サクラに救われ続けてきた。

ドクン、と不意に心臓が躍った。

ずっと、サクラの側にいた。

この暖かさに、過去の傷を癒され続けてきた。

サクラから離れたくない。

離れられるの？

そんな心が湧きあがって来て。

「ホタル？」

「サクラ様……私」

何が言いたいのか。

何を言ってしまう気なのか。

「お願いがあるの」

だが、サクラは、ホタルが先を続けるのを遮った。

サクラが人の話に割って入るなんて普段ならばあり得ない。

ホタルの言葉を故意に止めたのだと気が付いて、ほっとしながらサクラの会話へと頭を切り替える。

「お願いですか？」

サクラから、ホタルに『お願い』とは、これも珍しいことだ。

そんな考えが顔に浮かんだのか。

「ホタルはもう私の侍女ではないから、これは『お願い』」

ビクンと身体が強張った。

もう既に、それは分かっていること。

ホタルはサクラの元を辞し、シキの元に嫁ぐことを決めたのだから。

だが、改めて、サクラからはっきりと「侍女ではない」と言われたことに、ホタルは想像以上にショックを受けた。

サクラはホタルの手を取った。

今の一言で一氣に指先まで冷え切ってしまったようなホタルの手のひらを、小さいけれど、誰よりも大きく思われるサクラの手のひらが包み込んでくれる。

きゅつと指先と指先を絡めて、お互いに力を込めた。

「髪をね、切って欲しいの」

サクラの声は、意識してだろう、いつもに増して穏やかに柔らかかった。

しかし、それでも、絡め合った指先が大きく揺れた。

揺らしたのは、ホタル。

宥めるように、サクラが重なる手をきゅつきゅと握る。

「これからはずっと……マツリや他の者に結ってもらわないといけないから」

名の出たマツリを見やると、どうやら彼女も初耳らしく目を見開いている。

「だからね……ホタルに髪を切って欲しいの……これが最後」
ぎゅつと胸が痛くなった。

あの日、夏のオールドル家出会った小さな主。

ホタルの耳を塞いでくれた。

もう、大丈夫。

そう囁いてくれた。

小さな手を繋いで、太陽の元に連れ出してくれた。

こんな日々があるのだと。

こんな風に過ごすことが許されるのだと。

それを教えてくれた方。

一生、お側にいると思っていたのだ。

大きな決心も誓いもなかったけれど、ついこの間までは、疑うこともなくそれを確信していた。

「サクラ様のお側にいたいです」

気がつけば、そんな風に呟いていた。

先ほど、せっかくサクラが途切れさせてくれたのに。

結局、言ってしまった。

繋がる手を引き寄せて、そこに額を押し当てて。

「……離れたくありません」

これは、本当の気持ちだ。

シキの側にいたい、というそれも本当。

サクラの側にいたい、というこれも。

いつから、こんなに欲張りになってしまったのだろう。

ただ、ただ、サクラの傍らに寄り添っていれば良かった自分は、どこに行ってしまったのだろう。

「ホタル」

サクラがこつんと、ホタルの頭に額を当てた。

「どうしよう」

ああ、サクラ様を困らせている。

そう思ったけど。

「嬉しいかも」

サクラの言葉。

そつと顔を上げると、サクラは、微笑んでいた。

「でも、シキ様のところにいきなさいって言わないといけないのよね？」

サクラはホタルの手を引いて、再び歩き始めた。

「サクラ様」

サクラは振り返らない。

「……ホタル、大好きよ」

握られた手に力を感じる。

「今まで、ずっと側にいてくれてありがとう」

ホタルは首を振った。

それは、ホタルが言うべきこと。

ずっと、側においてくれて。

何も強いることなく。

ただ、ホタルをホタルとして受け入れて、傍らに寄り添うことを

許してくれて。

「私は大丈夫。 ホタルも、大丈夫」

「はい」

大丈夫です。

今は、ほんの少し感傷的になってしまったけれど。

「大丈夫です」

ホタルはもう一度力強く答えた。

「……あの」

背後から声がかかる。

マツリが真剣な顔で二人を見ている。

「私、頑張りますから」

何のことか分からずに、サクラを見遣る。

サクラもまた首を傾げて、マツリに先を促すように見ている。

「もっと、頑張りますから」

マツリは、一生懸命にそう話した。

先を歩いていた二人よりよほど大人びた容姿の少女の手は、だが、落ち着くかなげにスカートを握ったり離したりしている。

言いたいことが先走ってしまつて、うまく言葉にできないらしい。

サクラは、マツリに近付いて、その手を取るとポンポンと優しく触れた。

「マツリ、落ち着いて……続けて。ね？」

サクラの優しい催促に、少女は幾度か唇を開いたり閉じたりして。「今はホタルさんみたいに上手に結えませんが、もっと練習して上手になります」

ホタルは微笑んだ。

マツリの言いたいことが分かった。

「サクラ様の髪、切らない訳にはいきませんか？」

ホタルは僅かな距離を飛ぶようにしてマツリに近付くなり、その身を思い切り抱きしめた。

「ありがとう！」

もう何度も何度もいろいろな人に告げた言葉を今日もまた一つ言えることができた。

小さな頃は存在さえ知らなかった小さな言葉だ。

サクラ様が救い上げてくれて、そこから進むことはできなかったけれど、私は幸せだった。

その言葉もたくさん言えるようになった。

そして、シキ様が手を引いてくれて。

一步を踏み出して。

もしかしたら、それは、サクラ様の元に留まっている時よりもいろいろあって、その中には辛いことも少くないのかもしれない。でも、だからこそ、その小さな一言は、今までよりもずっと重くて深いものになる。

その言葉を持っていることを誇りにして。

全てのものに感謝しながら、進み続けようと。

シキ様と共に。

そう決めた。

だから、大丈夫。

「……マツリ、ありがとう」

サクラも、またその言葉を口にしながら、マツリを抱きしめる。

小さな女性二人に抱きつかれた、少し背の高めな少女は恥ずかしげに頬を染めながら。

「あの……カイ様とシキ様に睨まれるのは嫌なので……」
ぼそぼそ。

「えーと……できれば、離して欲しい……」

言いかけて、マツリは止めて。

そして、ギユツと二人に抱きついて来た。

「睨まれてもいいです！　ありがとうございます！……お二人とも、大好きです！」

ホタルとサクラは破顔して、更に強くマツリを抱きしめた。

一生着ることなどないと思っていた純白のドレス。

ほぼ完成しているそれを身につけて鏡の前に立つホテルに、もうすっかり顔なじみのお針子が会心の笑みを見せた。

「とてもお似合いですよ」

お世辞だとは分かっているけど、恥じらいと喜びがホテルを満たす。そして何よりも、丹精込めてこれを縫いあげてくれたのであろう彼女に感謝し、心からの礼を述べた。

何度か耳にしたことのある有名なドレス工房に、両脇を将来の義母と義姉に、背後を侍女頭に……世間的には『彼女達を従えて』というところなのだろうが、ホテルの気持ちとしては『彼女たちに包囲されて』……訪れたのは、婚約が決まってまもなくのことだった。ドレスをあつらえる事自体は、初めてではない。

10歳の誕生日の時や、サクラのお披露目と共にささやかながらもホテルの成人も祝ってもらえた時など、要所要所でオールド家は、ホテルにもドレスをこしらえてくれた。

しかし、あんな風に店を占拠する勢いでありとあらゆる純白の布地を広げ、どんなドレスがいいのかなどと大騒ぎしたことはただの一度としてない。

大体が、サクラは好みははっきりしているもののどちらかと言えば与えられたものを無難に着こなすタイプだし、ホテルに至っては「あつらえて頂くだけで十分」という思いだったから、工房を訪れて生地から選ぶという行為自体が初めてだ。

3人の女性の楽しげながらも真剣な様子に圧倒されて、ただただ大人しくしているホテルの目の前に、最終的には3種類の生地が置かれて、どれにするかと問われた時も、金額を聞くのも怖いような一目で極上品と分かる生地に怖気づき、「お任せします」の一言を言うのがやっとだった。

本当なら、そんな高価な生地は恐れ多くてご辞退申し上げたいところだ。

しかし、シキから母の好きにさせてやって欲しい、と事前にしっかり念を押されていた。

その後は、選んだ生地とお針子数人がスタートン家をたびたび訪れて、ホタルの身体に合わせてこのドレスは作り上げていった。

一枚の大きな布地だったものが切り取られ、縫い合わされ、技巧が施されて美しいドレスへと変化していく様は、なかなか面白いものだった。

ただ、これがホタルのものだという自覚を促されると、どうしても気後れしてしまうのが。

「いかがでしょう？」

お針子を取りまとめている工房の女店主が、傍らでドレスの出来栄えを確認しているスタートン夫人にお伺いを立てている。

もう、十分だと思うホタルだったが、夫人は幾つか細かい点を指摘し、店主は神妙な顔でそれに頷いた。

「結婚式には、完璧なものをご用意致します。ご安心くださいませ」力を込めてそう宣言し、明日また訪れることを約束して工房へと帰って行った。

ドレスは間違いなく、結婚式の時には素晴らしい出来栄えを披露するだろう。

それには何の心配もない。

結婚式後、新居となるのは、庭にあるあの小さなお屋敷だ。

そこには、これもまたもったいなくも新たにあつらえられた調度品が、昨日運び込まれ、住む人を待ちかまえている。

以前一緒に働いていたカノンが納められる調度品と共にこの屋敷を訪れて、「落ちちゃったのね」と爆笑したことはまだ記憶に新しい。

涙を浮かべて笑い続けた家具職人の女将さんは、最後はホタルを抱きしめ

『幸せになって。幸せにしてあげなさい』

3人の子を持つ母らしい笑みで激励をくれた。
全てが順調に進んでいるように思える。

3日後には、何の問題もなく結婚式が執り行われ、新たな夫との新生活が始められるだろうと、そう思われた。

「あとはお式当日を待つばかりですわね」

ドレス合わせの後を片付け終えたボタンが、ようやく落ち着いて
テーブルを囲んだホテル達にお茶を入れてくれる。

最初は申し訳なくも思えたが、最近はやく慣れてお茶に手を
伸ばすことができるようになった。

「いよいよ3日後ね」

アイリが焼き菓子を手に取りながら確認してくるのに、ホテルは
頷いた。

アイリはこのお屋敷に住んでいる訳ではない。

ここからほど近い場所にお屋敷を構えてそこを住居としているの
だが、シキとホテルの結婚が決まってからは毎日のように訪れて、
結婚式や調度品についてかなり楽しみに助言してくれる。

元はアルクリシュの姫君だと思えば、これもまたもったいないこ
とだと当初は遠慮がちなホテルだったが、そういう態度の方がアイ
リには失礼なのだ途中で気がついた。

義姉として、友人として。

心から親身に接し、歩み寄ってくれる女性に、いつまでも一歩引
いて接することは、誰もが望むことではないのだ。

そう思っ、アイリの好意を素直に受け入れて甘えてみれば、そ
れは決して悪いことではないのだと、屋敷内に満ちる空気が語って
いた。

「シキ様はお戻りになれましょうか」

ボタンがポツリとそれを口にする。

ホテルは答えずに、お茶に口を付ける。

アイリは軽く肩を竦めた。

ドレスはまもなく、完璧なものが出来上がるだろう。

新居は既に準備を終えて、新たな生活を始めるばかり。

それには、何も心配などない。

皆の心配はたった一つだ。

果たして新郎は結婚式に現れるのか。

「そうねえ」

夫人もこれには、能天気に見えることができないようだ。

シキは相変わらず忙しくて、不在がちだ。

ホテルがここに身を寄せ、婚約が整ってからは

『心配ごとがないなら働けとタキが容赦ない』

と、苦笑いを零していた。

『しかも……今の俺はかなり慎重派だからな。心配なく使えと、簡単に送り込んでくれる』

そう言って、送り出すホテルの不安をほんの少しでも軽くしようとしてくれて。

『結婚式には必ず戻るよ』

頬に口づけを落として出掛けて行ったのは、数日前だ。

その前は2週間程の長い不在で、この屋敷に戻れたのはほんの2日間。

もちろん、一つの結婚式が近づいて来たからといって、水面下で蠢く国間の思惑が消え失せる筈もないし、闇を闊歩する魔獣が大人しくなる筈もない。

だから、ホテルを始めとして誰一人、シキの不在に対し不平不満を言う者はいない。

式の段取り等は全て公爵や夫人が取り仕切ってくれているから、ここまでは何の支障もなく進められてきたが、さすがに当日に花婿がいないのは問題だろう。

ところが。

「構わんよ、シキが戻らなかったら、私が代理になるから」

何時の間にやら、同じテーブルについて……しかも、ちゃっかり

ホタルの隣に座ってお茶を飲んでいた公爵がにこりと笑う。
そして、恭しくホタルの手を取ってその甲に唇を落とす。

ホタルは引き攣った笑顔でそれに答えた。

公爵のこの手の戯れには慣れた。

双子の容姿は母親似。

しかし、やはりこの公爵ともシキは間違いなく親子だ。

誑かす微笑みと、そつない仕草に、ホタルは妙な確信をすること
もはや数えきれないほど。

「あら、タキなら、きつと誰にも気づかれないんじゃないかしら」
アイリが、いいことを思いついたとばかりに言う。

それは、ちよつとご辞退申し上げたいです。

ホタルはただでさえ引き攣っていた笑顔を更にぴくぴくとさせた
が、傍らの夫人は名案とばかりに明るい顔をした。

「そうね、我が家には同じ顔がもう一人いるんだったわ！」

いーやーです！

心で叫ぶ。

「おや、それは残念だな。美しい花嫁を代理とはいえ、受け取れる
なんて栄誉早々ないだろうに」

「なんとかなるわよねえ」

「なんとかありますって」

続く会話。

「戻られます！」

思わずホタルは割って入った。

いつもは臆してついつい受け入れてしまいがちな様々な提案だが、
これは譲れない。

タキ様を身代わりにするのも。

公爵を代理にするのも。

いらぬ。必要ない。

だって、約束したのだから。

あの方は今まで、一度だって約束を破ったことはない。

だから。

「シキ様はちゃんと戻っていらっしやいます！」

感情が抑えきれずに椅子から立ち上がったの力説は、思いがけず激しい口調になる。

3人の高貴な方々は一瞬ポカンとホタルを見上げて。

最初に笑みを浮かべたのはアイリ。

「……分かってるわ」

続いて未来の義父母が微笑んだ。

「もちろん。シキは戻ってくるわ」

「そう、残念ながら、私の出番はないだろうね」

この方達だって、シキ様を信じている。

だから、こんな戯言をホタルの前でやり取りするのだ。

ホタルはストンと椅子に腰を降ろした。

「……申し訳あり……」

自らの感情を抑えきれずにしでかした粗相を謝罪しようとする
アイリが横からそれを遮った。

「でも、いざという時のために、お義父様を代理にするか、タキを
身代わりにするかは決めておかない？」

「決めておきません！」

その日は、見事な晴天に恵まれた。

春の柔らかな日差し。

そよと吹く風は、冬の冷たさを完全に拭い切り、そして、まだ夏の暑さを含んではない。

そんな完璧な天候の下、ホタルはお針子が縫いあげたウエディングドレスを身に付けていた。

ドレス工房の女店主が宣言した通り、これもまた天気負けず劣らず完璧な出来栄だ。

花嫁の純潔を現すための純白。

昨今の流行りだという細身のフォーマルは、ホタルの細い身を際立たせながら、最近はとみに女性らしさを増した流麗な輪郭を描き出している。

首も肩も生地で覆う肌を露出しないデザインは伝統に則ったものだ。

これを解いて、花嫁の肌を晒し、触れることが許されるのは、その夫となった者のみ。

ドレス合わせに一度だけ同席したシキが『紐やらボタンやらが多くて脱がしにくそうだな』と呟いて、女性陣から白い目で睨まれていたのを思い出す。

だが、果たしてシキはこのドレスを紐解くことができるのだろうか。

それが危うい状況だ。

この完璧なまでの婚礼の良き日。

当の新郎は未だ戻らない。

「シキは帰ってくるのかしら」

この方は、本当に華やかな装いがよくお似合いになる。

彩り鮮やかなドレスに身を包んだアイリは、まだ来ぬ夏の日差し

のように眩しい。

そして、言葉もまた夏の灼熱のように容赦がないのだ。

「ねえ、本当に、タキを身代わりにしちゃう!？」

かなり怒気を含んでいるそれは、ホタルに向かって言っているものの、実際は傍らにいる夫へのもの。

ホタルは苦笑いを浮かべつつ、首を振るった。

さすがにタキを身代わりにするのはどうかと思う。

それは世間を、そして、神様を欺くことになるだろう。

それなら、まだ、公爵を代理にした方が世間的に道理が通る。

遠方からの花嫁を迎えに行った新郎の親族が、その地で代理として式を上げるとはまあある話だ。

「……アイリ」

華やかな妻の隣で、ホタルの想い人にそっくりな方が大きなため息をついた。

この2、3日、タキは顔色がいたく悪い。

シキに遠征を命じた身を、アイリと母親に左右からチクチクと非難されているのだ。

それはやんわりとした甘い焼き菓子の中から、鋭い針が飛び出る辛辣さで、当事者のホタルが同情を禁じ得ない程に厳しい。

「戻ってくる筈なんですがねえ」

もう一度、大きなため息。

ホタルは開かれた窓から空を見上げた。

雲ひとつない空。

そこに何かの影一つ過ぎることはない。

耳には何も届かない。

いつからか、すっかり小心者になってしまったホタルは、シキが不在の間、その声を聞くことがまったくできなくなってしまったのだ。

ただ、必ず、戻ってくる。

そう信じて待つばかりの日々。

今も、そう。

きつと戻ってくると信じて。

こうして花嫁の衣装に身を包んで待っている。

「カイ様にご到着です」

ボタンの声に、ホタルははっとして身を正した。

今回の結婚式では、とにかくホタルにとってはもったいないことばかり。

中でも、とびきりなのがこれだ。

「……本気でいらっしゃったのですね」

現れた人に、思わず呟く。

信じられないことに。

恐れ多いことに。

花嫁の付き添いは、元の主である方の夫が名乗りを上げて下さった。

最初に、その話を聞いた時は耳を疑った。

元の主、といえばサクラ様。

その夫、といえばカイ様。

カイ様といえば。

大帝国キリングシック皇帝の弟で。

漆黒の軍神として名を馳せる御方で。

現皇帝がご即位された際に、帝位継承権を放棄されたとはいえ、

その威光は今だ皇帝を凌がんばかり。

そんな方が、寵妃の幼馴染の侍女だからって。

嫁ぎ先が、キリングシック指折りの有力貴族だからって。

付き添いをかけてでて下さるなど、前代未聞だ。

花嫁の付き添いといえば、通常は実家から嫁入り先までの道のりに同行し、新郎の元に新婦を届けるというのがその役目だが、実質は婚姻以降の後見を意味していることが多い。

花嫁の実家に力があればその父親、もしくは懇意の有力な貴族に頼むことが大半だ。

ホタルの付き添いについては、オードルの伯爵が妥当だろうと関係者は思っていたのだが。

思いがけず、カイ自らがそれに手を上げたのだ。

ホタルとしては謹んでご辞退申し上げたいところではあったが、誰一人として反意を示せる者がなく、気がつけば決定事項となっていた。

何の後ろ盾のない一介の侍女であるホタルが、公爵家に興入れすることに、これで誰も何も言えないだろうと、マアサが安堵の涙を浮かべていたから、多分これは本当にすごいことなのだろう。

もっともシキは、これを聞いて、感謝を口にしつつも、少し嫌そうだった。

『カイ様の背後にはサクラ様がいるだろう』

だそうだ。

どうにも、サクラへの拘りを捨てきれないシキに少々呆れて。

でも、シキのサクラへの警戒心は、ホタルのサクラへの敬愛に比例しているのだと苦笑い。

「きれいにしてもらったな」

ホタルの前に立ったカイが、微笑んで褒めてくれる。

しかしながら、ホタルにしてみれば。

いえいえ、そういうカイ様こそ、だ。

その存在の象徴でもある黒の上衣は相変わらずではあるが、その上には皇族のみが身につけることのできる深い紫のローブを身につけている。

たつぷりとドレープの流れる胸元には金の組紐が優雅に絡み、肩の留め金にはサクラの瞳に似た彩りの鮮やかな緑の宝石があしらわれている。

こんなふうに皇族然とした姿をする軍神など、そうそう目にすることはない。

これが、ホタルのため、ホタルの後見が皇族であることを示すための装いかと思うと緊張で足が震えてくるようだ。

しかも、シキは未だ現れず。

なんか、やらかしてしまっただろうしよう。

急激に不安がホタルに広がる。

「すごいお花ねえ」

そんなホタルの不安をポワンと消し去るのんびりとした声が聞こえ、カイの背後からサクラがひょっこりと顔を出す。

驚いた表情で部屋を見回し。

「ジンから？」

尋ねてくる人に、ホタルは大きく頷いた。

花嫁の控室としても使われているホタルの部屋は、溢れんばかりの花に満ち溢れている。

身分のある方々が揃う場には、恐れ多くて行けようもないと祖父は今日は来ていない。

その代りというように、今朝方、この花達が届けられた。

門出を祝う明るい色調のものばかり。

本当なら、花嫁姿を誰よりも見て欲しい人だ。

ホタルを育ててくれた人。

血の繋がりが無い後ろめたさから、心から甘えたことは少ないけれど。

でも、いつだって祖父は、その手を大きく広げてホタルに場所を与えてくれていた。

今この時も、公の場に顔は出せないと言いながらも、こうしてでき得る限りの心を見せてくれるのだ。

そして、それらの花の幾つかは、ホタルの装いを手掛けた心優しい侍女の心遣いで、華やかに結い上げられた髪にも添えられている。

まだ、式が始まってもないのに、花々を眺めるサクラの傍らに祖父の姿を見つけた気がして、鼻の奥がツンとなった。

「泣くとお化粧が取れますからね」

いち早く気がついたサクラがそう言う。

誰かの口調を真似たようなそれ。

「くれぐれもお式の途中で号泣なさったりしませんように。堪えて下さいまし」

サクラは微笑み、人差し指を立てて、それでホタルのおでこを突く。

「……って、私もマアサに注意されてきたの。ホタルが泣いたら、絶対つられて泣いてしまうから……堪えてね」

そんなこと言われたら、よけい泣いてしまいそうです。

「そうだな……ドレスや髪が乱れるからと今朝からキスの一つもさせてもらえない俺のためにも、なんとか堪えて欲しいものだな」

サクラの横に立つ、カイの珍しい戯言にホタルの涙が引っ込む。どんな状況でも、威力がある軍神の一言だ。

「私が禁じたんではありませんもの……」

頬を染めながら言うサクラの今日の装いは、こちらも皇族に連なる方として紫をローブを身につけている。

カイの身につけているものより色は随分と薄く柔らかな雰囲気醸し出しているが、彩る金の組紐は同じもののようで、結びあげた髪や耳を飾る宝石もまた、カイの肩にあるものと同じだろう。

その姿はどこからどう見ても、軍神の寵妃だった。

幼い頃からホタルと共に在った小さな主。

姉妹のような。

親友のような。

でも、もう違う。

そして、ホタルも変わるのだ。

「サクラ様、すぐく緊張してきましたあ」
思わず、泣き言が出る。

サクラは、きょとんと目を瞬かせた。

その様は、初めて出会った頃のように。
そして。

「……転びそうになっても、ちゃんとカイ様が支えてくれるから」
無造作に、椅子に座るホタルの前にしゃがみ込む様も。

あれ、と思う。

先ほど見た妃殿下は見間違いかと思うほど。

「ドレスが乱れないように、カイ様をも遠ざけていらっしやったのではないですか？」

つい、昔の侍女の口調で言えば。

サクラは破顔する。

「ジンもオードル家から祈ってくれている」

サクラの言葉に応えるように、窓から吹き込むそよ風に花が揺れた。

「皆がホタルの幸せを祈ってる」

サクラは立ちあがった。

「大丈夫」

いつか、幼い少女が耳を塞いで『大丈夫』と言った時のように。

ホタルの中に大丈夫が広がっていく。

ホタルは頷いて立ちあがった。

差し出されるのはカイの手。

ホタルはそれをしばし眺めた。

皇族の方の手の平はもっと優雅なのかと思っていたけれど。

この方の手は、シキの手と同じくらい……もしかしたら、それ以上筋張り硬そうだった。

「カイ様と腕を組んで歩くのが……多分、今日一番の緊張の瞬間だと思います」

言いながら、差し出された手の平に自ら手を乗せる。

カイが慣れた動作で、そのホタルの手を肘へと添えさせた。

「それは困ったな。花嫁の付き添いの特権は……花婿に手渡す時にキスできることではなかったか？」

それは、平民の慣習ではないでしょうか！？

確かに耳にする慣習ではあるが、先ほどボタンから聞いたお式の

流れの中に、そんなのはなかった。

ぎよっとするホタルをよそに、サクラは反対側のカイの腕にするりと手を添えて楽しげに呟いた。

「でね……シキ様が戻られなかったら、そのままカイ様と一緒に帰りましょね」

結婚式は、スタートン家の庭で行われる。

春の花が咲き誇る中、祭壇が設えられておりそこに司祭が立っている。

公爵家の結婚式ということでそれなりの立会人が招かれてはいたが、あまり派手派手しくはしたくないというシキの意向は、ここは反映されている。

そして、本来であれば、新郎が立っている場所には公爵がいた。

やはり、無難にこうなるのだろう。

予想通りの状況で、ホタルに動揺はない。

ちらりとカイを挟んだ向こう側にいるサクラに目を向ければ、薄いベール越しに見えるはその人はホタルの大好きな微笑みを確かに浮かべている。

「このまま、ラジルに攫うか？」

頭上から聞こえてくるカイの口調は、少々笑いを含んでいた。

「2度目だから……兄上には少々説教を食らうかもしれんが」

小さな笑いを零したのはサクラだ。

そして、ホタルに全てを任せるというように、カイの腕を離して公爵家の元に歩いて行く。

ベールに覆われた表情は見えないだろうから、ホタルは小さく、でも、はつきりと首を振った。

だって。

「……本当は結婚式なんて良いのです」

そう、本当は結婚式なんて、しなくたって良いのだ。

もう、何度も想いを確かめ合って。

幾度と誓いを立てて。

迷いなんて、何もないから。

司祭様のありがたい説法なんて聞かなくても。

何よりも大事なことを、もう十分に知っている。見失ったりしない。

白いドレスを来て、シキの元へと歩きたい夢は少しばかりあったけれど。

「そうだな」

カイが同意し、歩き出す。

シンと静まりかえる中を、純白の花嫁は、漆黒の軍神に連れられて進んでいく。

緊張で、何も聞こえないかと思われた耳に、不意に小さな音が届く。

足が止まる。

気がついたカイがすぐに留まり、頭上を見上げた。

それに倣うように、そこにいる全ての者達が空を仰ぐ。

「……来たな」

カイの呟き、そして、不意に青空に数個の黒点が現れる。

数匹の翼竜。

大きく翼を広げた神獣とも言われるその姿に、大きなどよめきが庭に広がる。

その内の一頭が地上に降り立ち、その背から一人の男が飛び降りた。

身につけているのは到底身分ある者とも、今日の新郎とも思えない薄汚れたマントではある。

「間にあったかな？」

だが、呟く声を聞き間違える筈がない。

カイが公爵に向かっていった進路を変えて、翼竜を労う男に近付いて行く。

公爵が少々残念そうに、だが、嬉しそうに肩を竦める姿がホタルの視界の片隅に映った。

「連れて帰るところだったぞ」

無人の翼竜が、ふわりと空へ舞い上がる。

皆がそれを見送る中、ホタルはただまっすぐにその人を見ていた。「冗談でしょう。結構、頑張ってきましたよ。でも、報告はイトから聞いて下さい」

シキはそう言って、マントを外した。

少しばかり薄汚れてはいても、貴公子然とした笑みに翳りは無い。そうして、頭上に何かを合図する。

途端に、空を旋回していた数匹の竜から何かが降ってくる。

それは、色とりどりの花々だった。

身近に咲くものから、見たこともない彩りのものまで。

多分、各地方から集い集まった者達なのだろう。

荒くれどもらしからぬ華やかな祝いに、庭にいた人々から感嘆の吐息が零れる。

「……降りてくる気はないか」

シキが天空に戻した無人の竜に、他の竜に乗っていたイトが飛び移るのが見えた。

そして、すぐにも方角を変えて飛んでいく。

他の竜達もそれに倣うように、あっという間に四方に散っていった。

「ないでしょう……イトだって、さっさと報告を済ませて、帰りたいでしょうから」

カイは肩を竦めた。

そして、ホタルの手を取り、その甲に唇を落とした。

果然とシキを見つめるばかりだったホタルは、それにまともな反応を返すこともできず。

「さっさと式を終えて来い」

カイの手から、シキの手へと。

ホタルが導かれて。

カイが離れて歩いて行く。

その先には、サクラがいて。

やはり、微笑んでいた。

そして、目の前にシキがいる。

「遅くなって悪かった」

かけられる声。

きちんと仕事は終わられましたか？

怪我はしていませんか？

そんな問い掛けに、笑み一つで答えが返る。

聞こえない耳に、確かに大丈夫だと聞こえる。

だから、ホタルは微笑んだ。

「不安にさせたな？」

不安になることなんて、何もない。

首を振った。

ここに来るまで、いろいろなことがあったから。

でも、今は、何も迷うことなどない。

「お戻りになると信じてました」

だって。

「そう……誓って下さったもの」

ホタルは、侍女ではなく、貴婦人として。

騎士ではなく、夫を迎えるべく、純白のドレスの膝を折り迎え入れる。

「お帰りなさいませ」

私は貴方の無事を祈り続ける。

「ああ……ただいま」

俺は必ず君の元に戻る。

願う。

想う。

お互いに。

お互いを。
そう誓った。

祭壇の前にいた司祭はしばらくシキとホタルを眺めていた。
やがて、微笑みをその皺の深い面に浮かべる。

「……では、誓いの口づけを」

既に誓いは立てられていると。

全てを承知のように。

告げられる司祭の言葉に。

「……話が分かる司祭で助かるな」

言うなり、シキはホタルを抱き寄せ、ベールを剥ぐと口付けた。

わあっと周りに歓声上がるのを聞きながら、ホタルはシキを抱
きしめた。

その想い。

その願い。

貴方とならば。

君とならば。

それはいつだって、必ず叶えられる。

34 (後書き)

完結です！

少々、当初の予定より長くなってしまいましたが。。。

結婚式まで辿りつけたあ！

お付き合い下さった読者様、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7098j/>

騎士の想い 侍女の願い

2011年5月6日16時14分発行